

朝酌川河川改修工事に伴う
西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ
(海崎地区 2)

昭和63年 3月

島根県土木部河川課
島根県教育委員会

朝酌川河川改修工事に伴う
西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ
(海崎地区2)



昭和63年3月

島根県土木部河川課
島根県教育委員会

イラスト：古浦秀明



弥生時代中期の土壙 (SK01)



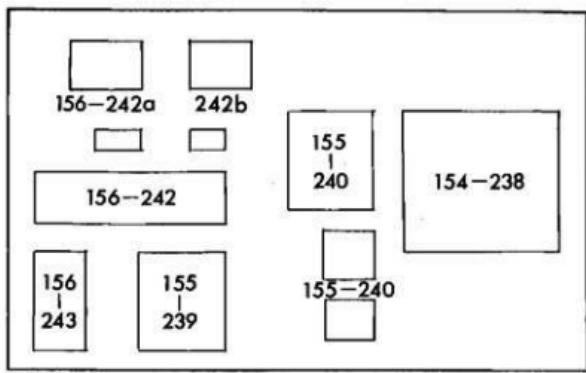
弥生時代中期の土壙（SK01）

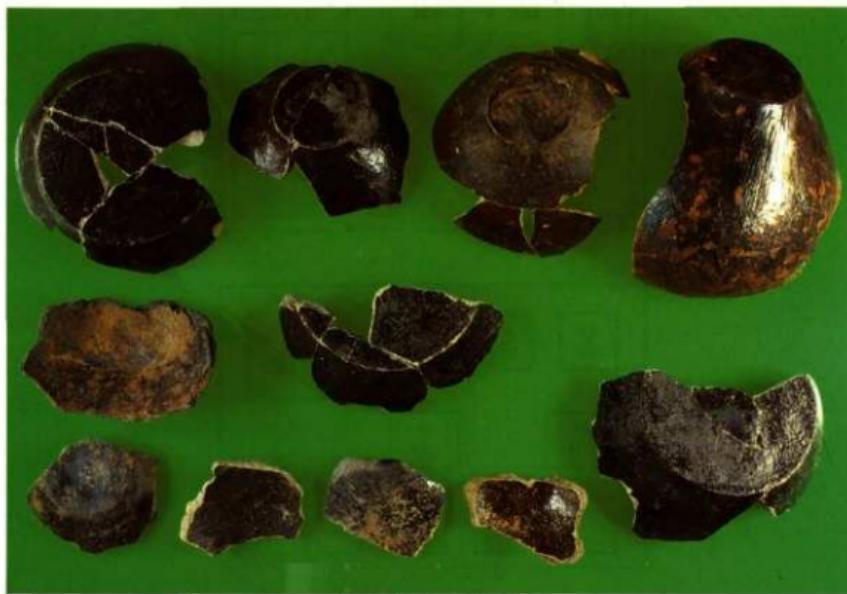


鉄 刃（弥生時代中期）

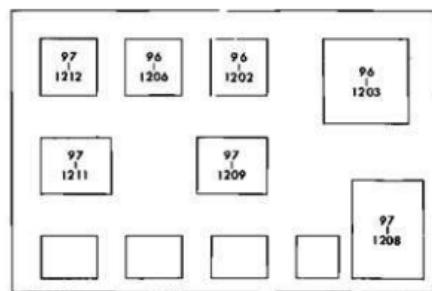
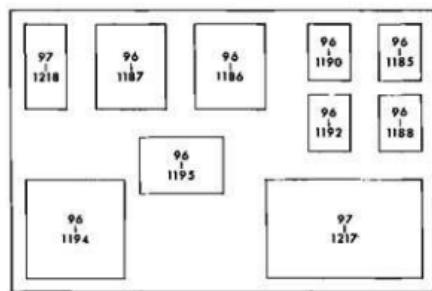


弥生時代中期の漆塗木製品



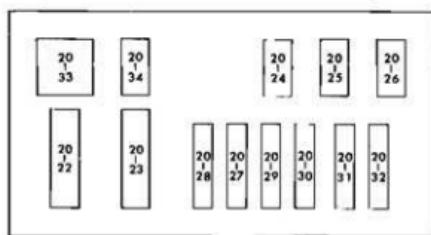
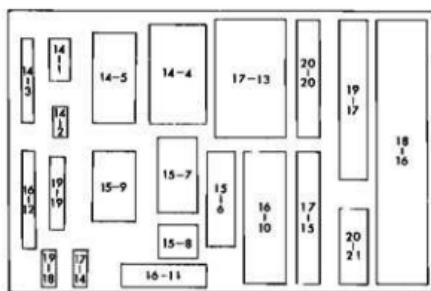


弥生時代中期の漆塗土器





弥生時代中期の骨角器



序

本報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて昭和59年度に実施した朝酌川河川改修工事予定地内にある西川津遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

発掘調査では、弥生時代の木製品加工場跡やヒョウタンの貯蔵施設など貴重な埋蔵文化財が発見され、各方面より多くの関心が寄せられることになりました。

本書が、広く一般の埋蔵文化財に対する御理解に多少なりとも役に立てば幸いに存じます。

昭和63年3月

島根県教育委員会

教育長 松井邦友

例　　言

- 1 本書は昭和59年度、島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡の発掘調査の概要である。
- 2 調査組織（昭和59年度）

調査主体	島根県教育委員会教育長 栗栖理知
事務局	文化課課長 美多定秀、課長補佐 長谷川行雄、長瀬忠治、蓮岡法暉、文化係係長 岩崎况一朗
調査指導	山本 清（島根県文化財審議員、島根大学名誉教授）、下條信行（愛媛大学法文学部教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、町山 章（奈良国立文化財研究所）、大西郁夫（島根大学理学部助教授）、徳岡隆夫（同）、高安克己（同）、井上貴央（鳥取大学医学部助教授）、森川昌和（福井県立若狭歴史民俗資料館）、入江文敏（同）、網谷克彦（同）、勝部衛（玉湯町立玉作資料館）
調査員	主幹・埋蔵文化財第2係長 石井悠、文化財保護主事 宮沢明久 主事 内田律雄
調査補助員	島根県教育文化財団嘱託 桑原真治、鍛冶正彦
- 3 調査協力 渡辺貞幸、佐原 貞、近藤喬一、片岡詩子、金子浩昌、古浦秀明、足立 力、田中和雄、斎野裕彦、田村晃一、古山 学、工業普通小田宮士雄、小野山 節、宮本一夫、小原貴樹
- 4 掲載図面の作成及び遺物整理には次の者が携わった。
竹内信枝、佐藤順子、野津順子、林 健亮、小城清政、長羅 忠、古瀬岩男、藤原和子、鈴政泰子、増原泰子、宮本守人、金津まり子、野田清美、佐藤綾子、吉岡玄一、岡田昌子、若佐裕子、川上登志江、真野啓子、為西あや子、基常明美、梅瀬さきえ、野津英治、上井由美子、片山礼子、有富千恵、川本桂子、岡本登見雄、高木知恵子、見崎千里、永田桂子、永田かおり、青木紀子、兵 立山、江川幸子、須藤聖子、瀬田明子
- 5 本報告書の執筆は渡辺正巳、井上貴央、片岡詩子、内田律雄が行った。
- 6 本報告書の編集は上記調査員や指導者の協力を得ながら、内田律雄が行った。

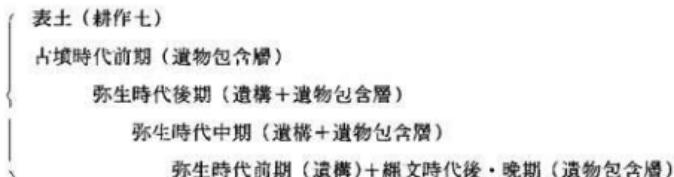
目 次

I 調査の概要	1
1 遺構	2
(1) 弥生時代中期の遺構	2
① 堀立柱建物跡	2
② 土壙(SK)	2
③ ウッドサークル	8
④ 貝層	11
⑤ 溝状遺構	12
(2) 弥生時代後期の遺構	13
2 遺物	18
(1) 弥生時代中期の遺物	18
(2) 弥生時代後期の土器	111
(3) 古墳時代前期の土器	133
(4) 土錘・石錘	137
(5) 紡錘車	137
(6) 弥生時代中期の木製品	142
(7) 弥生時代後期の木製品	202
(8) 古墳時代前期の木製品	214
(9) 石器	215
II 自然科学的分析	243
1 松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について	244
2 西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について	261
III 写真図版	275

I 調査の概要

昭和59年度・60年度に発掘調査の対象としたのは、昭和58年度に引き続きその南西側、幅25.0m×100.0mの範囲である。発掘は調査区が広範囲にわたり朝酌川に沿ってあり、水田下2.0m以上掘り下げる必要があると思われたので、作業の安全を第1に考慮し調査対象範囲の外側より安全勾配でもってオープンカットし、表土および遺物包含層の一部をあらかじめ調査員立会いのもとに掘削して行った。また、調査区の内側には土層観察を兼ねた排水溝を周囲に掘り込み、水中ポンプで24時間排水を行いながらできるだけ発掘作業が土の乾いた状態でできるようにした。

発掘調査によって確認された層序は次のようである。



このうち、弥生時代中期層が最も安定しており、多くの遺構、遺物が検出された。特に、2×3間の掘立柱建物跡、土塙、木製農耕具に関わる施設と考えられるウッドサークル群等は本県ではじめて確認されたものであり、遺物では本報告で図示したような多量の木製品が出土し、多方面より多くの関心が寄せられることとなった。

弥生時代前期においては、朝酌川の旧河道と考えられる溝状の遺構があり、中期にも引き続き存在しており、繩文時代晩期の土器が共伴して出土したことが注目された。また、遺物には10個体以上にもおよぶ土笛、貝層から出土した各種の骨角器、多量の動植物の遺存体、緑色凝灰岩を材料とした管玉作り等、当地方においていくつもの新発見があった。

古墳時代前期層では遺構は発見されなかったが、本県ではこれまでこの時代の木製遺物は皆無に近い状態であったが、豊富な木製品の種類が明らかになった。

このように、本遺跡の発掘調査によって、繩文時代から古墳時代にいたる期間の多くの新しい情報を入手することができた。ただし、調査区のはば中央部が後世の開発によって削平されており、昭和58年度調査区で検出した繩文時代前期～前期末の遺物包含層との関係をつかめなかったのが惜しまれた。以下は、主として、昭和59年度調査区の発掘調査の概要である。

1. 遺構

弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構は、掘立柱建物跡群（SB01～SB04）、土塙群（SK01～SK03）、ドングリの貯蔵庫（SK04）、ウッドサークル群（SZ01～SZ023）、貝層、溝状遺構を検出した。これらの遺構は大別して調査区内北側の一群と中央部の一群との二群に分けられるが、その中间にあたる部分は本来その地形が東側丘陵にむかって高くなっていたのを、水田の開発によって水平に削平されたものと考えられる。従って、この空间には例えば、堅穴住居跡とか水田跡のような遺構があることは存在していたかもしれない。

掘立柱建物跡

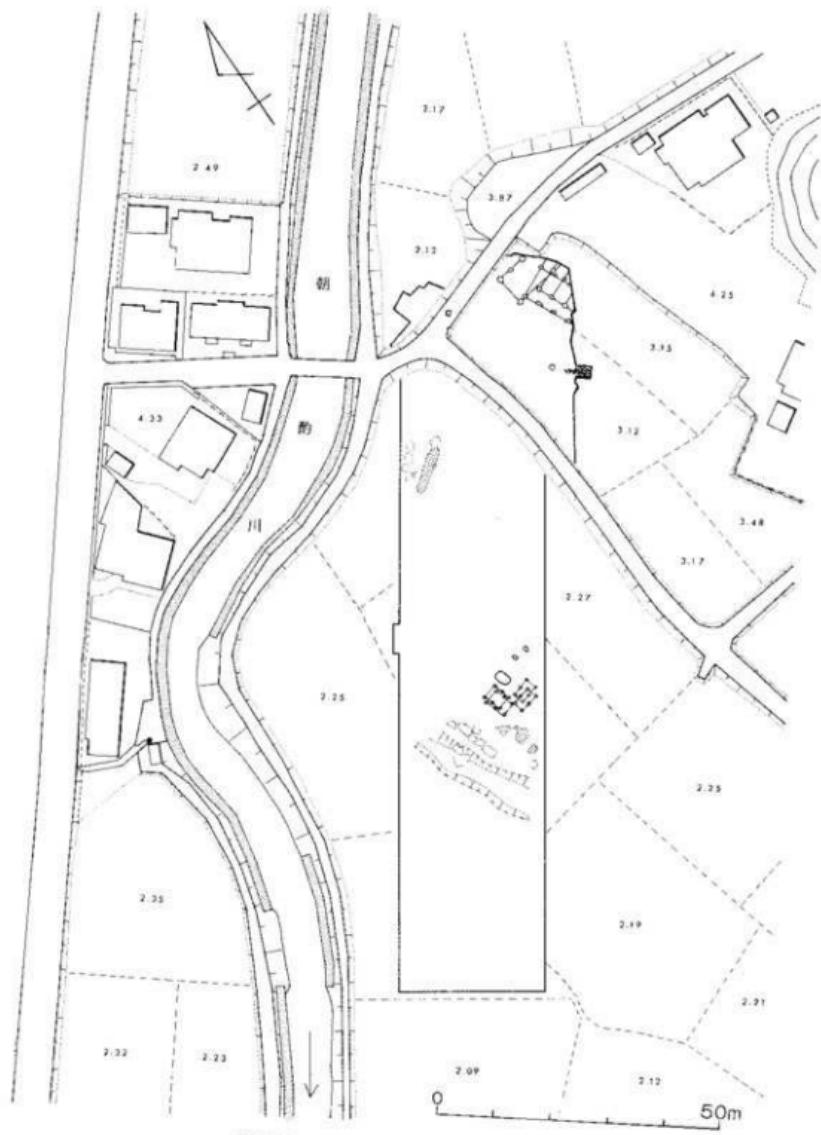
掘立柱建物跡は、発掘調査区のほぼ中央東壁より土塙群と共に発見された無数の柱穴群の中から（図版1）、SB01、SB02、SB03、SB04の4棟を確認した（第3図、図版2）。いずれも1×2間の構造で、それぞれ $2.42 \times 3.08m$ 、 $2.68 \times 3.73m$ 、 $1.82 \times 3.31m$ 、 $1.79 \times 2.92m$ の規模である。

これら掘立柱建物跡群の柱穴は、径20.0～40.0cm、検出面からの深さ20.0～30.0cmの規模のものである。柱穴の中には、板やその他の木材が充填しており、中には柱根が残存している例もあった（第4図、図版3）。これは遺跡のある場所が当時から水分を多く含み、むしろ、掘立柱建物を建てるにはあまり適さない条件であったことを示していると思われる。逆に、この種の建物がこうした場所に設置されなければならない理由があったと考えられ、後述する加工途中の木製品との関係が注目されるところである。柱穴の中の木材は、^{（図1）}例えば、静岡県登呂遺跡の柱穴内にみられる礎板と同様な機能をもつものであろう。

検出された掘立柱建物跡は、SB01とSB02が切りあい関係にあり、同様に切りあい関係にあるSB03とSB04よりやや規模の大きなものである。さらに、SB02とSB03はそれぞれP17とP4が重複して発見されているので、SB01とSB03、SB02とSB04はそれぞれセットとして「L」字状に配置され、同時期に存在していた可能性が高い。これら大・小の掘立柱建物に囲まれるように、ヒョウタンの種子を出土したSK01が検出されたこともこれを裏づけるものであろう（第2図）。

土塙（SK）

SK01 掘立柱建物跡に埋められた位置に検出されたSK01はヒョウタンの貯蔵施設であったと考えられる（第5図、カラー図版1）。規模は長さ2.70m、幅1.50m、検出面より中央部での深さ0.70mを測る。北隅を一部欠くがもとは隅丸長方形の整った平面プランで



第1図 西川津遺跡海崎地区発掘調査区

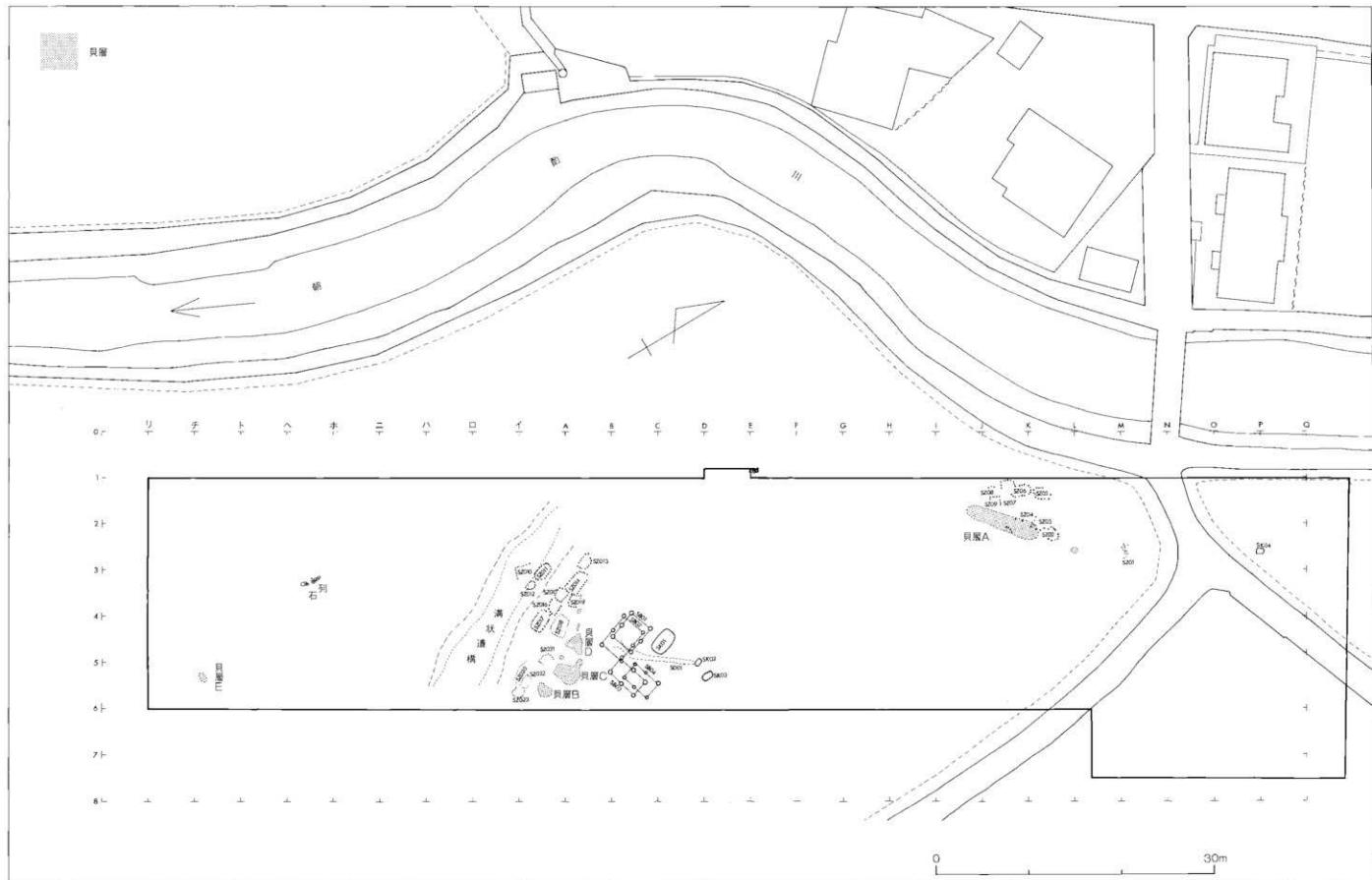
あったことが知られる。底は舟底形を呈している。第5図に示したa層は茶黒色有機質土で、この層の直上の層との間には部分的にムシロ状の植物質のものが認められた。このa層を取り除くと多數の木材が検出されたが、それらはこの土塙を覆っていた上屋構造の木材であったと考えられる。その上屋がどのような構造のものであったのかは即断しかねるが、第142図165はその木材の一つを図示したものであり、頭部が二股の自然木を長さ約1.6mに切断して使用していることから、地表上へはせいぜい30~40cmほど高くさせた簡単な施設であったと考えられる。このことより、第5図a層はこの土塙の上屋構造が陥没したものと考えられる。土塙内からは石斧片や木製農具が発見されたが、いずれも完成品が破損したものであった。この他に弥生土器や獸骨の小片が混在していた。特徴的であったのは、3個体のヒュウタン（第5図では粗いスクリーントーンで示した）とa層から多量のヒュウタンの種子が出土したことである。その自然科学的な分析は次年度で報告する予定である。

S K02 土塙SK01の東側約3.5mに検出された長さ1.25m、幅0.55m、深さ0.13mのほぼ南北方向に長い長方形の土塙である（第6図、図版4）。底はほぼ水平で、東壁に接して第120図41に示したような木製歛（完成品・使用痕あり）があった。

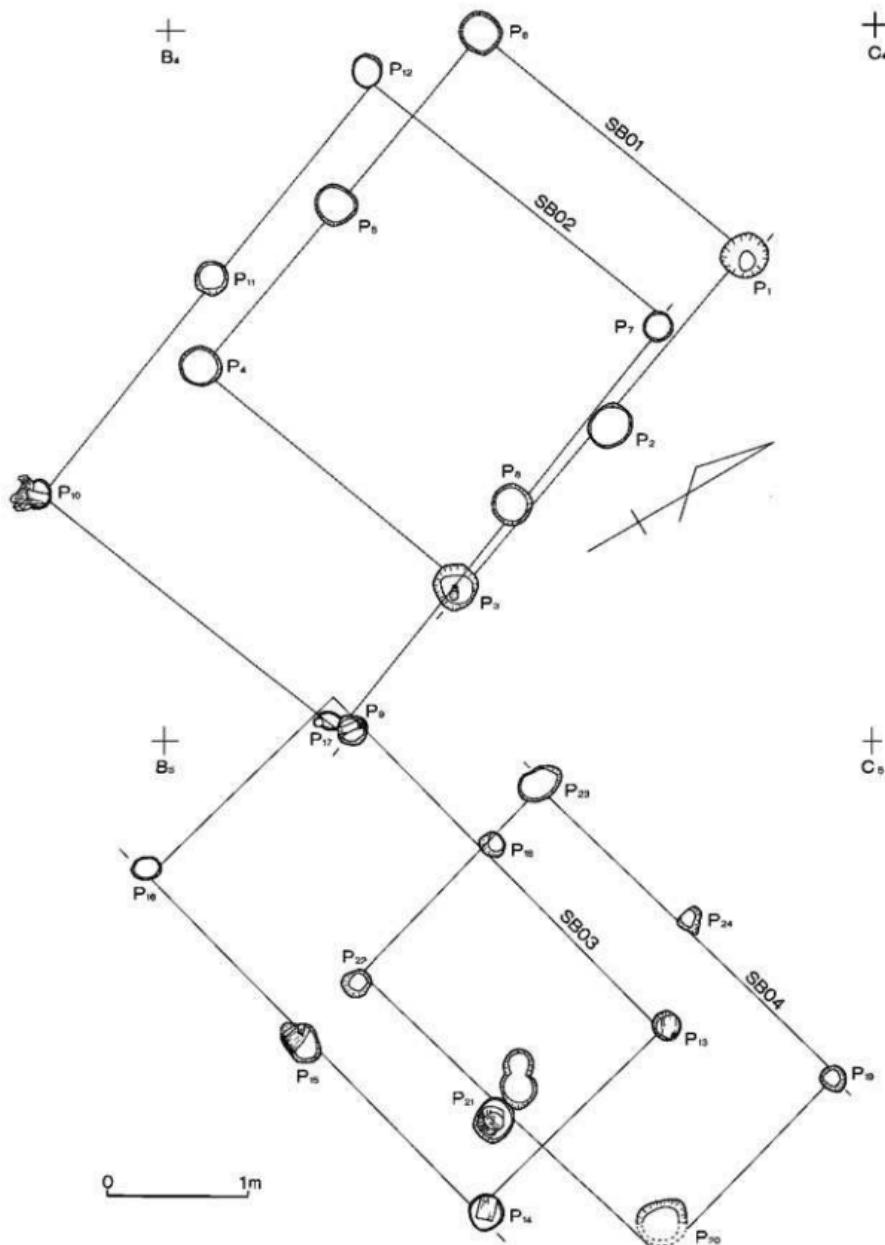
S K03 SK02のさらに東側、約1.2mの位置にSK02に類似した土塙を検出した（第6図、図版5）。南北1.2m、東西0.8m、深さ0.12mを測るが北側の一部は弥生時代前期の貝層に掘りこまれている。床は水平でなく北東にむかって高くなっている。土塙内には板状の木製品が二枚あったが、このうち加工痕のあるものを第145図177に示した。田下駄等の未成品と考えられる。

S K01、SK02、SK03はその主軸方向をほぼ南北にとっており、これらの西側～南側に検出された柱穴群や掘立柱建物跡群と一連の遺構であったと考えられる。つまり、土塙群も掘立柱建物跡群もある程度、計画的に設置されたと思われる。

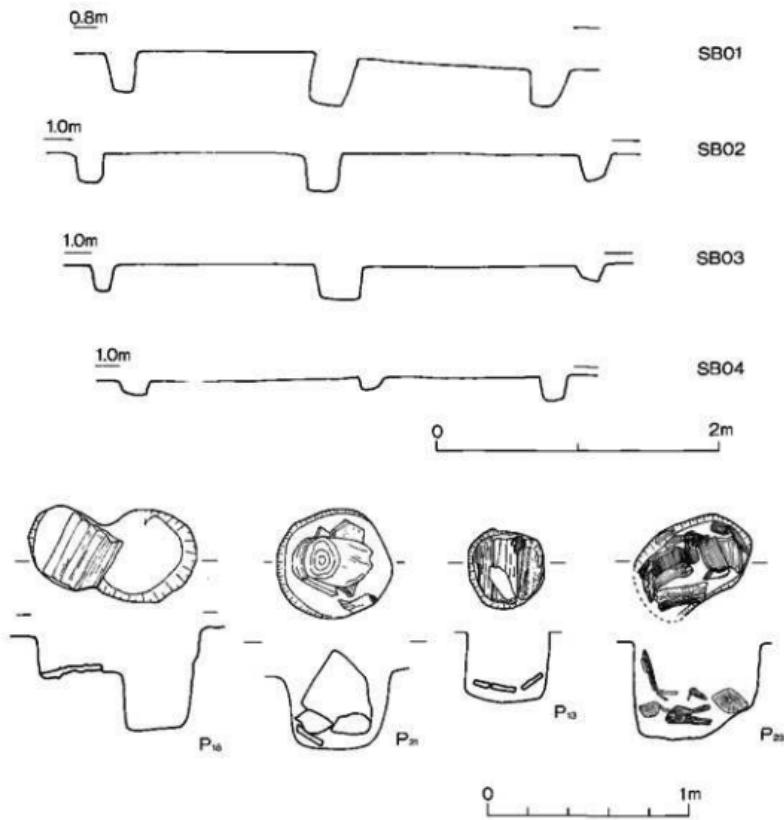
S K04 発掘調査区の北側に検出された土塙でドングリの貯蔵庫である（第7図、図版6）。0.7×0.7mのほぼ正方形の平面プランで、基底部10~15cmは縄文前期層に掘りこまれ、その上は弥生時代の微砂粒に覆われていた。床は水平で、床直上からドングリの種子がまとまって出土した（図版6）。土塙の内側周辺は長さ約50cmの檜皮を壁面に貼り付けたものであるが、床近くにはこの土塙を覆っていたと考えられる同様な檜皮が陥没した状態で発見された。ドングリの種子の詳しい同定は別に報告する予定である。島根県内におけるこの種の遺構は、松江市手角町寺ノ脇遺跡や同柳瀬遺跡の二か所がこれまで知られているが、それらは縄文時代のものであり、また素掘りの土塙である。現在のところ、弥生



第2図 遺構配置図



第3図 据立柱建物跡平面図

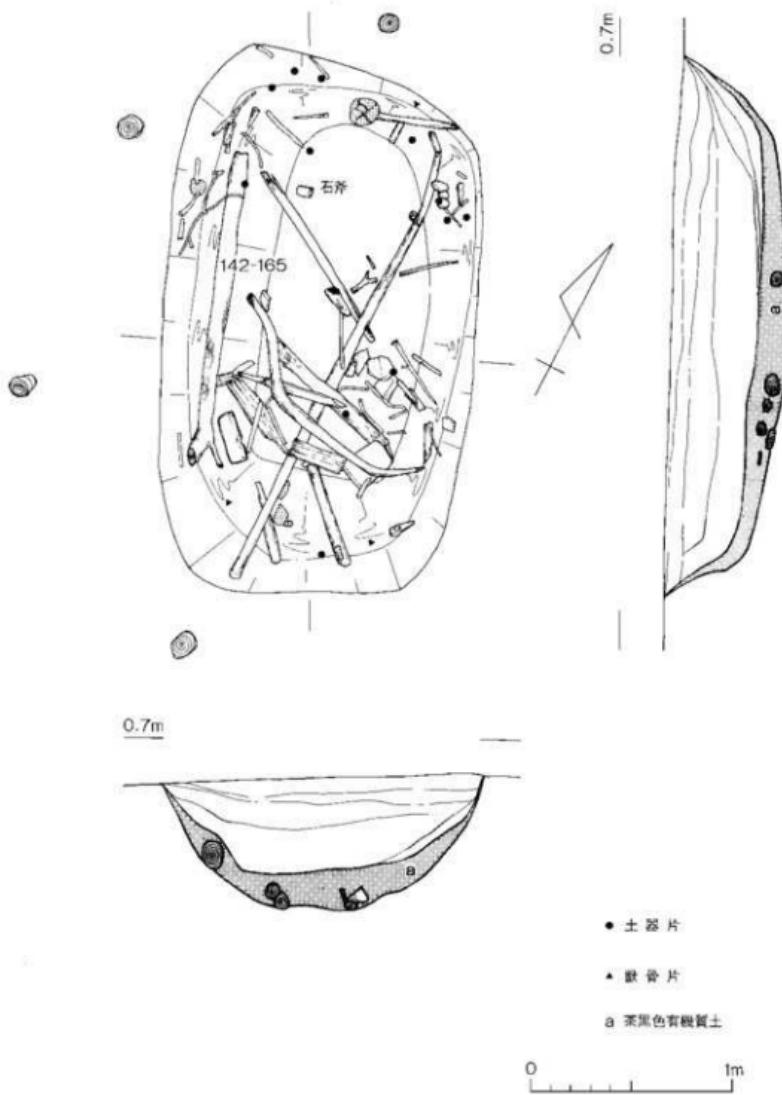


第4図 据立柱建物跡柱穴断面図

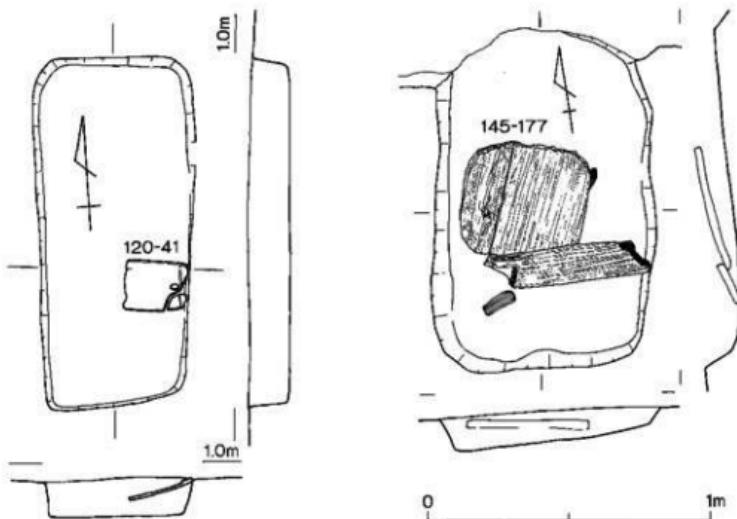
時代の遺構としては他に例をみないものである。

ウッドサークル (S Z)

発掘調査区の北側、朝駒川岸に近いあたりと、調査区のほぼ中央に発見された旧河道と考えられる溝状遺構に沿うて、多くのウッドサークル (wood-circle) を検出した。その北側の一群 (S Z01～S Z09) は、ほぼ東西に、つまり現在の朝駒川左岸と同じ方向で、同時に貝層Aもこれらの南側に接して発見された (第8図、図版8)。発掘区の中央部の一群 (S Z10～S Z23) は、ほぼ南北に溝状遺構に沿うており、同様に貝層A～Dがその東に存在していた (第9図～第11図、図版7、図版9～17)。



第5図 SK01 実測図



第6図 SK02・03 実測図

これらのウッドサークルの構造は、径1.0mの小規模のものから、2.5m×1.0mのものまで各種ある。いずれも、自然木の先端を尖らせたものと板材を再利用したと考えられる杭が混在して用いられており、後者の方が多い。最長のもので1.25mを測るが、もとは今少し長い杭が用いられていたと思われる。

ウッドサークルの平面プランは、径が1.0m前後の比較的小規模なものは不整形のようにみえるが、方形プランを意識していると考えられる。これより大規模なものは長方形プランであり、その典型はS Z017(第10図、図版13)にみることができる。杭の先端は40~50cmほど弥生時代以前の層に打ち込まれており、多くの場合、その層の上面より40~50cmの部分が残存していた。弥生時代前期にも同様な施設を検出しているが、その場合横木をわたし杭に巻き縛った例がある。S Z013(第10図、図版11)、S Z014(第9図、図版11、12)にみられるような例からすると、杭列は横木を固定された構造になっていた可能性がある。杭は自然木のものは変形したものが多い。これは打ち込む時、あるいは土厚によって変形してしまったと考えられる。断面が三角形の板材の再利用と思われる杭が多いのは、自然木が構造上あまりウッドサークルに適さない為であったかもしれない。

さて、第111図~第156図に示した多量の木製品は、その多くがこのウッドサークルの

周辺から出土したものである。そのほとんどは鋤・鎌を中心とする木製農耕具の未成品であった。従ってこれらのウッドサークルと木製農耕具の未成品は何らかの関係にあるものと思われる。福岡県板付市板付遺跡^(註4)や、兵庫県神戸市玉津田中遺跡では、溝状遺構の縁に土塹を穿ち、その中に加工途中の木製農耕具を納めた弥生時代の遺構が知られているけれども、西川津遺跡においては、ここで報告したウッドサークルが同様な機能を有していた施設であったと考えておきたい。S Z017（第10図）はまさにそのような木製農耕具の製作工程の初期段階を示す好例としてとらえることができよう。とすれば旧河道に沿うて発見された二群のウッドサークル群は、通常水中に没していたことが考えられ、当地方における弥生時代木製農耕具製作工程を具体的に知ることのできる遺構として注目されよう。

貝層

ウッドサークル群に沿うようにいくつかの貝層も検出された。S Z01～S Z09の南に接した貝層Aは、最大幅2.0m、長さ約8.0mに及ぶ細長いもので、これより約4.0m東にも径0.5mほどの貝層のブロックがあった。また、中央で発見された貝



第7図 ドングリの貯蔵庫

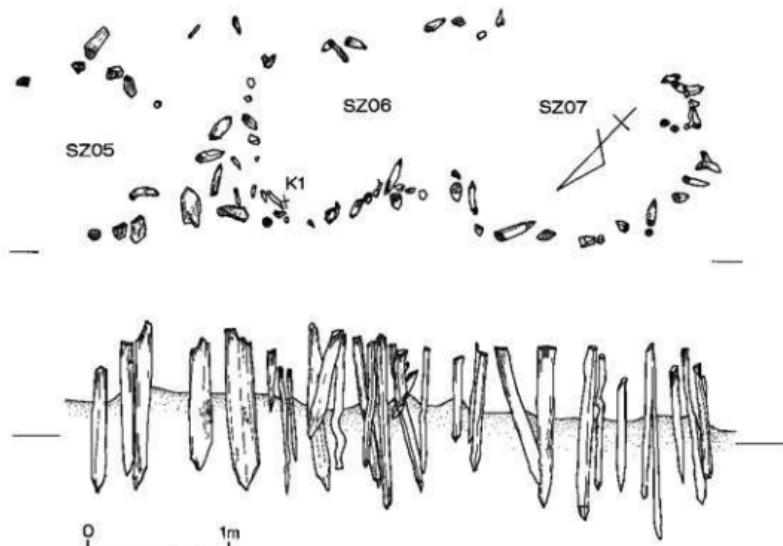
層は、南より貝層B、貝層C、貝層Dがほぼ南北方向に溝状遺構やウッドサークル群に沿うかたちであった。いずれも不整形で径は2.0m～5.0mあり、その周囲には径0.3m内外の小ブロックがいくつかみられた。他の遺構のありかたからして、この貝層A～貝層Dが位置するあたりを、本遺跡における弥生時代中期の旧河道の水際と考えている。

これらの貝層を構成する主な貝類は、汽水産のヤマトシジミである。ヤマトシジミの貝層は、本遺跡に近いところでは縄文時代前期の鹿島町佐太講武貝塚^(註5)がある。弥生時代の貝塚は出雲地方ではこれまでその西部において、多門院貝塚などが知られているが、東部においてははじめての遺跡例となった。このヤマトシジミの貝層群は、少なくとも弥生時代中期には穴道湖が現在のような汽水湖になっていたことを示しており、当時の自然環境を復元する貴重な資料となった。貝層は原則として、全て取り上げ、これを水洗いし微細な遺物も検出するよう努めた。その結果は、弥生土器、シカやイノシシといった獸骨、それらで製作された釣針をはじめとする骨角器、魚骨、時には使いすられた木製農耕具や容器類、石器片、炭化米、貝製小玉、カワニナのような淡水産の貝類、サザエ、アワビなど磯の生物等々豊富な資料を得ることができた。このうち、獸骨や魚骨についてはⅡ章で報告されているとおりであるが、他の遺物や貝層の詳しい分析は、来年度報告される予定である。

溝状遺構及びSD01

発掘調査区の中央よりやや西側にはほぼ南北方向に、上幅5.0～7.0mの溝状遺構が検出された（第2図、図版7）。この溝状遺構の西側は高さ1.5mの堤状となっている。その溝の西側斜面には、無数の杭が打ち込まれているとともに、多数の人頭大の自然石がこれを覆うように存在し、東側の遺構群とは対象的なあり方を示していた。溝の西側の施設はその状況から、簡単な護岸工事のようなものが行なわれたともうけとれる。溝は弥生時代中期以前の遺物しか含まない砂礫層で埋っており、溝の埋没した時期もそのころと考えられる。調査区の北側に検出された貝層Aやウッドサークル群（SZ01～SZ09）が現在の朝酌川左岸にあたることを考え合わせると、この溝状遺構としたのは弥生時代中期の旧河道と考えられよう。因に、この溝状遺構は昭和60年度の調査において、弥生時代前期から生活に使用されていたことが判明している。

SD01（第2図、図版1）は、SK02やSB01、SB02によって切られているので、それらより古い時期と考えられるが、弥生時代中期の中での先後関係を示している。これによつて、土塙や掘立柱建物跡群より以前の遺構であることが知られるが、その性格は不明である。



第8図 SZ05・06・07 実測図

弥生時代後期の遺構

列石遺構

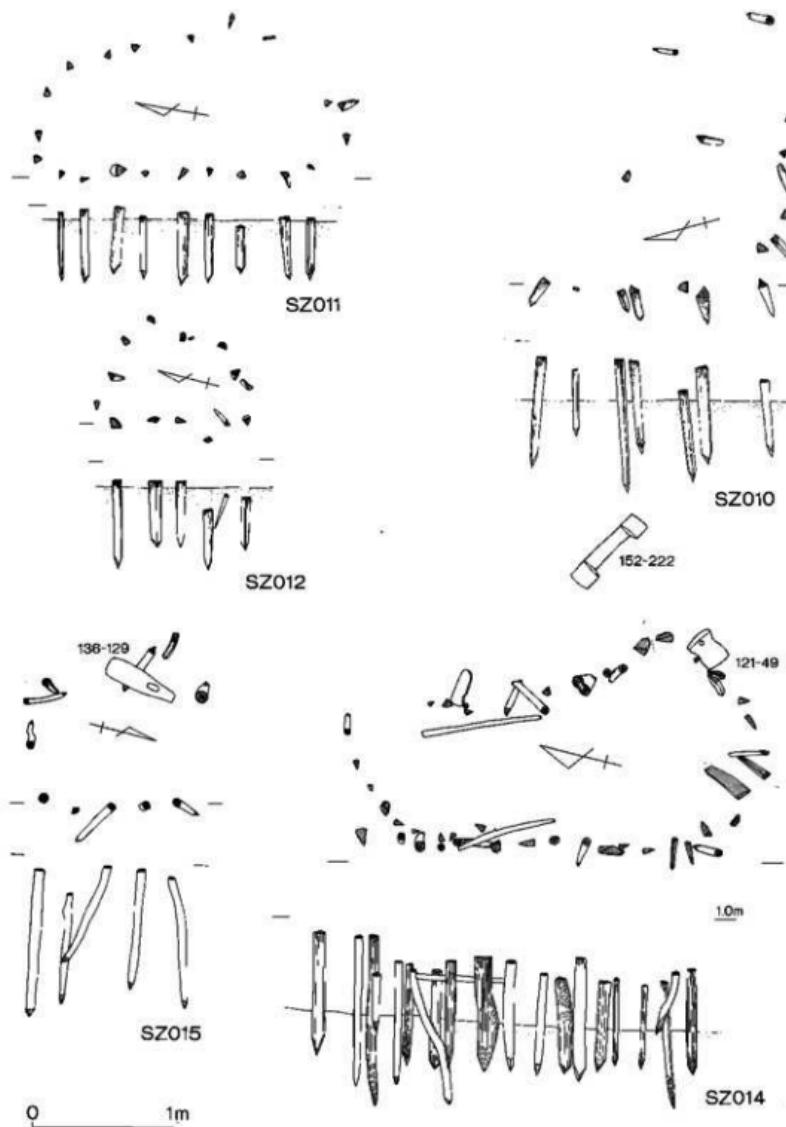
弥生時代中期の溝状遺構のあるあたりから、西に約20mの位置に弥生時代後期の列石を検出した（第12図、図版18）。それは南北方向に長さ2.3m、幅0.6mの短いものであったが、川の氾濫をうけ付近に散乱している石や遺物の状態から元来、かなり長く構築されていたと思われるふしがある。石は20.0～40.0cmの自然石で、東高西低の緩斜面に築かれている。

貝層

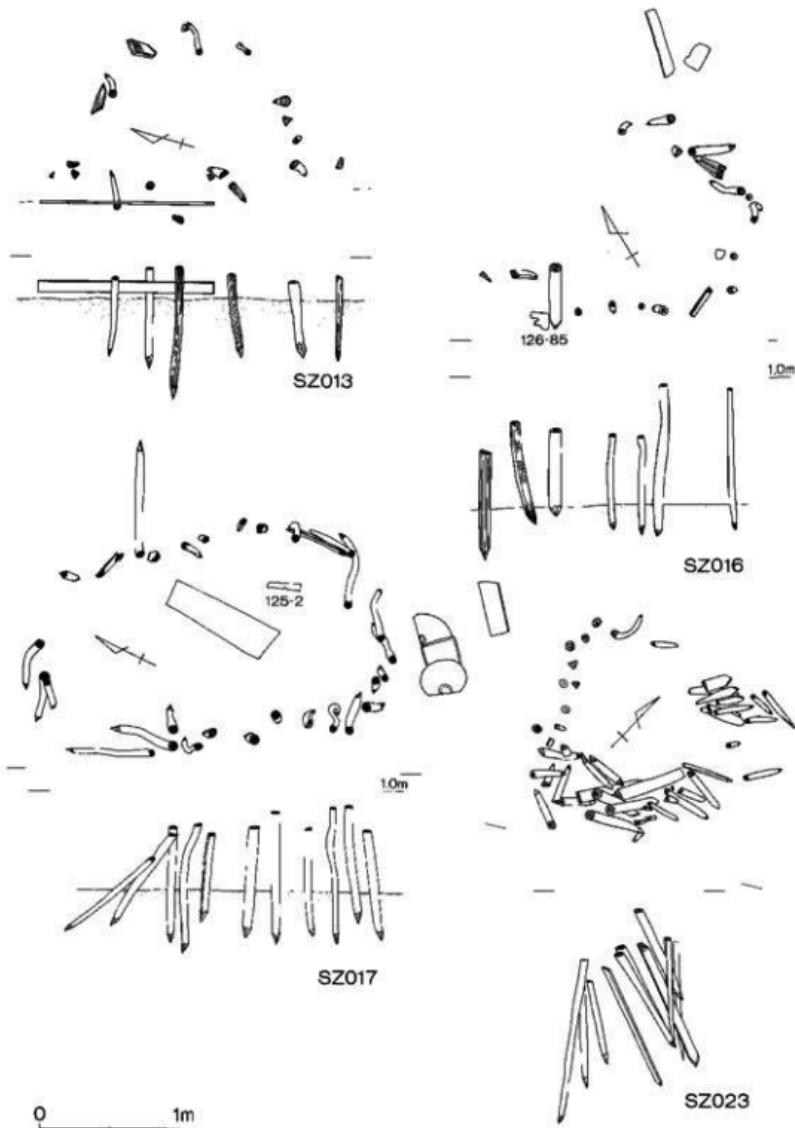
列石遺構の南約15.0mの位置に径1.0mほどの薄い貝層があった（貝層E、第2図）。中に含まれている土器片から列石遺構と同様に、弥生時代後期のものと考えた。

これらの列石遺構と貝層Aとを結んだ線は、ほぼ、弥生時代中期の溝状遺構やウッドサークル群等発掘調査区中央の遺構の方向に沿っている。弥生時代中期の貝層が旧河道の水際に形成されていることから、列石遺構と貝層Eを結んだあたりよりさらに西側は、弥生時代後期の旧河道であった可能性が高い。

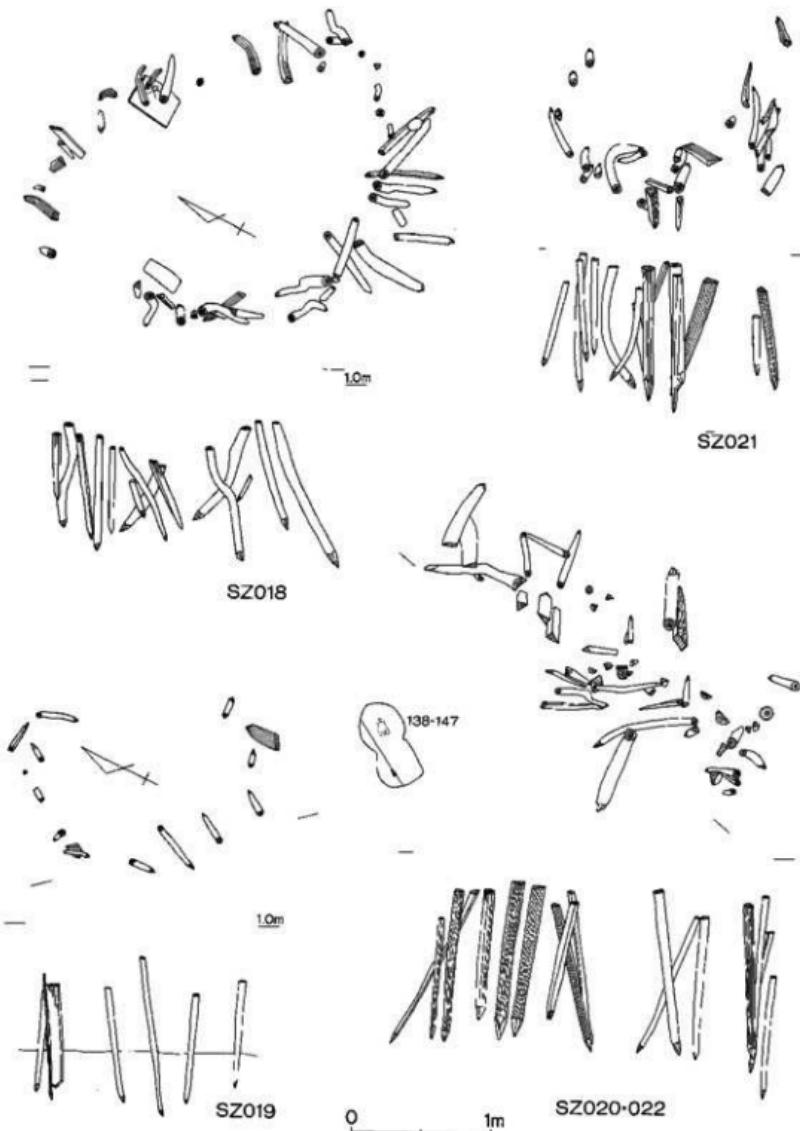
以上のような、弥生時代中・後期の遺構のありかたから、弥生時代の朝酌川の歴史を知



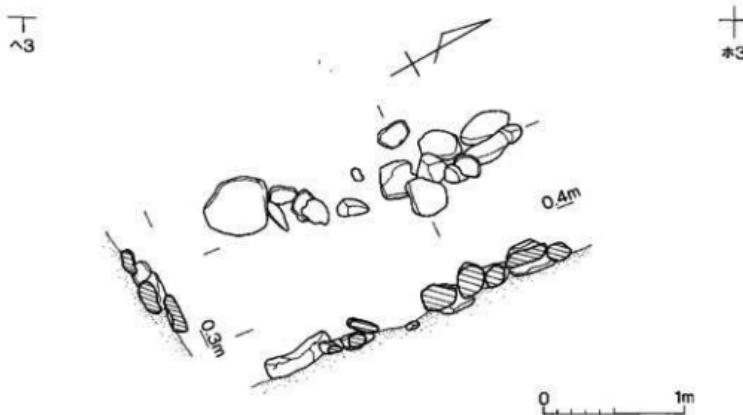
第9図 SZ010・011・012・014・015 実測図



第10図 SZ013・016・017・023 実測図



第11図 SZ018・019・020・021・022 実測図



第12図 列石遺構実測図

ることができよう。まず、発掘調査区の北東部（朝酌川の上流部）においては、旧河道は現在の朝酌川に沿うかたちでその水際を貝層Aのあたりに考えることができる。そしてそれは、第2図に示された現在の朝酌川が蛇行しているあたりから、旧河道も現在よりは、さらに急カーブを描きほぼ南北方向を南に流れている（溝状遺構）と考えられる。これは弥生時代中期のことである。次に、この旧河道（溝状遺構）が埋まり、弥生時代後期には、発掘区のほぼ中央部を流动していた川は、西側下流部に流路を移動し、現在の朝酌川に少し近づいていったようである。

尚、弥生時代の層の上に古墳時代前期の遺物包含層があったが、遺構は発見することができなかった。

註1 『登昌』昭和35年

2 近藤 正『寺の協造跡』島根県松江土木事務所 昭和44年3月

3 恩田 清氏調査

4 深井明比古氏の御教示による。

5 山本 清『鹿島町誌』昭和37年

6 東森市良他『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会 昭和55年3月

2. 遺 物

第21図～第192図に示したのは、前項の遺構や各時期の層から出土した遺物である。各遺構や土層の時期決定の基準としたのは編年研究の進んでいる土器によってである。それ以外の遺物についてはそれ自体で未だ詳しい時期決定をすることは困難である。従って木製品や石器といった土器以外の遺物の中には、ここでは一応時期別に分類しているけれども、いくばくかはそれ以前の時代のものが混在しているかもしれない。例えば弥生時代後期として分類した木製品の中には前期のそれが混在する場合もある。しかし、大方においては土器の示す年代に他の遺物も等しいと考えて差し支えはないと思われる。以下は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物の概略であるが、一部には便宜上、明らかに亦生時代前期の遺物であっても載せることにした。また、動植物の遺存体については弥生時代中期の遺物であっても、都合によって次回に報告する予定のものもある。

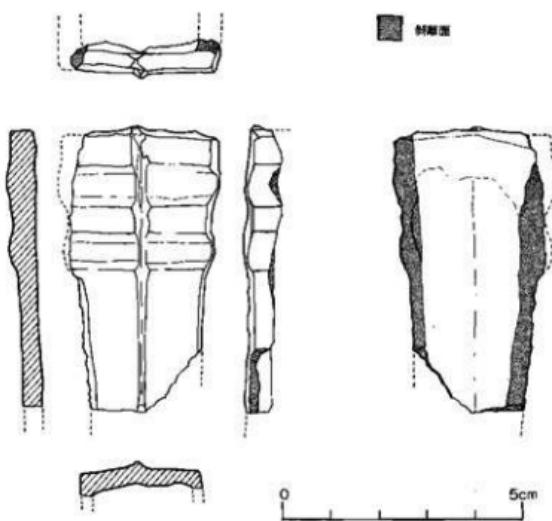
(1) 弥生時代中期の遺物

鉄斧 発掘調査区のはば中央にある貝殻C付近より第13図に示したような鉄斧片が出土した（カラー図版2上）。現存部長さ6.0cm、最大幅3.0cmを測る。横方向に幅約1.0cm、高さ3mmの二条の突起があり、その中央を縱方向に鑄型の合わせ目痕が走っているので、袋状铸造鉄斧の側面であることがわかる。平均的な厚みは4mmである。全体に銹化しており部分的に綠錆がみられる。重さは31.0gを測る。弥生時代における同種の資料は福岡県行橋市下稗田遺跡等九州北部に多く、大陸では中国東北部から韓半島北部に分布がある。^(註1) 西川津遺跡出土資料は、直接的にせよ、九州北部を経るとしても、大陸から日本海沿いにもたらされたものとして注目される。弥生時代後期の木製品の中には、この種の柄が出土している（第162図278）。下稗田遺跡出土例（弥生時代中期前葉～中葉）を参照にこの鉄斧を復元すると全体の長さ15.0cm、幅8.0cmほどになると思われる。

骨角器 骨角器には釣針、鋸、簪等の装身具類、鍼針、矢筈等がある（第14図～第20図、カラー図版4）。いずれも、鹿角製か猪牙製かのどちらかである。

釣針には4種がある。A類は小形で逆刺のないもので、第14図1・2がこれにあたり鹿角製である。1は長さ3.1cm。B類は長さが5.0cm以上で逆刺が外側につけられたもので、第14図3・4・5、第15図6がそれで、いずれも鹿角製である。完成品の4は長さ7.1cm、幅4.2cmを測る。C類は逆刺は内側に向かい合って2か所設けられたもので、第15図7と8がこれにあたるが、前者は鹿角製、後者は猪牙製である。完形の7は長さ8.0cm、幅1.8cmを測る。D類は大形の結合式釣針である。第16図10、11、第17図13がそれである。こ

の種の釣針
は軸部を鹿
角、鉤部を
猪牙製とな
つていて、
この原則は
他遺跡でも
貫かれてい
る。このう
ち、11は外
側に2か所
の逆刺が見
られる鉤部
の欠損品で
ある。10、
13は歯部の
未成品で粗



第13図 鉄斧実測図

い削り痕が残る。10の長さは約11.0cmである。

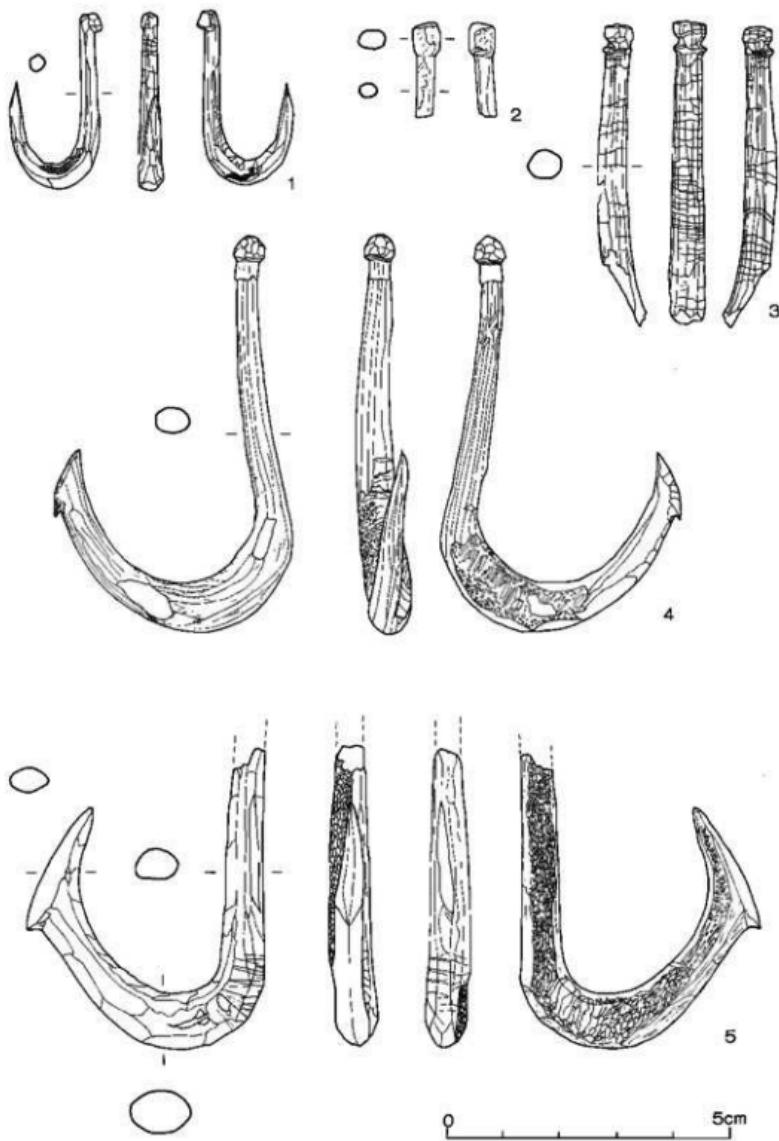
第15図9は長さ7.4cmの鹿角製品である。頭部に加工痕と中央部に孔を穿とうとした痕が認められる。加工途中なので、不明点が多いが、全体の形状からして回転式離頭鋸の未
(註2) 成品の可能性がある。

第16図12、第17図14、第19図18、19は箒の類である。12は長さ7.9cm、径は0.5cmで先端より3.0cmあたりから基部は乳白色の接着剤と柄に繋縛した糸の痕が認められる。18はエイの刺尾、19は最大径が3mmで、3個の欠損品からなる箒であるが、復元すれば8.0cm以上の細長いものとなる。入念に磨かれている。

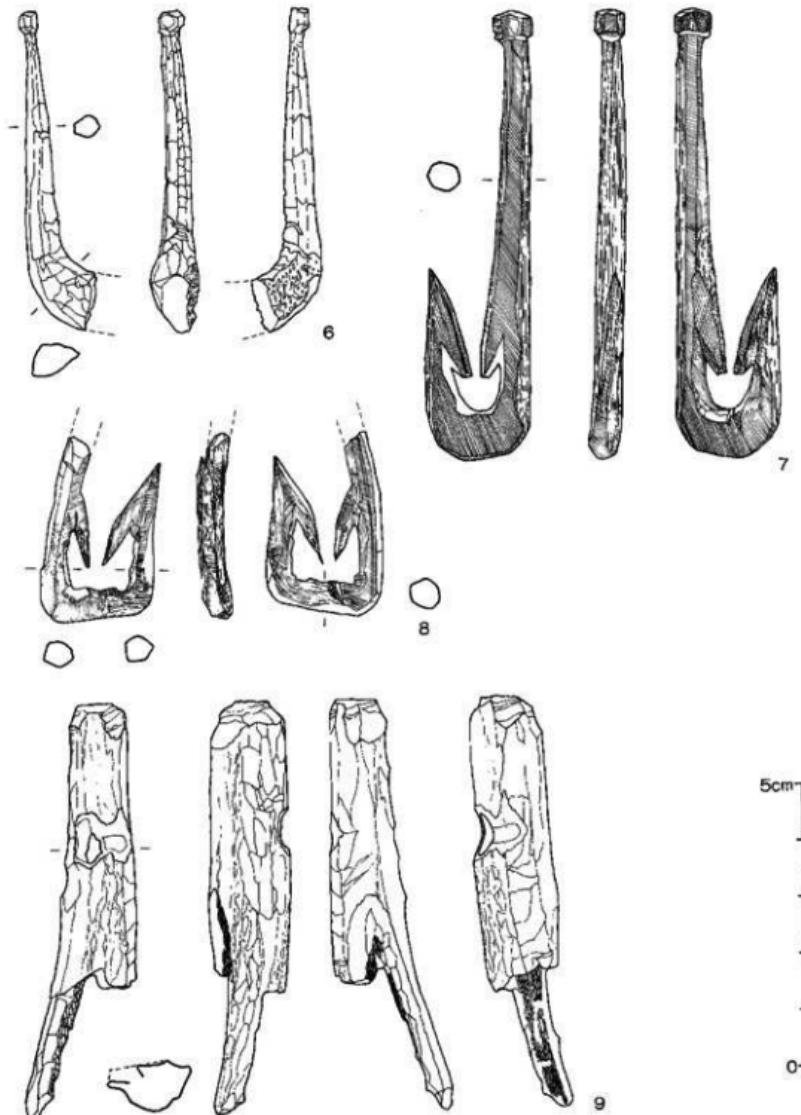
第20図25と26は矢筈の一部と考えられる。同24は不明の骨角器であるが、その製作手法は矢筈と同一であり、25や26に関係するものか、あるいは装身具と考えられる。

第20図27~32は縫針である。このうち、27と28はその未成品、29~32は完成品が欠損したものであるが、29・30・31には糸孔が残る。

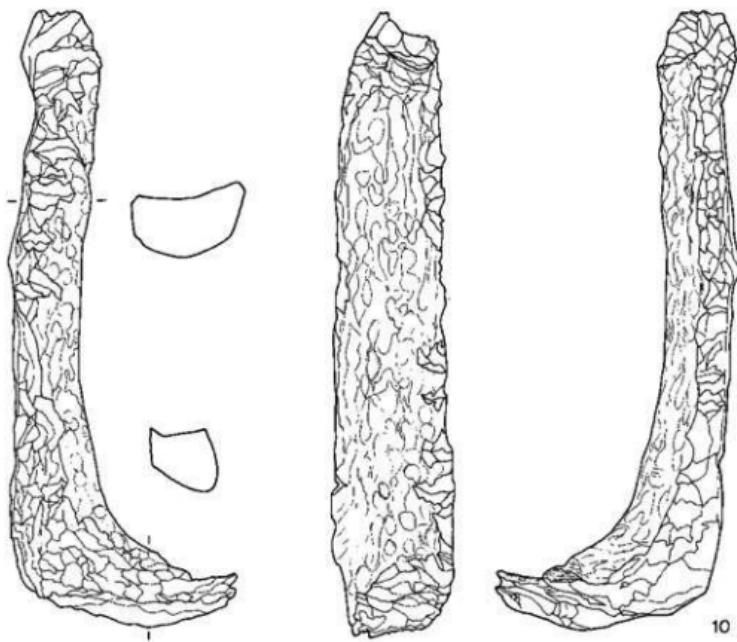
第20図33は簪で現存部は2.0×2.2cm、厚さ0.2cmの扁平でこれに3本の歯が認められるが、いずれも長さ2~3mmで折れている。第20図34は長さ1.3cmの牙玉で孔を穿つ。



第14図 骨角器実測図(1)



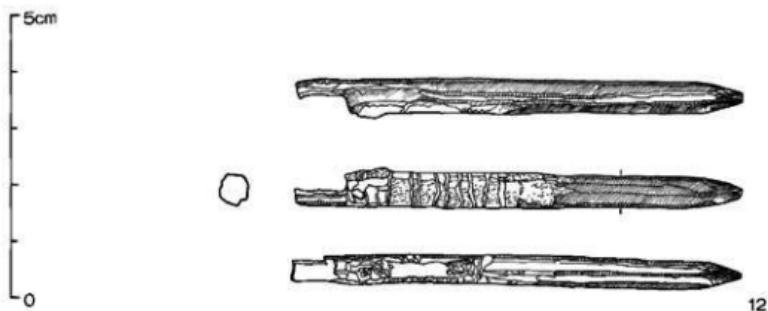
第15図 骨角器実測図(2)



10

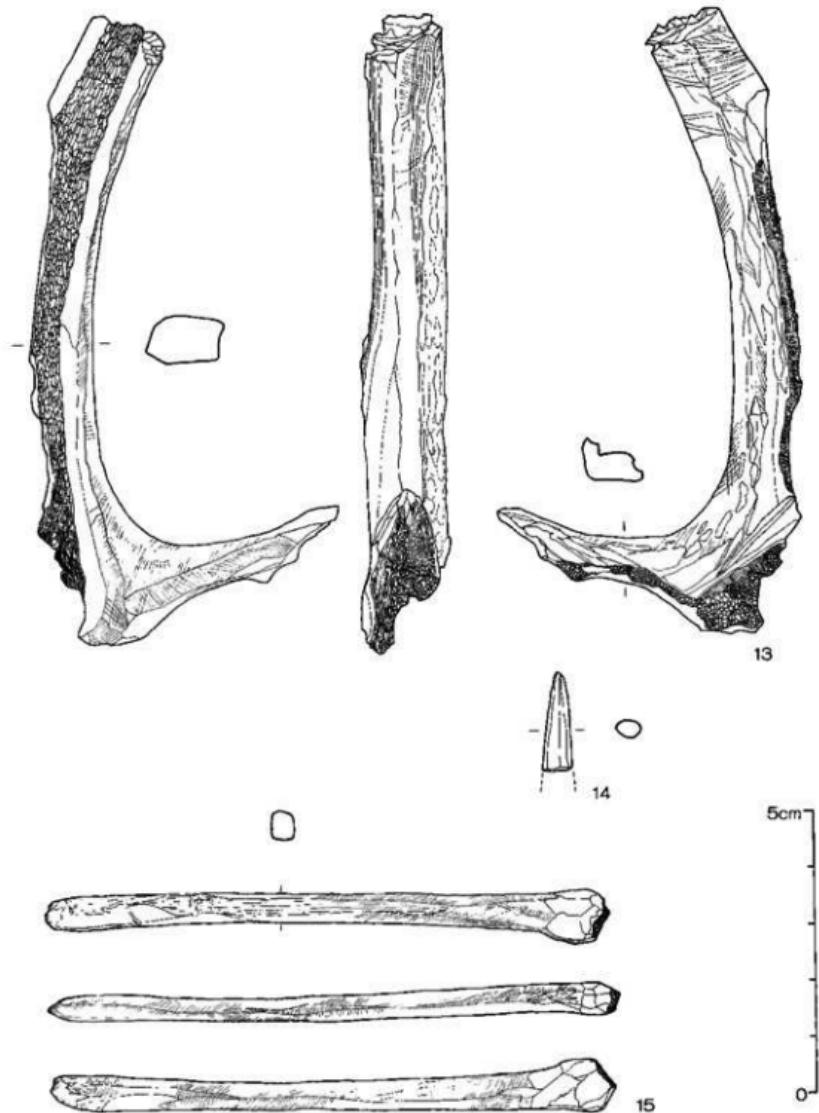


11

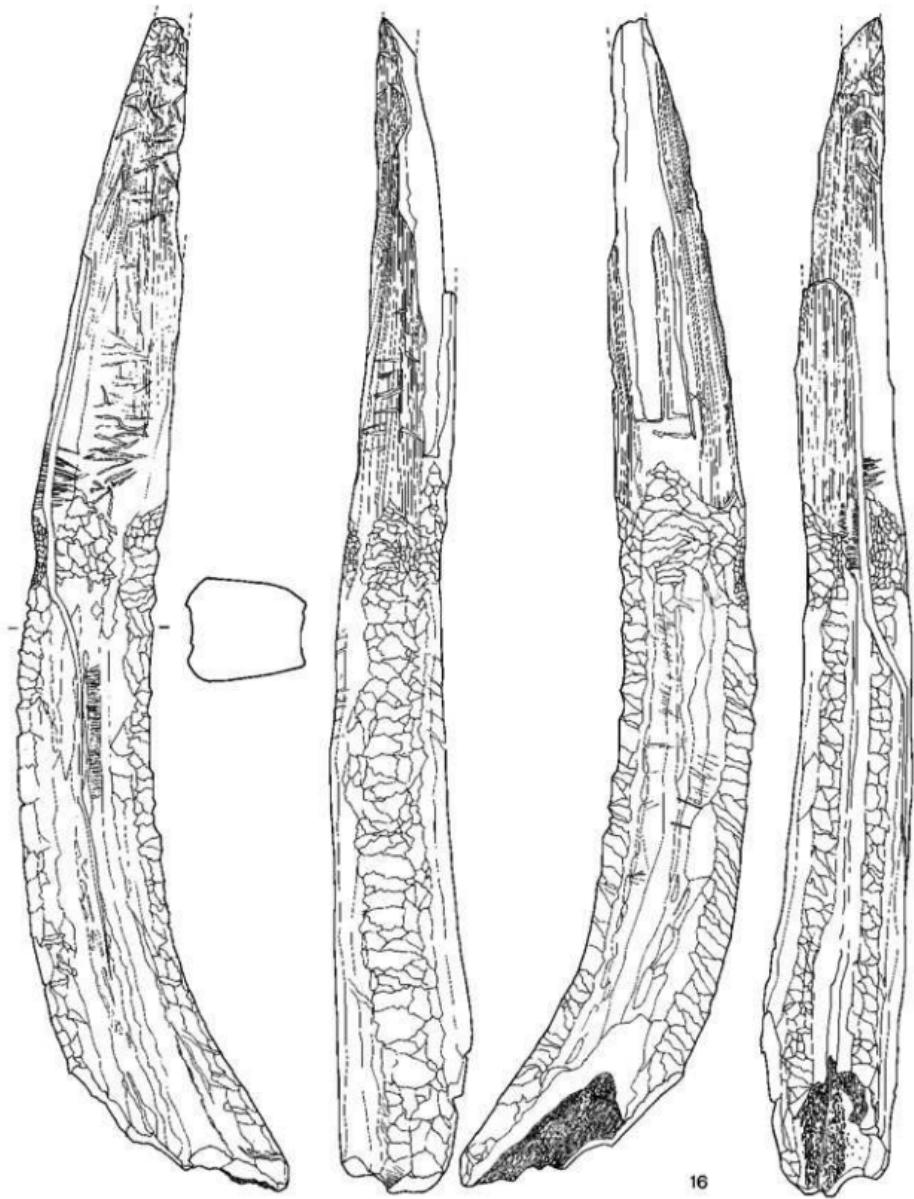


12

第16図 骨角器実測図(3)



第17図 骨角器実測図(4)

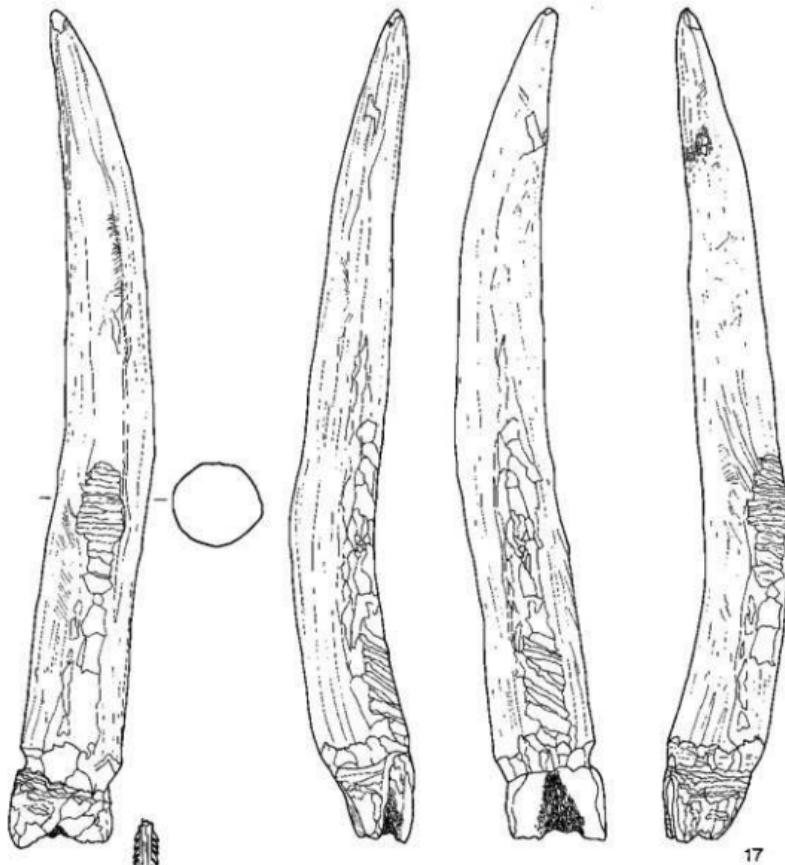


16

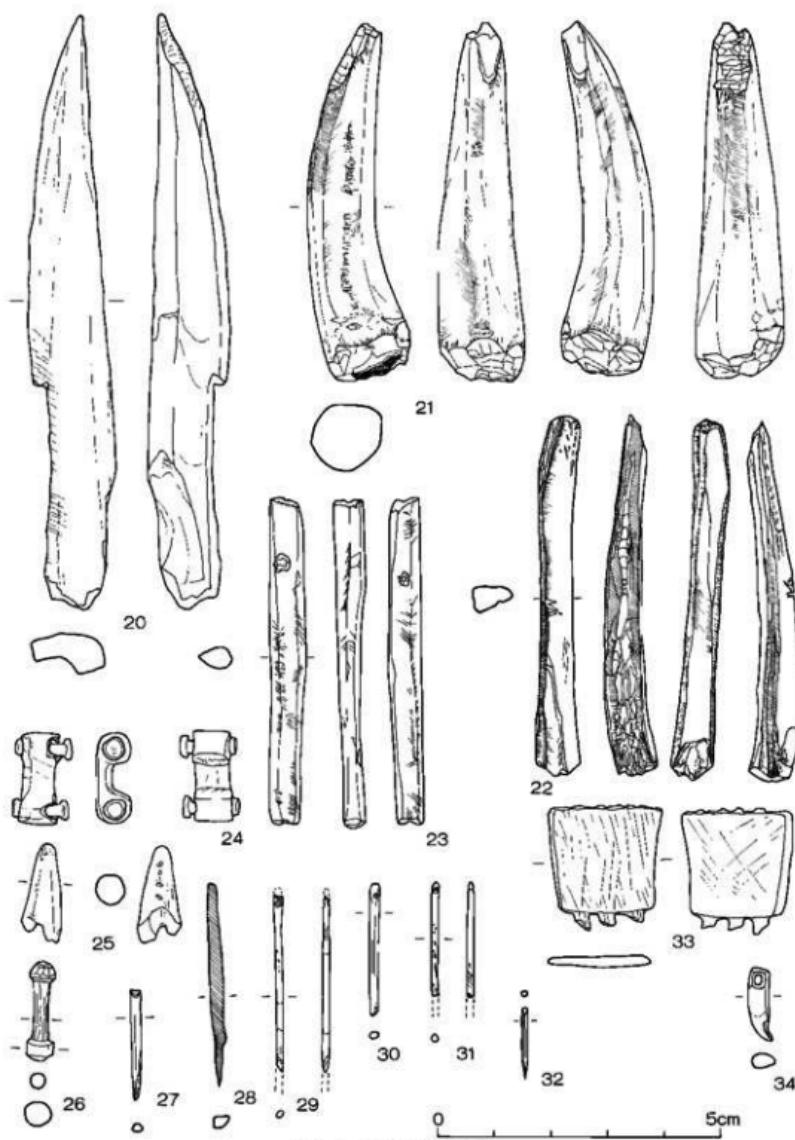
第18図 骨角器実測図(5)

0

5cm



第19図 骨角器実測図(6)



第20図 骨角器実測図(7)

第17図15は長さ10.0cmで、両端がその中央部に比して幅広・扁平となっている骨角器である。使用痕があり完成品と考えられる。用途は不明だが、現在使用されている金属製の釣針はずしに似ている。

第18図16、第19図17、第20図20・21・22・23はいずれも加工途中のものである。23は小孔をあけようとしており、16は敲打と粗い削りがみられる。16・17・21は兜角製である。

弥生時代中期の土器 第21図～第98図には弥生時代中期の土器を図示した。そのほとんどは弥生時代中期層や遺構から出土したものであるが、中には弥生時代後期層や古墳時代前期層からの出土資料も弥生時代中期の特徴的なものであれば掲載することにした。器形は、甕・壺・鉢・高杯の他に各種の土製品や分銅型土製品、土錐、紡錘車がある。

a. 甕形土器

第21図～第43図は甕形土器として分類したものである。このうち、第21図7・8・9・12・14、第22図17・18・19・20・21は弥生時代前期の様相を強く残しているが、沈線はクシ書き手法によっている。口縁部が平坦となるもの(7)と「く」の字状になるもの(8・9・12・13・14)がある。17～20も後者と思われるが、19はクシ書き沈線部に一条の突帯がある。

第21図1・2・3・4・5・10は口縁部が肥厚し平坦、もしくは断面が二角形となる一群である。このうち、1と2は口縁部直下に一条の突帯を施し、九州地方の頸次式土器の影響を受けたと思われるものである。内面はヘラ磨きがみられ全体に丁寧な作りである。

以上の甕形土器以外のそれらは、いずれも原則的には口縁部が「く」の字状を呈し、胴部の最大径が中央よりやや上方にある胴長の器形である。胴部の径に対し底部径が小さくやや不安定なものも特徴の一つにあげられよう。いずれも壺に比較すると器壁は薄く、外面上には煮沸時のふきこぼれと考えられる厚い炭化物が付着したものが多い。外面ともハケ目やヘラ磨きで整形しているが、特徴的なものは外面のヘラ磨きである。すなわち、外面胴部中央より下方は縦方向のヘラ磨きの原則が貫かれている。上方にヘラ磨きを施す例はない。これに対し、内面はくびれ部より下方に横方向のヘラ磨きが施される例が若干あるが(第22図29・30、第23図39・45、第24図47・52・57、第26図73・83、第27図88・95、第30図145、第33図194、第36図232、第39図288)、多くは縦方向や斜めのハケ目調整されている。中にはハケ目調整後粗い横方向のヘラ磨きがみられるものがある(第27図92、第29図141、第30図153、第31図160・161、第36図242、第38図275)。また、内面の胴部下方全面にヘラ磨きを施す例もある。壺に比較すると装飾性は極めて乏しいが、多くは胴部中央

にクシ状工具による一条か二条の刺突文をめぐらすのが通例である。中には第21図6や第44図388・389のように壺の突帯に共通した装飾がみられるものもある。また、口唇部に刻み目を施すものと、そうでないものがある。口縁部に一条あるいはそれ以上の沈線のあるものは、中期の中でも後出のものと考えられるが、このような沈線と刻み目を組み合わせたものもある（第41図318～333）。

第42図及び第43図347～351は菱形土器の底部のうち、穿孔のみられる資料を図示したものである。いずれも焼成後に穿孔されているが、第42図334はその途中のものである。これら底部穿孔の菱形土器は盤として使用されたと考えられている。但し、第42図334及び第43図347の二例は、底部が厚く、前期のものの可能性がある。

第43図352～382は、台付の菱形土器として分類を試みたものである。この中には366のように底部を穿孔したものがある。この種の菱形土器は中期になって始めてあらわれる器形である。

以上の外に第77図814以降第83図にあげた底部の中にも多くの菱形土器が含まれているものと思われる。

b. 壺形土器A

第49図456及び第71図772・773・774は弥生時代前期の特徴を残した壺形土器の頸部である。多条化した沈線と波状文はクシ状工具によってしっかりと施されている。菱形土器の第21図7・8・9・12・13・14に対応するものである。壺形土器は菱形土器に比較すると器形が変化に富んでおり、装飾も豊かなものが多い（第44図～78図）。

456以外の壺形土器は特に頸部から口唇部の形態によって、二種に大別し、それぞれを細分し次のように分類を試みた。

I類——口縁部が短く断面が「く」の字状を呈するもの。

I a類………頸部に突帯をつけたもの。

I b類………頸部に突帯がみられないもの。

II類——口縁部が長いもの。

II a類………頸部より上がほぼ垂直に立ち上るか、やや外傾し、口唇部内側をつまみ出したような低い突帯状となるもの。

II b類………頸部より上が逆「ハ」の字状に長くなり、その外面や口唇部が装飾されたもの。

II c類………II b類の頸部よりさらに外側に広がるもの。

II d類………II c類の口縁が下垂し、最も装飾性に富むもの。

I a 類、第44図389～395、第45図、第46図、第47図、第48図430～439、第49図446・447・448、第50図469・472・478・479・480、第52図517・519、第53図537等がこれにあたる。甕形土器の器形に共通する部分も多いが、頸部の突帯を壺形土器の要素として重視した。その頸部に貼りめぐらされた突帯は、いずれも指頭でおさえ凹凸をつけ文様としているのが特徴である。口縁部が無文のもの（389～397、537）、刻目を入れたもの（416～439、446～448、478、480、517、519）、沈線が入るもの（425、429～439、446～448、472、478～480）、これらに円形浮文を貼りつけたもの（413、414、416、429、434、435）、下垂する突帯を貼りつけたもの（439、446）、これらが互に混在するもの（429、430～439、446～448）があり、I a 類内においてさらに細分できる可能性がある。但し、円形浮文と下垂する突帯が共存する例はみられない。

I b 類、第50図460、465～467、471、474～476、第51図481～484、486～493、第52図502～516、第53図520～535、第54図544～555、第59図613～615がこれにあたる。これらは口縁部が無文のもの（481、482、490～493、501、520～522、524～532、544～555、613～615）、沈線のはいるもの（460、465～467）、それに円形浮文を貼りつけたもの（462、464）、斜格子文を施すもの（471、505、507）、クシ状工具による刺突文がみられるもの（475、501～504、506、508～516、748）、これらが組みあわさったもの（477）等があり、胴部に多条沈線や波状文、刺突文を施すものも多い。このうち、481と482は、作りは丁寧で内外面ともヘラ磨きがみられ、頸部には小孔が穿たれてるので、蓋とセット関係にある比較的小形の壺形土器であり、これら以外のものとはその機能が異なり、単なる貯蔵のみの機能ではなく製作当初から例えば、漆を入れる容器としてある目的をもって作られたものと考えられる。

II a 類、第54図541をその典型と考えた。第54図542、543の他に第51図494～500もこの一群として扱った。541は頸部に貼付突帯を有するが、これ以外にはみられない。495、497、541は口唇部に刺突文、494、500は沈線がみられる。541の場合胴部に貝殻腹縁による刺突文を施し、それより下方は内外面ともヘラ磨きがみられる。

II b 類 第49図453、454、第52図518、512、513、第55図、第56図570～575、第58図611が相当する。II b 類の特徴は頸部より上方が逆「ハ」の字状に長く延びるとともにその外面に刻目突帯を多条に貼り付けていることである。その突帯の上にさらに下垂する二条の突帯を貼り付けたものもみられる。（564～568、562、572）。装飾文様は円形浮文や斜格子文、波状文がある。外面に多状の突帯がみられない454、518、570はその頸部にこれを貼り付けている。

II c 類 第51図485、489、第56図576～586、第57図、第58図、第59図622～628、第60図629、第61図661等その例は多い。II b 類のように頸部より上方外面に刻目突帯を貼り付けたものもみられるが（581～585、599～601、605、609、610）、その本数は少ないものの方が多い。これらの口唇部の文様は I a 類や II b 類にみられたものと同様である。外面に多条の貼付け突帯のみられないものは、その頸部に突帯や（598、611）、沈線を入れている（593）。このうち、599は口唇部に貫通した小孔をめぐらせている。

II d 類 第59図619～621、第60図、第61図、第62図、第63図、第64図、第65図、第66図、第67図、第68図（748を除く）と多い。II b 類や II c 類にみられたような刻目突帯ではなく、頸部にのみ突帯が貼り付けられている。下垂した口唇の外面にはクシ状工具による斜格子文が目立ち、それは口縁部内側や外面の頸部から胴部にかけて同じ手法で飾られるものが多い。634、676、696～702、705、707、708は口縁部において最も装飾性に富んでおり、口縁上やその内側に凹凸のある突帯を貼り付けている。このうち696と707の突帯は注口状に貼り付けられた可能性がある。また、680、682とともに、この種のものには676、698、699、700等口唇部に小孔をめぐらせたものも多い。

このような壺形土器の特徴から、第69図758、759、760、764は II b 類か II c 類、第60図757、761～764、766～768、第74図803、804、第75図806、807、第76図812、第77図813は II c 類、か II d 類、第70図769、第72図791、第73図、第74図799、800は II d 類に属するものと考えられる。

以上、壺形土器の分類を試みたのであるが、これらにあてはまらないものや、それの中間様相を示すものが多いのも、これまた弥生時代中期の特色である。

c. 壺形土器B

ここで壺形土器Bとしたのは、無頸壺と考えられるもので、鉢形土器に似るものもあるが、口唇部に、一孔、または二孔が対になっているものはこれに入れた。口縁部は内傾し肥厚しない。第84図951～961、第85図966～969、第86図990、993、1000、が壺形土器B類である。壺形土器Aのように派手に装飾したものは少ないが、952、954、956、959、960等は共通した文様意匠である。このうち、960は蓋の径は口縁部より小さく、壺の口唇の外に蓋が出ないものと思われ、他は皆、壺の口唇径より大きな径の蓋がセットになるものと考えられる。但し、954は口縁部上に文様があるので、無蓋の壺か、あるいは鉢形土器であろう。

d. 壺形土器C

第84図947、948は長頸壺と考えられるものであるが、全体の器形は不明である。

e. 鉢形土器

第85図、第86図、第87図、第88図は、壺形土器Bとしたもの以外は全て鉢形土器として分類した。この中には、さらに壺形土器B類に入れなければならないものもあるかもしれないが、第88図1028や第87図1017は全体を知ることができ、鉢形七器の典型として考えられよう。第85図や、第86図に示したものはあまり文様がみられず第87図や、第88図は壺形土器に共通した文様を施しているが、派手ではない。外面にヘラ磨きが施されるのは文様帯より下方で、その多くは縦方向である(989、997、1011、1017、1028)。第85図962、965の小形品は、中期前出土の弥生時代前期のものの可能性がある。

f. 高坏

第89図、第90図、第91図、第92図、第93図、第94図、第95図1141～1153には高坏を図示した。高坏の坏部の形態から次の4種に分類した。

A類、無口縁で、口唇部は内傾するもので、1060、1061がこれにあたるが、全体は坏部の深いワイングラスの器形に近いものであろう。外面は沈線と刺突文で飾られる。

B類、1033、1062をB類とした。口唇部はA類と同様であるが、A類ほど内傾せず、口縁は広く開き浅い。1062は口唇上と外面に沈線を施し、脚部は小孔と多条沈線がある。

C類、B類より坏部がさらに広がり、口縁部は広く平坦となる。1035～1037、1047～1053、1064～1083がこれにあたる。全体の器形はB類に近いと思われるが、1075、1076、1082、1083は胴部が直線的か、あるいは逆に坏の内部にむかいつかにカーブを描く。1082、1083は、口縁部が明確になり、「S」字状となったもので、第103図1303、1308、1309のような弥生時代後期の高坏に近い。口唇部と広く平坦な口縁部には、文様を入れたものもみられる(1037、1050、1051、1052、1054、1063、1066、1067、1068、1071、1081)。また、1065、1070、1072は口縁部に一对の小孔があり、蓋がセットとなったと思われる。当然のことながら、その口縁部には文様はみられない。

D類、C類の口縁部が外側に向かい鉗状に延びたもの、あるいはその兆しがみえるものをD類とした。1036、1038～1046、1054～1059がそれである。このうち、1054の口縁部上には文様があるが他にはみられない。1040、1041、1045は鉗状の口縁がやや下垂する。1057は全体の器形を知ることのできる好例である。脚部には文様や透しではなく、「へ」の字状に基が広がり、外面は坏部、脚部とも全面にヘラ磨き調整が施されている。

第92図1084以下第95図1153までは高坏の脚部を示したものであるが、1087、1088は、A～D類にあてはまらない別種のものの可能性がある。また、A類には第94図や第95図にあるような、三角形透しを有する脚部がついていたと思われる。

g. 漆塗土器

第96図と第97図は、土器の内外面に黒漆が付着したものを集成した（カラー図版3）。これらの多くは壺形土器であり、高坏や鉢形土器にもみられる。これらを壺形土器の分類にあてはめると、1184～1188は壺形土器B類に、1189～1198、1201は壺形土器A類のうちI b類となる。從って1183は1184～1188とセット関係にあった蓋であろう。1199～1211は底部であるが、皆底部外面まで漆が認められる。1212は鉢形土器であろう。その他の1213～1217は高坏であり、1215は高坏の分類のうちC類の蓋付きのものに、1214はD類となる。1216と1217は頸部と脚部であるが、これらの中間に球状、もしくはレンズ状の坏部があったと考えられる高坏である。漆は内外面にみられるものと、外面のみにみられるものの二種があるが、前者が多い。これらによって漆は蓋付きで無口縁か、短かい口縁の壺に入れられていたことが知られるが、それは漆の性質とも符合している。但し高坏の場合は別の目的で塗装されたと考えられる。

h. 朱塗土器

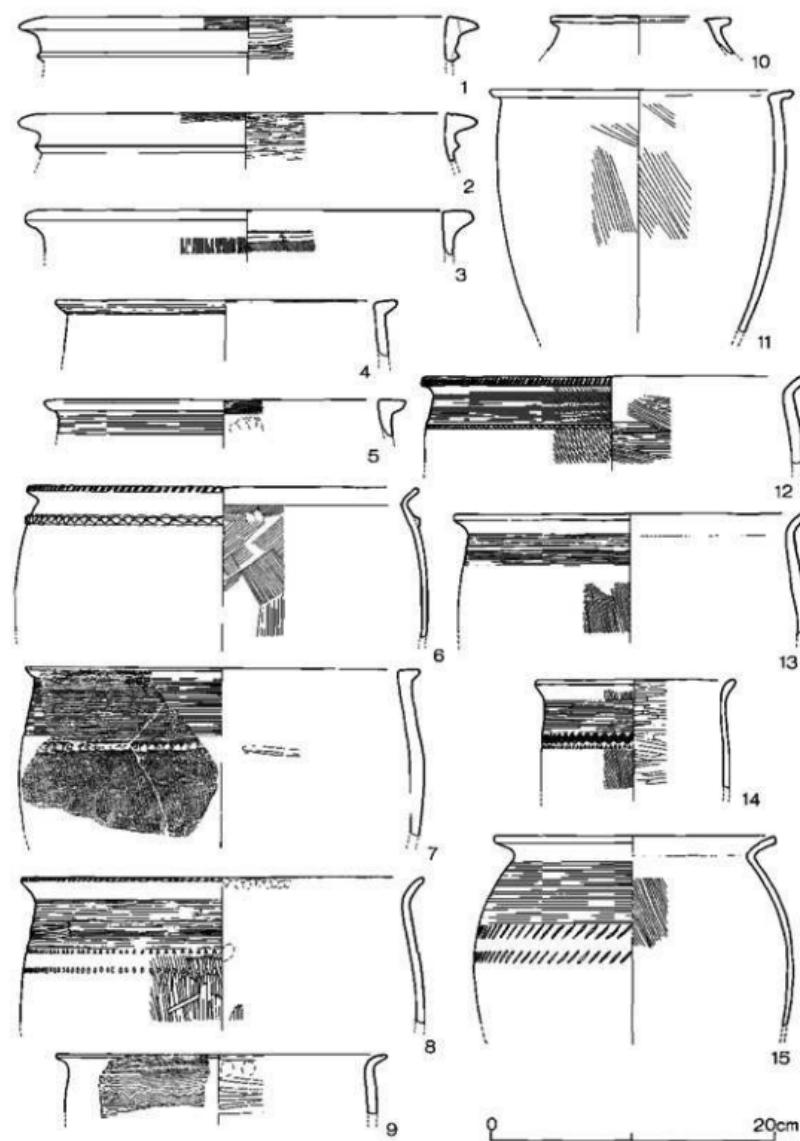
第104図1329と1332は弥生時代中期の朱塗土器である。1329は口縁部径36.7cm、胴部径39.8cmの大形の鉢形土器で、第84図～第87図に示したそれを含めても、最も装飾性に富んでいる。成型・調整や施文も丁寧である。文様は口縁部上面から胴部外面にかけて施されている。胴部中央に4.5cmの幅に施されたクシ状工具による斜格子文のみを朱で塗っている。文様より下方は横方向のヘラ磨き、内面は丁寧なハケ目調整である。1333は、内外面とも朱が塗られ径13.5cmの蓋である。口唇近くに小孔が穿たれている。

i. 小形土器

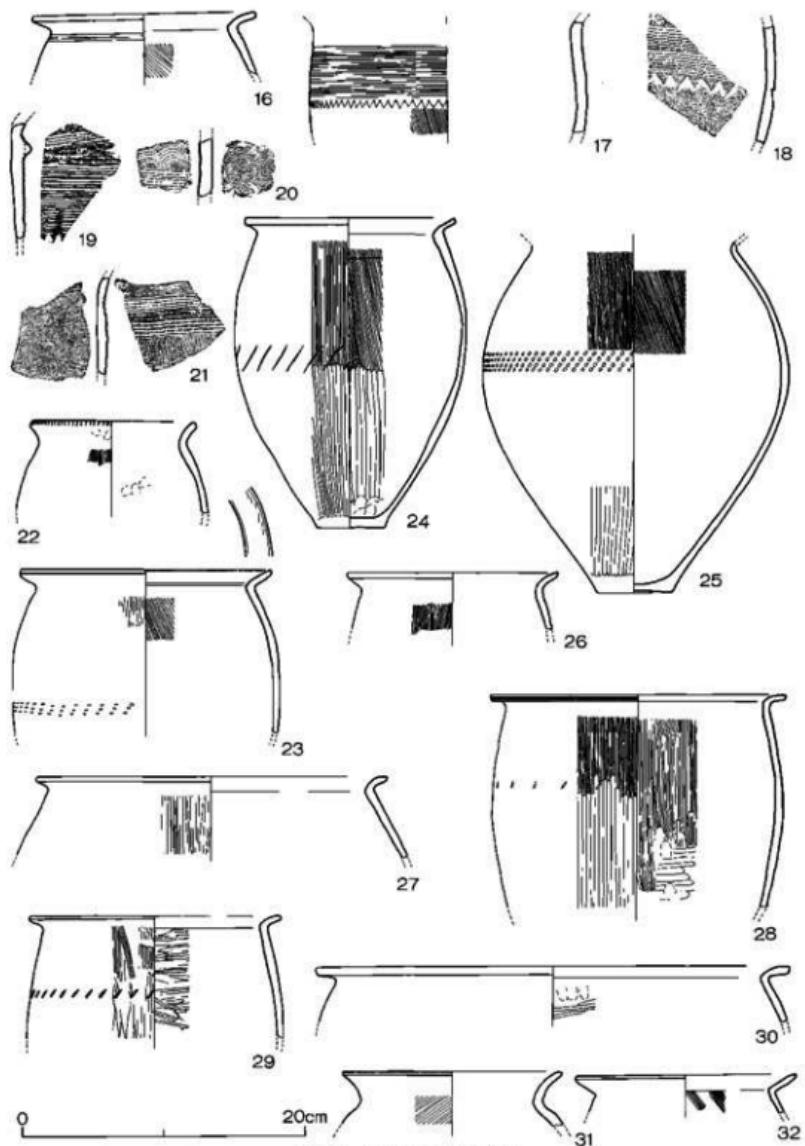
第95図1154～1175は実用には適さない小形の土器を示した。これらのうち、粗く仕上げられた1154以外は、小形であってもその成型・調整は通常のそれを忠実に守っている。但し、1160は前期のものである可能性がある。

j. 土製品

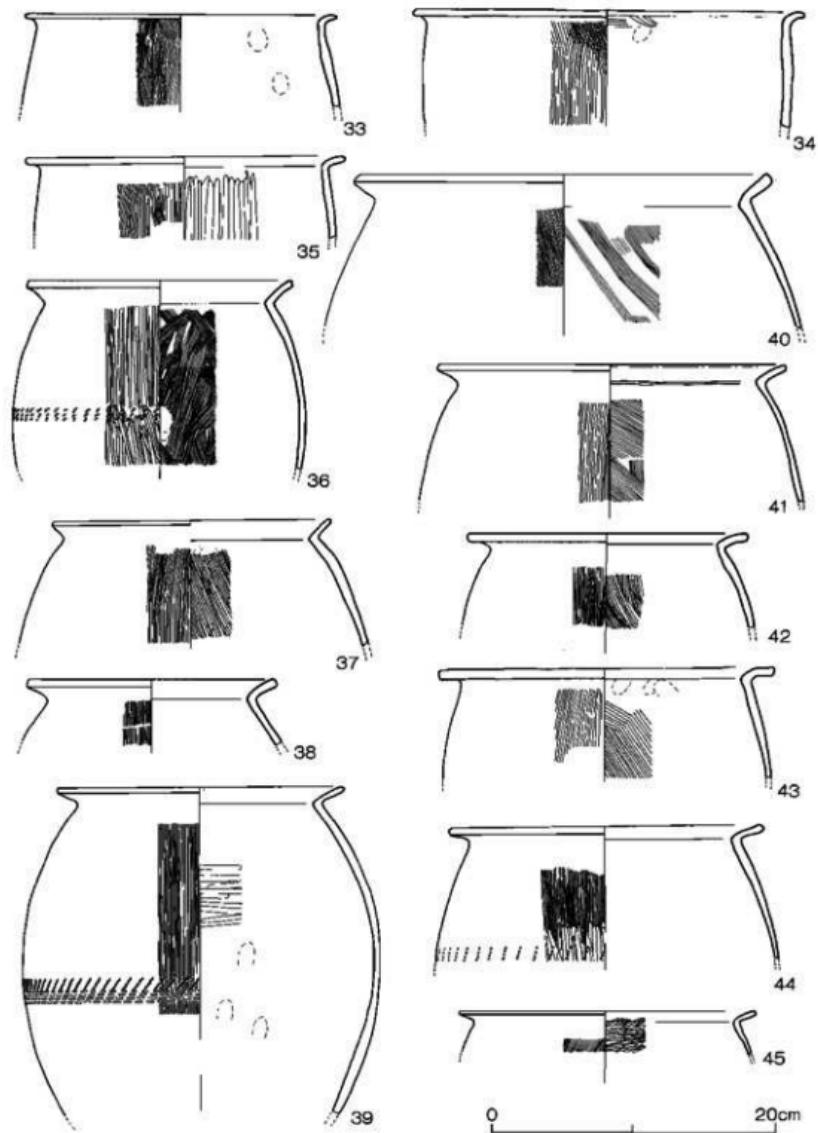
分銅型土製品 第98図には出土した全ての分銅型土製品を示した。6個体ある。1218は現存部9.5×5.7cm、厚さ0.8cmで6個体中最も丁寧な作りのものである。焼成も良好で堅く焼きしまっており、他の分銅型土製品とは時期や製作場所が異なるものかもしれない。文様はクシ状工具で描かれている。1219は長さ3.3cm、厚さ1.3cmを残すが元来小形品であったろう。文様はクシ状工具による沈線を列点文で埋むものである。1220は6個体中最大の破片で現存部は7.1×3.6cm、厚さ1.3cmである。文様の手法は1219と同じで、沈線と列点文である。側面から裏面にむかいい小孔が多数貫かれている。1222は現存部3.7×3.0cm、厚さ



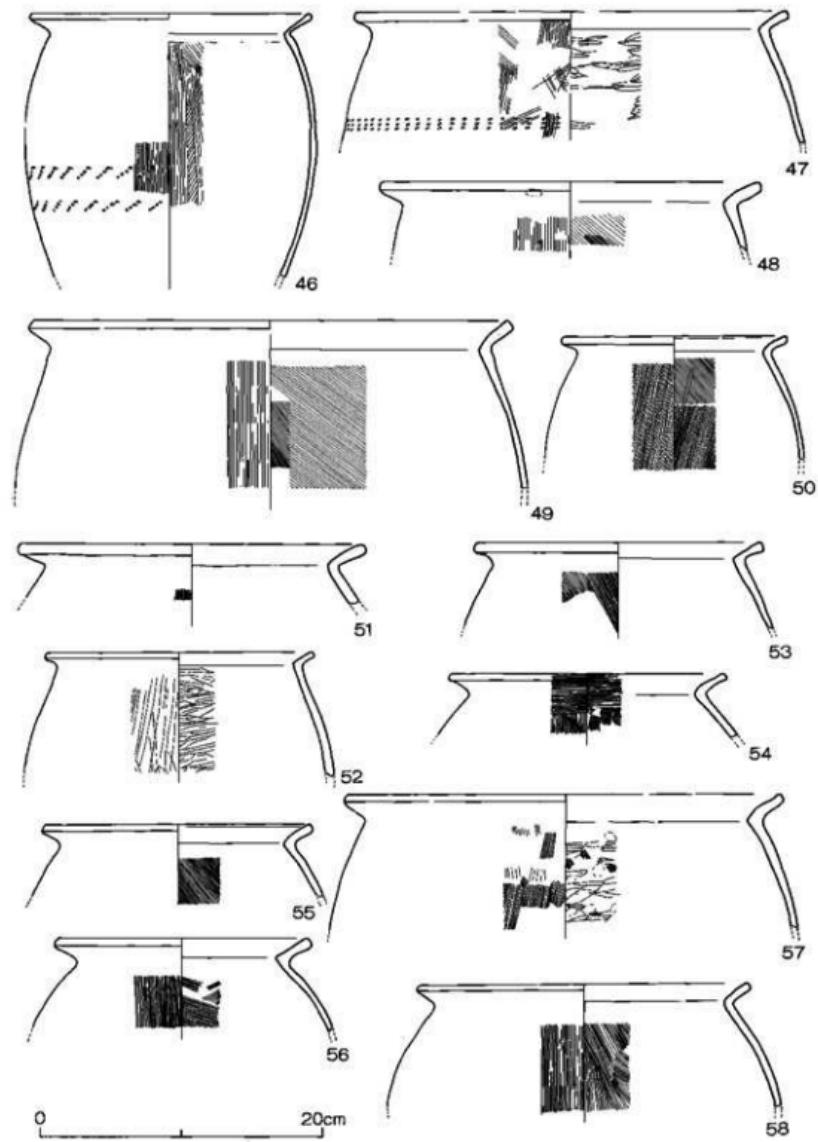
第21図 弥生土器実測図(1)



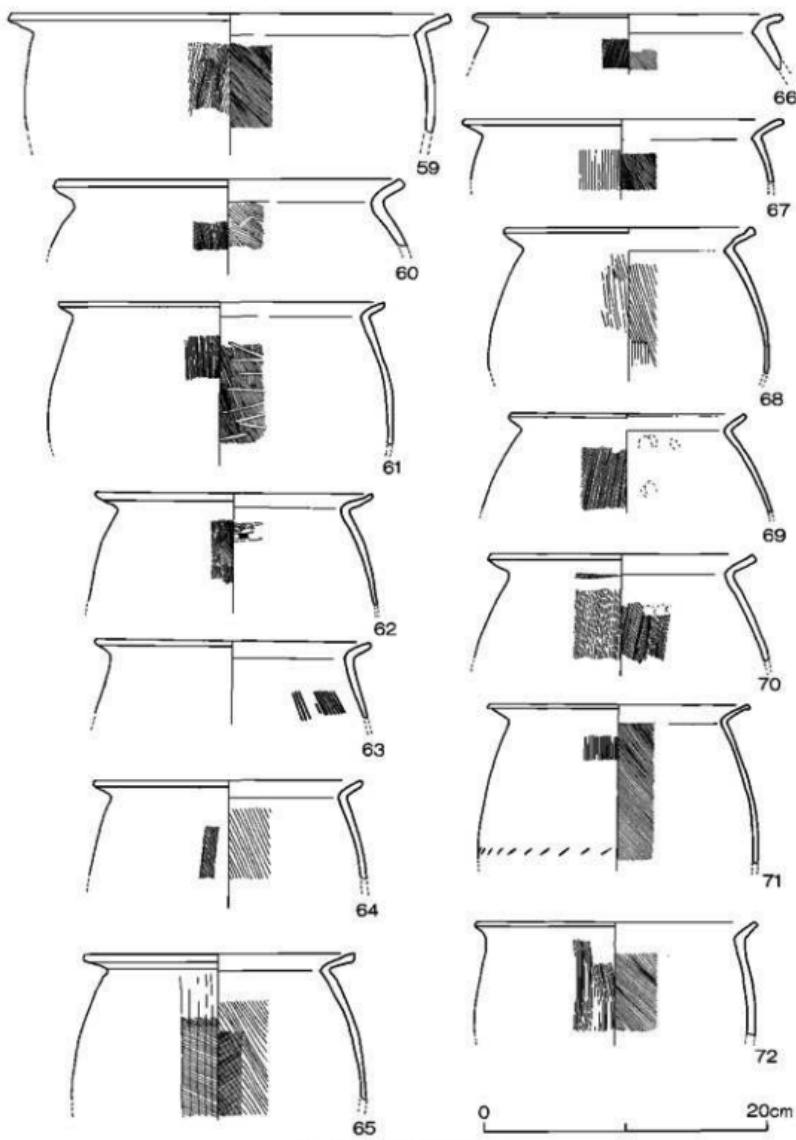
第22図 弥生土器実測図(2)



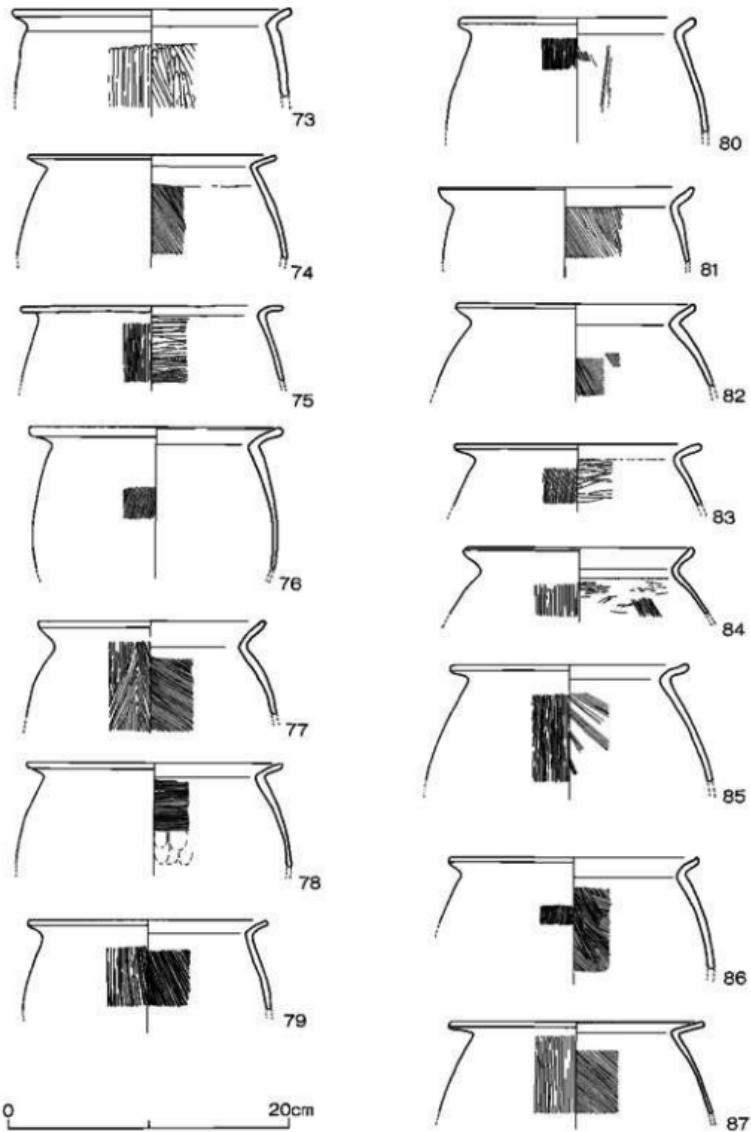
第23図 弥生土器実測図(3)



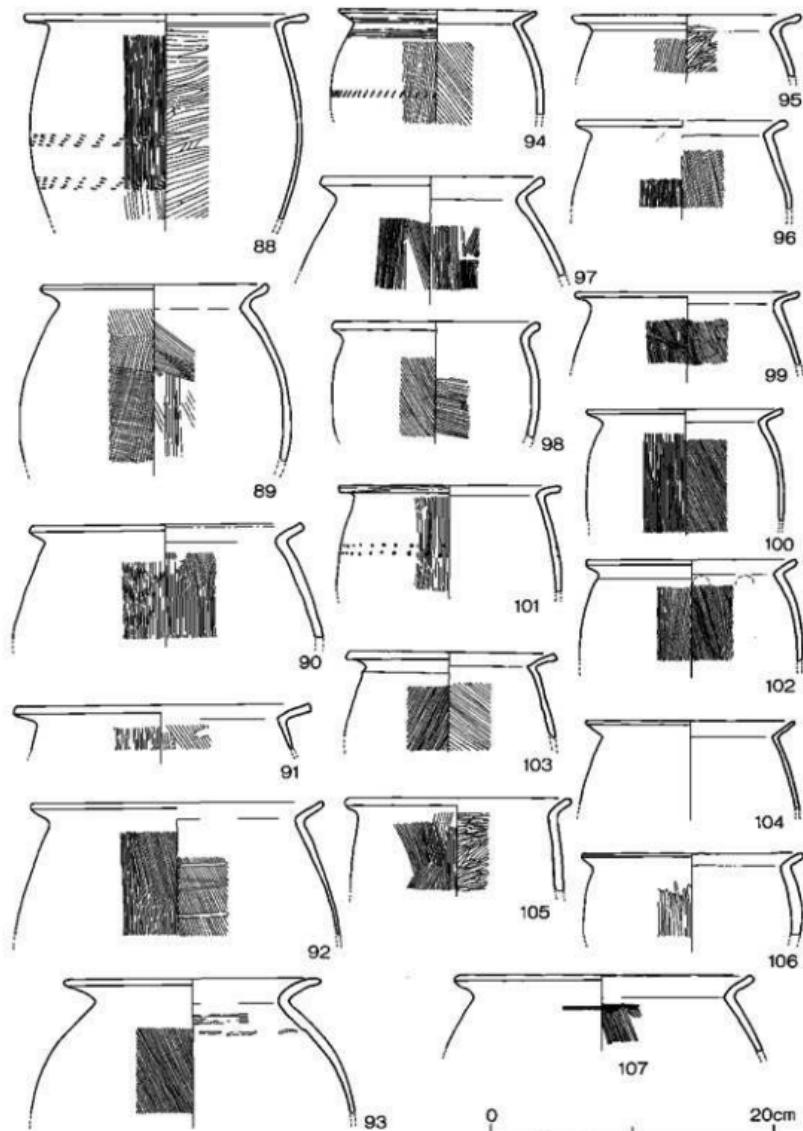
第24図 弥生土器実測図(4)



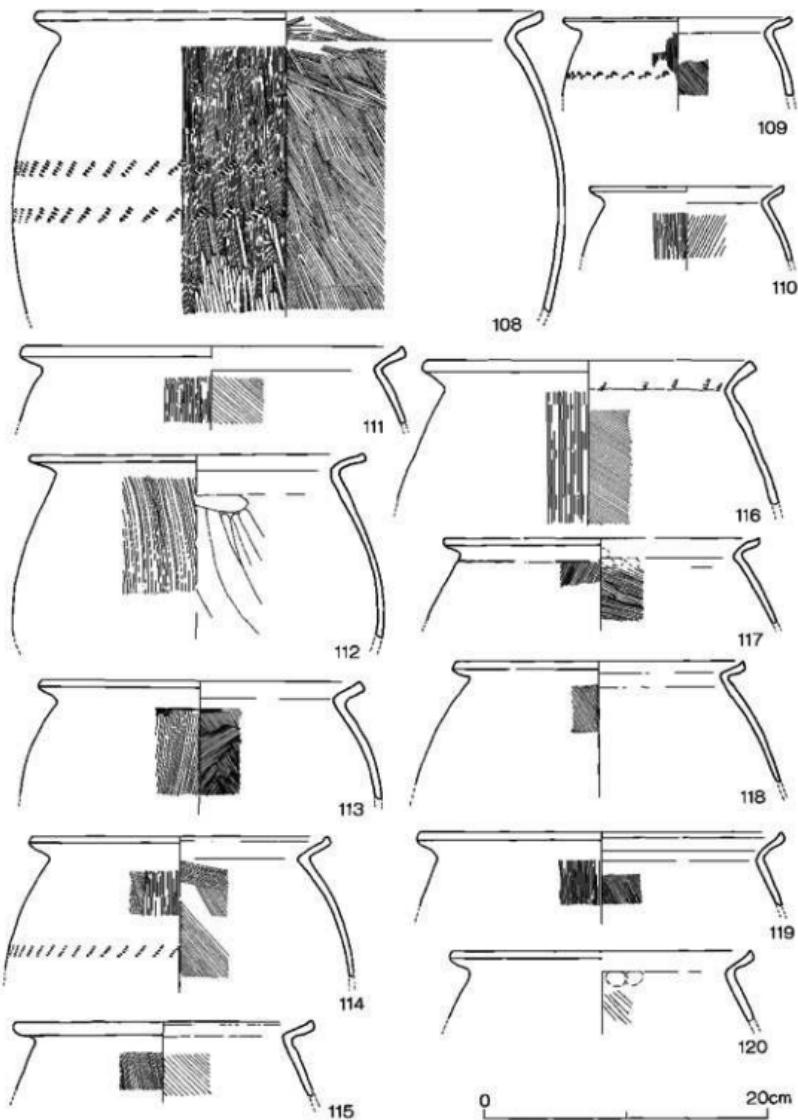
第25図 弥生土器実測図(5)



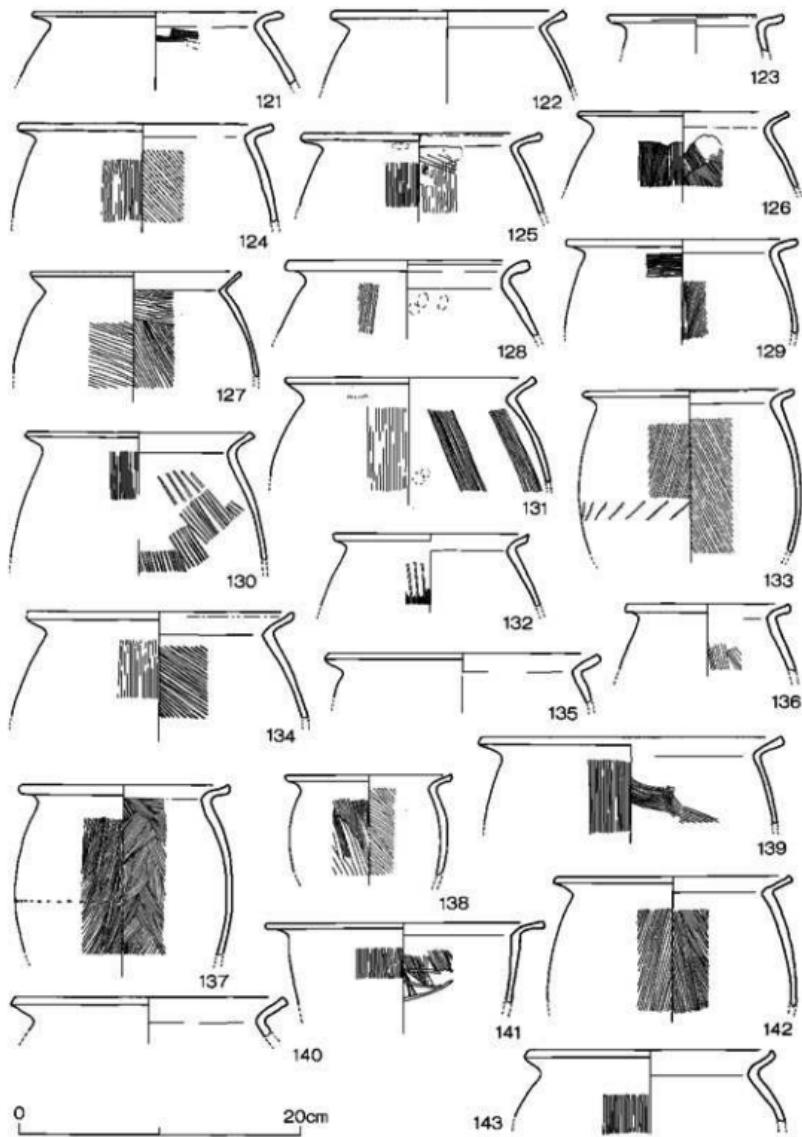
第26図 弥生土器実測図(6)



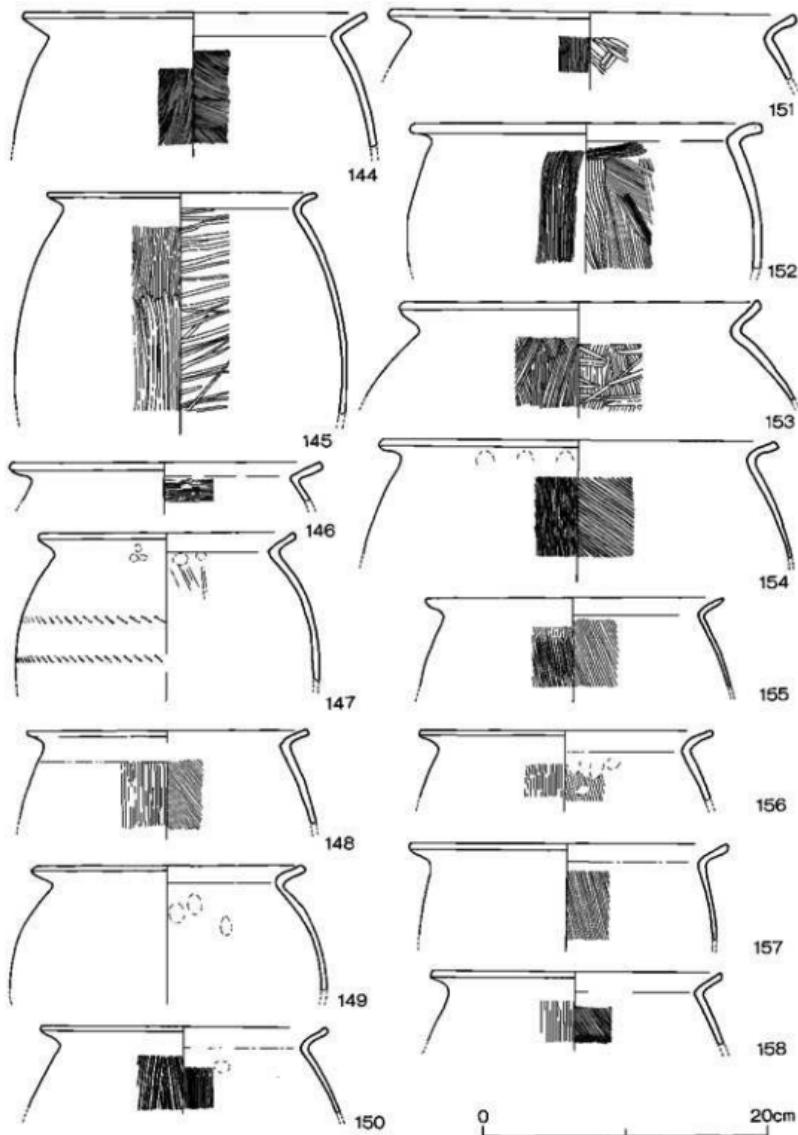
第27図 弥生土器実測図(7)



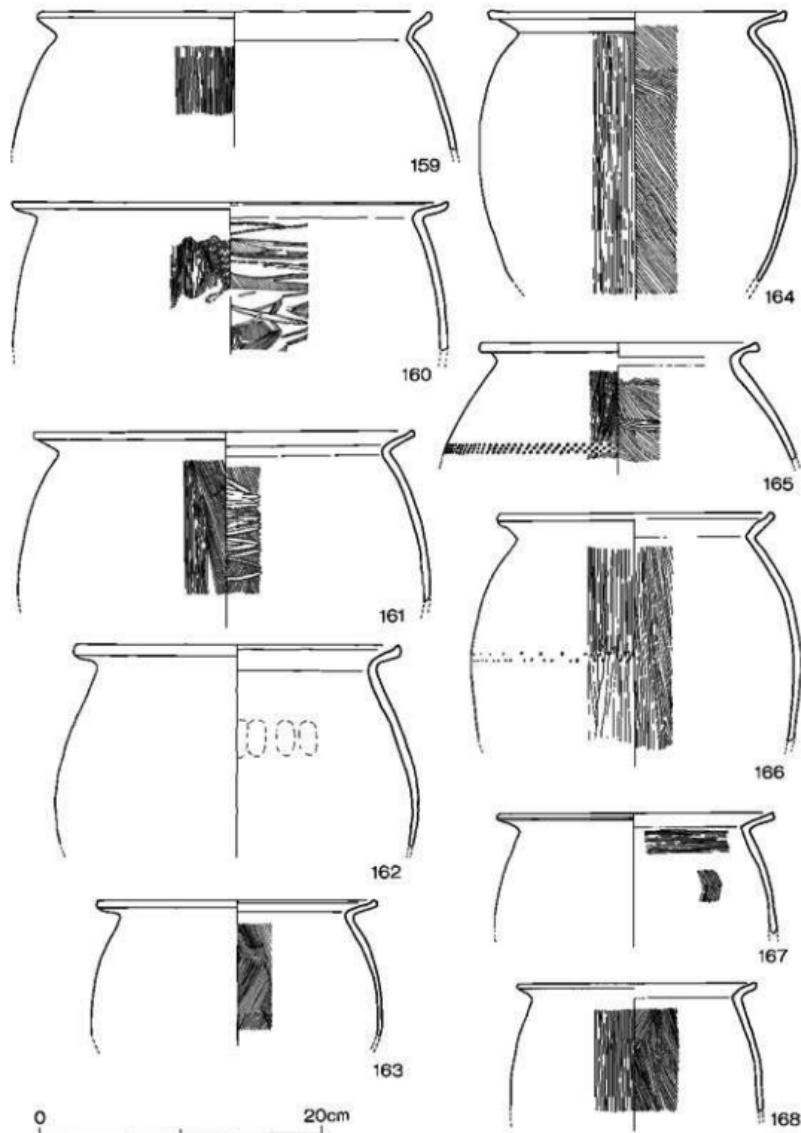
第28図 弥生土器実測図(8)



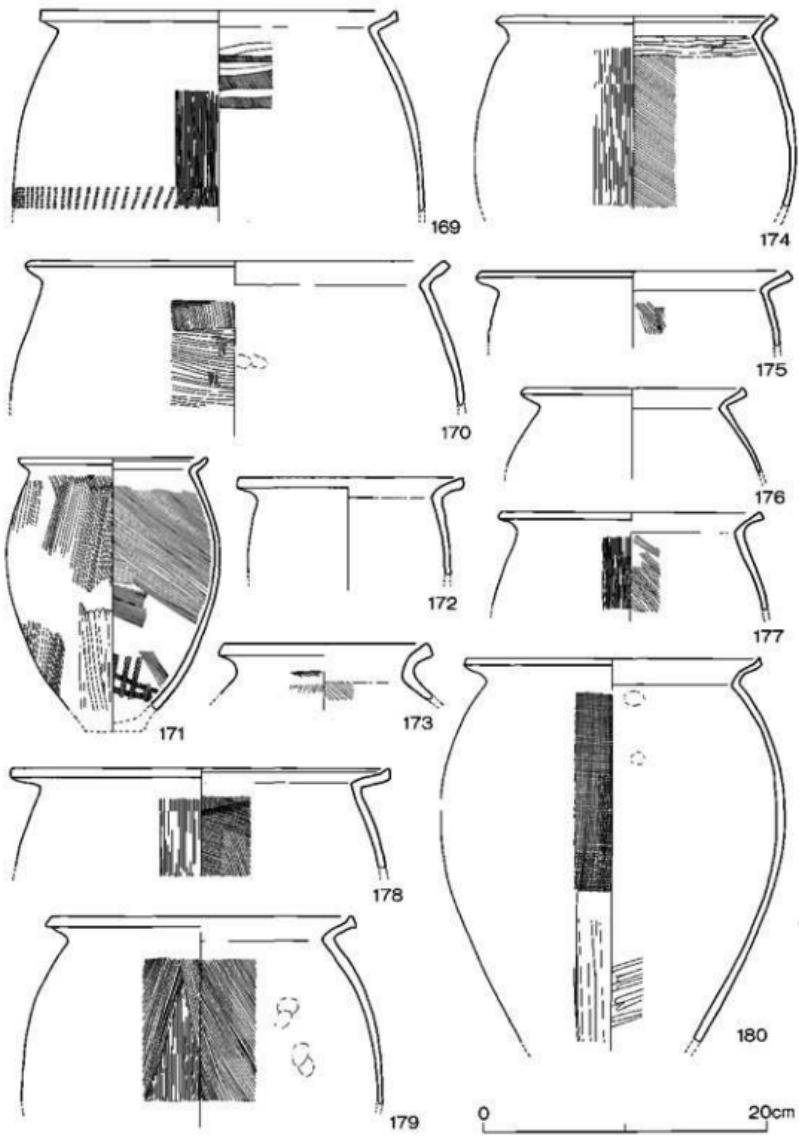
第29図 弥生土器実測図(9)



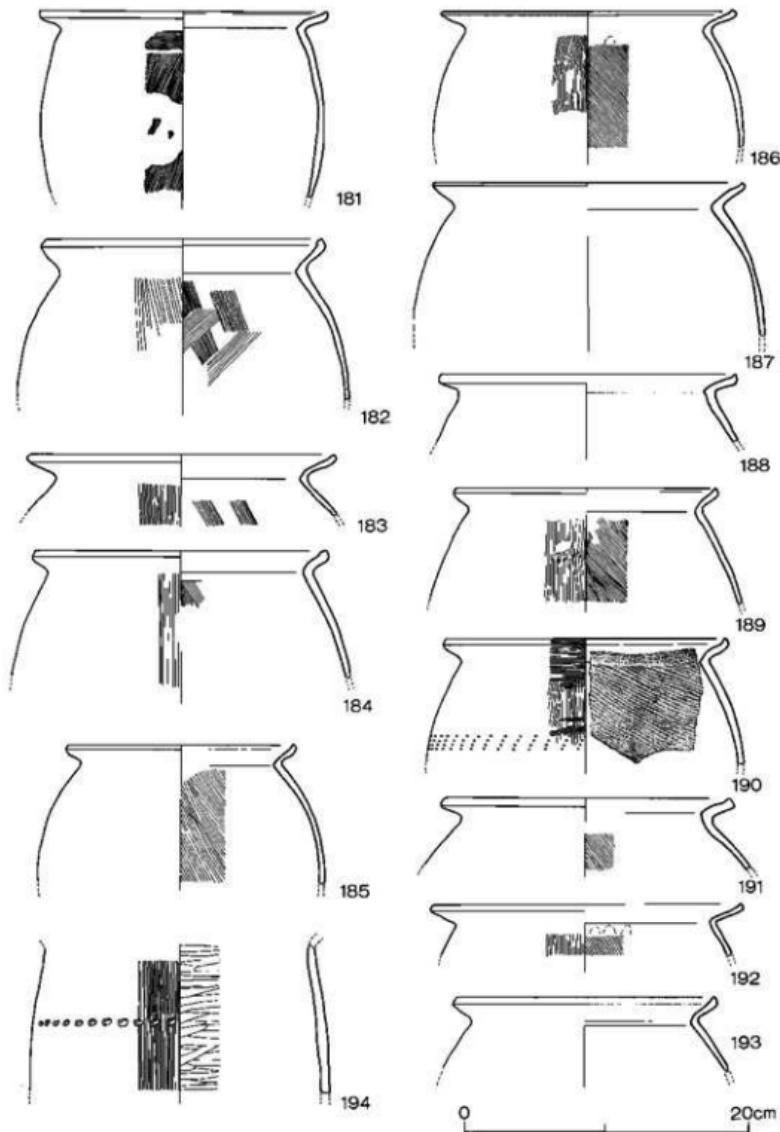
第30図 亦生土器実測図(10)



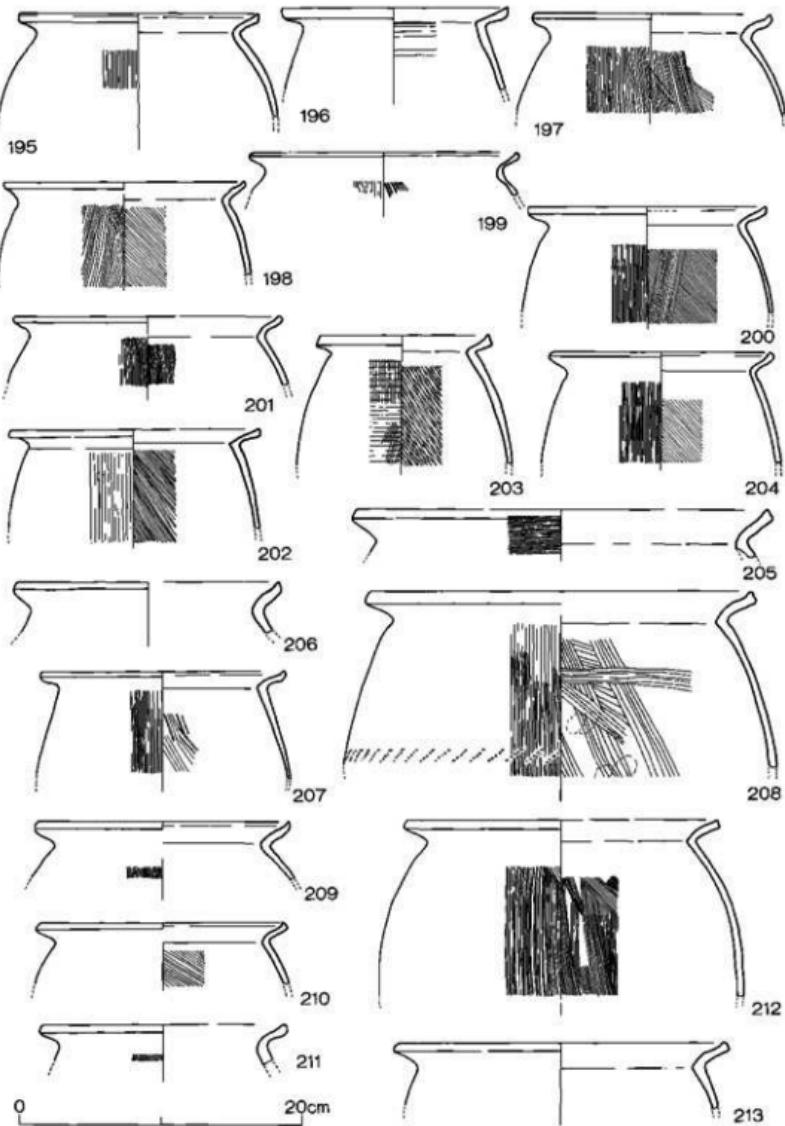
第31図 弥生土器実測図(11)



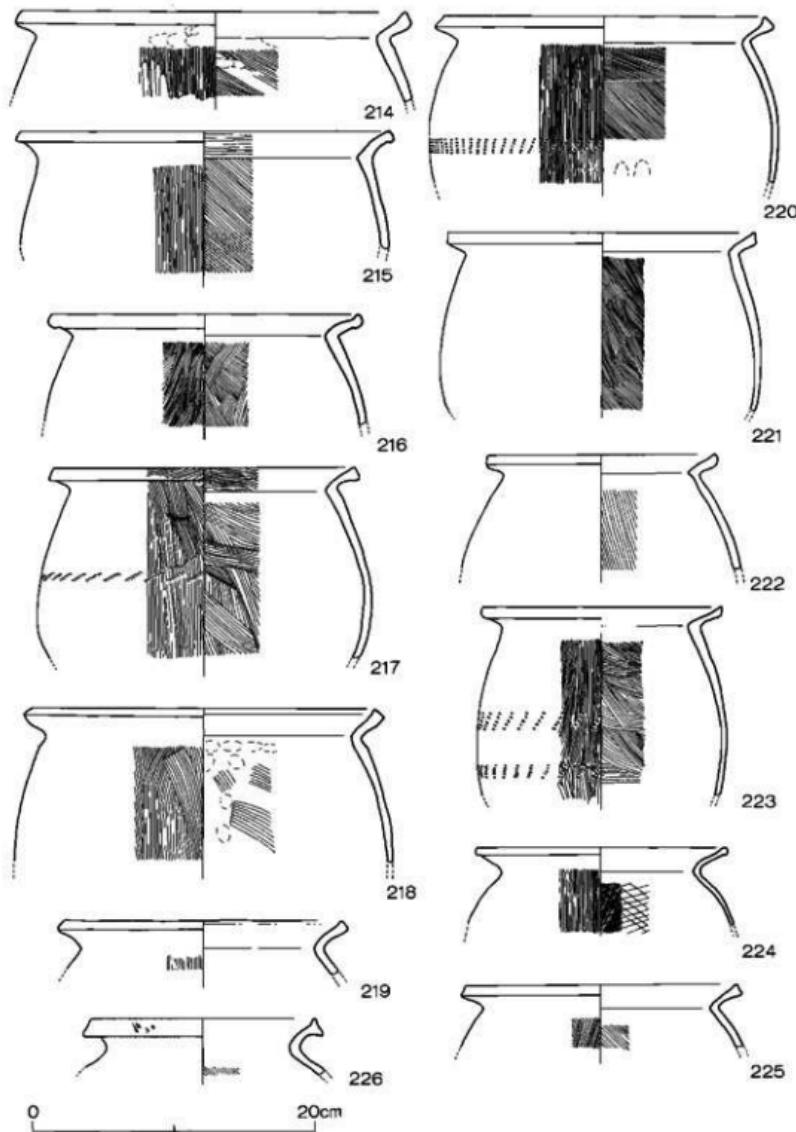
第32図 弥生土器実測図(12)



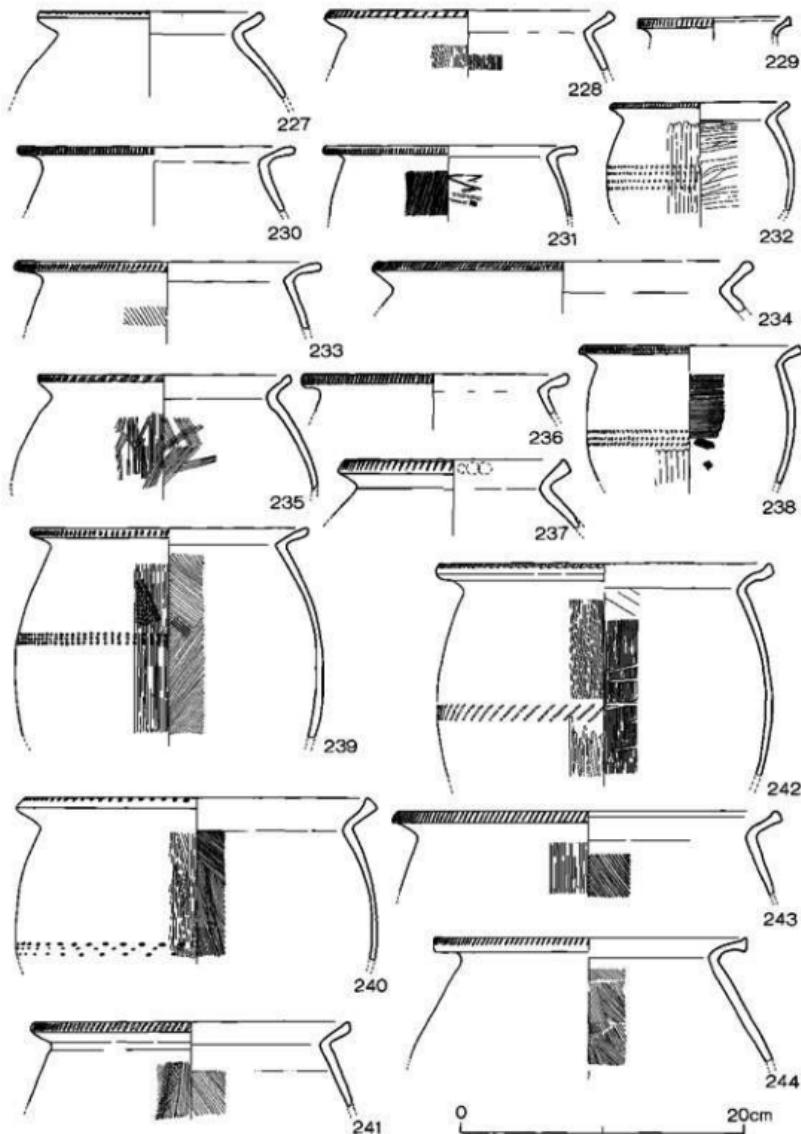
第33図 弥生土器実測図(13)



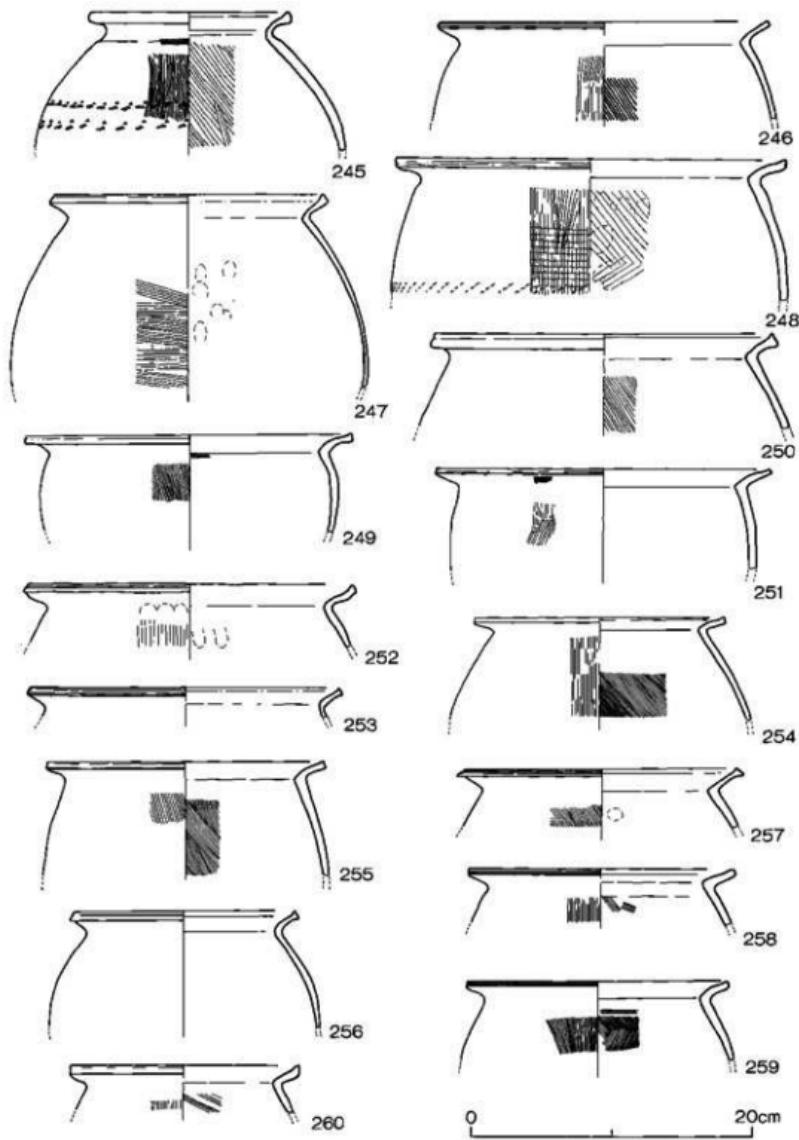
第34図 弥生土器実測図(14)



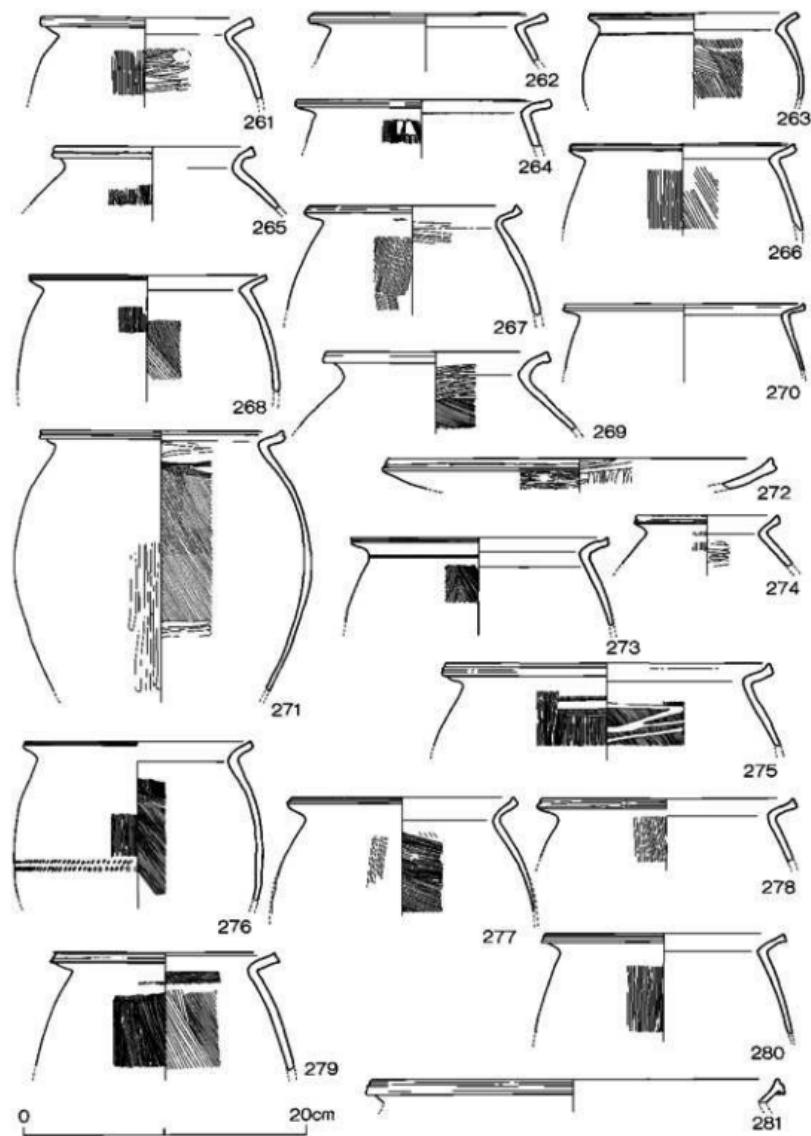
第35図 弥生土器実測図(15)



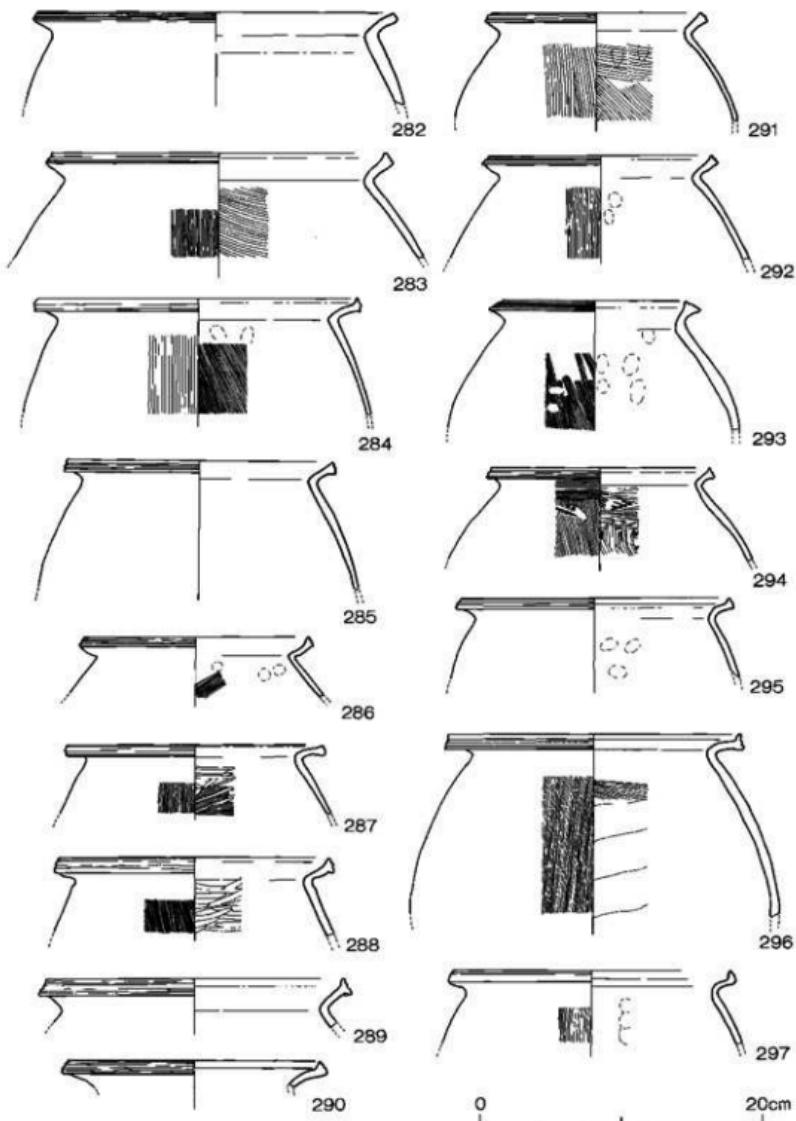
第36図 弥生土器実測図(16)



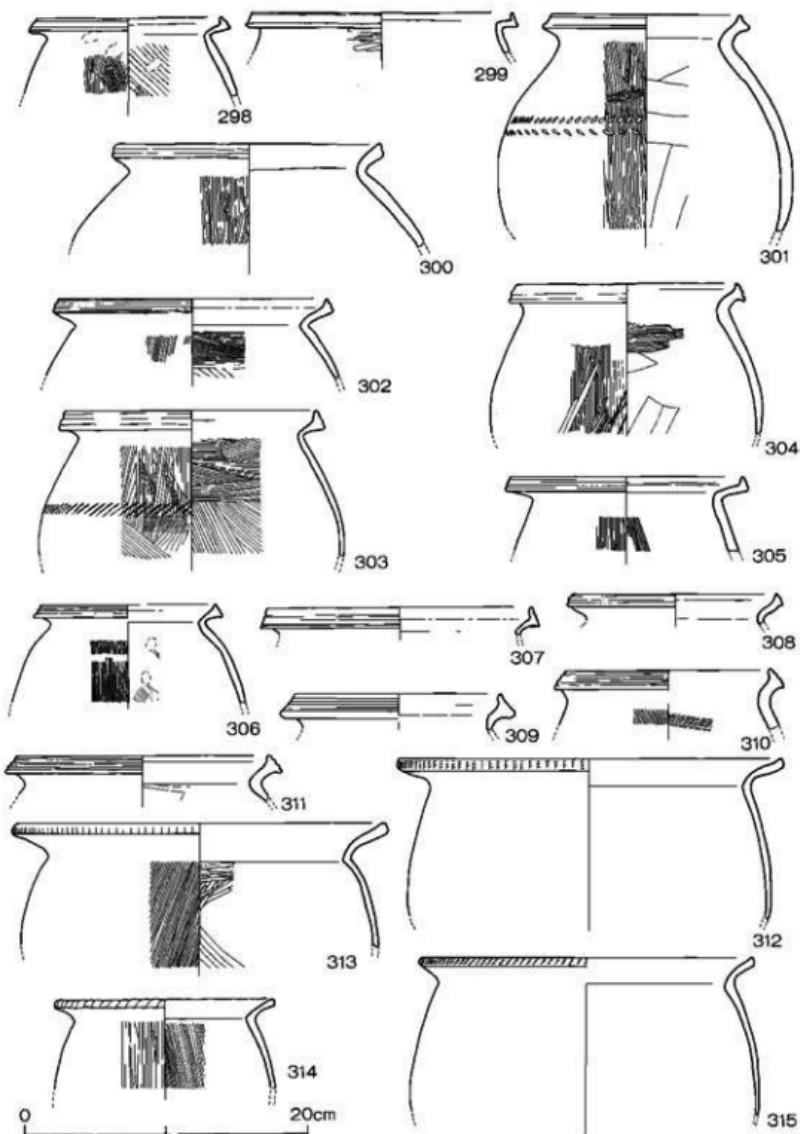
第37図 弥生土器実測図(17)



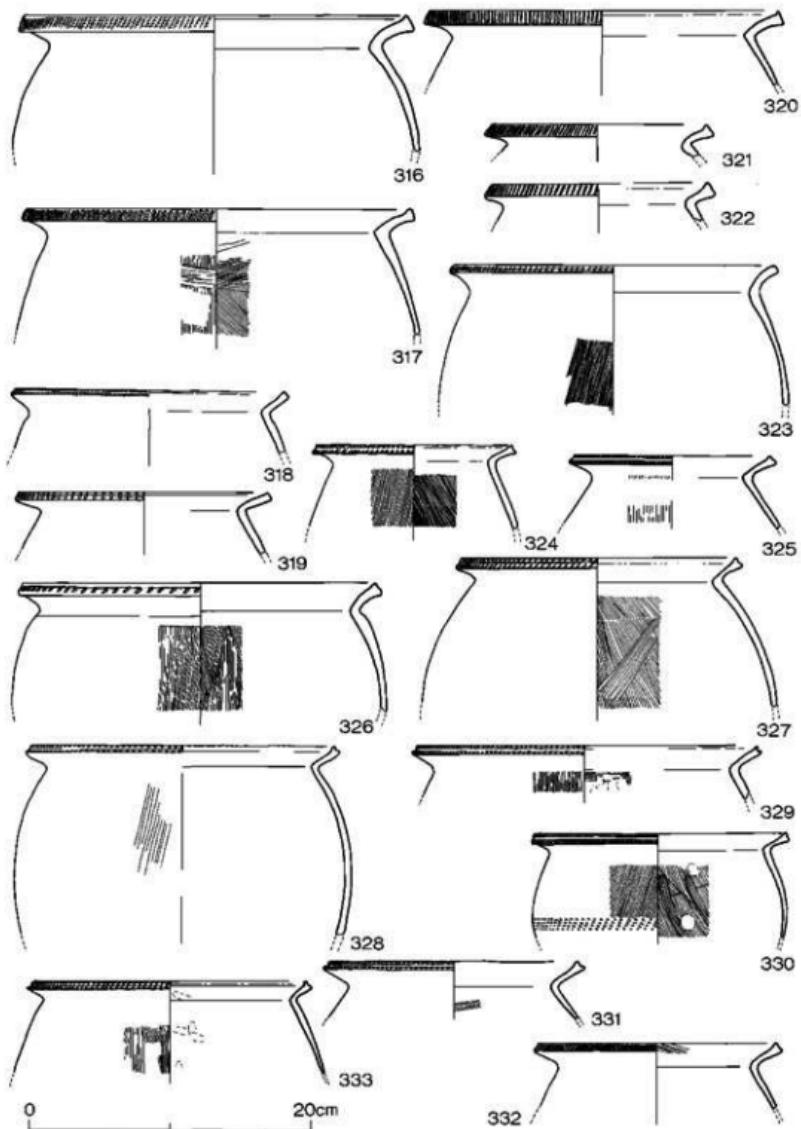
第38図 弥生土器実測図(18)



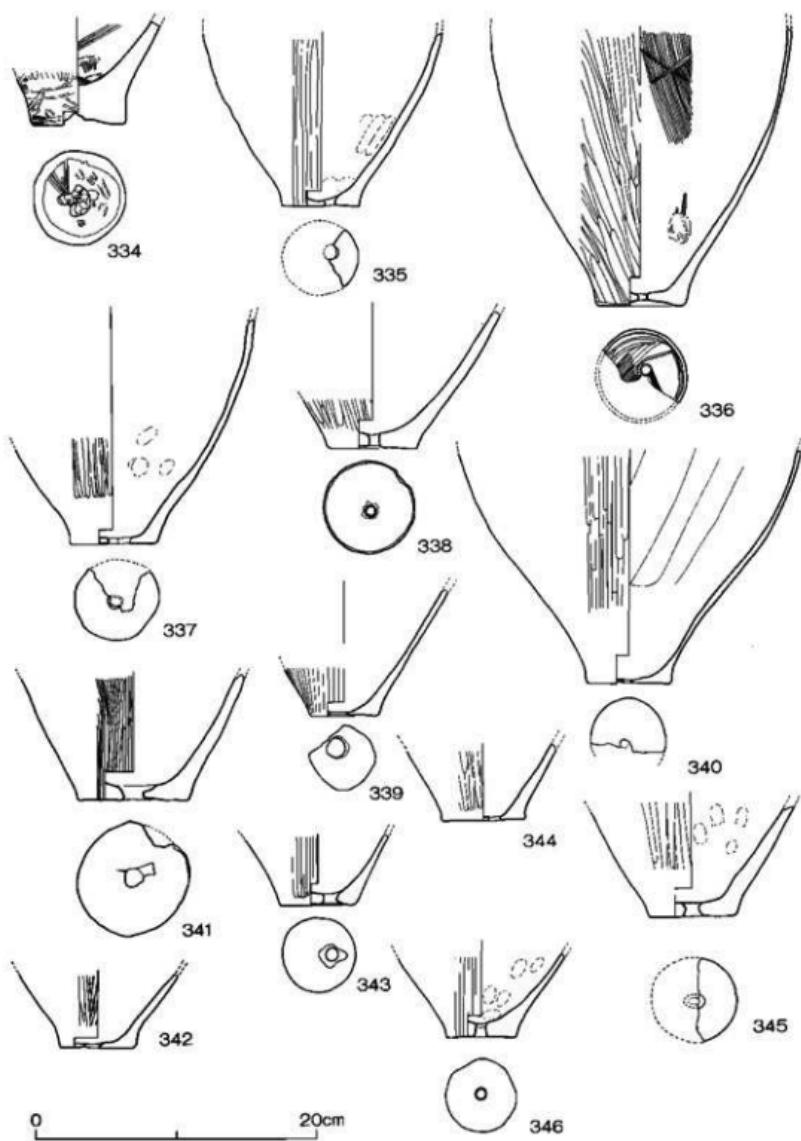
第39図 弥生土器実測図(19)



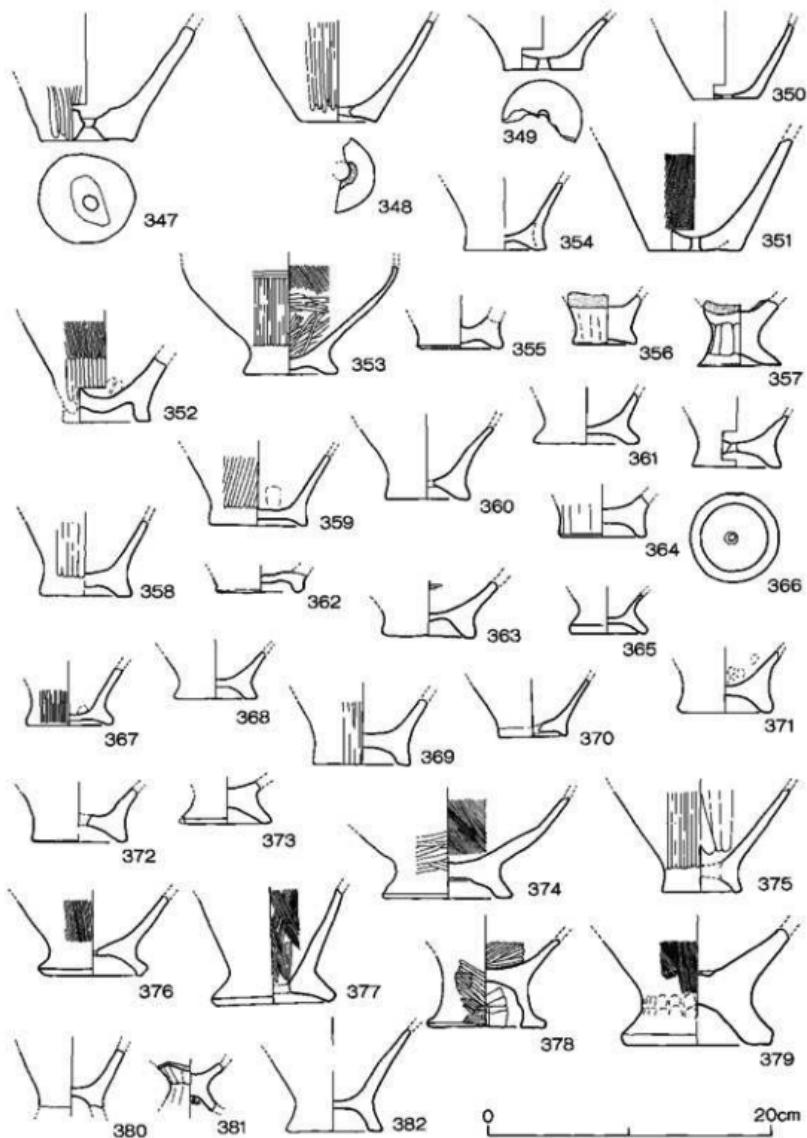
第40図 弥生土器実測図(20)



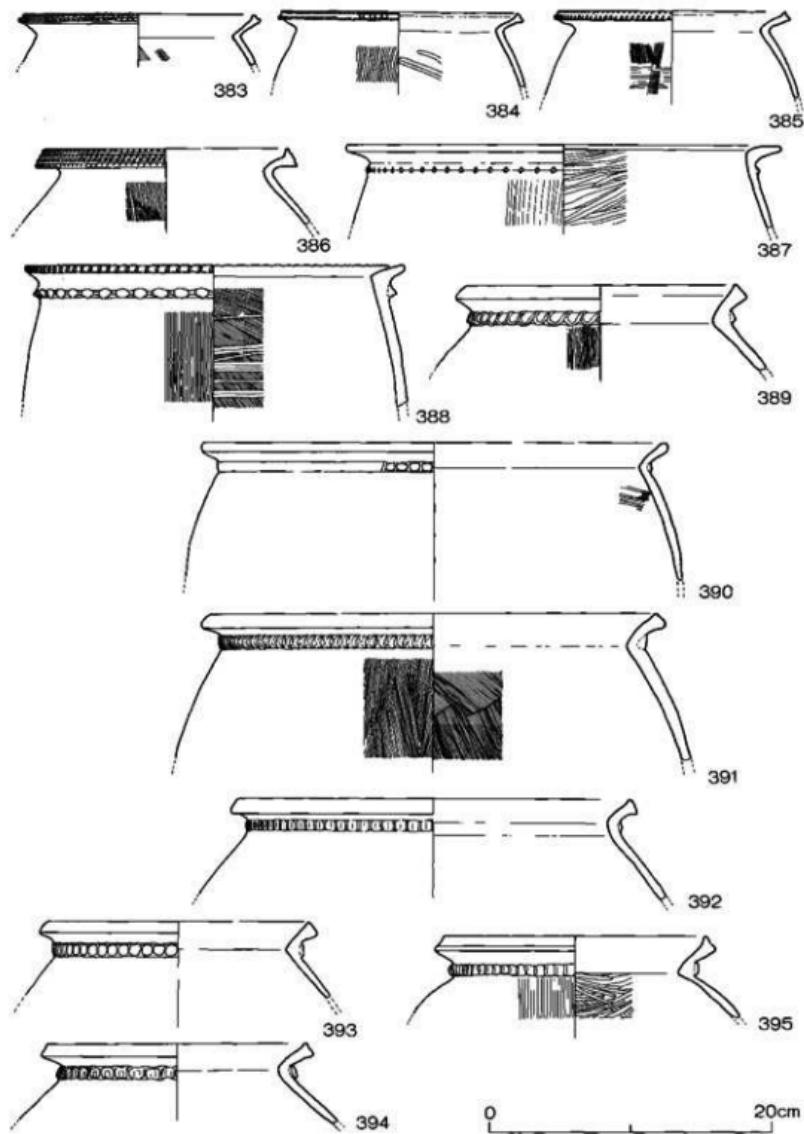
第41図 弥生土器実測図(21)



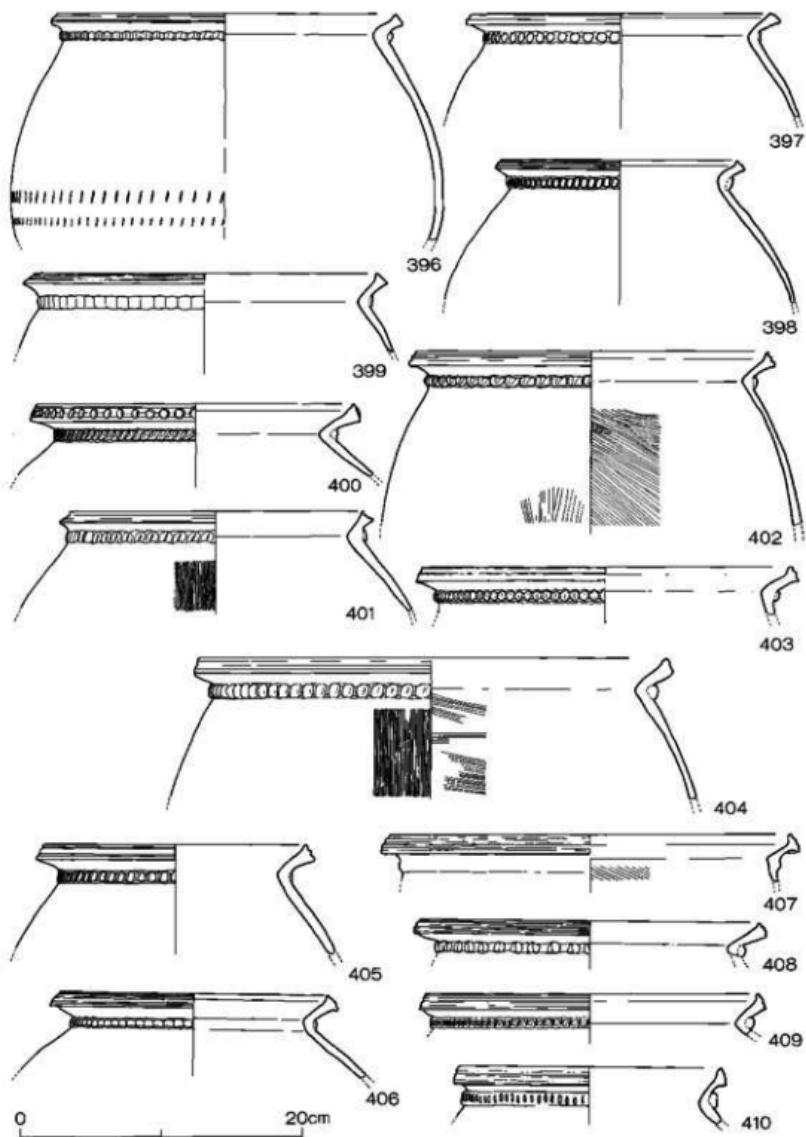
第42図 亦生土器実測図(22)



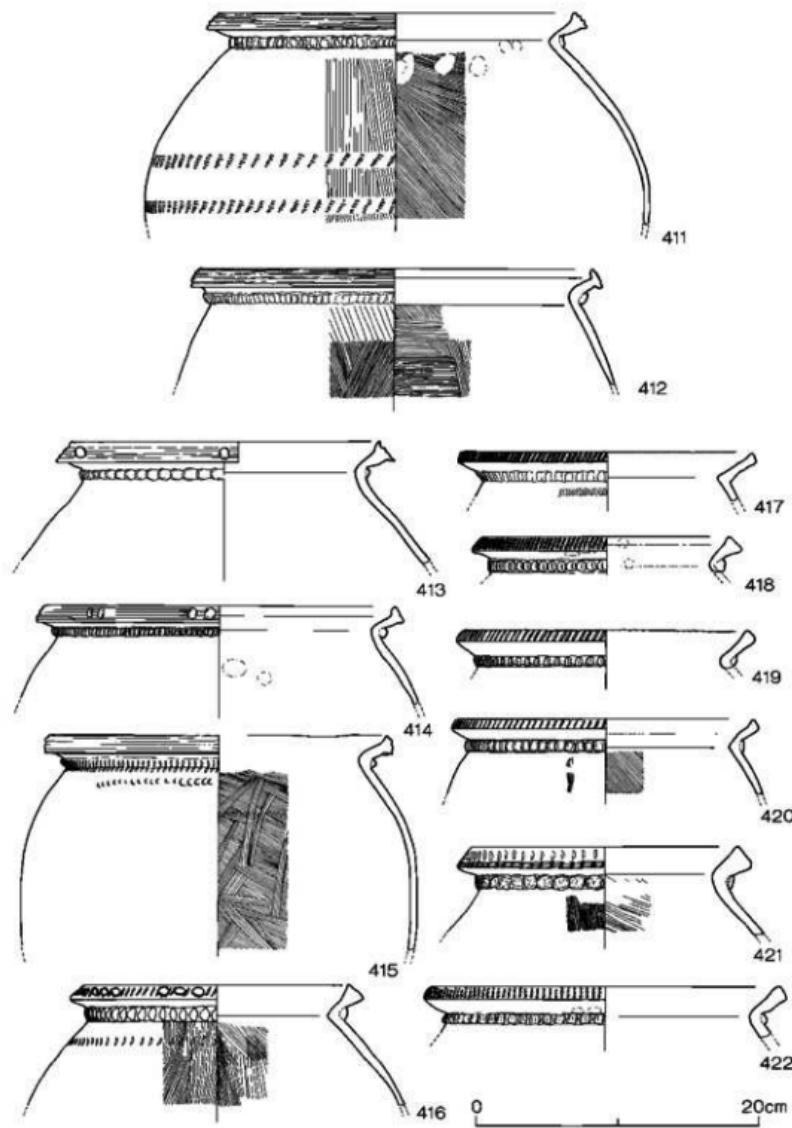
第43図 弥生土器実測図(23)



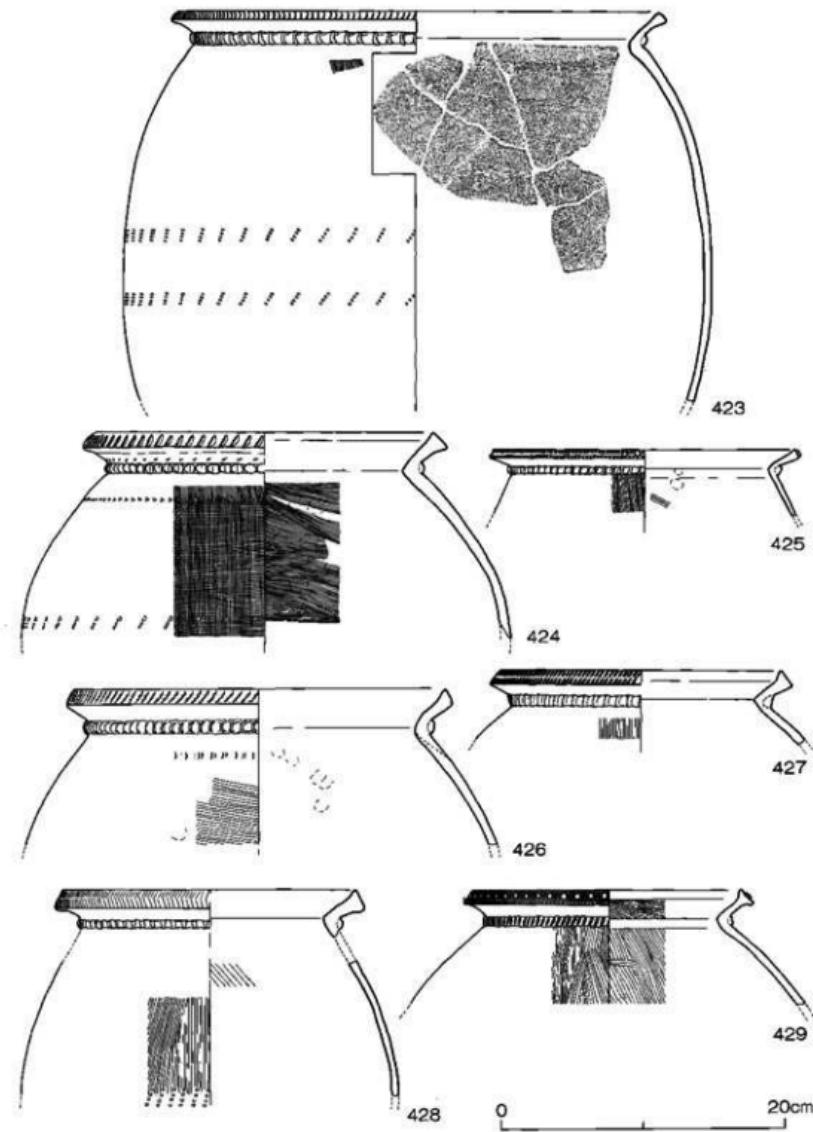
第44図 弥生土器実測図(24)



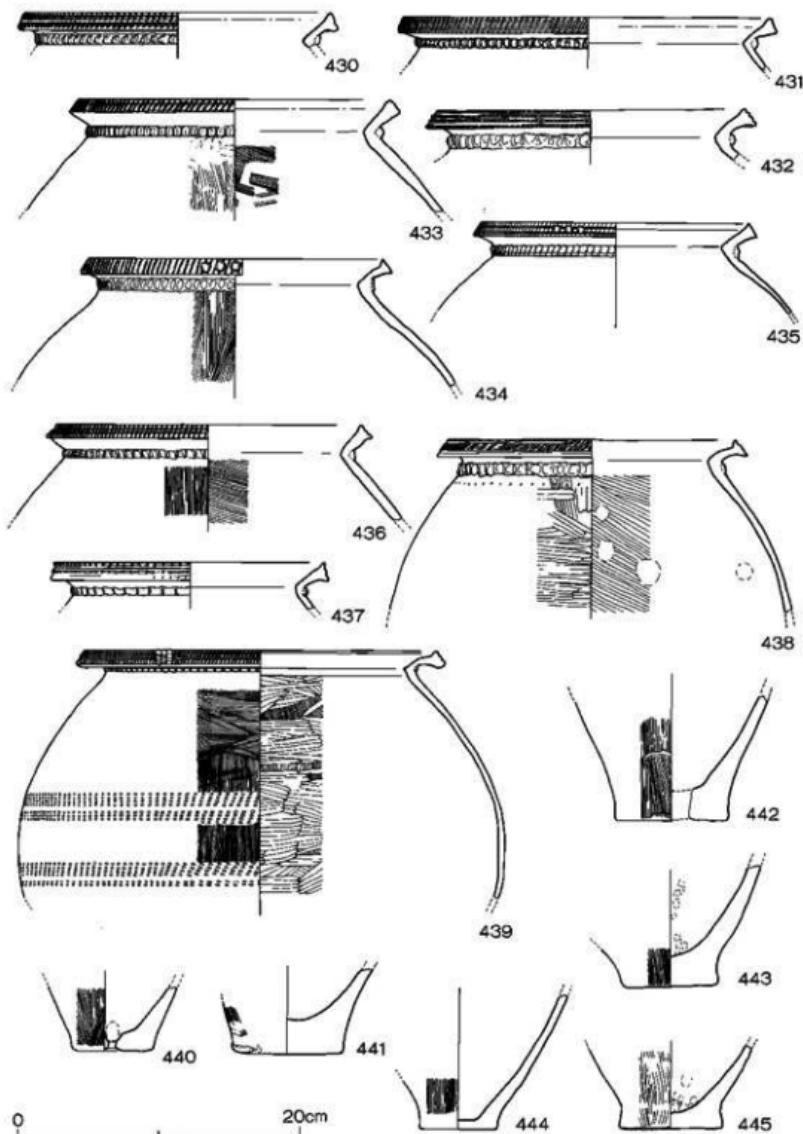
第45図 弥生土器実測図(25)



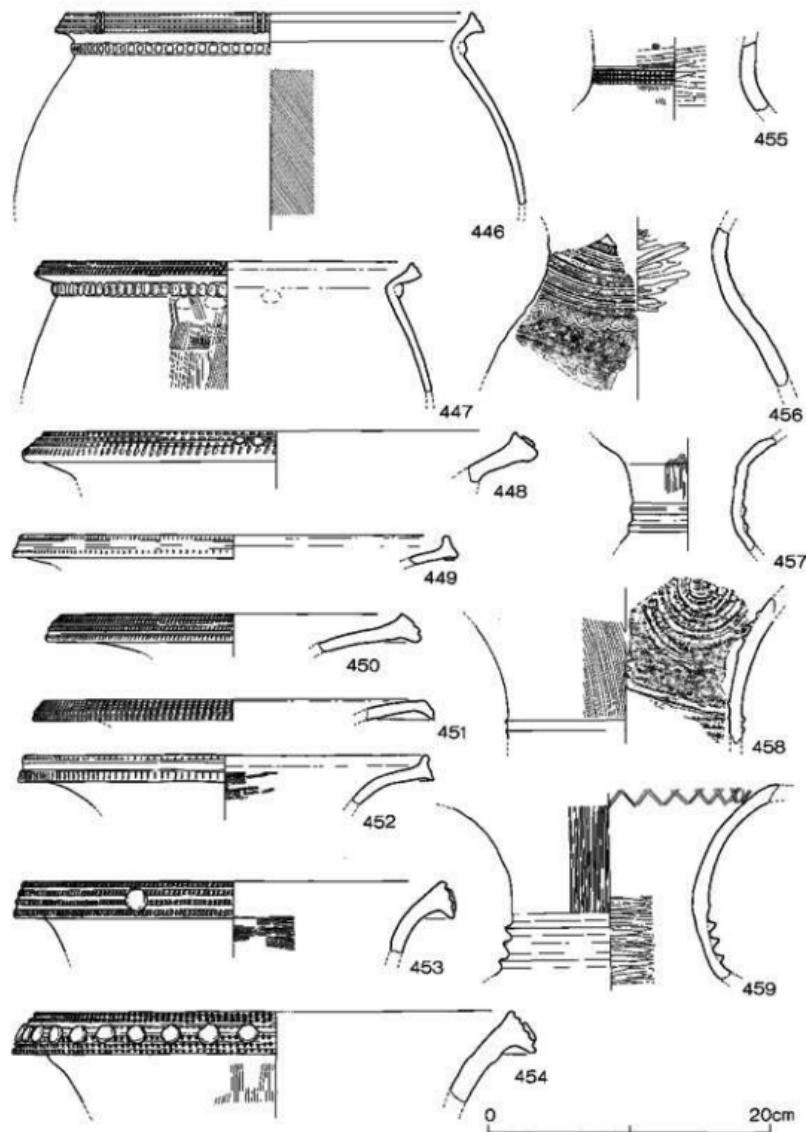
第46図 弥生土器実測図(26)



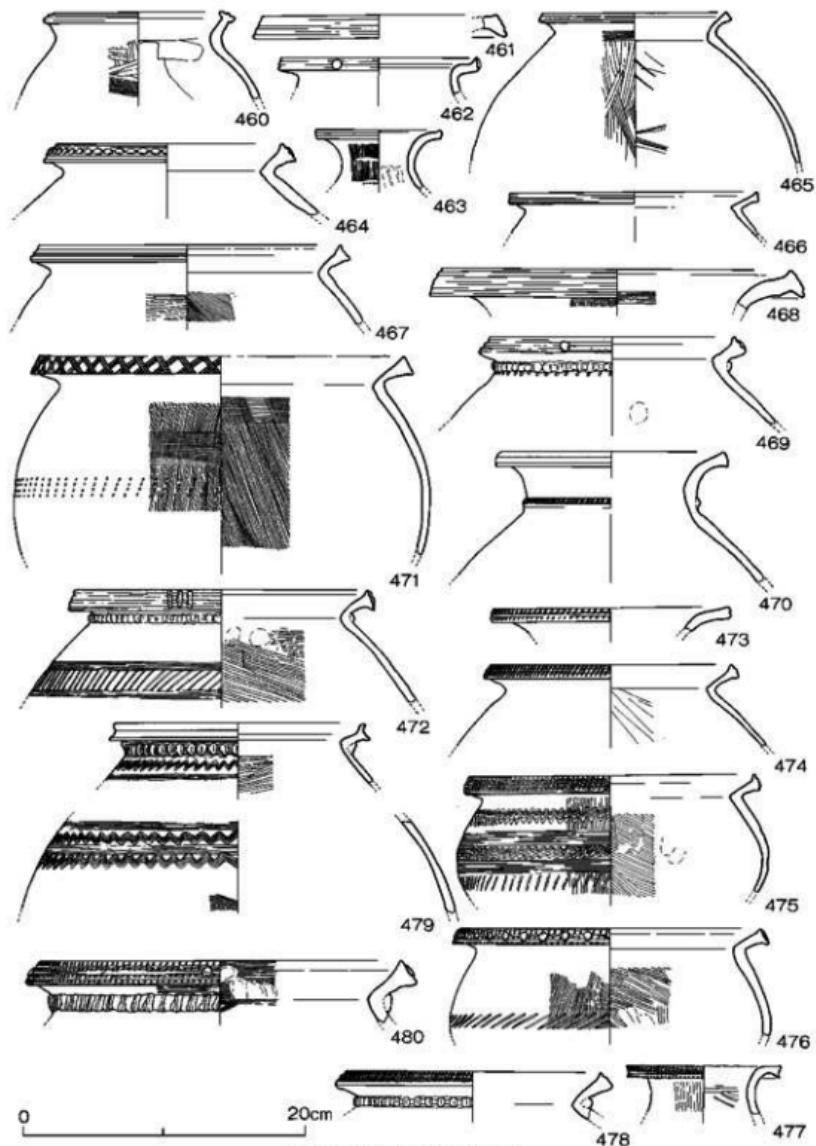
第47図 弥生土器実測図(27)



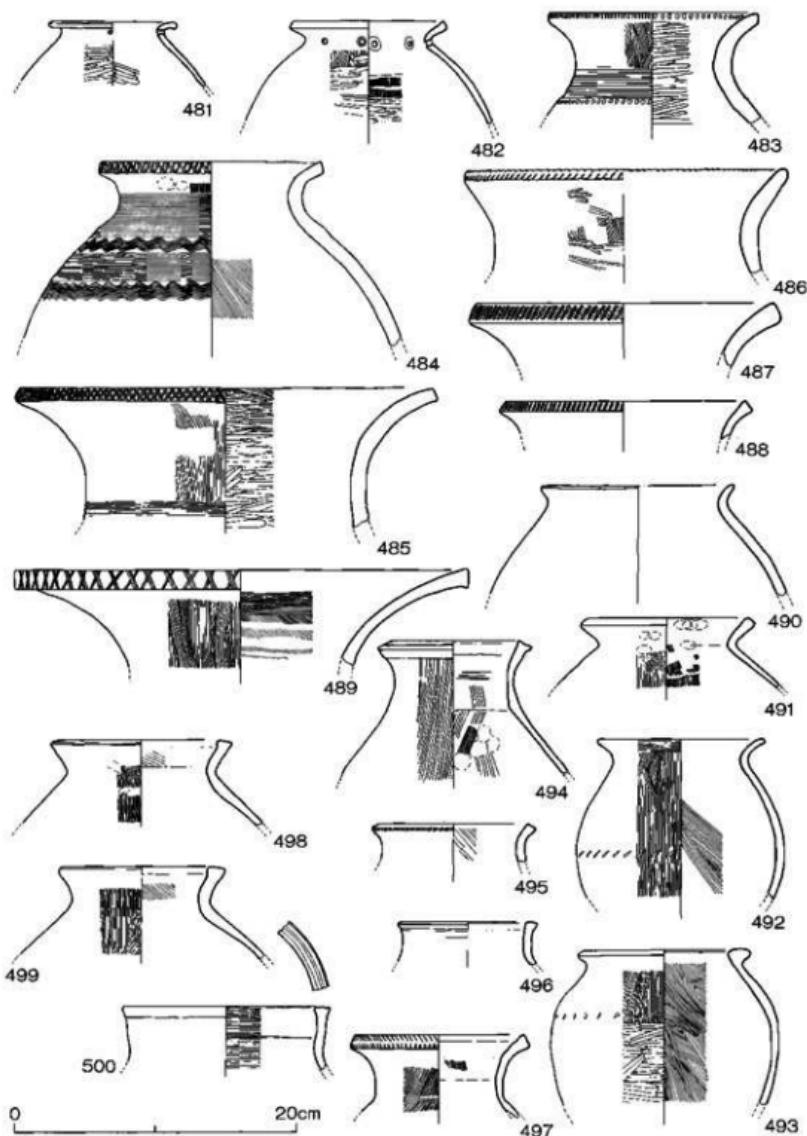
第48図 弥生土器実測図(28)



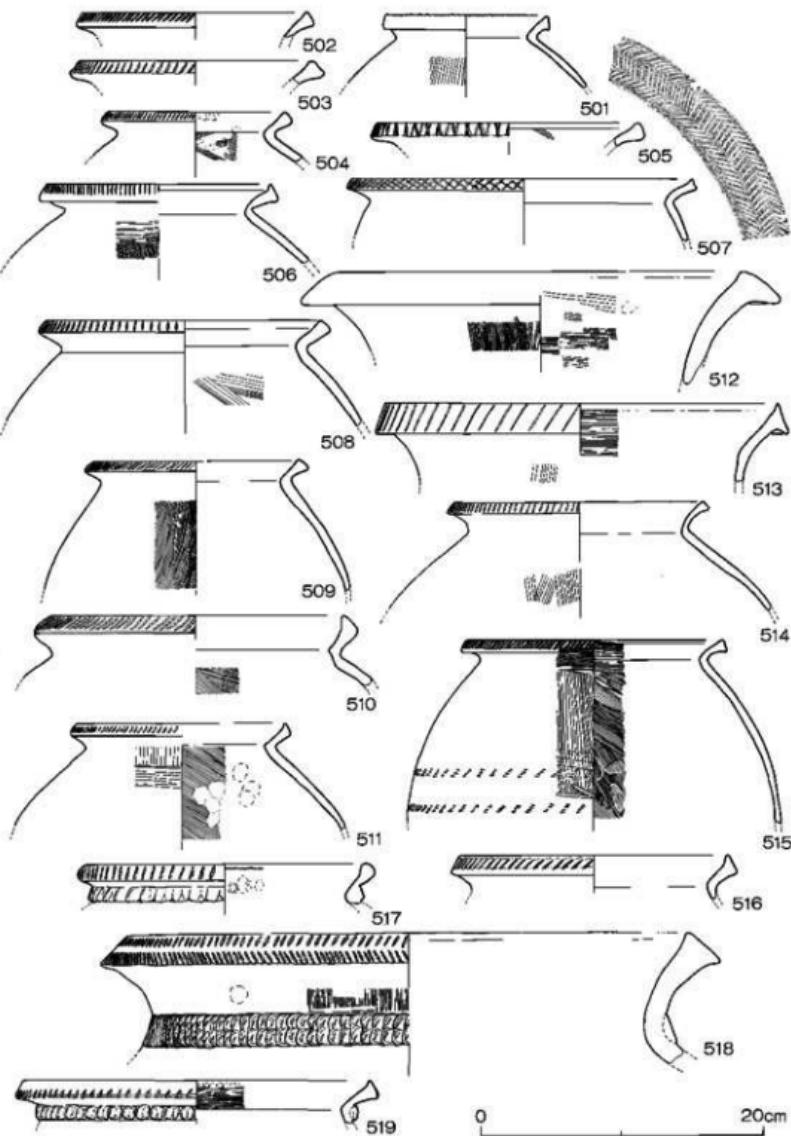
第49図 弥生土器実測図(29)



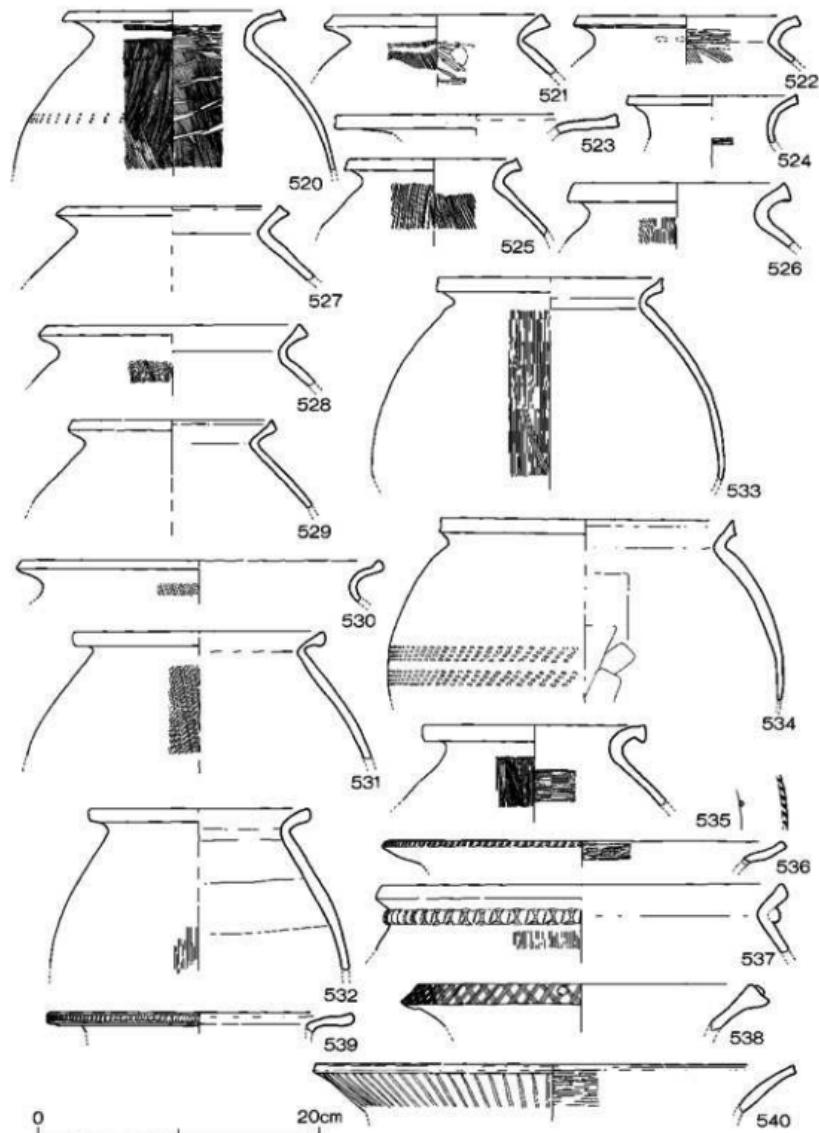
第50図 弥生土器実測図(30)



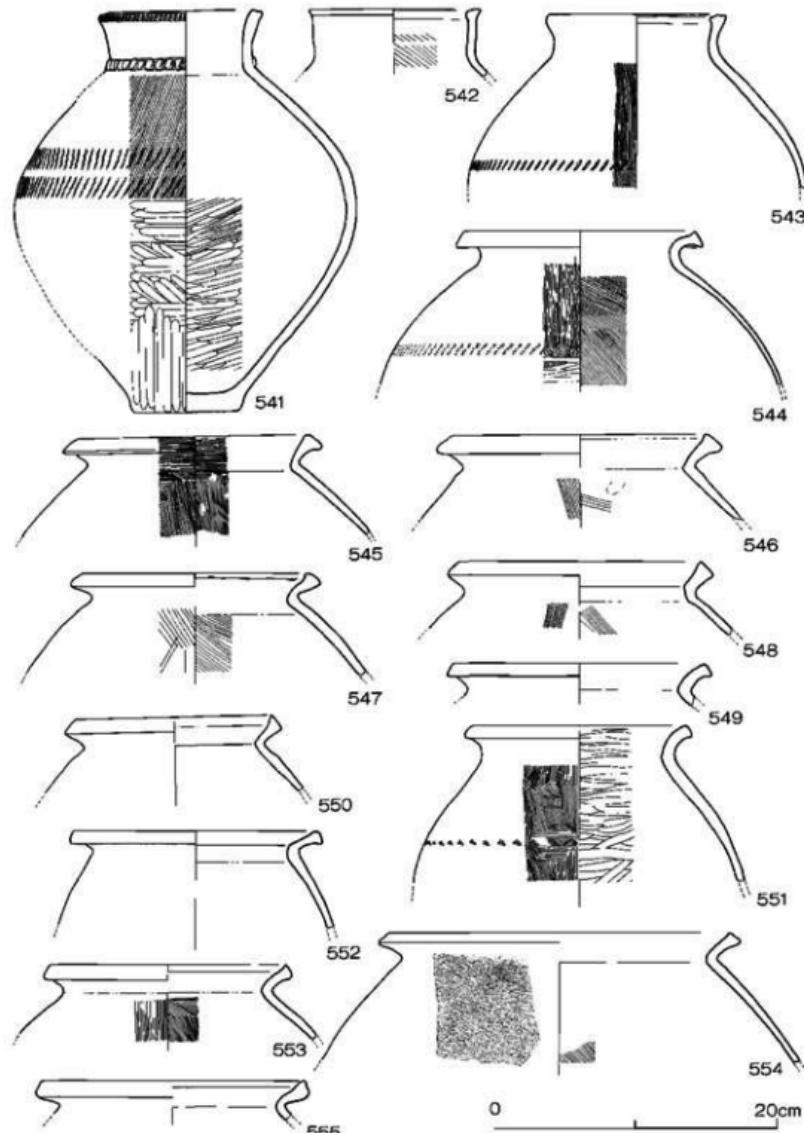
第51図 弥生土器実測図(31)



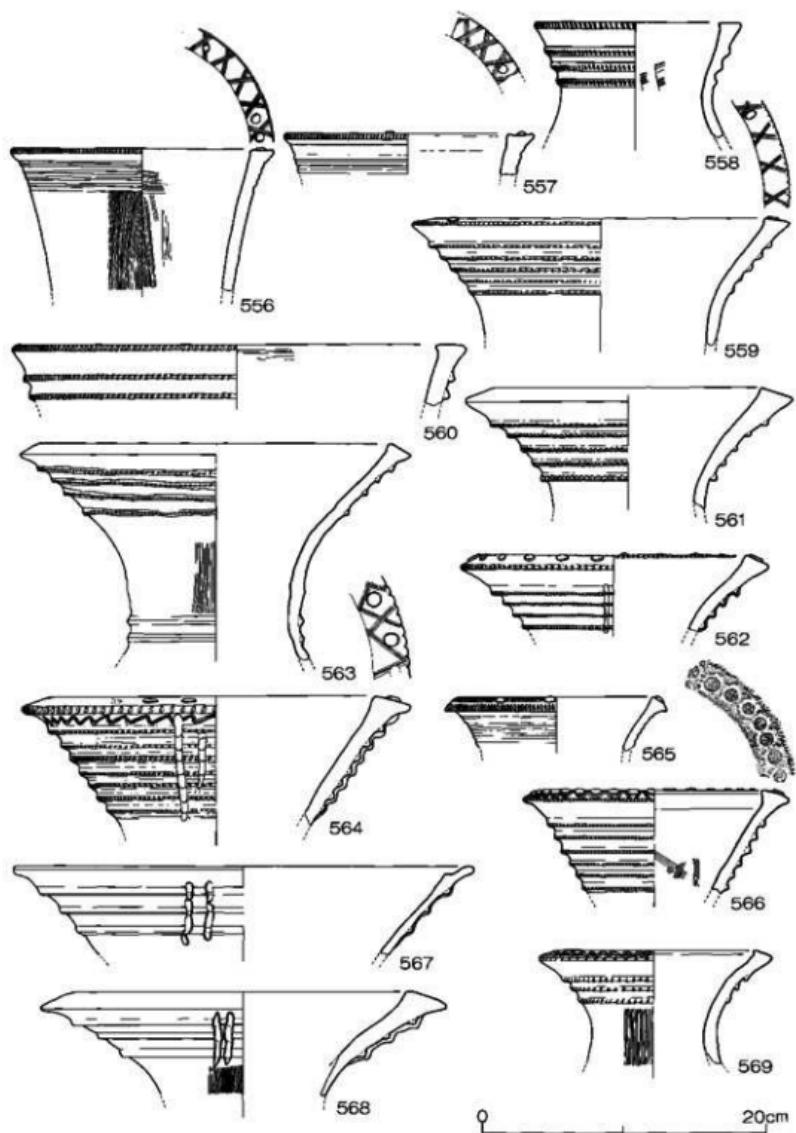
第52図 生土器実測図(32)



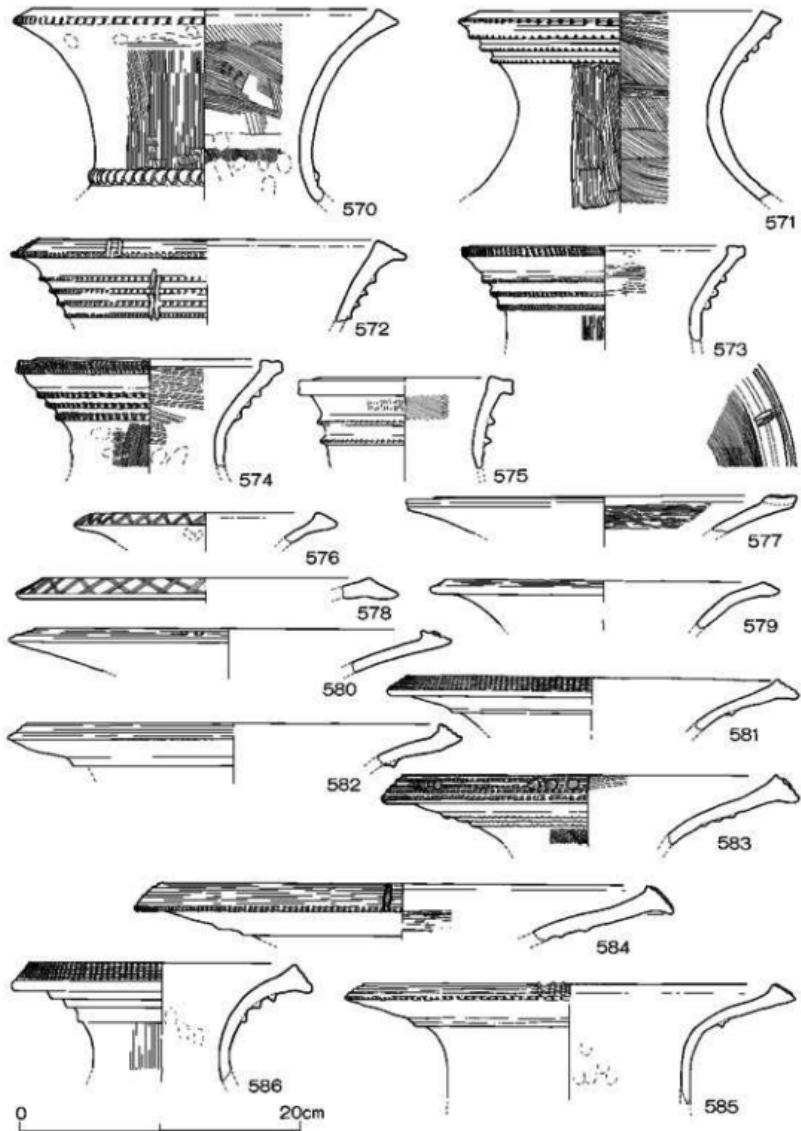
第53図 弥生土器実測図(33)



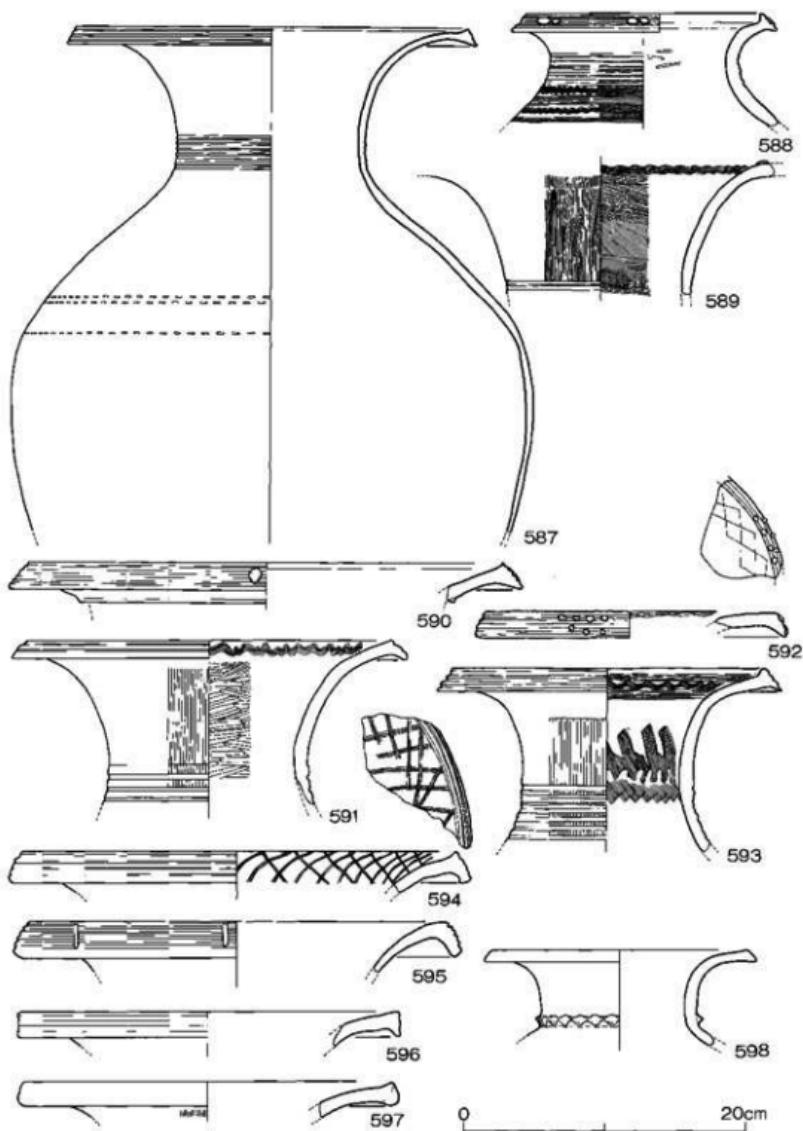
第54図 弥生土器実測図(34)



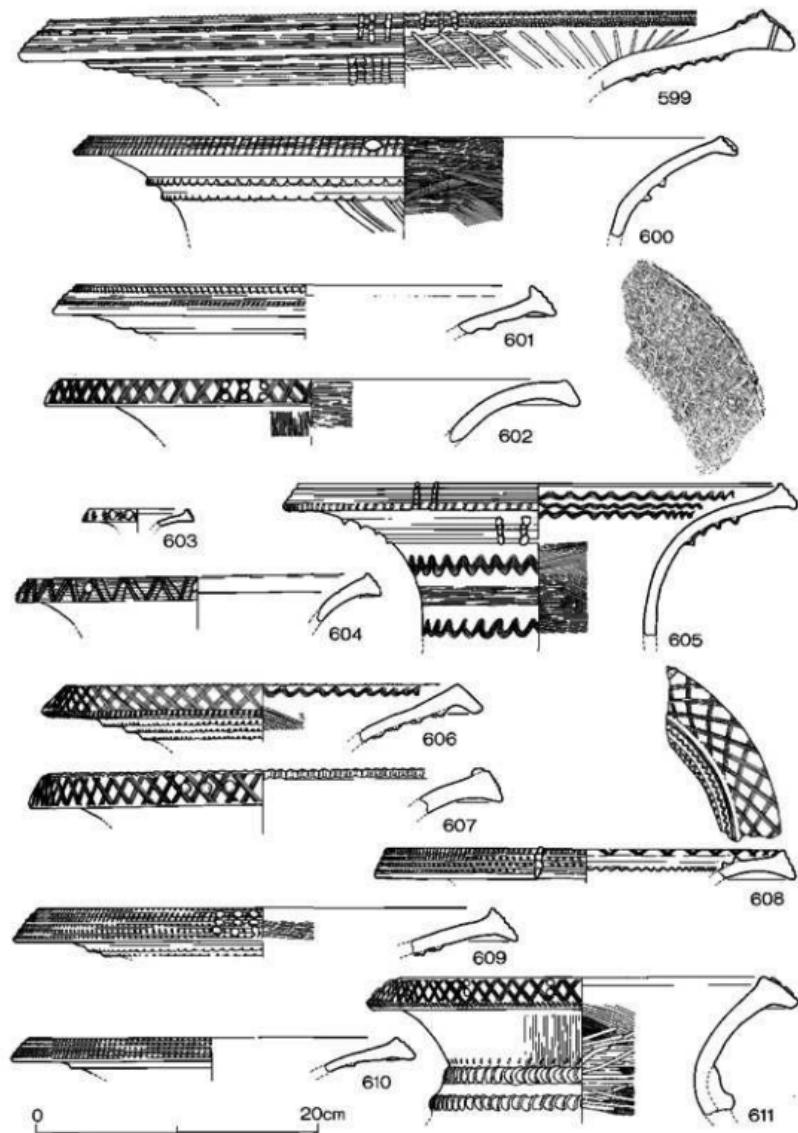
第55図 弥生土器実測図(35)



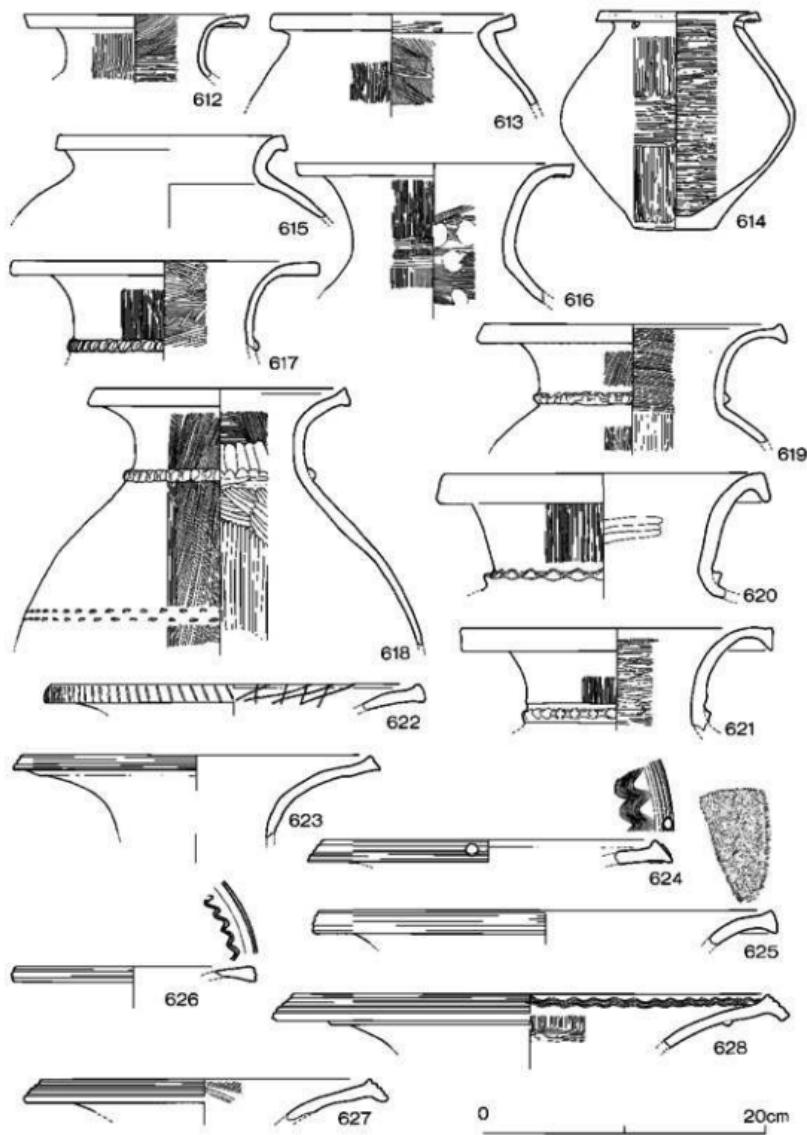
第56図 弥生土器実測図(36)



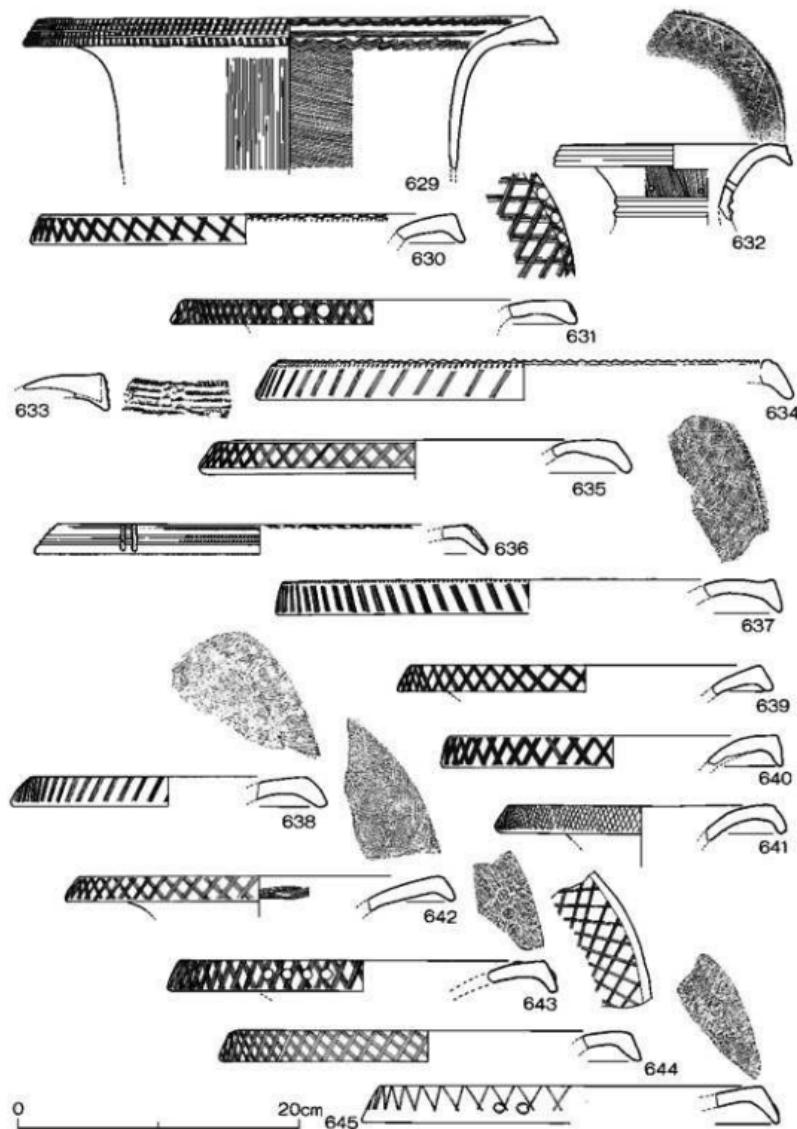
第57図 弥生土器実測図(37)



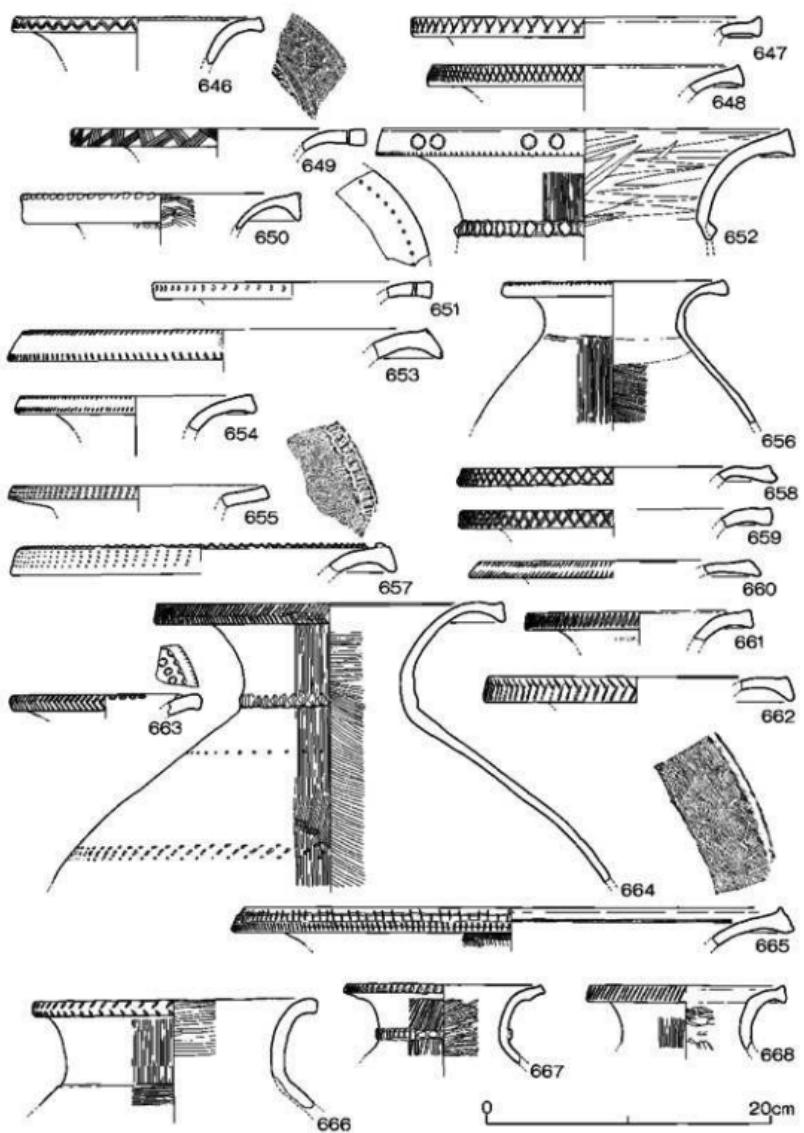
第58図 弥生土器実測図(38)



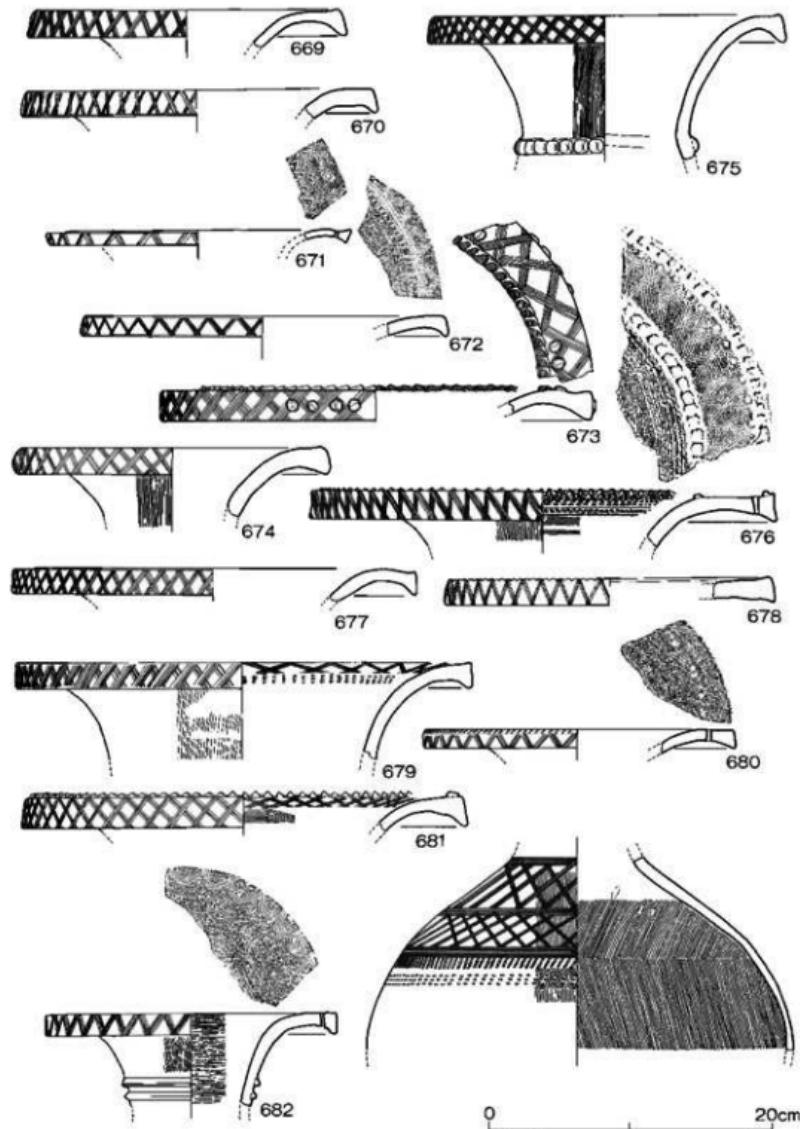
第59図 亦生土器実測図(39)



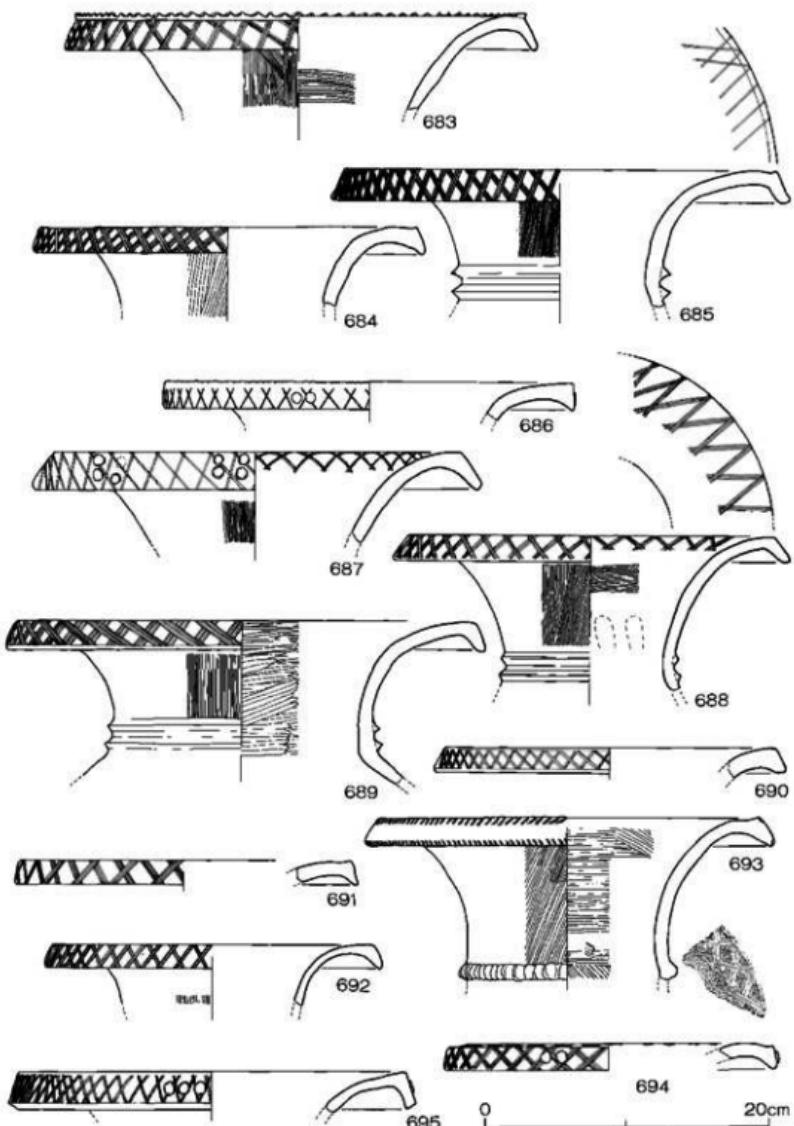
第60図 亦生土器実測図(40)



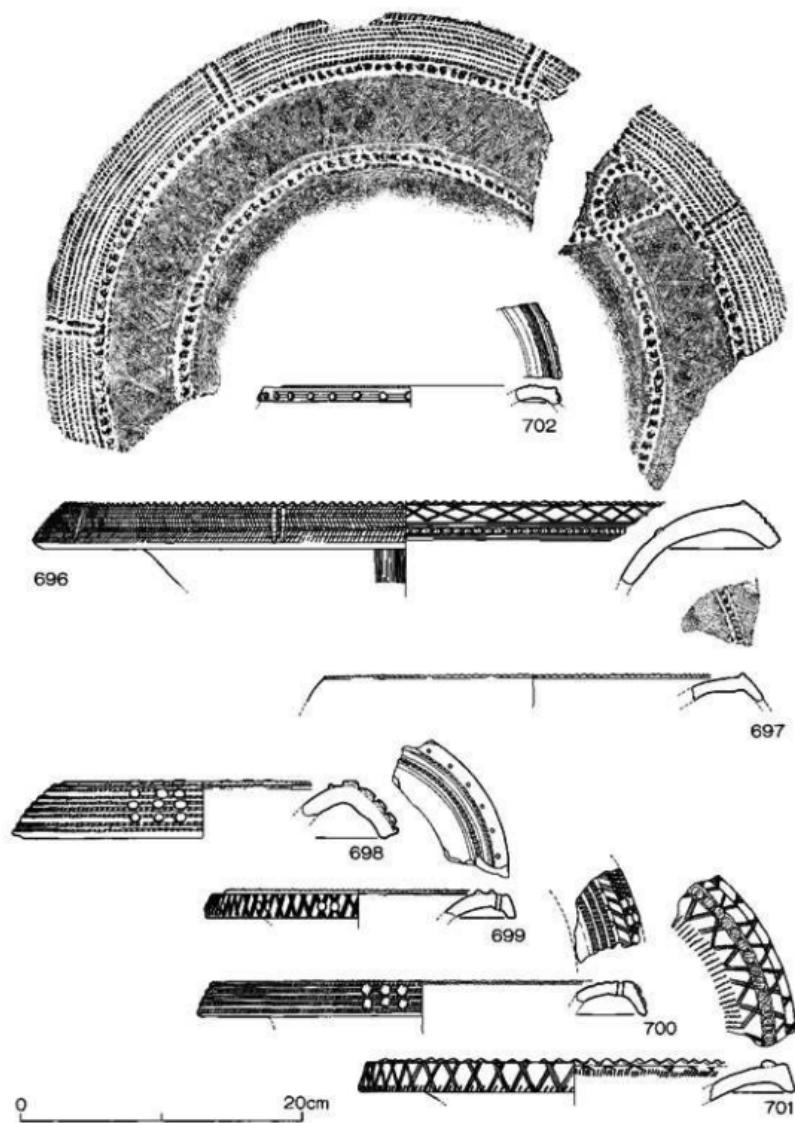
第61図 弥生土器実測図(41)



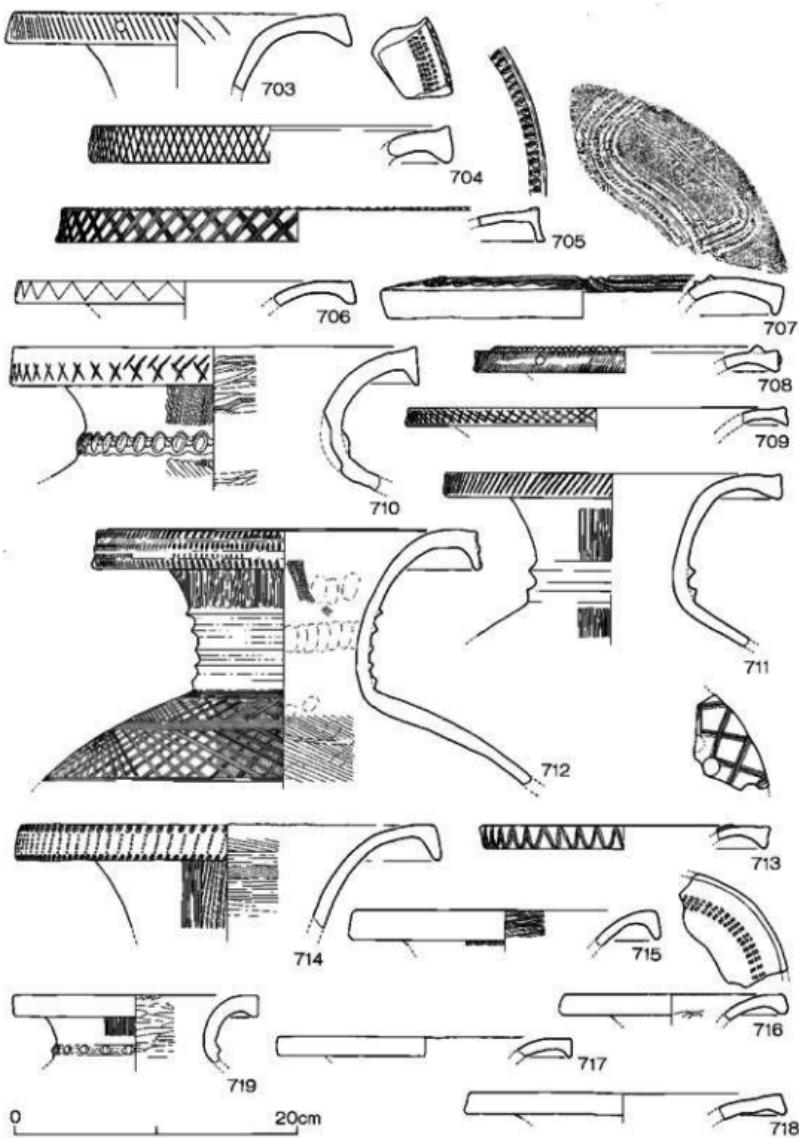
第62図 弥生土器実測図(42)



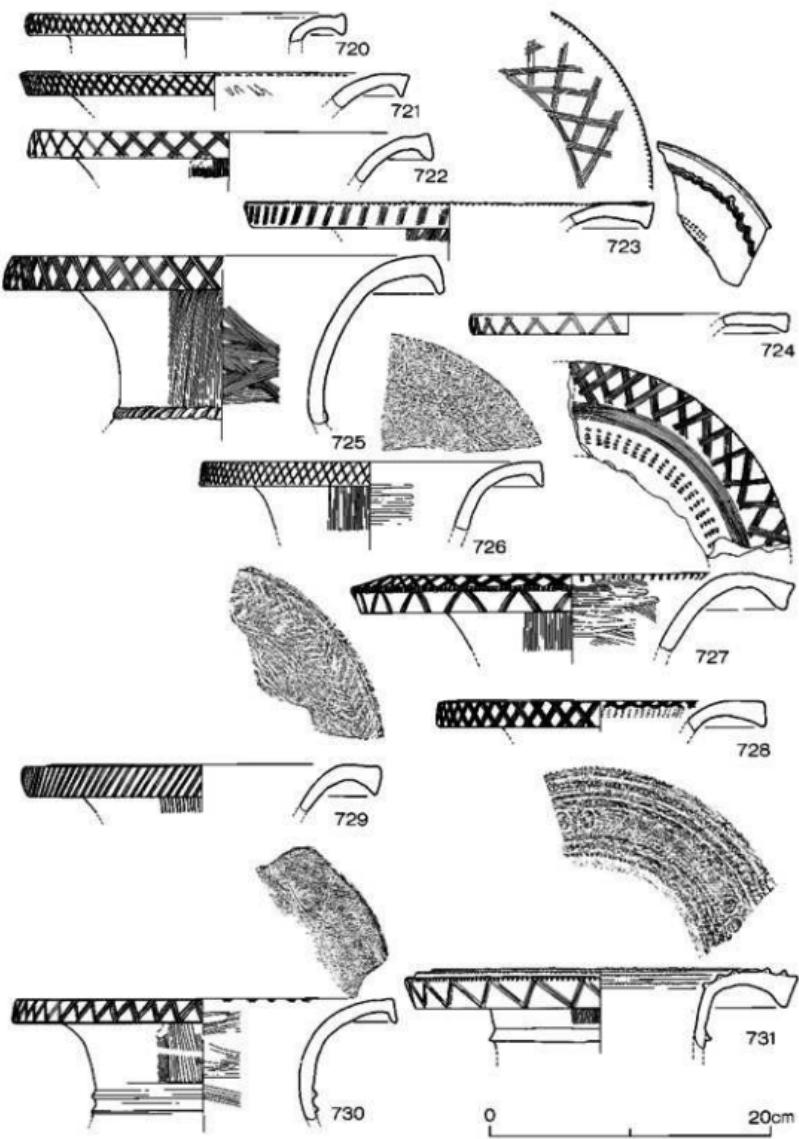
第63図 亦生土器実測図(43)



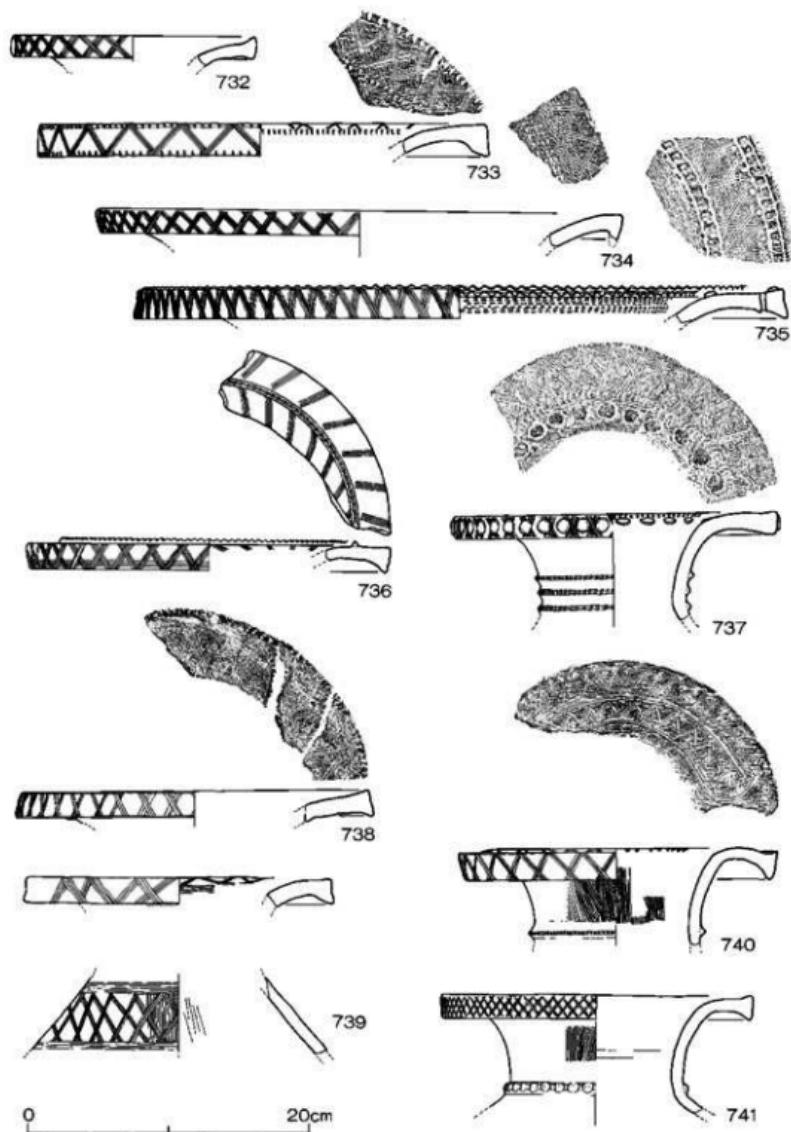
第64図 弥生土器実測図(44)



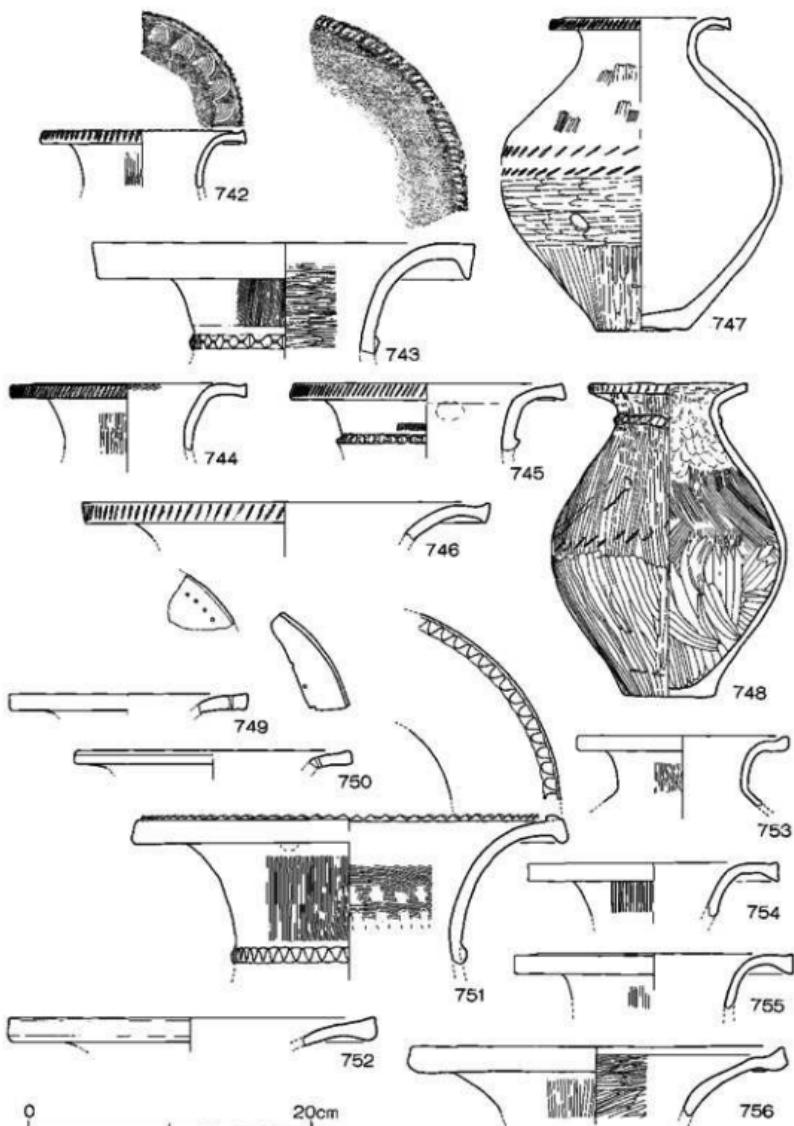
第65図 亦生土器実測図(45)



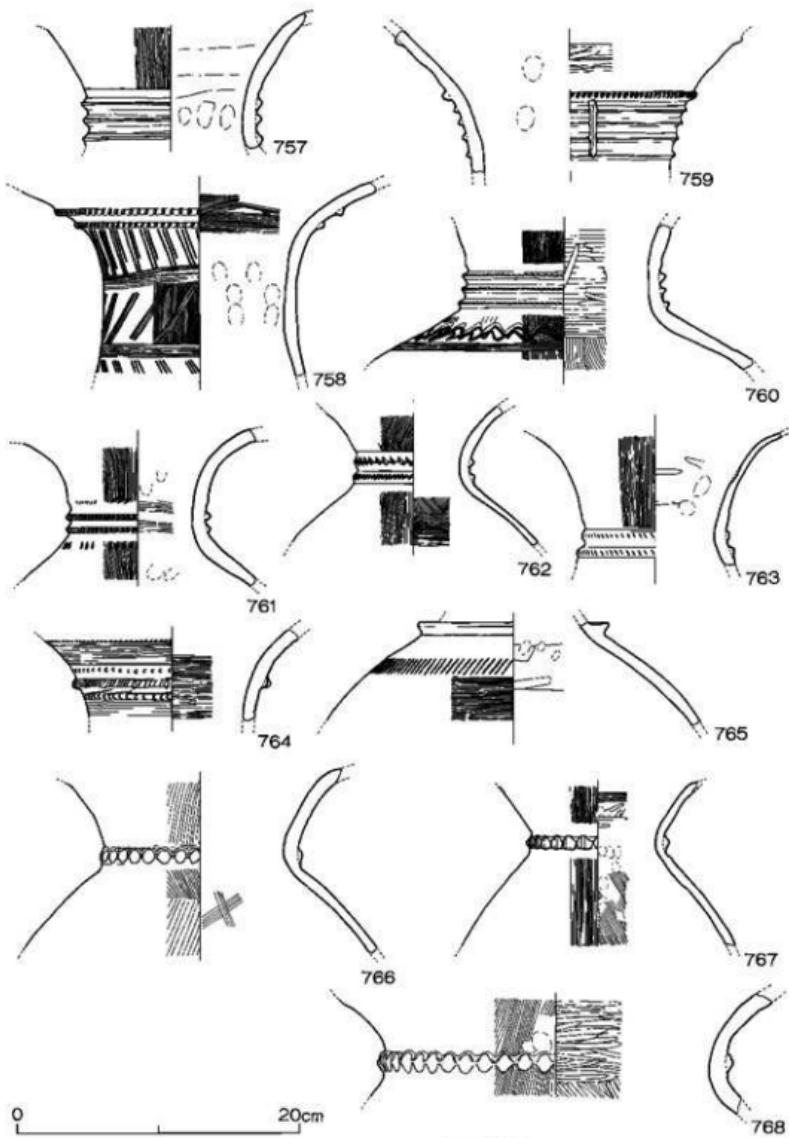
第66図 弥生土器実測図(46)



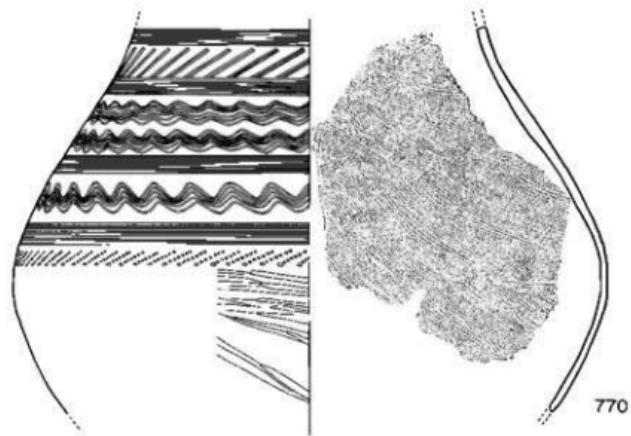
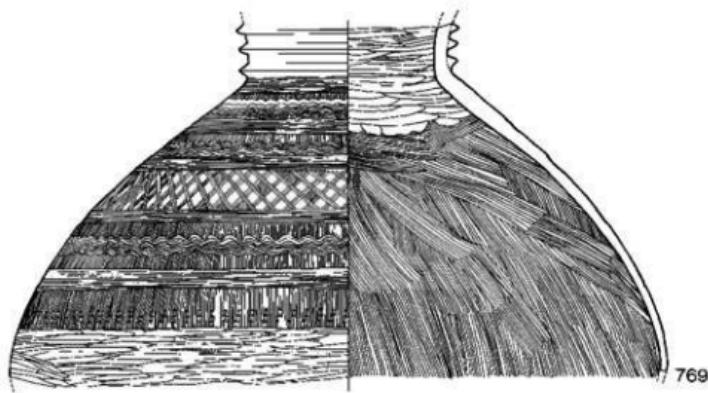
第67圖 亦生土器実測図(47)



第68図 弥生土器実測図(48)

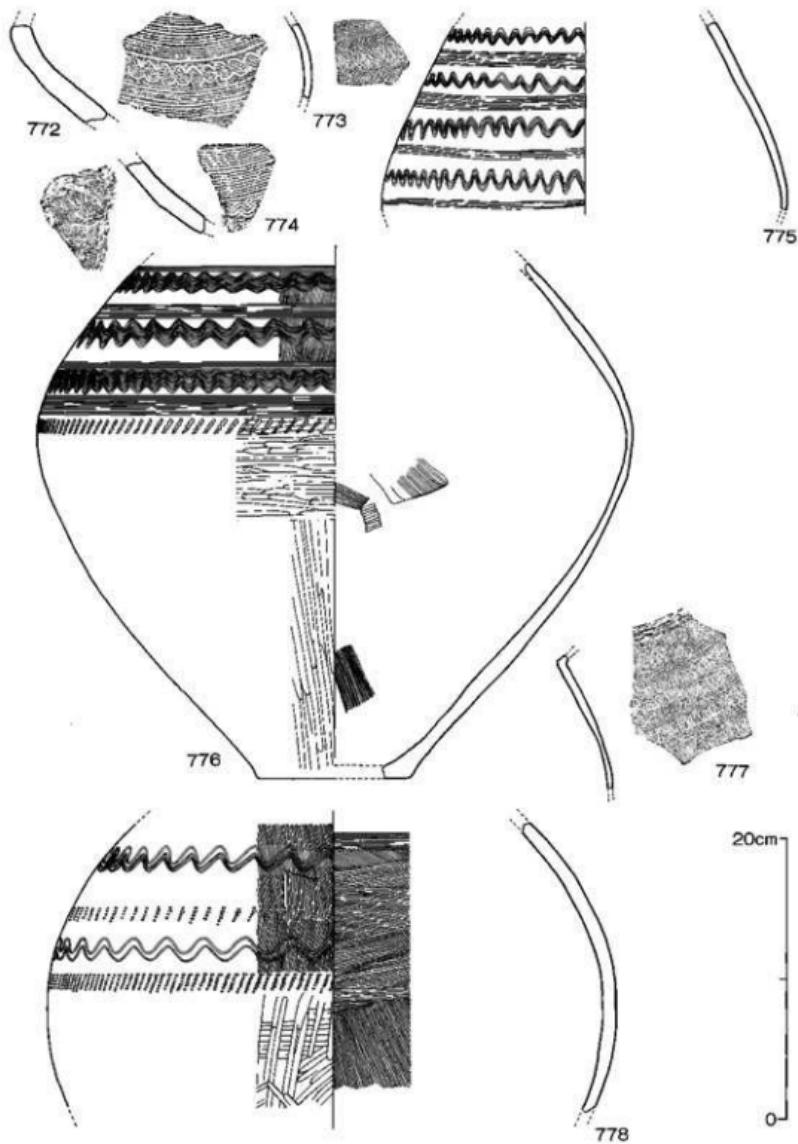


第69図 弥生土器実測図(49)

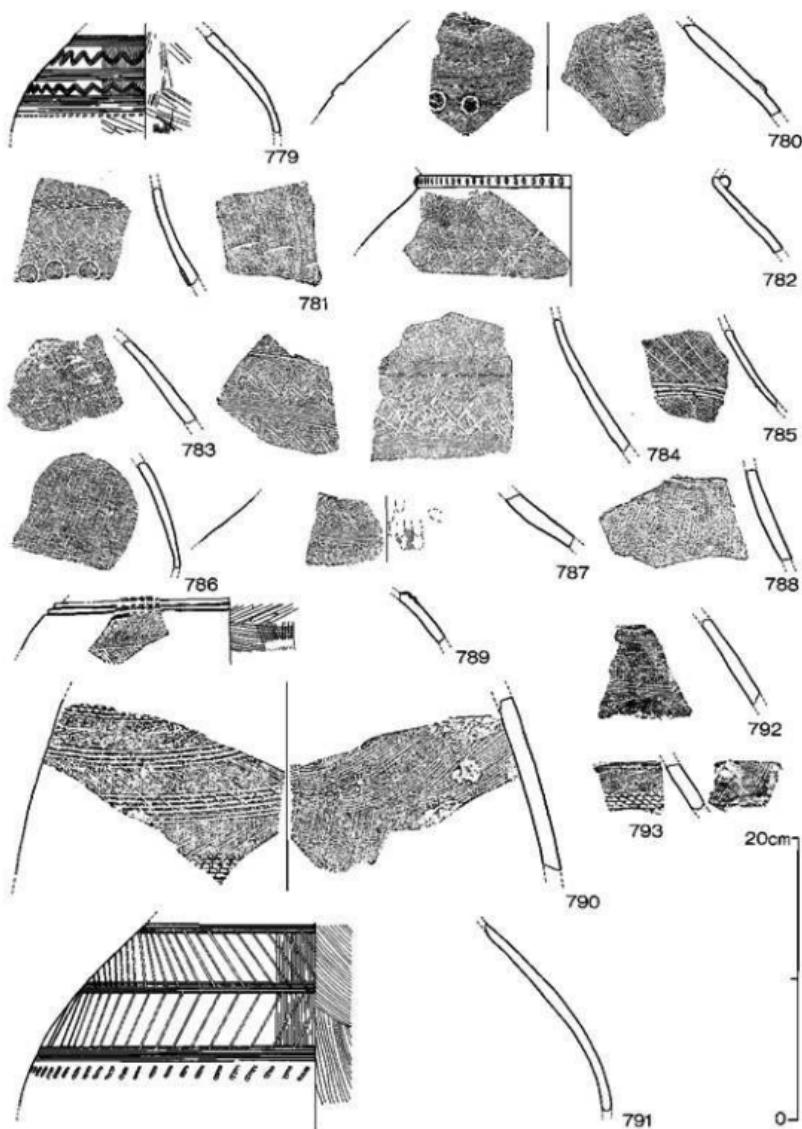


0 20cm

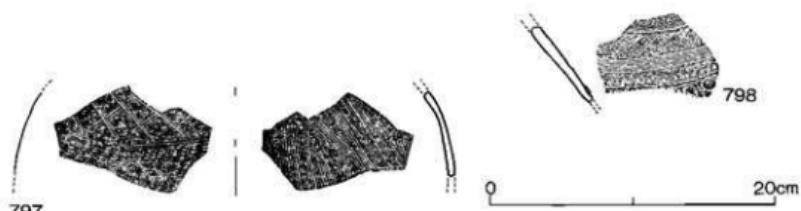
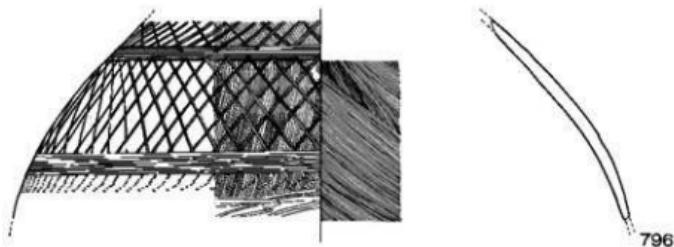
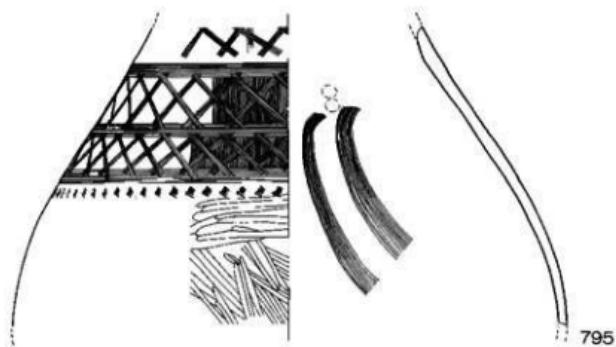
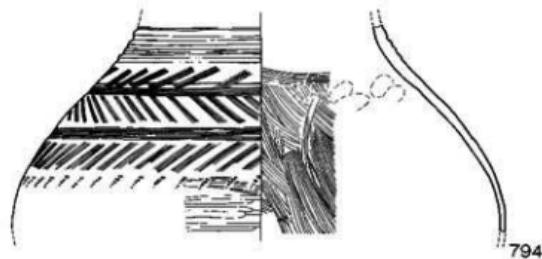
第70図 异生土器実測図(50)



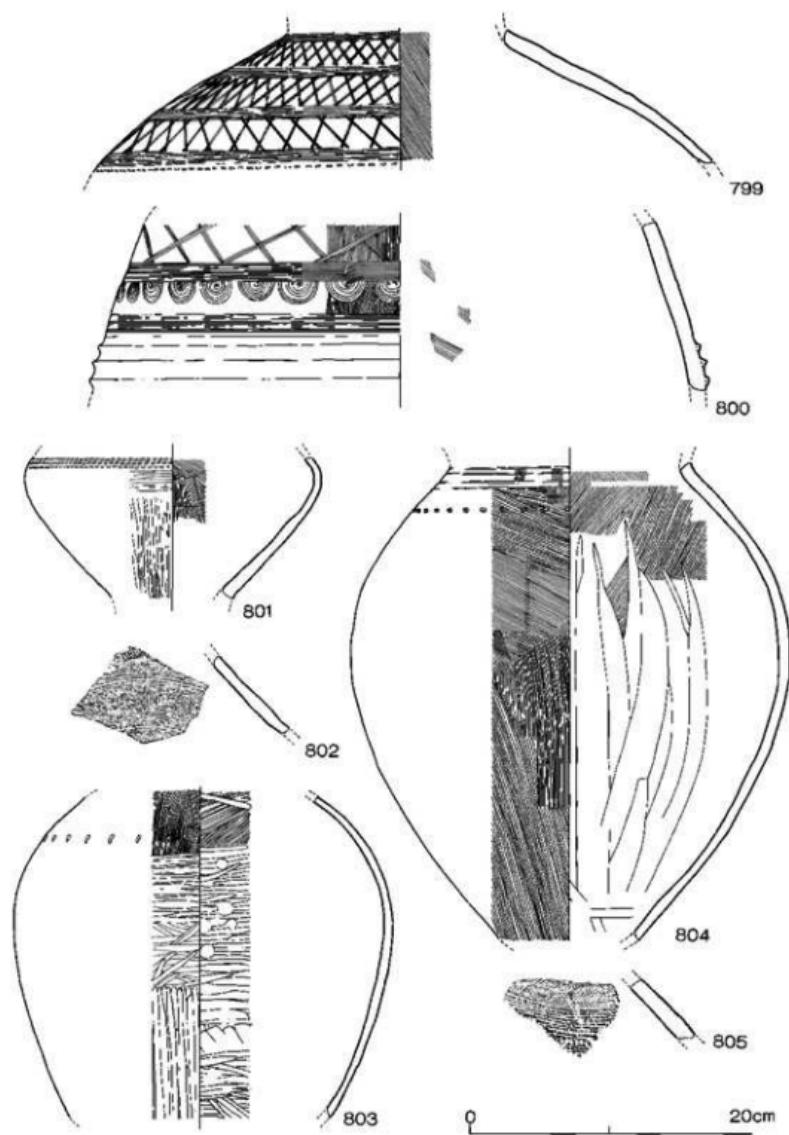
第71図 弥生土器実測図(51)



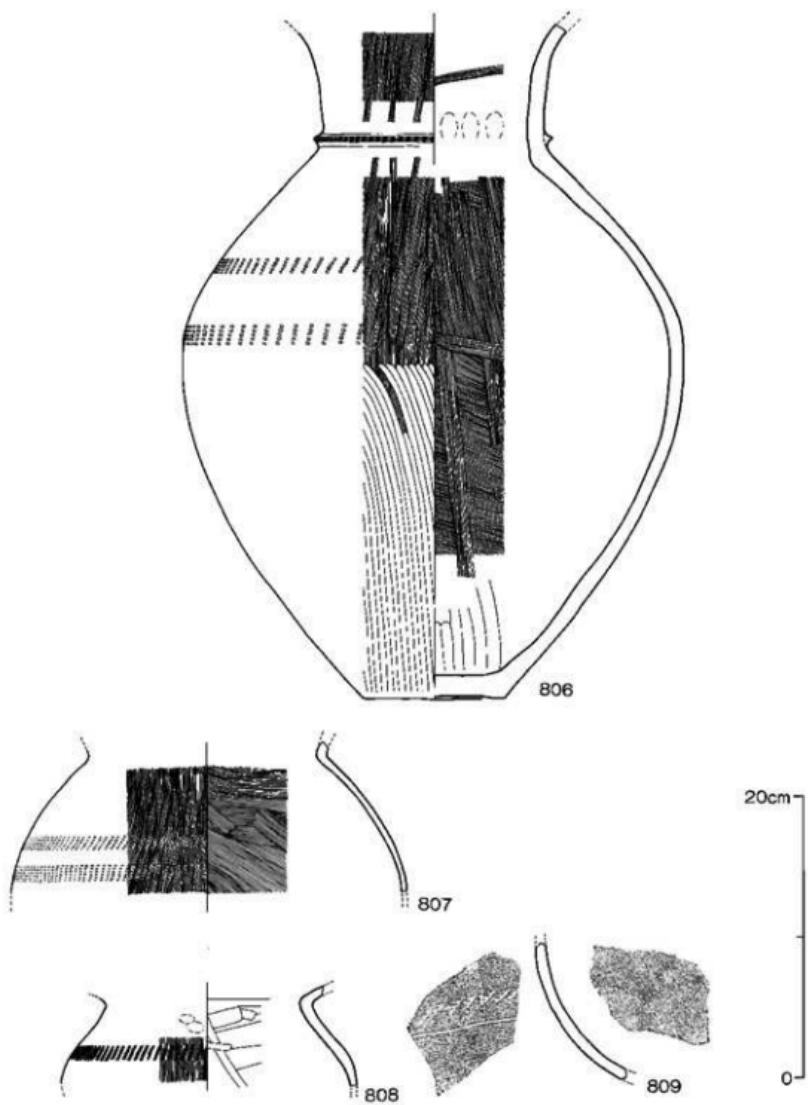
第72図 弥生土器実測図(52)



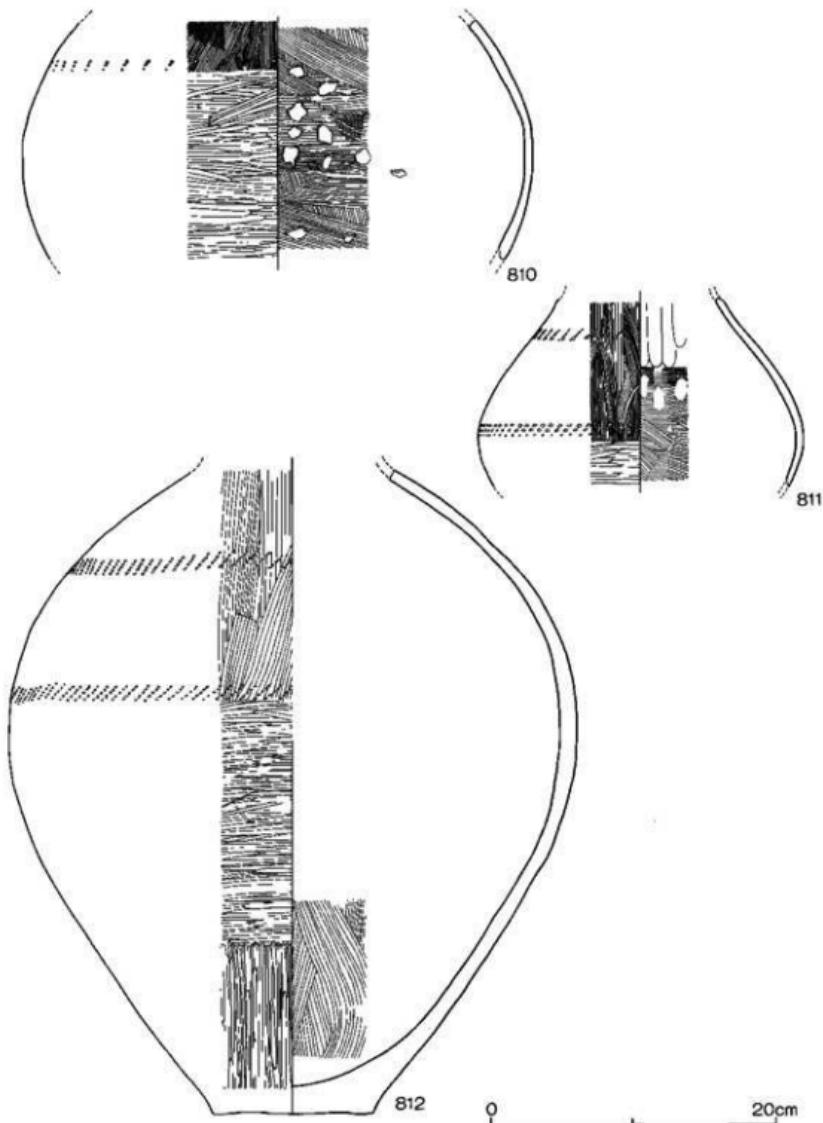
第73図 弥生土器実測図(53)



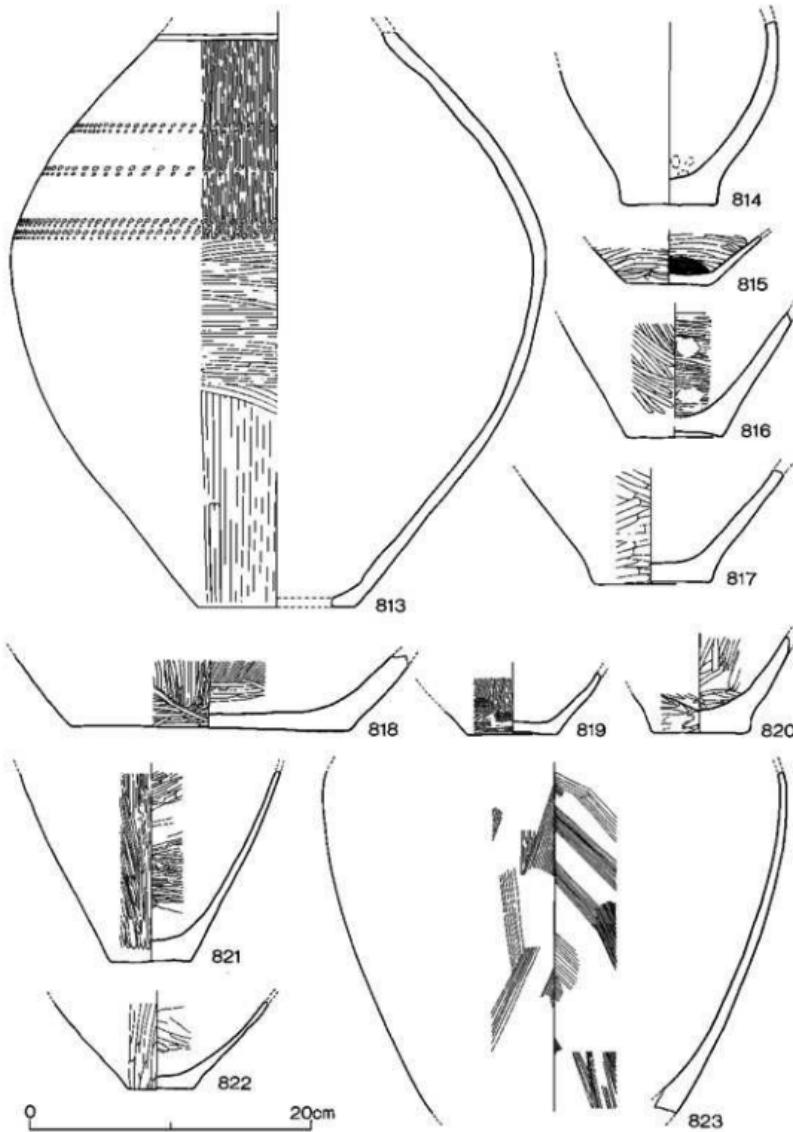
第74図 余生土器実測図(54)



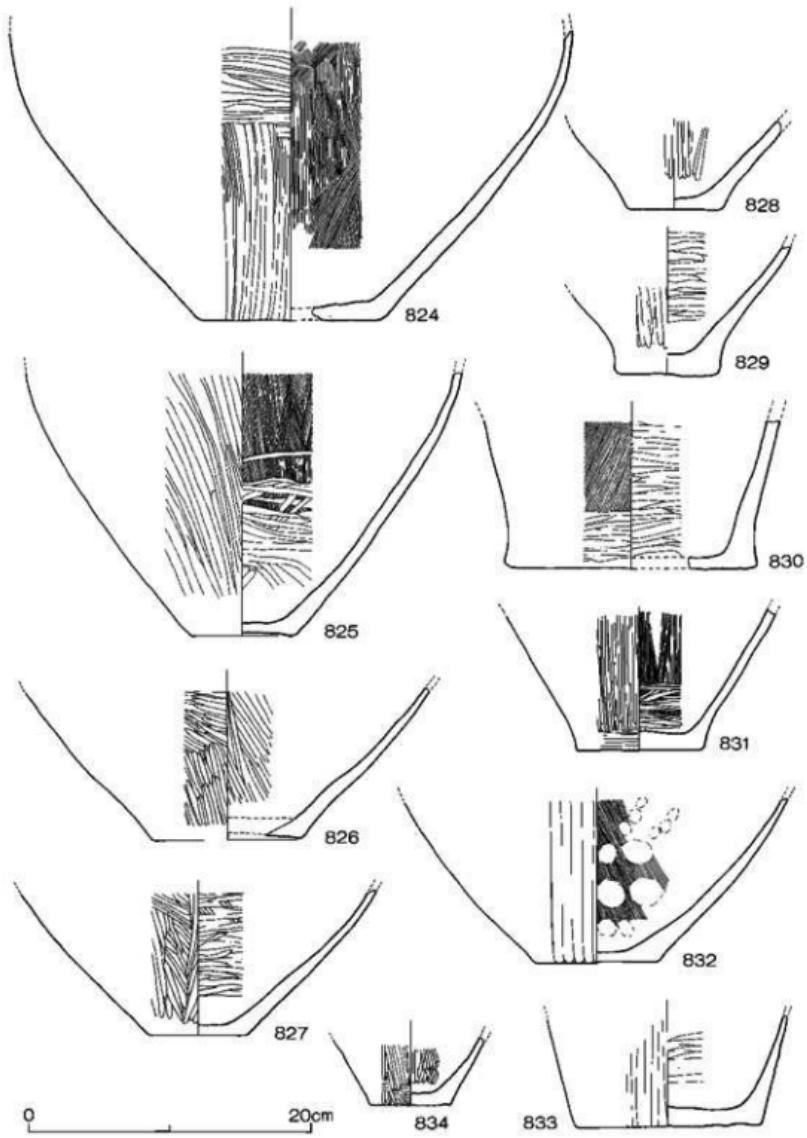
第75図 弥生土器実測図(55)



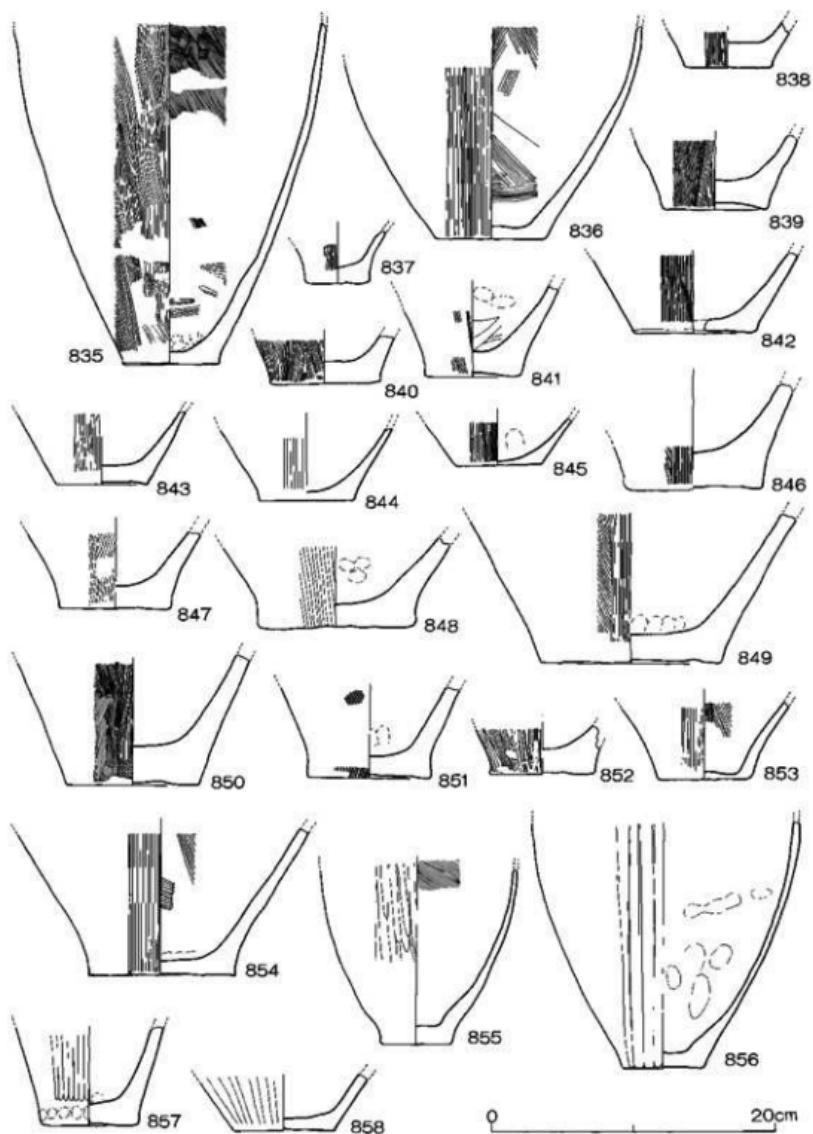
第76図 弥生土器実測図(56)



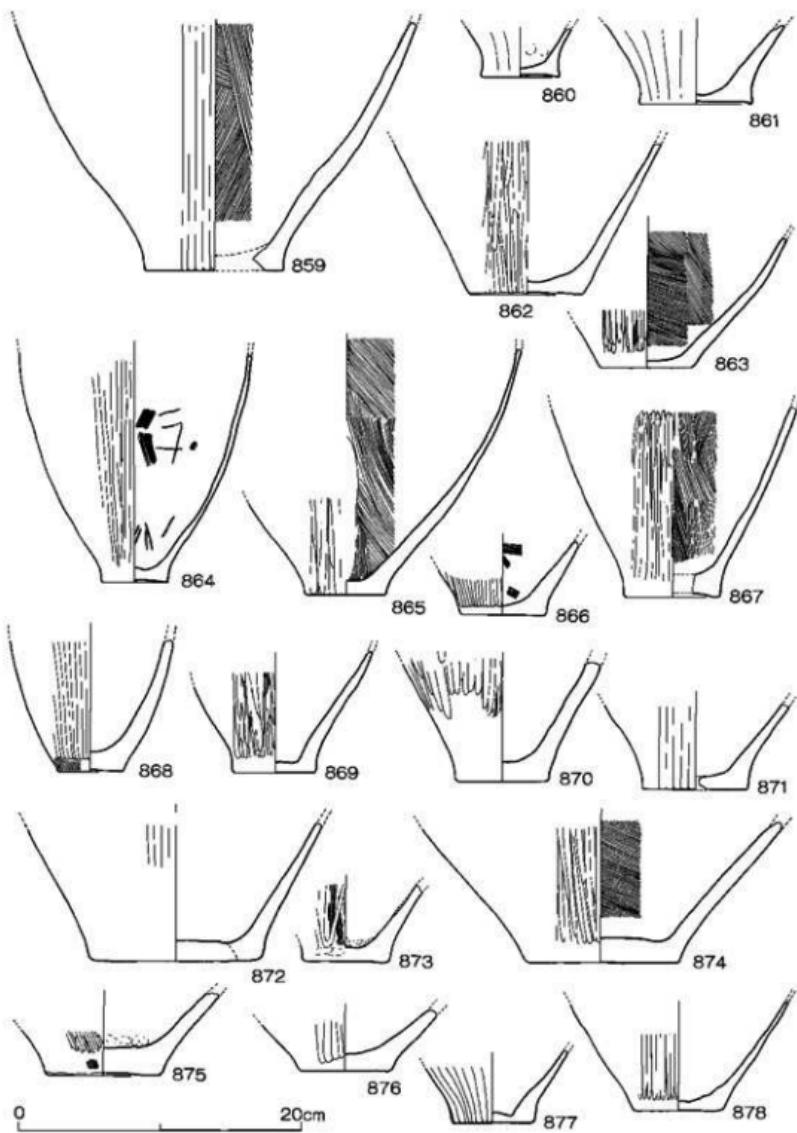
第77図 弥生土器実測図(57)



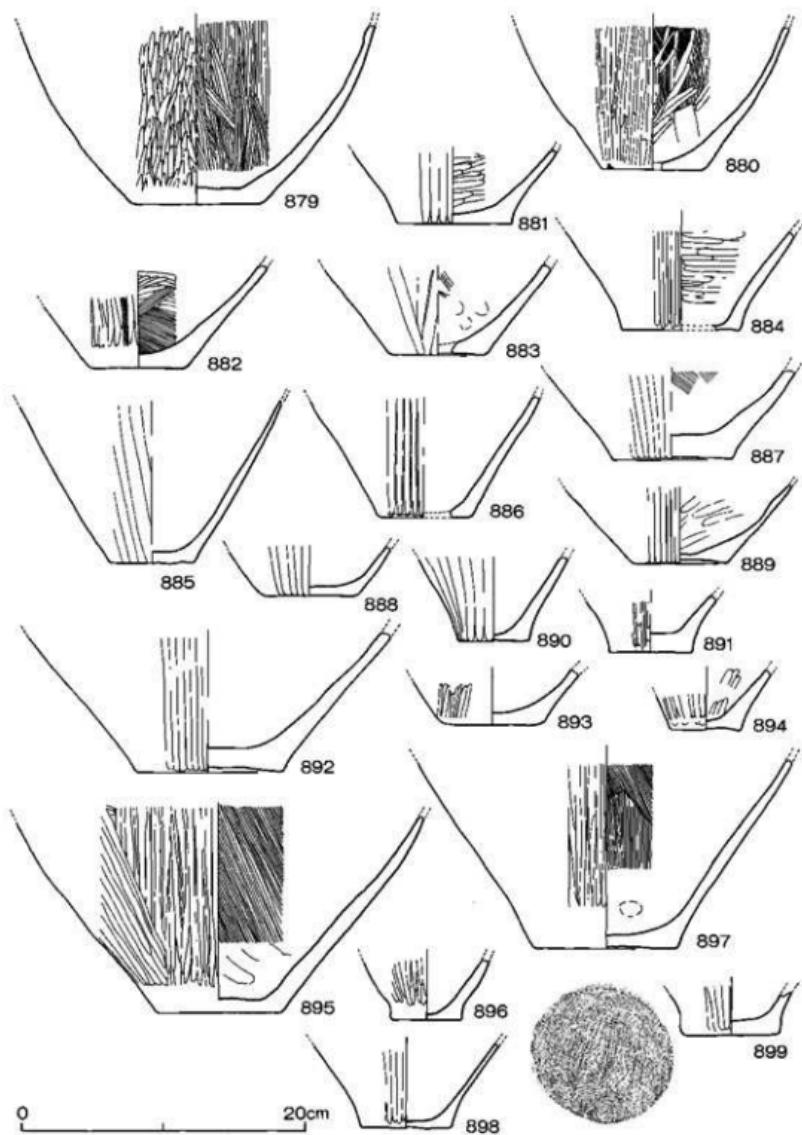
第78図 亦生土器実測図(58)



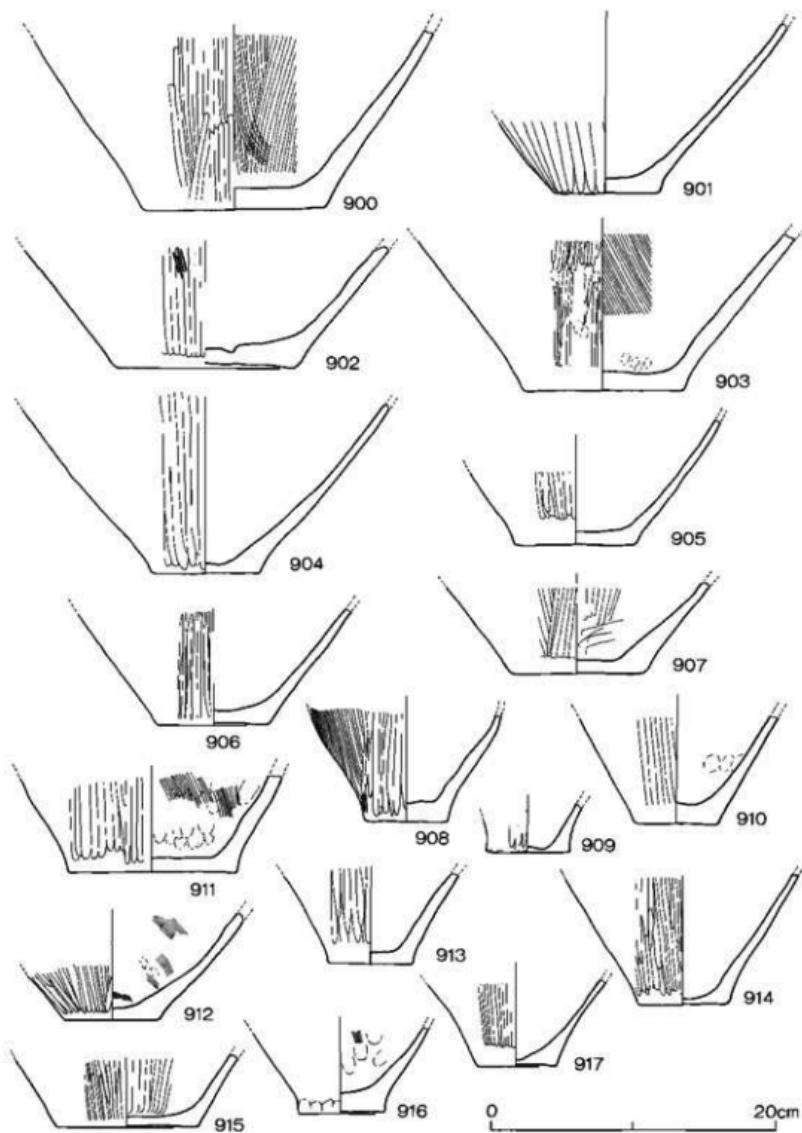
第79図 亜生土器実測図(59)



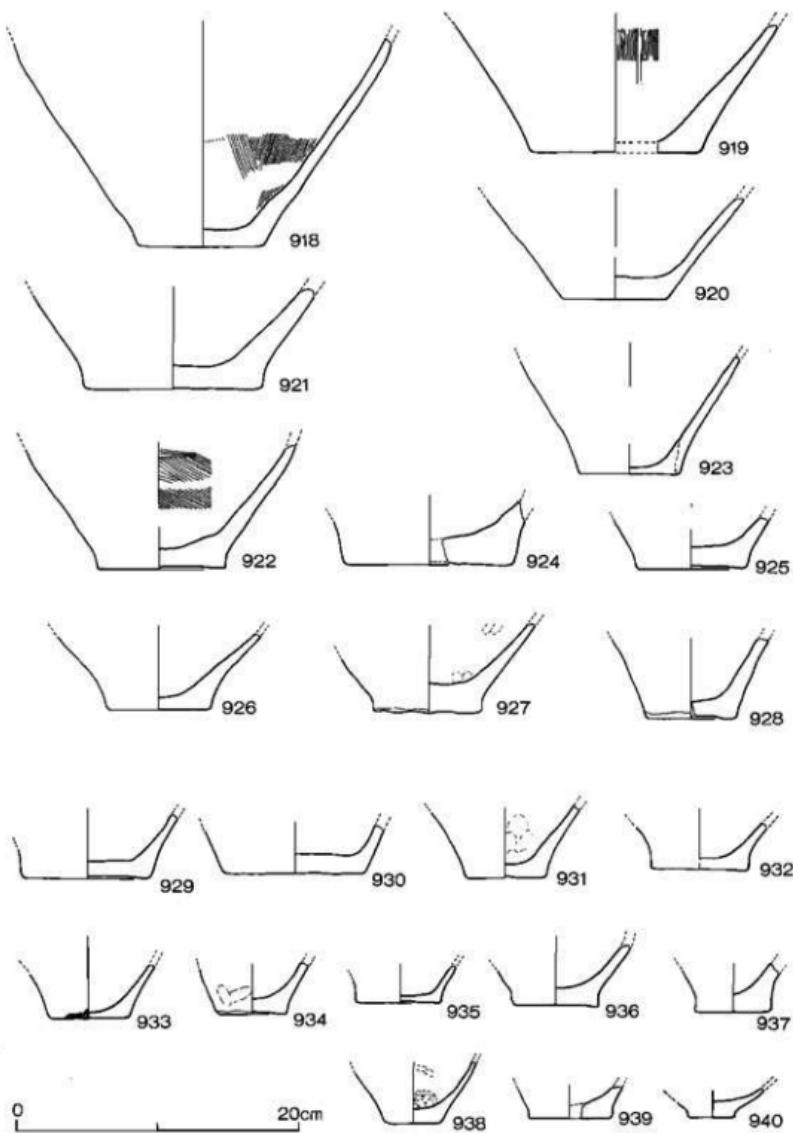
第80図 弥生土器実測図(60)



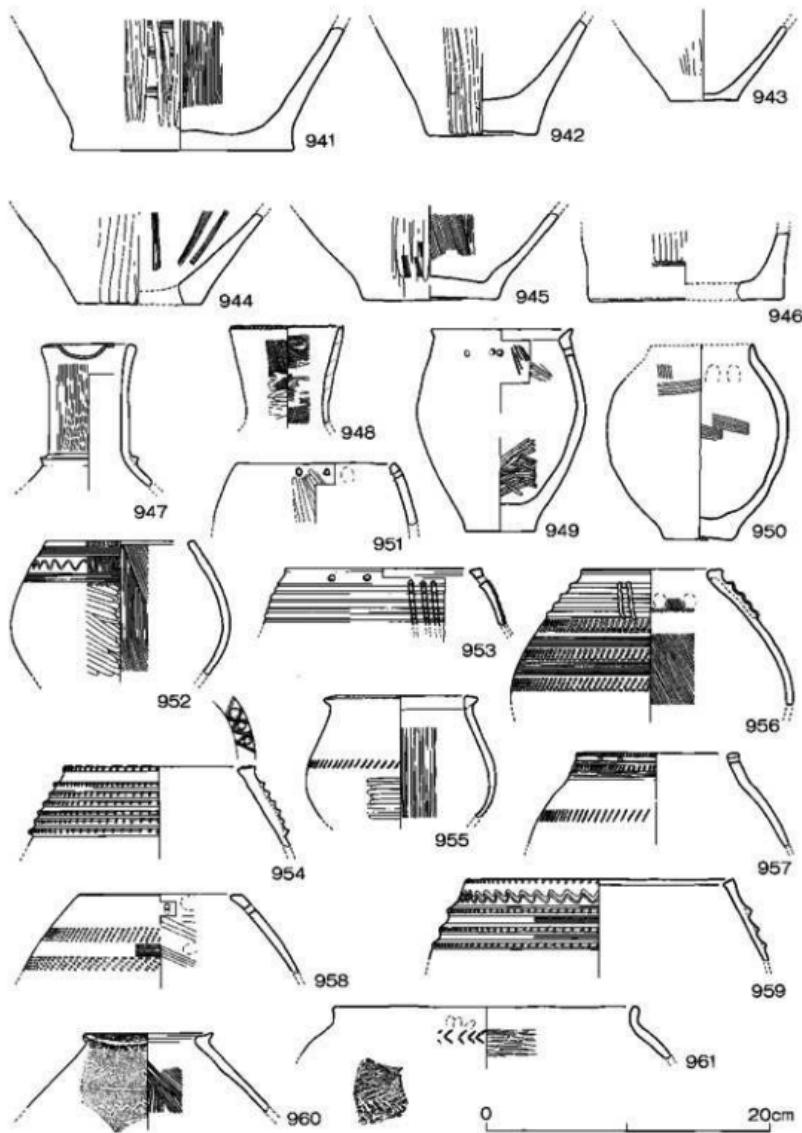
第81図 弥生土器実測図(61)



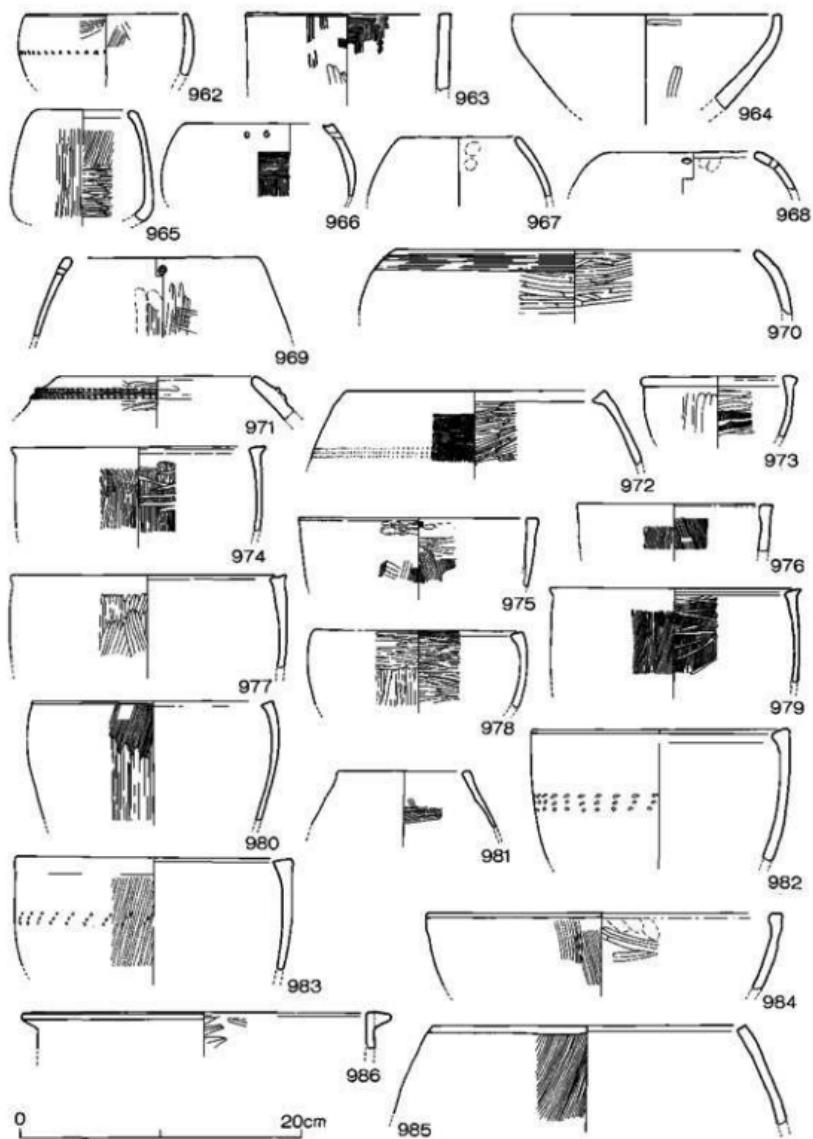
第82図 弥生土器実測図(62)



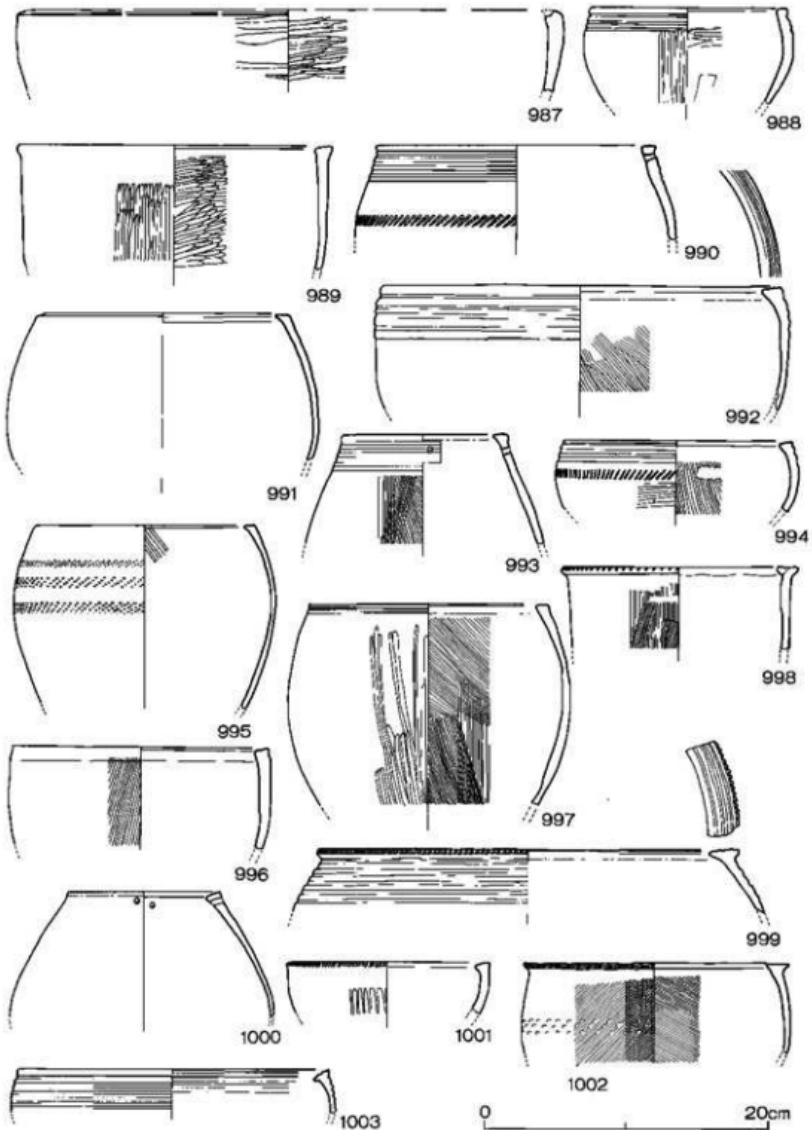
第83図 弁生土器実測図(63)



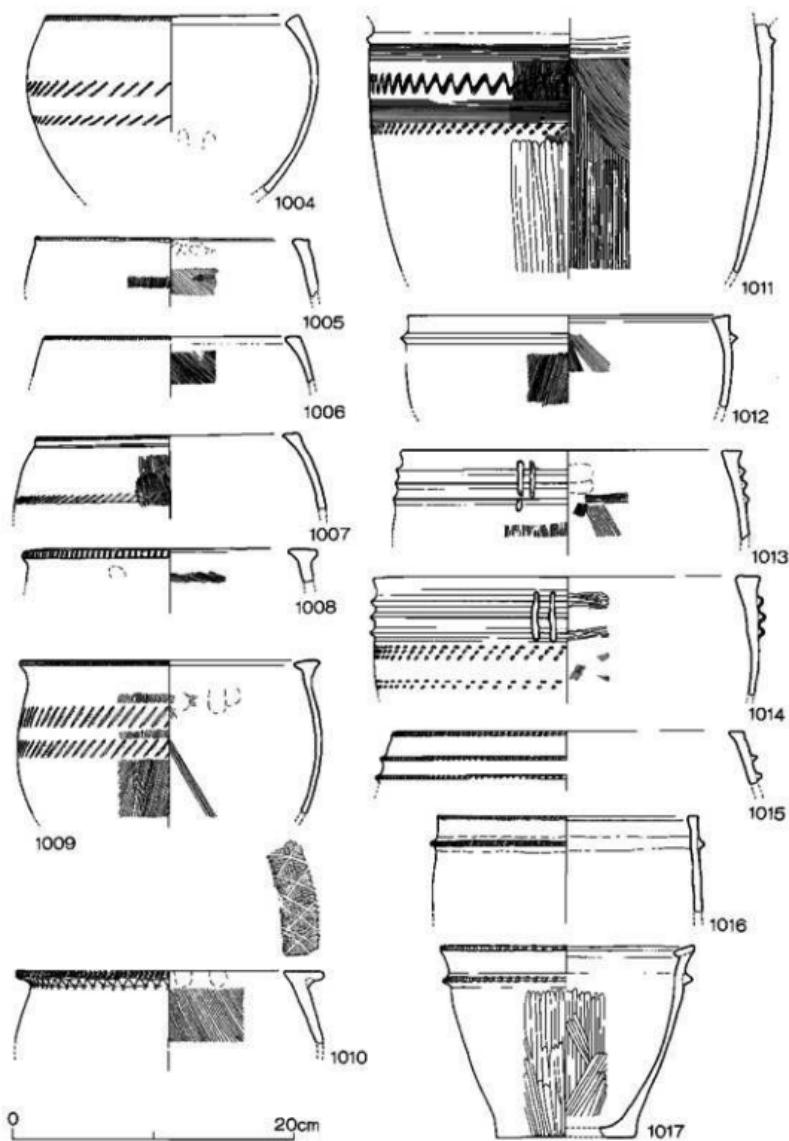
第84図 弥生土器実測図(64)



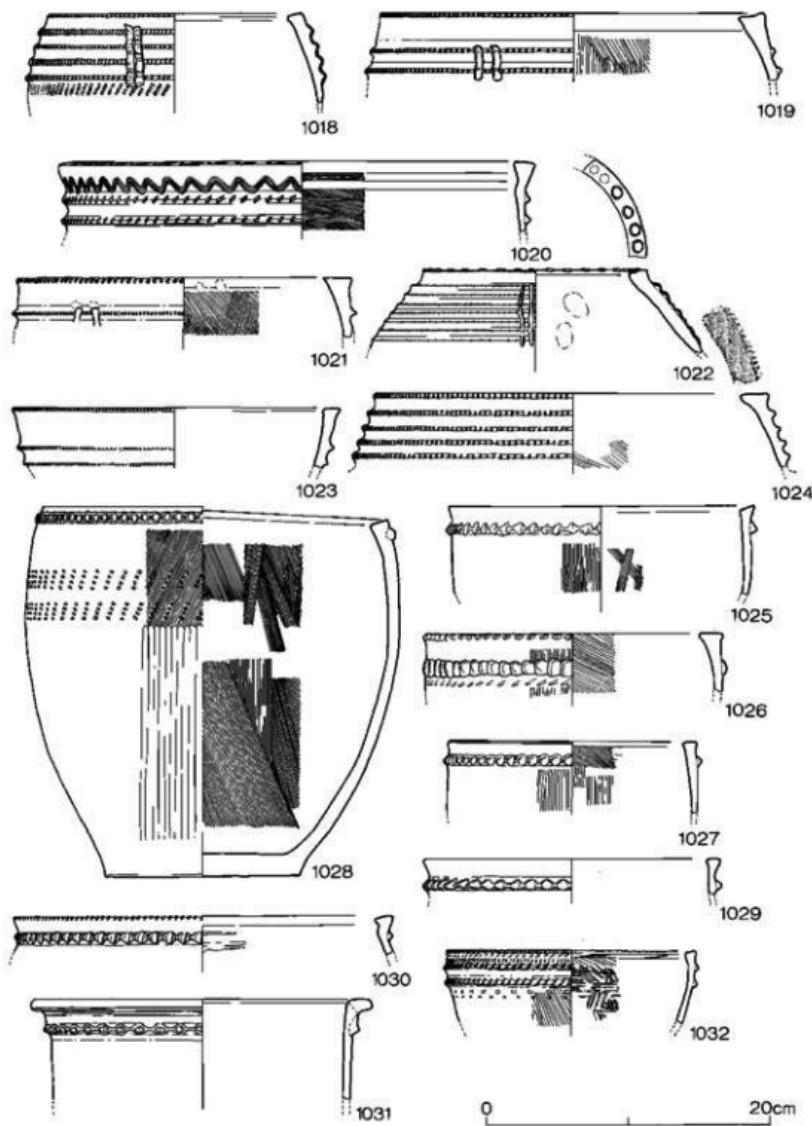
第85図 弥生土器実測図(65)



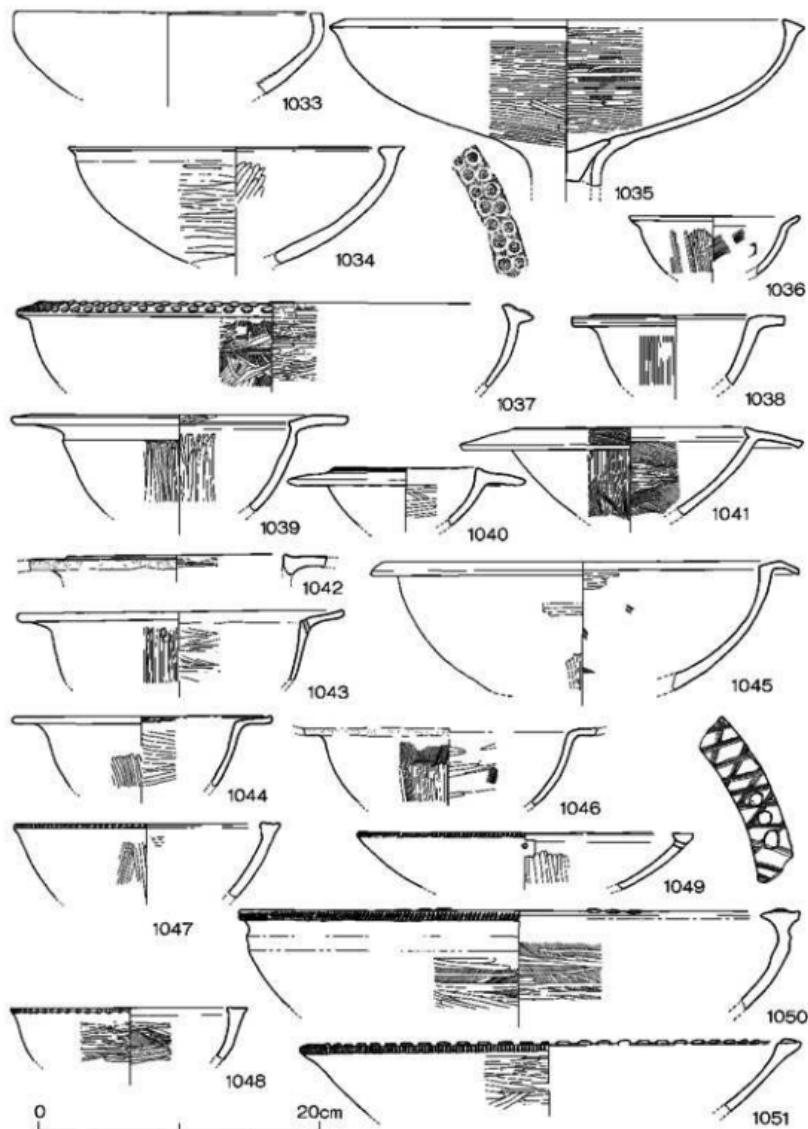
第86図 弥生土器実測図(66)



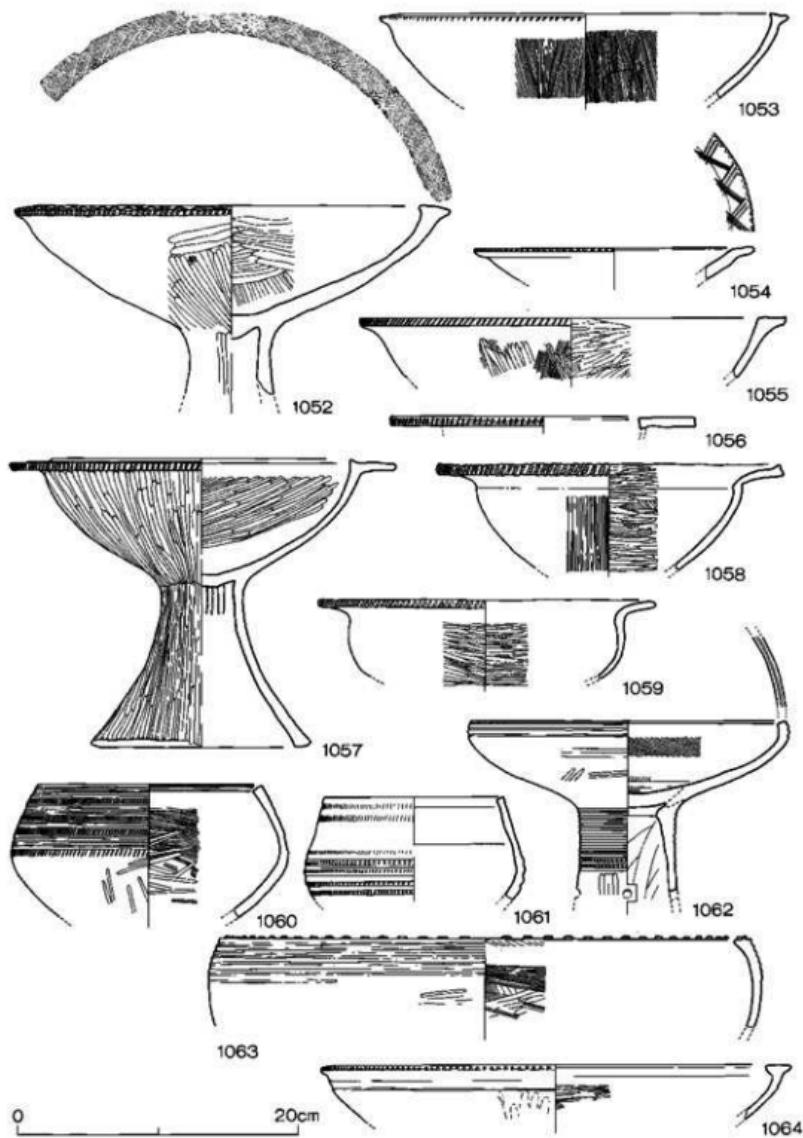
第87図 弥生土器実測図(67)



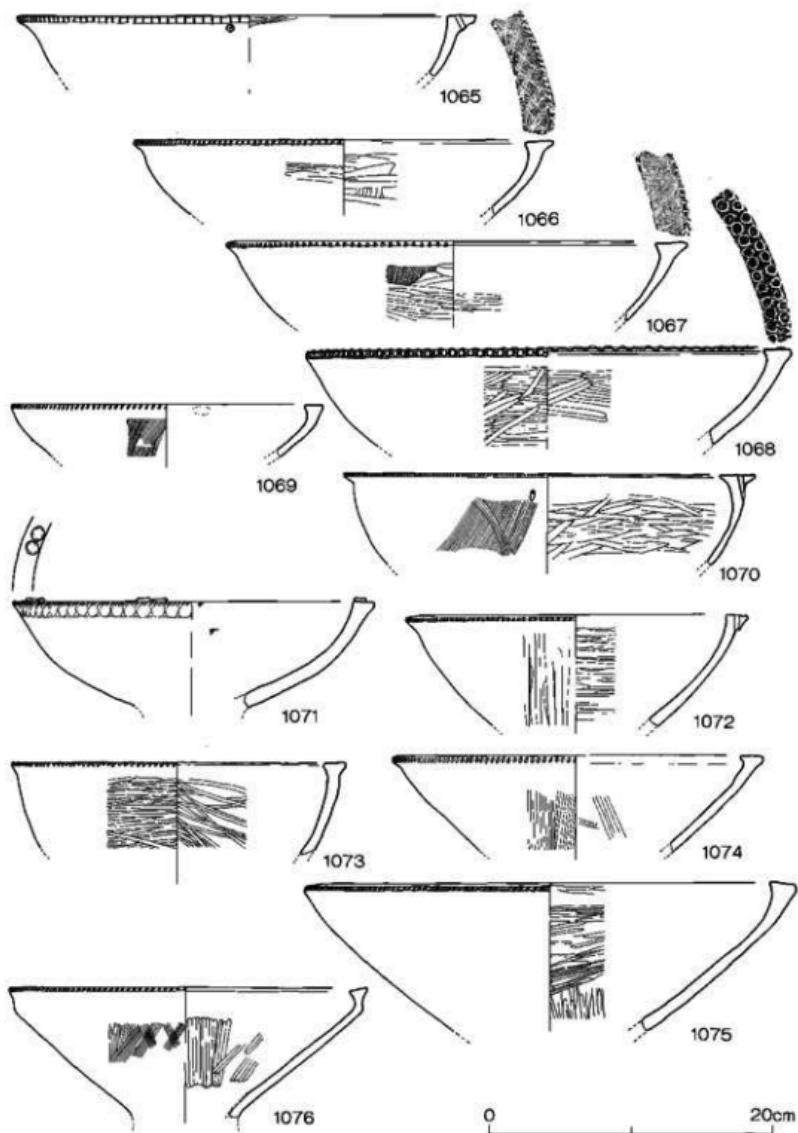
第88図 弥生土器実測図(68)



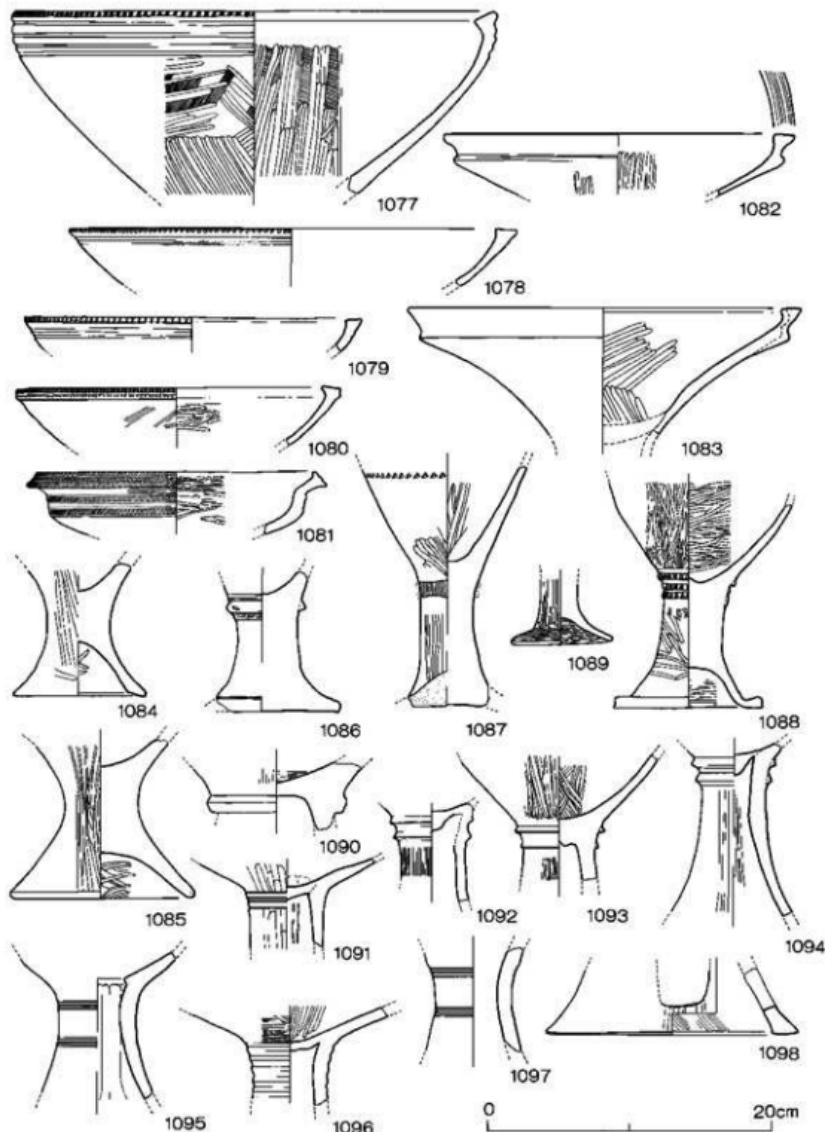
第89図 弥生土器実測図(69)



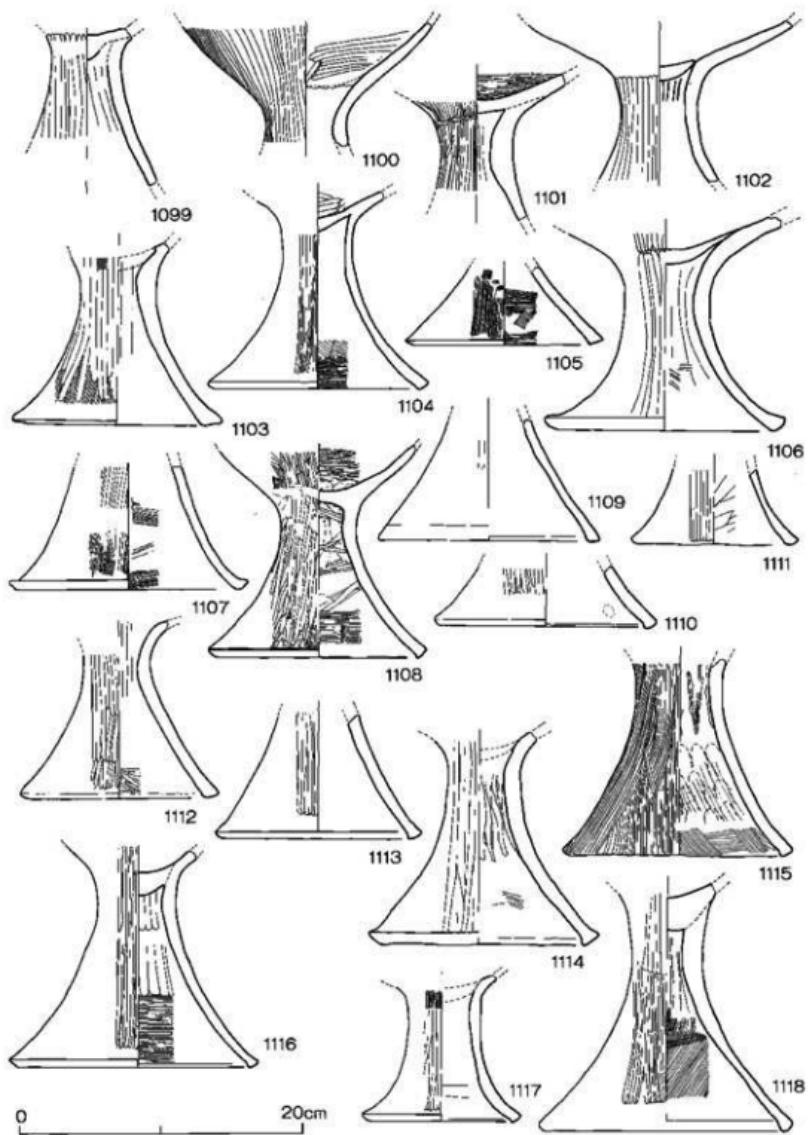
第90図 弥生土器実測図(70)



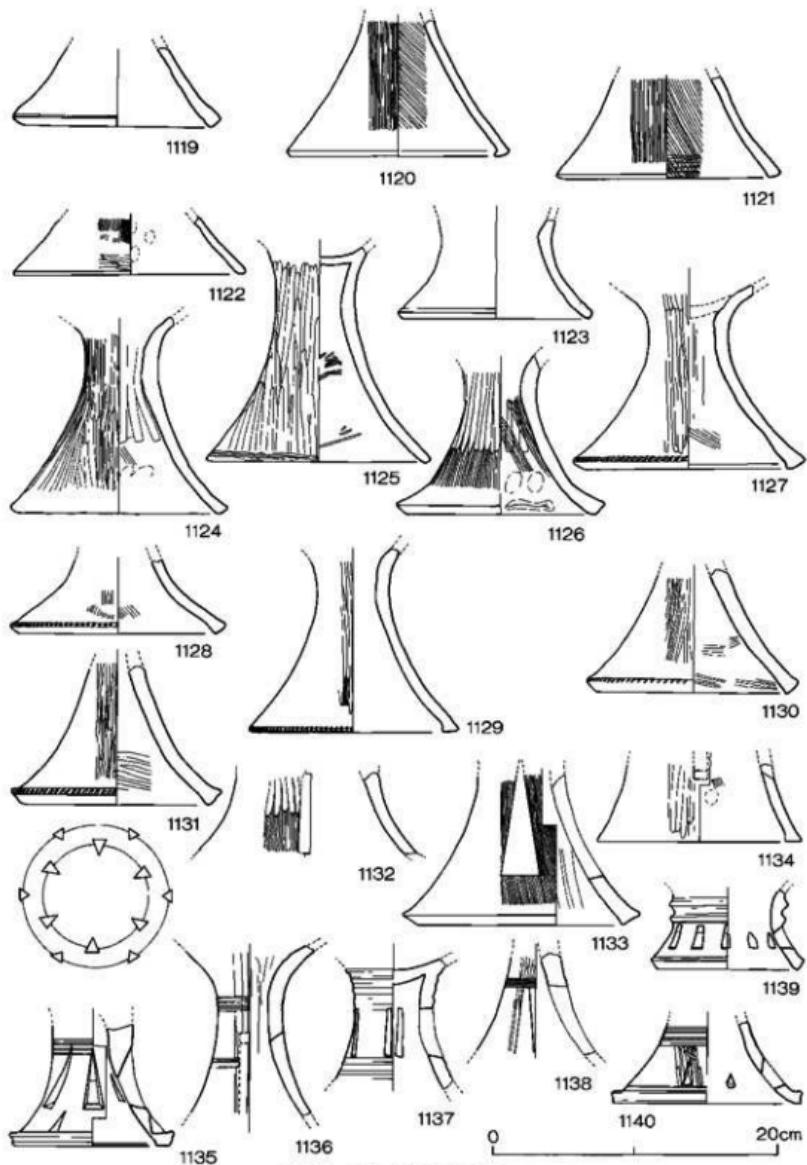
第91図 弥生土器実測図(71)



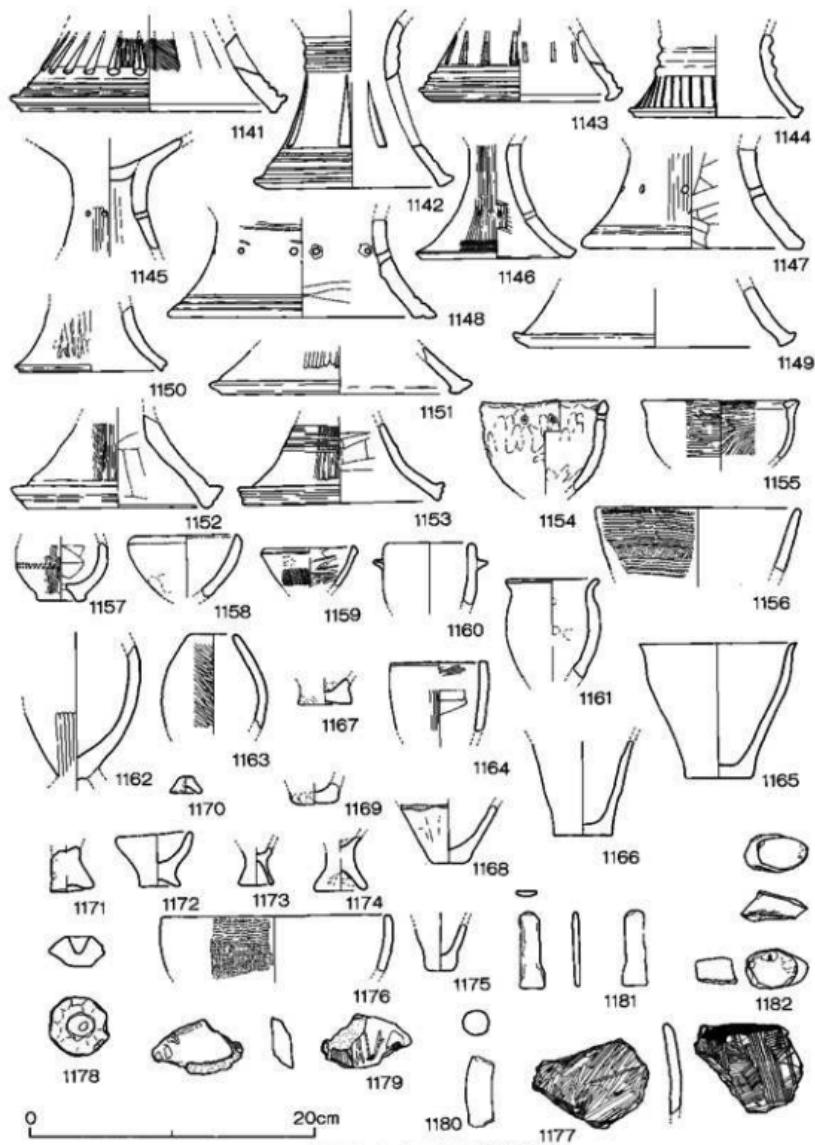
第92図 弥生土器実測図(72)



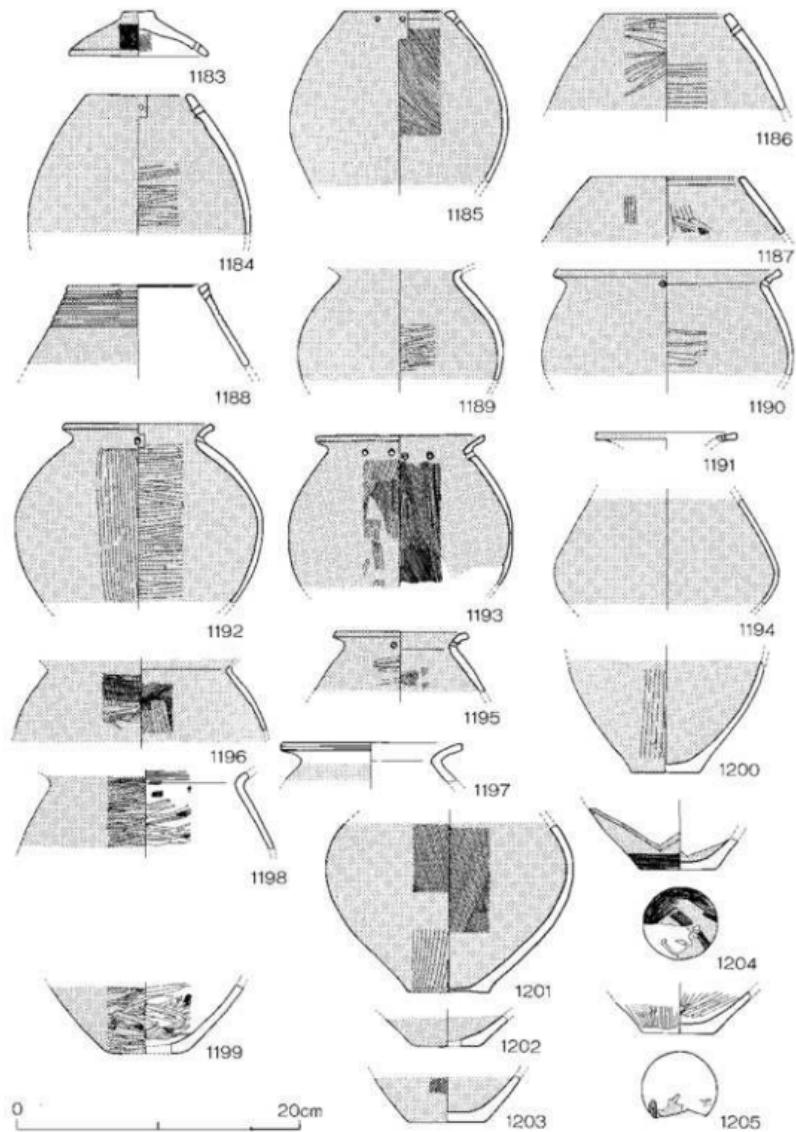
第93図 弥生土器実測図(73)



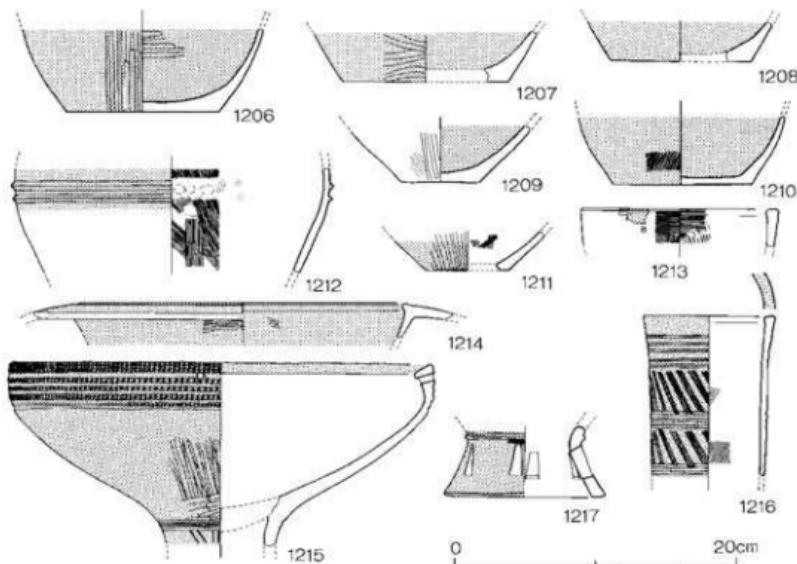
第34図 弥生土器実測図(74)



第95図 弥生土器実測図(75)



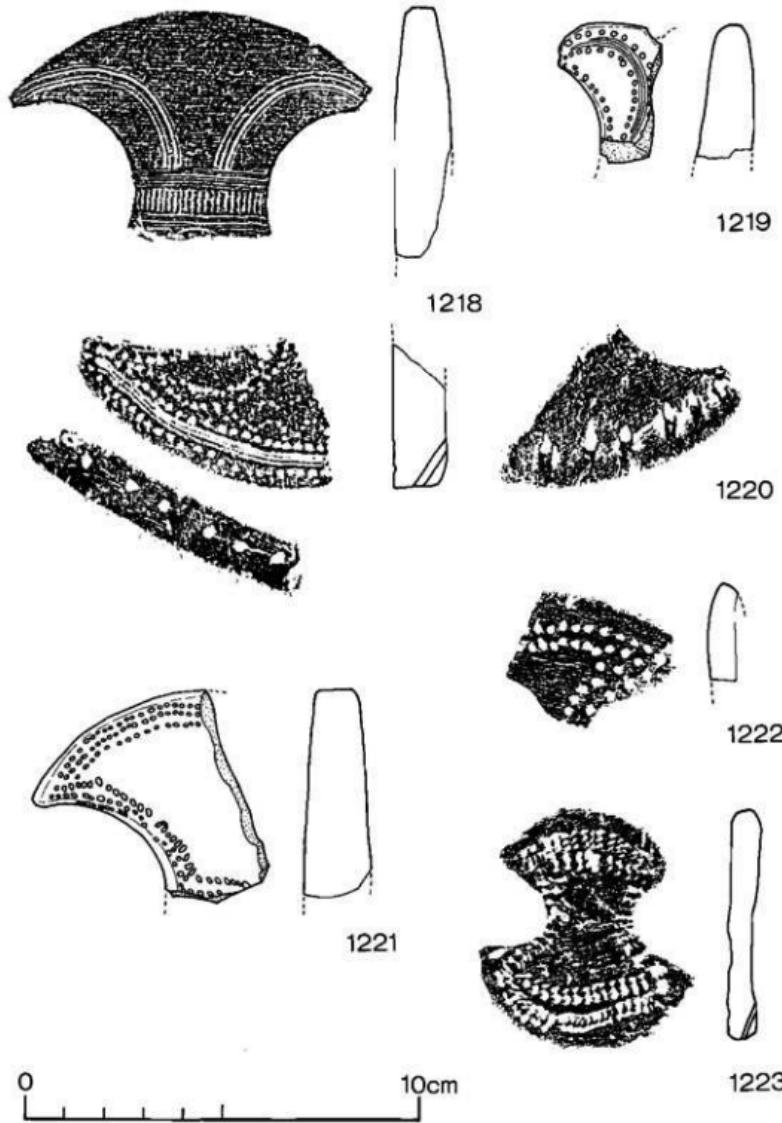
第96図 弥生土器実測図(76)



第97図 赤生土器実測図(77)

は1.0cmあるが裏面は剥離している。文様は列点文のみで1219や1220にみられたような沈線はない。1221は現存部5.3×5.0cm、厚さ1.7cmを測る。文様の手法は1222と同じで、列点文のみで表わされている。1223は、唯一の完成品である。長さ5.9cm、図示した位置での上方の幅は4.0cm、中央のくびれ部で2.2cm、下方で5.5cm、厚さは0.6cmを測る、分銅型七製品としては小形のものである。文様の手法も只殻腹縁で刺突がなされ他と異なる。下方には、1220でみられたような側面から裏面にむかひ小孔が貫かれている。最も荒い作りで229ある。これらは、いずれも、発掘調査区中央部に検出された溝状構造とその周辺から発見されたものである。県内では、西川津遺跡の下流にあるタテチョウ遺跡、松江市竹矢町布田遺跡^(註4)、安来市十善遺跡^(註5)、出雲市矢野遺跡^(註6)に出土例が知られているが、6個体は一遺跡としては最多である。文様は、その手法の違いはあるが、いずれも同じ文様が描かれている。

不明土製品 第95図1177～1182には不明土製品を掲げた。1178は径4.0cm、厚さ2.0cmの不整形のソロバン玉状の土製品である。中央は凹んでおり貫通していない。1179は粗い手挽で、分銅型土製品の一部かもしれない。1180は把手であろう。1181は七器片を再利用したヘラ状のもので全体に磨滅している。1182は径4.0×2.0cm、厚さ2.0cmの橢円形の土製



第98図 弥生土器実測図(78)

品。1177は不整形な土器片を再利用し、その二辺を磨き、刃部を作り出している。この土器片は前期の可能性もある。

(2) 弥生時代後期の土器

a. 豊形土器 第99図、第100図、第101図1266～1278は弥生時代後期の豊形土器として分類した。全体の器形は1235や1241に代表されるような胴部の長いものと、1275～1278のように胴部の短いものがある。いずれも、内面は頸部より下方にヘラ削りを施し、その後はハケ日調整やヘラ磨き調整はしないという特徴がある。口縁部から頸部にかけては断面が「く」の字状となるもの（第99図、第101図1267～1270、1273～1277）と二重口縁になるもの（第100図、第101図1266、1271、1272）がある。前者の多くは口縁部が内傾し、後者のそれは垂直もしくは外傾するものが多い。いずれも、口縁部外面には多条沈線を施すが、無文のもの（1267～1274）や波状文もみられる（1266、1276）。胴部外面中ほどよりやや上方に、ヘラやクシ状工具による刺突文をめぐらすもの多く（1230、1234、1236、1239、1238、1258、1275）、それが頸部近くにある例もある（1252、1268）。1276は外面胴部にクシ捕波状文、1275は珍らしく半円を連続させた文様を施している。

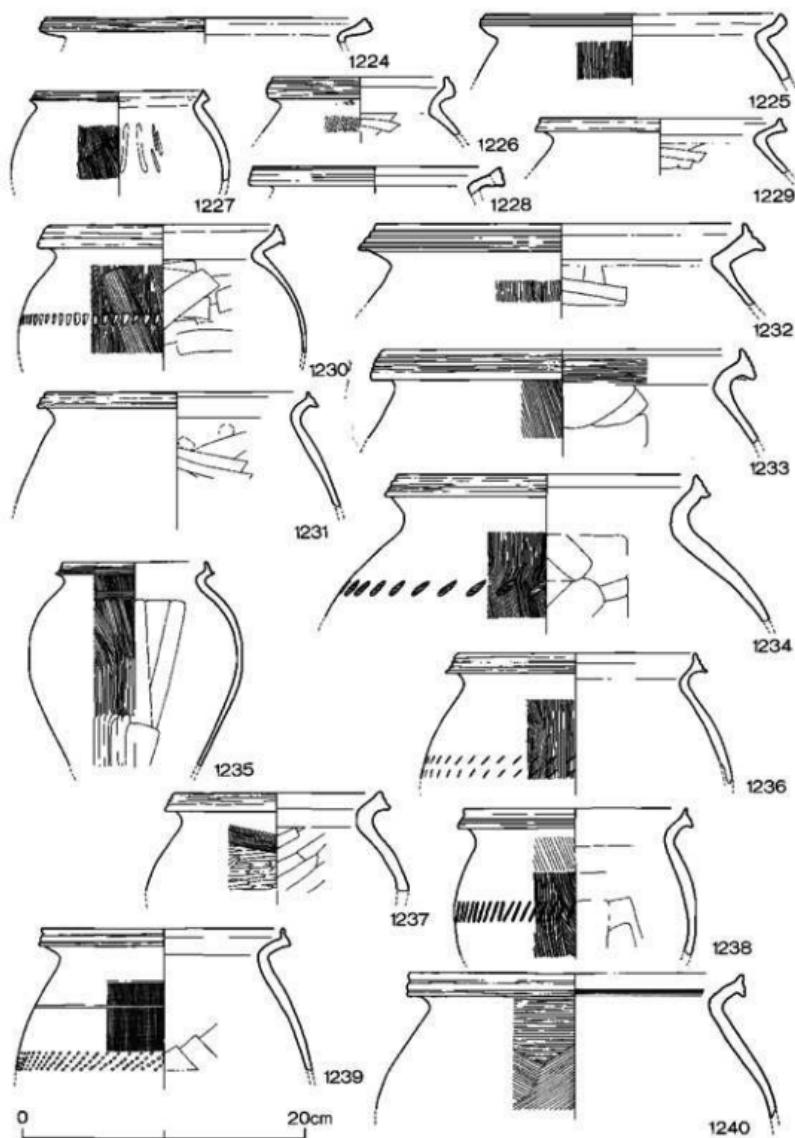
b. 壺形土器 第101図1279～1288、第102図1289～1298は壺形土器として分類した。1284、1294は壺形土器の口縁部が内傾し「く」の字状とするものに対応し、同様に1282～1285は二重口縁のものに対応すると考えられる壺形土器である。1289、1290は当地方ではあまりみかけないもので、特に1289と1290は他地域からの搬入土器の可能性もある。1286は脚がつく壺かもしれない。1287は無口縁の壺。1288は壺形土器のミニチュア土器と考えた。

c. 鉢形土器 第102図1300は口縁径14.0cmの小形の鉢形土器である。内面は全体にヘラ削りを施している。

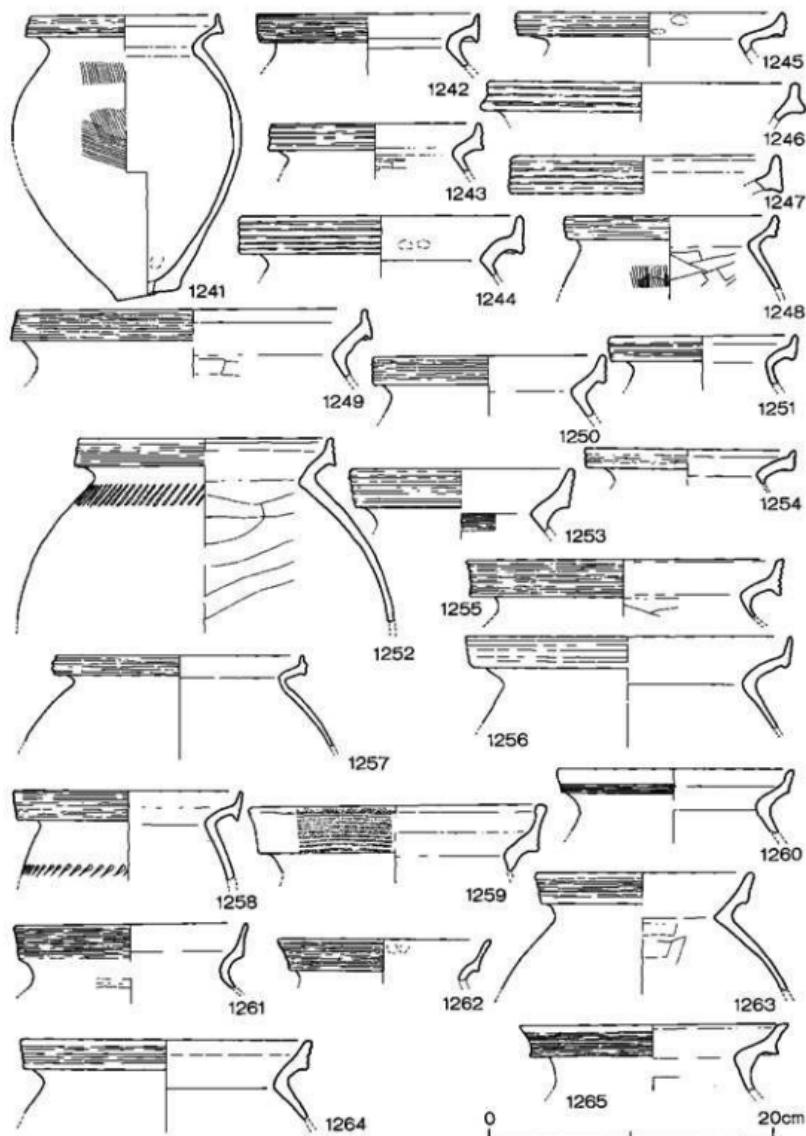
d. 高杯 第103図1303～1320に高杯を示した。杯部の形態は大別して二種ある。1303、1308、1399は弥生時代中期の高杯として分類した第92図1082、1083の系統上にあるものと、1304～1307は二重口縁を有するものの二種である。このうち1309は内外面に丁寧な放射状のヘラ磨きが観察される。

e. 器台形土器 第103図1321～1325は器台形土器で、二重口縁の壺や壺に共通した1321～1323と、そうでない1324、1325がある。前二者は鼓形器台である。このうち1323は最大径約32cmを測る大形のものである。

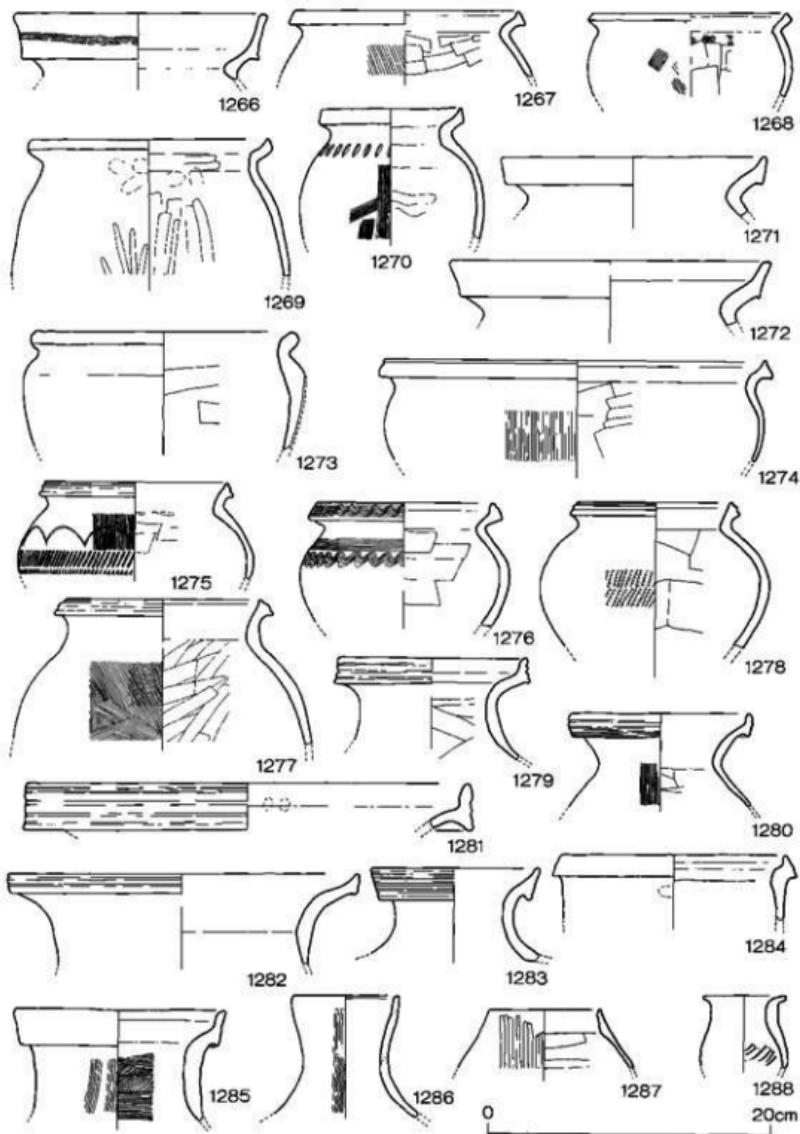
f. 低脚杯 第103図1326～1328は低脚杯として分類した。このうち、1327は、高杯1303、1307、1308の一一群のものに対応するものと思われる。



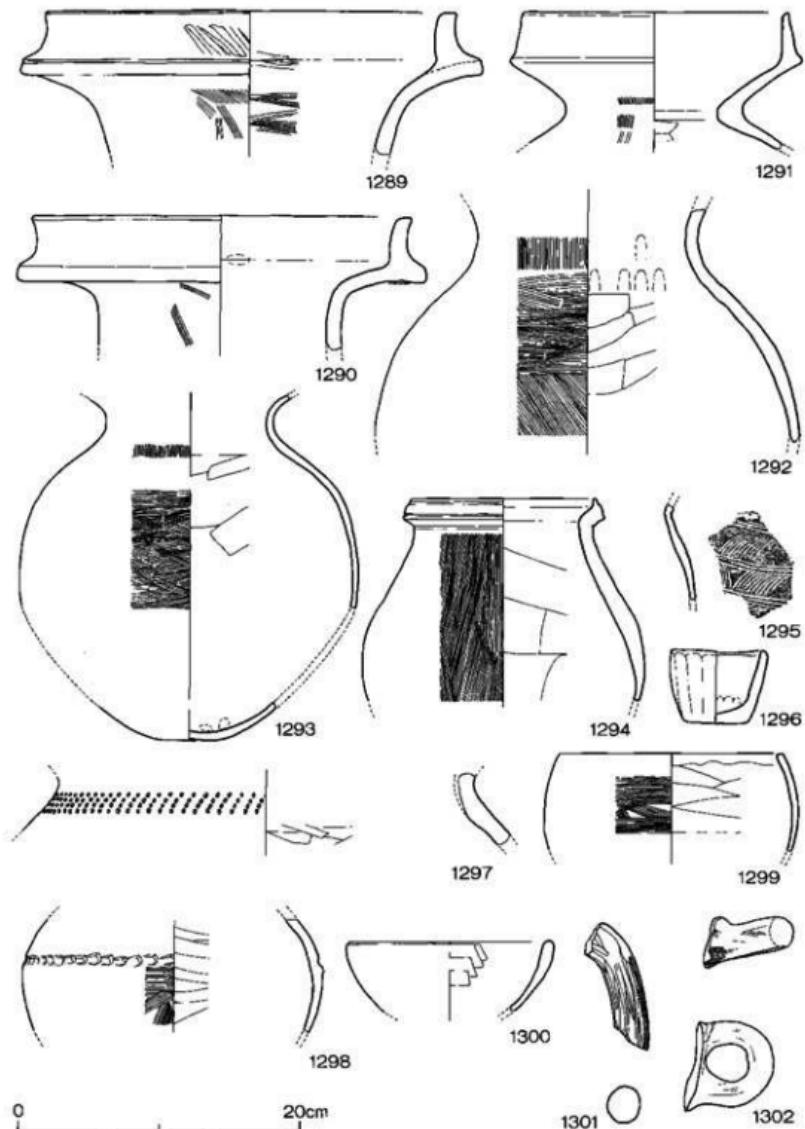
第99図 弥生土器実測図(79)



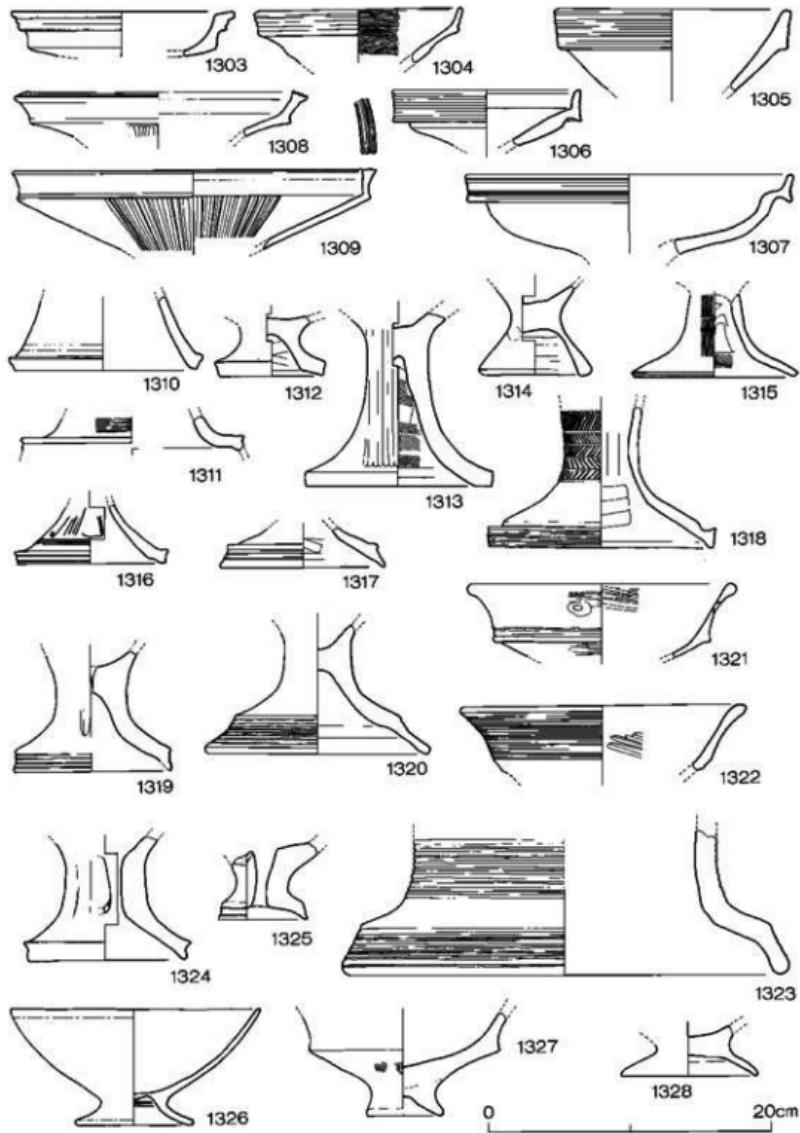
第100図 弥生土器実測図(80)



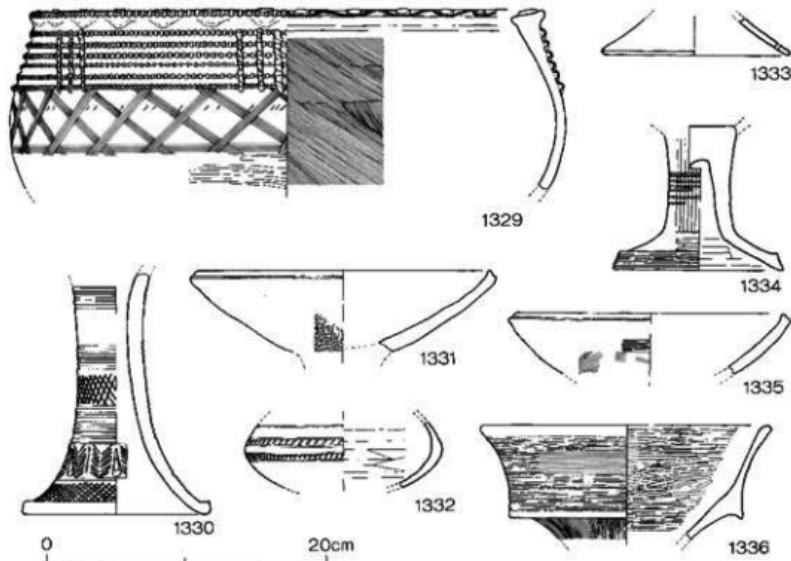
第101図 弥生土器実測図(81)



第102図 弥生土器実測図(82)



第103図 弥生土器実測図(83)



第104図 漆塗り土器実測図

g. 朱塗土器 第104図1330～1332、1334～1336は朱塗土器である。1336が鉢形器台である以外は、いずれも高杯と考えられる。

h. その他 第102図1301、1302は把手。

注1 小田富士雄氏の御教示による。

2 烏根・鳥取河原境の境水道に出上角がある。

3 柳浦俊一『朝酰川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書II』島根県教育委員会 昭和62年3月

4 足立克己「布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書(IV)』島根県教育委員会 昭和58年3月

5 山木 消「山陰」『新版考古学講座上』 昭和44年10月

6 東森市良他「出雲・上坂治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」島根県教育委員会 昭和55年3月

表1 弥生土器一覧表(1)

件名番号	器形	法 量・特 徴	出 土 置	規 格 (N K Y)	件名番号	器形	法 量・特 徴	出 土 置	規 格 (N K Y)
21-1	劍	L1832	弥・中	1757	24-46	劍	L1220 刺突文	弥・中	269
2	+	+	弥・中	1863	47	+	+	30	768
3	+	+	弥・中	945	48	+	+	27	1363
4	+	+	弥・後	1377	49	+	+	34	115
5	+	+		692	50	+	+	16	68
6	+	+	28 刻目突帶	弥・中	1034	51	+	25	374
7	+	+	28 多条比較	弥・中	1905	52	+	19	925
8	+	+	28 *		1169	53	+	20	942
9	+	+	23	弥・中	1273	54	+	20	689
10	+	+	13	弥・中	1260	55	+	19	67
11	+	+	21	弥・後	1400	56	+	18	780
12	+	+	27	弥・中	1342	57	+	31	785
13	+	+	25		1386	58	+	24	小口・SK01 736
14	+	+	14 波狀文	弥・中	1622	59	+	31	105
15	+	+	20 刺突文	弥・後	1724	60	+	25	411
22-16	+	+	16	弥・中	1090	61	+	23	413
17	+	銀衝文		1303	62	+	20	弥・中	1
18	+	+		弥・中	817	63	+	20	121
19	+	+		弥・中	1699	64	+	19	27
20	+	+		弥・中	1085	65	+	19	弥・中 164
21	+	+		弥・後	1234	66	+	22	78
22	+	口1812	弥・中	1332	67	+	23	弥・中 1065	
23	+	+	18 刺突文	弥・中	50	68	+	18	104
24	+	+	15 器高22	弥・中	355	69	+	19	858
25	+	刺突文	弥・中	1461	70	+	19	弥・中 1422	
26	+	口1515	弥・中	214	71	+	19 刺突文	弥・中 306	
27	+	+	25		72	+	20	742	
28	+	+	21 刺突文	弥・中	1821	26-73	+	20	弥・中・具蓋A 230
29	+	+	18 刺突文	弥・中	1108	74	+	18	弥・中 308
30	+	+	33	弥・後	1380	75	+	18	弥・中 829
31	+	+	15	古・前	1694	76	+	28	弥・中 216
32	+	+	16	弥・中	929	77	+	16	弥・中・具蓋A 168
33-33	+	+	22		1255	78	+	18	弥・中 420
34	+	+	27		956	79	+	17	弥・中・具蓋A 392
35	+	+	23	弥・中・SK01	731	80	+	17	弥・中 1464
36	+	+	19 刺突文	弥・中	208	81	+	18	741
37	+	+	20	弥・中	781	82	+	17	弥・中 116
38	+	+	18	弥・中	232	83	+	17	1466
39	+	+	20 刺突文	弥・中	1480	84	+	16	弥・中 118
40	+	+	29	弥・中	57	85	+	17	1474
41	+	+	24	弥・中	369	86	+	18	弥・中 398
42	+	+	20	弥・中	404	87	+	18	弥・中 1071
43	+	+	24	弥・中	1116	27-68	+	20 刺突文	弥・中 1882
44	+	+	22 刺突文	弥・中	960	89	+	16	弥・中 1487
45	+	+	21	弥・中	739	90	+	19	弥・中・具蓋B 1500

表2 弥生土器一覧表(2)

種類番号	器形	法 畜・特 徴	出 土 帯	施 考 (NKY)	種類番号	器 形	法 畜・特 徴	出 土 帯	施 考 (NKY)
91	甌	口徑21		1007	136	甌	口徑12	弥・後	1396
92	*	* 21	弥・中	1153	137	*	* 15	弥・中	244
93	*	* 18		1646	138	*	* 12	弥・中	1822
94	*	* 14 刺突文	弥・中	24	139	*	* 22	弥・中	376
95	*	* 14	弥・中	931	140	*	* 20	弥・後	1369
96	*	* 15	弥・中	96	141	*	* 20	弥・中	172
97	*	* 16	弥・中	402	142	*	* 17	弥・後	292
98	*	* 15		978	143	*	* 18	弥・後	362
99	*	* 19	弥・中	255					
100	*	* 14	弥・中	69	30-144	*	* 24	弥中・貝層A	276
101	*	* 16 刺突文	弥・中	365	145	*	* 19	弥・中	1671
102	*	* 15	弥・中	1088	146	*	* 22	弥・中	1251
103	*	* 15	弥中・貝層A	162	147	*	* 18 刺突文	弥中・貝層	1049
104	*	* 15	弥・後	293	148	*	* 20	弥・中	184
105	*	* 16		963	149	*	* 19	弥・後	1626
106	*	* 16	弥・中	1081	150	*	* 20	弥・中	1522
107	*	* 21		661	151	*	* 29	弥・中	81
					152	*	* 25	弥・中	423
28-108	*	* 36 刺突文	弥・中	1600	153	*	* 26	弥中・貝層A	254
109	*	* 16 *	弥・中	75	154	*	* 28	弥・中	1092
110	*	* 14	弥・中	282	155	*	* 21	弥・後	1393
111	*	* 27	弥・中	1018	156	*	* 21	弥・中	1451
112	*	* 24	弥・後	1887	157	*	* 22	弥中・貝層B	1494
113	*	* 23	弥・中	697	158	*	* 20	弥・中	262
114	*	* 21 刺突文	弥・中	1520	31-159	*	* 28	弥・中	788
115	*	* 21	弥・後	1378	160	*	* 13	弥・中	114
116	*	* 24	弥中・貝層A	153	161	*	* 27	弥・中	225
117	*	* 22	弥・中	838	162	*	* 23	弥・後	54
118	*	* 21	弥・中	71	163	*	* 20	弥・中	1866
119	*	* 26	弥・中	231	164	*	* 21	弥中・貝層A	161
120	*	* 24	弥・中	1135	165	*	* 20 刺突文	弥・中	1074
					166	*	* 20 *	弥・中	274
29-121	*	* 18 刺突文	弥・中	952	167	*	* 20	弥・中	165
122	*	* 16		1009	168	*	* 17	弥中・貝層A	288
123	*	* 12	弥・後	1310					
124	*	* 18		1016	32-169	*		刺突文	
125	*	* 17	弥・中	1026	170	*	口徑30	弥・中	728
126	*	* 15	弥・中	1024	171	*	* 13	弥・中	108
127	*	* 15	弥・中	273	172	*	* 16	弥・中	430
128	*	* 17	弥・中	832	173	*	* 15	弥・中	1429
129	*	* 16	弥・中	419	174	*	* 20	弥中・貝層A	152
130	*	* 16	弥・中	122	175	*	* 22	弥・中	23
131	*	* 18	弥・中	275	176	*	* 16	弥・中	394
132	*	* 14	弥・中	76	177	*	* 19	弥・中	1075
133	*	* 15 刺突文	弥・中	112	178	*	* 27	弥・中	70
134	*	* 19	弥・中	954	179	*	* 22	弥・中	410
135	*	* 20	弥・中	1069	180	*	* 21	弥・中	1819

表3 弥生土器一覽表(3)

器物番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)	器物番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
33-181	更	口徑20			346	更	口徑16	器・中	219
182	*	* 20	赤・中	401	36-227	*	* 16 口徑刻目	赤・中	77
183	*				228	*	* 20 *	赤・中、貝層B	1506
184	*	口徑21	赤・中	32	229	*	* 11 *	赤・中	1040
185	*	* 16	赤・後	1384	230	*	* 19 *	赤・後	803
186	*	* 21		1853	231	*	* 18 *	赤・中	868
187	*	* 22	赤・中	36	232	*	* 13 刻文	赤・中	1939
188	*	* 21	赤・中	220	233	*	* 21 口徑刻目	赤・中	671
189	*	* 19	赤・中	712	234	*	* 26 *		1008
190	*	* 20 刻文		677	235	*	* 18 *	赤・中	177
191	*	* 21	赤・中	1083	236	*	* 19 *	赤・中、貝層B	1505
192	*	* 22	赤・中	928	237	*	* 16 *	赤・中、貝層	1045
193	*	* 19	赤・中	111	238	*	* 15 刻文	赤・中	307
194	*	刻文	赤・後	1197	239	*	* 19 刻文	赤・中	259
34-195	*	口徑17	赤・中	92	240	*	* 24 *	赤・中	74
196	*	* 16	赤・中	437	241	*	* 22 口徑刻目	赤・中	187
197	*	* 17	赤・中	759	242	*	* 23 *	赤・中	1825
198	*	* 17	赤中・貝層A	156	243	*	* 27 *	赤・中	1243
199	*	* 19	赤・後	6	244	*	* 22 *	赤・中	417
200	*	* 17	赤・中	95	37-245	*	* 14 刻文	赤・中	136+159
201	*	* 19	赤・中	79	246	*	* 23		834
202	*	* 18	赤・中	169	247	*	* 19	赤・中	1575
203	*	* 12		888	248	*	* 27 刻文	赤・中	941
204	*	* 16	赤・中	41	249	*	* 23	赤・中	206
205	*	* 30		1001	250	*	* 24	赤・中	175
206	*	* 19	赤・中	213	251	*	* 23	赤・中	158
207	*	* 17	赤・中	815	252	*	* 23	赤・中	1186
208	*	* 28 刻文	赤・中	382	253	*	* 22	赤・中	1331
209	*	* 18	赤・中	783	254	*	* 18	赤・中	35
210	*	* 18		89	255	*	* 21	赤・中	289
211	*	* 17	赤中・貝層B	1490	256	*	* 16	赤・中	1032
212	*	* 22	赤・中	408	257	*	* 19	赤・中	1207
213	*	* 24	赤・後	296	258	*	* 19	赤中・SD01	802
259	*				259	*	* 18	赤・中	170
260	*				260	*	* 16	赤・後	1315
35-214	*	* 28	赤中・SK01	735	38-261	*	* 15 口徑沈線	赤・中	1423
215	*	* 27	赤・後	330	262	*	* 16 *		1000
216	*	* 22	赤・中	237	263	*	* 14 *	赤・中	1070
217	*	* 22 刻文	赤・中	284	264	*	* 18 *	赤・後	912
218	*	* 25	赤・中	1778	265	*	* 14 *	赤・中	1067
219	*	* 20	赤・後	1362	266	*	* 16 *	赤・中	8613
220	*	* 24 刻文	赤・中	1812	267	*	* 15 *	赤・後	98
221	*	* 22	赤・後	320	268	*	* 17 *	赤・中	200
222	*	* 16	赤・中	1587	269	*	* 16 *	赤・後	1361
223	*	* 17 刻文	赤・中	242	270	*	* 17 *	赤・中	399
224	*	* 18	赤中・貝層A	173					
225	*	* 20	赤・中	1068					

表4 弥生土器一覧表(4)

所蔵番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)	所蔵番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
271	甌	口径17 口唇比縫	弥・中	1959	41-316	甌	口径27 口唇比縫	弥・後	333
272	+	φ 27 +		1149	317	+	φ 27 +	弥・中	298
273	+	φ 18 +		166	318	+	φ 19 +	弥・後	1374
274	+	φ 10 +	1	1601	319	+	φ 18 +	弥・中	1192
275	+	φ 23 +	弥・中	1921	320	+	φ 24 +	弥・中	248
276	+	φ 16 刺突文	弥・中	60	321	+	φ 15 +	弥・中	1110
277	+	φ 16 口唇比縫	弥・中	1418	322	+	φ 15 +	弥・中	1672
278	+	φ 18 +	弥・後	1285	323	+	φ 22 +	弥・中	5
279	+	φ 15 +	1	1239	324	+	φ 14 +	弥・中	1427
280	+	φ 17 +	弥・後	1224	325	+	φ 14 +	弥・中	1325
281	+	φ 29 +	1	1257	326	+	φ 25 +	弥・中	229
					327	+	φ 19 +	弥・中・S2017	1666
39-282	+	φ 25 口唇比縫	弥・中	283	328	+	φ 21 +	弥・中	1877
283	+	φ 24 +	1	799	329	+	φ 24 +	弥・中	784
284	+	φ 23 +	弥・中	1597	330	+	φ 17 刺突文	弥・中	1596
285	+	φ 17 +	1	128	331	+	φ 18 口唇比縫	弥・中	966
286	+	φ 16 +	弥・後	1307	332	+	φ 17 +	弥・中	1786
287	+	φ 18 +	弥・中	1435	333	+	φ 19 +	弥・中	1424
288	+	φ 19 +	弥・中	1249					
289	+	φ 21 +	弥・中	1327	43-334	+	底部環 6 立穿孔	弥・中	669
290	+	φ 18 +	1	350	335	+	φ 6 +	弥・後	30
291	+	φ 15 +	弥・後	1388	336	+	φ 6 +	弥・中	375
292	+	φ 16 +	弥・後	1399	337	+	φ 6 +	弥・中・其層A	218
293	+	φ 13 +	弥・後	1382	338	+	φ 6 +	弥・中	85
294	+	φ 15 +	弥・中	702	339	+	φ 5 +	弥・中	14
295	+	φ 19 +	弥・中	1264	340	+	φ 6 +	弥・後	1219
296	+	φ 20 +	弥・後	1938	341	+	φ 8 +		839
297	+	φ 20 +	弥・中	1033	342	+	φ 5 +	弥・中	1706
					343	+	φ +		
40-298	+	φ 13	弥・中	1037	344	+	φ 6 +	弥・後	1364
299	+	φ 19	弥・後	1163	345	+	φ 5 +		357
300	+	φ 18 口唇比縫	弥・中	391	346	+	φ 5 +	弥・中	1962
301	+	φ 13 刺突文	弥・後	1927					
302	+	φ 19 口唇比縫	弥・後	1390	43-347	+	φ 7 +	弥・中	1947
303	+	φ 16 +	弥・中	1774	348	+	φ 5 +	弥・後	1299
304	+	φ 16 +	弥・中	1653	349	+	φ 8 +	弥・中	1618
305	+	φ 16 +	弥・中	867	350	+	φ 5 +	弥・中	18
306	+	φ 12 +	弥・中	1241	351	+	φ 6 +	弥・中	1892
307	+	φ 19 +	弥・後	1410	352	+		弥・中	962
308	+	φ 14 +	弥・中	1261	353	+	底部環 7	弥・中	1584
309	+	φ 14 +	弥・後	1303	354	+	φ 6	弥・中	19
310	+	φ 14 +	弥後・貝層E	1565	355	+	φ 6	弥・後	337
311	+	φ 18 +	弥後・貝層E	1569	356	+	φ 5		1322
312	+	φ 27 口唇比縫	弥・後	322	357	+	φ 6	弥・中	359
313	+	φ 26 +	弥・後	326	358	+	φ 7	弥・後	1796
314	+	φ 15 +	弥・中	1788	359	+	φ 7	弥・中	1791
315	+	φ 23 +	弥・後	318	360	+	φ 6	弥・中	129

表5 弥生土器一覽表(5)

件目番号	形態	法量・特徴	出土層	箇号	件目番号	形態	法量・特徴	出土層	箇号
361	変 近部径 8	弥・中	1837	45-406	変	口径19 頭部突唇	弥・中	45	
362	△ △ 6	弥・後	1229	407	△	△ 28 △	弥・後	1349	
363	△ △ 7	弥・中	1875	408	△	△ 24 △	弥・中	46	
364	△ △ 6	弥・後	338	409	△	△ 24 △	弥・中	795	
365	△ △ 6	弥・後	1668	410	△	△ 18 △	弥・中	961	
366	△ △ 6 底穿孔	弥・後	386	46-411	△	△ 25 頭部突唇	弥・中	1516	
367	△ △ 6		1700	412	△	△ 28 △	弥・中	709	
368	△ △ 6		1802	413	△	△ 22 △	弥・中	253	
369	△ △ 7		1800	414	△	△ 25 △	弥・後	1397	
370	△ △ 5		1287	415	△	△ 24 △	弥・後	1624	
371	△ △ 7	弥・中	792	416	△	△ 19 △	弥・中 S Z 014	1921	
372	△ △ 7	弥・後	1339	417	△	△ 21 △	弥・後	1381	
373	△ △ 7	弥・中	1866	418	△	△ 17 △	弥・後	1349	
374	△ △ 9 近部径	弥・中	1940	419	△	△ 20 △	弥・中	1076	
375	△ △ 6	弥・後	1628	420	△	△ 21 △		1004	
376	△ △ 7	弥・後	1469	421	△	△ 19 △	弥・中	717	
377	△ △ 8	弥・後	328	422	△	△ 24 △	弥・後	1371	
378	△ △ 8	弥・中	1901	47-423	△	△ 33 頭部突唇	弥・中	31+198	
379	△ △ 10	弥・後	1929	424	△	△ 24 △	弥・中	1948	
380	△ △	弥・中	1603	425	△	△ 21 △	弥・中	1881	
381	△ △	弥・中	302	426	△	△ 26 △	弥・中	1481	
382	△ △ 7	弥・中 S Z 016	1906	427	△	△ 20 △	弥・中	97	
44-383	変			96	428	△	△ 21 △	弥・中	43
384	△ △ 17	弥・後	1735	429	△	△ 19 △	弥・中	1915	
385	△ △ 16	弥・後	1392	48-430	△	△ 22 頭部突唇	弥・中、貝層B	1514	
386	△ △ 17	弥・中	1814	431	△	△ 26 △	弥・中	1134	
387	△ △ 31 頭部突唇	弥・中	1831	432	△	△ 22 △	弥・後	1321	
388	△ △ 27 △	弥・中	1902	433	△	△ 22 △	弥・中	1425	
389	△ △ 19 △	弥・後	332	434	△	△ 21 △	弥・中	263	
390	△ △ 32 △	弥・後	4	435	△	△ 19 △	弥・後	(58+3)	
391	△ △ 32 △	弥・後	1385	436	△	△ 21 △	弥・後	1221	
392	△ △ 28 △	弥・中	1183	437	△	△ 19 △	弥・中	725	
393	△ △ 18 △	弥・中	90	438	△	△ 20 △	弥・中	1573	
394	△ △ 18 △	弥・後	1208	439	△	△ 25 △	弥・中	1954	
395	△ △ 18 △	弥・中	667	440	△	底部径 6 底穿孔	弥・中	1707	
45-396	△ △ 24 頭部突唇	弥・中	797	441	△	△ 8 △		665	
397	△ △ 21 △	弥・中	329	442	△	△ 8 △	弥・中、貝層	1060	
398	△ △ 17 △	弥・中	73	443	△	△ 7 △	弥・中	776	
399	△ △ 24 △	弥・後	370	444	△	△ 5 △	弥・中、貝層A	180	
400	△ △ 22 △	弥・中	72	445	△	△ 7 △	弥・後	1318	
401	△ △ 21 △	弥・後	341	49-446	△	△ 28 頭部突唇	弥・後	51	
402	△ △ 25 △	弥・中	1878	447	△	△ 26 △	弥・中	1404	
403	△ △ 26 △	弥・中	1456	448	△	△ 33 貼付文	弥・中	1426	
404	△ △ 33 △	弥・中	1421	449	△	△ 30 口唇刻凹	弥・中	895	
405	△ △ 18 △	弥・中	52	450	△	△ 24 △	弥・後	1322	

表6 弥生土器一覧表(6)

通巻番号	器形	法量・特徴	出土場所	備考(NKY)	通巻番号	器形	法量・特徴	出土場所	備考(NKY)
49—451	盃	L1往27 口唇刻目	弥・中	1473	51—496	盃	口延9	弥・中	816
452	+	* 28 *	弥・後	1635	497	+	* 12 口唇刻目	弥・中	1006
453	+	* 30 貼付文	弥・後	1182	498	+	* 11	弥・中	1462
454	+	* 34 *	弥・中	1645	499	+	* 10	弥・中	1560
455	+	格子文	弥・中	1294	500	+	* 14 口唇沈線	弥・中	1598
456	+	波状沈線文	弥・中	65					
457	+		弥・中	124	52—501	+	* 11	弥・中	314
458	+	渦巻状貼付文	弥・後	1705	502	+	* 16 口唇刻目	弥中・貝層	1046
459	+	斜格子文	弥・中	703	503	+	* 15 *	弥中・貝層B	1507
					504	+	* 13 *		256
50—460	+	L1往12 口唇沈線	弥・後	1218	505	+	* 18 *	弥・後	1324
461	+	* 16 *	弥・中	1259	506	+	* 16	弥・中	412
462	+	* 14 貼付文	弥・後	327	507	+	* 24 斜格子文	弥・中	720
463	+	* 9 口唇沈線	弥・中	1270	508	+	* 19 口唇刻目	弥・中	34
464	+	* 16 斜格子文	弥・中	1430	509	+	* 14 *	弥・中	323
465	+	* 13 口唇沈線		345	510	+	* 21 *	弥中・SK01	729
466	+	* 17 *	弥・中	1434	511	+	* 15 口唇沈線	弥・中	710
467	+	* 21 *	弥・中	1419	512	+	* 29 斜格子文	弥・中	1537
468	+	* 25 *	弥・後	1206	513	+	* 28 口唇刻目	弥・中	760
469	+	* 17 頭部突起	弥・後	1623	514	+	* 17 *	弥・中	132
470	+	* 16 *	弥・後	1237	515	+	* 18 *		662
471	+	* 26 *	弥・中	1962	516	+	* 19 *		937
472	+	* 21 *	弥・後	1639	517	+	* 20 頭部突起		948
473	+	* 16 口唇突起	弥・中	1036	518	+	* 40 *	弥・中	1729
474	+	* 17 *	弥・中	1484	519	+	* 25 *	弥・中	1019
475	+	* 20 *	弥・中	1335					
476	+	* 21 貼付文	弥・中	688	53—520	+	* 15 斜格子文	弥・中	904
477	+	* 11 L1脣刻目	弥・中	1634	521	+	* 15	弥・中	163
478	+	* 18 頭部突起	弥・中	1403	522	+	* 15	弥・後	1309
479	+	* 18 *	弥・後	1156	523	+	* 20		1006
480	+	* 26 *	弥・中	699	524	+	* 12	弥・中	251
					525	+	* 12	弥・中	266
51—481	+	* 9 頭部穿孔	弥・中	80	526	+	* 15	弥・中	766
482	+	* 10 *		1856	527	+	* 15	弥・中	366
483	+	* 12 沈線文	弥中・貝層A	287	528	+	* 18	弥・中	756
484	+	* 16 斜格子文	弥・中	1720	529	+	* 14	弥・中	183
485	+	* 29 *	弥・中	1582	530	+	* 25	弥・中	1077
486	+	* 22 口唇沈線		1274	531	+	* 18	弥・中	133
487	+	* 21 *	弥・中	1054	532	+	* 15	弥・中	189
488	+	* 17 *	弥・中	1066	533	+	* 16	弥・中	221
489	+	* 21 斜格子文	弥・中	1784+1785	534	+	* 21 斜格子文	吉・前	1660
490	+	* 14	弥・後	1383	535	+	* 16	弥・中	1817
491	+	* 11	弥・中	1104	536	+	口唇刻目		
492	+	* 12 刺突文	弥・中	1897	537	+	口唇刻目	弥・中	1306
493	+	* 12 *	弥・中	1903	538	+	* 24 斜格子文	弥・中	1292
494	+	* 9	弥・中	361	539	+	* 21 口唇刻目		999
495	+	* 10 口唇刻目	弥・中	1022	540	+	* 34 口唇沈線		1143

表7 弥生土器一覽表(7)

件目番号	器形	法量・特徴	出土層	備考 (NKY)	件目番号	器形	法量・特徴	出土層	備考 (NKY)	
54 541	豆	口徑10 高さ29	弥・中		1346	56-586	豆	口徑19 口唇沈線	弥・中	1718
542	*	* 12	弥・後		1401	57-587	*	* 28 LI唇沈線	弥・中	127
543	*	* 11 刺突文	弥・後		1740	588	*	* 16 *	弥・後	1632
544	*	* 16 *	弥・中		1862	589	*	LIIE33 口唇沈線	弥・中	1606
545	*	* 16	弥・中		696	590	*	* 26 *	弥・中	1276
546	*	* 16	弥・中		1448	591	*	* 21 *	弥・中	1923
547	*	* 16	弥・中		281	592	*	* 22 *	弥・中	825
548	*				593	*	*		弥・中	1529
549	*	口徑18	弥・中	1301	594	*	* 29 *		弥・中	772
550	*	* 14	弥・中	1792	595	*	* 30 *	弥・中	179	
551	*	* 15 刺突文	弥・中	1829	596	*	* 27 *	弥・中	1438	
552	*	* 17		279	597	*	* 26 *	弥・中 SD01	863	
553	*	* 17	弥・中	290	598	*	* 18 脊部文様	弥・中	1445	
554	*	* 24	弥・中	1073	58-599	*	* 50 刺突文様	弥・中	1971-716	
555	*	* 18		117	600	*	* 44 *	弥・中	1873	
556	*	* 17 刺格子文	弥・中	1961	601	*	* 32 *	弥・中	823	
557	*	* 16 *	弥・中	847	602	*	* 36 刺格子文	弥・後	1171	
558	*	* 13 刺目突痕	弥・中	1486	603	*	* 7 *	弥・中	1041	
559	*	* 23 *	弥・後	1245	604	*	* 34 *	弥・中	1203	
560	*	* 30 *	弥・中 肩轍B	1501	605	*	* 28 波状沈線	弥・中	1968	
561	*	* 19 *	弥・中	1159	606	*	* 30 刺格子文	弥・後	1633	
562	*	* 19 *		1809	607	*	* 30 *	弥・中	791	
563	*	* 25 *	弥・後	39	608	*	* 28 *	弥・中	1650	
564	*	* 23 *	弥・後	1571	609	*	* 32 口唇斜面	弥・中	1428	
565	*	* 14 跡付文	弥・中	1654	610	*	* 26 *	弥・中	1437	
566	*	* 16 *	弥・中	119	611	*	* 26 刺格子文	弥・中	1992	
567	*	* 31 突帶	弥・中	53	59-612	*	* 16	弥・中 肩轍A	155	
568	*	* 23 *	弥・後	368	613	*	* 17	弥・中 肩轍A	280	
569	*	* 14 刺目突痕	弥・中	240	614	*	* 11 器底16	弥・中	1787	
56-	570	*	* 24 脊部文様	弥・中	1526	615	*	* 16	弥・中	303
571	*	* 20 刺目突痕	弥・中	265+25	616	*	* 19	弥・中	400	
572	*	* 24 *	弥・中	235	617	*	* 22 脊部文様	弥・中	245	
573	*	* 18 *	弥・中	1593	618	*	* 17 *	弥・中	694-771	
574	*	* 16 *	弥・中	1956	619	*	* 21 *	弥・中	695	
575	*	* 12 *	弥・中	120	620	*	* 23 *	弥・後	1741	
576	*	* 16 刺格子文		1356	621	*	* 22 *	弥・中	1576	
577	*	* 24 内曲沈線	弥・後	1228	622	*	* 26 LI唇沈線	弥・中	855	
578	*	* 23 刺格子文	弥・中	826	623	*	* 24 *	弥・後	351	
579	*	* 22 LI唇沈線	弥・中	794	624	*	* 23 *	弥・中	1477	
580	*	* 27 *	弥・中	1184	625	*	* 32 *	弥・後	915	
581	*	* 26 口唇斜面	弥・中	1799	626	*	* 17 *	弥・中	1638	
582	*	* 29 LI唇沈線	弥・中	1820	627	*	* 23 *	弥・後	1391	
583	*	* 26 刺目突痕	弥・中	1524	628	*	* 34 *	弥・後	342	
584	*	* 34 LI唇沈線	古・前	1629	629	*	* 36	弥・後	1742	
585	*	* 29 *		1542	630	*	* 29 刺格子文	弥・中	812	

表8 弥生土器一覽表(8)

件名番号	器形	法量・特徴	出土層	備考 (NKY)	件名番号	器形	法量・特徴	出土層	備考 (NKY)
收	口徑	斜格子文	收	口徑	斜格子文	收	口徑	斜格子文	收
60-631	蓋	口徑27	弥・中	306	62-678	收	口徑32	斜格子文	1141
632	*	* 16 頭部穿孔	弥・中	1945	677	*	* 28	*	弥・後
633	*		弥・中	675	678	*	* 23	*	弥・中
634	*	LJ24	弥・後	1257	679	*	* 32	*	
635	*	* 25 斜格子文	弥・中	21	680	*	* 22	*	弥・中
636	*	* 29	弥・中	1472	681	*	* 31	*	弥・中
637	*	* 35	弥・後	1252	682	*	* 21	*	弥・中
638	*	* 20		1229	63-683	*	* 32	斜格子文	425
639	*	* 25 斜格子文	弥・後	1172	684	*	* 27	*	弥・中
640	*	* 23 *	弥・中	802	685	*	* 30	*	弥・中
641	*	* 18 *	弥・中・貝層A	228	686	*	* 29	*	弥・中
642	*	* 26 *	弥・後	1254	687	*	* 29	*	弥・中
643	*	*			688	*	* 26	*	弥・中
644	*	* 28 *	弥・中	403	689	*	* 32	*	1511
645	*	* 27 *	弥・中	82	690	*	* 23	*	219
61-646	*	* 17	弥・中	245	691	*	* 23	*	弥・中
647	*	* 24 斜格子文	弥・中	934	692	*	* 23	*	弥・中
648	*	* 22 *	弥・中・貝層B	1303	693	*	* 27	*	705
649	*	* 21 山形紋	弥・中	1884	694	*	* 23 斜格子文	*	1366
650	*	* 20	弥・中・SK01	730	695	*	* 27	*	44
651	*	* 20	弥・中	977	64-696	*	* 48 史前文	弥・中・SK014	584
652	*	* 28 頭部突起	弥・中	110	597	*	* 29	弥・中・貝層B	1492
653	*	* 28	弥・中	773	598	*	* 20	弥・中	774
654	*	* 16	弥・中	211	699	*	* 21	弥・後	1747
655	*	* 18	弥・中	37	700	*	* 30	弥・中	1195
656	*	* 15	弥・中	260	701	*	* 29	弥・中	762
657	*	* 26	弥・中	1429	702	*	* 30	弥・中・SK01	738
658	*	* 22 斜格子文	弥・中・貝層	1047	65-703	*	* 23	弥・中	388
659	*	* 22	弥・中	1267	704	*	* 25	弥・中	381
660	*	* 19	弥・中	857	705	*	* 29	弥・中	727
661	*	* 16	弥・中	1453	706	*	* 24	弥・後	9
662	*	* 21		1003	707	*	* 26 突唇文	弥・中	1976
663	*				708	*	* 21	弥・中	354
664	*	口徑24	弥・中	252	709	*	* 26	弥・中	22
665	*	* 38	弥・中	663	710	*	* 28	弥・中	1960
666	*	* 20	弥・後	1227	711	*	* 24	弥・中	264
667	*	* 14 頭部突起	弥・中	241	712	*	* 27	弥・中	305
668	*	* 14	弥・中	770	713	*	* 20	弥・中	348
62-669	*	* 21 斜格子文	弥・中	93	714	*	* 29	弥・中	1719
670	*	* 24 *	弥・中	723	715	*	* 21	弥・後	1350
671	*	* 22 *		87	716	*	* 15	弥・中	347
672	*	* 25 *	弥・中	943	717	*	* 21	弥・中	1680
673	*	* 30 *	弥・中	726	718	*	* 22	弥・中	1044
674	*	* 21 *	弥・中・貝層A	222	719	*	* 17	弥・中	1683
675	*	* 24 *	弥・中・貝層B	1510	66-720	*	* 20	弥・中	261

表9 陈生土器一覽表(9)

器物番号	器形	法 量・特 故	出 土 層	國 考 (NKY)	編目番号	器形	法 量・特 故	出 土 層	國 考 (NKY)
66- 721	支	口(足)27	弥・中	1452	69- 766	支	腹部押捺尖鋒	弥・中	294
722	*	* 27	弥・中	715	767	*	*	弥・中	840
723	*	* 29	弥中・貝層A	271	768	*	*	弥・中	1519
724	*	* 22	弥・中	353	70- 769	*	波状多条沈線	弥中・貝層A	249
725	*	* 30	弥・後	317	770	*	*	弥・中	1832
726	*	* 24	弥・中	1790	771	*	多条沈線	弥・中	160
727	*	* 31	弥・中	1609	71- 772	*	波状多条沈線文	弥・後	1675
728	*	* 23	弥・中	1467	773	*	*	弥・中	1475
729	*	* 25	弥・後	1225	774	*	*	弥・中	1084
730	*	* 26	弥・中	714	775	*	*	弥・中	106
731	*	* 27	弥・中	1893	776	*	*	弥・中	1979
67- 732	*	* 17	弥・後	1226	777	*	底部條11	弥・中	1444
733	*	* 31	弥・中	787+674	778	*	波状多条沈線	弥・中	1838
734	*	* 37	弥・中	1196	72- 779	*	多条沈線	弥・中	1840
735	*	* 45	弥・中	1607	780	*	沈線文・點付文	弥・中	1122
736	*	* 26	弥・中	1768	781	*	?	弥・中	1823
737	*	* 23 貝付文	弥・中	1846	782	*	腹部刻目突唇	弥・中	1330
738	*	* 24	弥・後	29	783	*	*	弥・中	1485
739	*	* 21	弥・中	871- 872	784	*	斜格子条模	弥・中	1631
740	*	* 22	弥・中	711	785	*	斜格子文	弥・中	1174
741	*	* 22		1688	786	*	波状文	弥・中	191
68- 742	*	* 14 半心円文	弥・中	1951	787	*	*	弥中・貝層	1061
743	*	* 27	弥・中	1180	788	*	*	弥中・貝層A	300
744	*	* 17	弥・中	393	789	*	橫格文		949
745	*	* 19		902	790	*	+	弥・中	1772
746	*	* 29	弥・中	721	791	*	橫格文・刺突文	弥・中	424
747	*	* 13 固高22 網狀穿孔	弥・中	722	792	*	条幅文・	弥・中	800
748	*	* 11 + 22	弥・中	352	793	*	*	弥・後	1191
749	*	* 17	弥中・S D 01	865	73- 794	*	横杉多条沈線文	弥・中	1978
750	*	* 19	弥・中	380	795	*	斜格子多条沈線文	弥・中	1900
751	*	* 30 拍捺突唇	弥・中	1835	796	*	*	弥・中	1975
752	*	* 26	弥・中	939	797	*	*	弥・中	33
753	*	* 15	弥・後	1387	798	*	*		1854
754	*	* 18	弥・中	1685	74- 799	*	斜格子多条沈線文	弥・中	331
755	*	* 20	弥・中	64	800	*	半同心円文		1785+1784
756	*	* 26	弥・中	670	801	*	刺突文	弥・中	1805
69- 757	*	頸部多条突唇	弥・中	372	802	*		弥・後	1667
758	*		弥中・S Z 017	1676	803	*	刺突文	弥・中	421
759	*	頸部多条突唇	弥・後	1665	804	*	刺突文・沈線	弥・中	1730
760	*	頸部多条刻目突唇	弥・後	1609	805	*	横格文	弥・後	1224
761	*	*	弥中・貝層	1058	75- 806	*	底部條10 刺突文	弥・中	1701
762	*	*	弥・中	301	807	*	*	弥・中	1830
763	*	*		414	808	*	*	弥・後	1212
764	*		弥・後	1769	809	*	*	弥・後	1304
765	*		弥・後	1644	76- 810	*	刺突文	弥・中	1389

表10 弥生土器一覧表(10)

器種番号	器形	法 直・特 故	出 土 層	備 考 (NKY)	体高番号	器 形	法 直・特 故	出 土 層	備 考 (NKY)
76-811	亞	刺突文	弥・後	1663	79-856	甕	直部洋 6	弥・中	319
812	*	底面径11 *	弥・中	1759	837	*	*	弥・後	1162
77-813	*	*	11 刺突文	弥・中	1848	858	*	*	197
814	*	*	7	弥・中	1946	80-859	*	*	321
815	*	*	6	弥・中	88	860	*	*	336
816	*	*	7	弥・中	1281	861	*	*	196
817	*	*	8	弥・中	1298	862	*	*	1306
818	*	*	20		1057	863	*	*	弥・中・貝層A 185
819	*	*	6	弥・中	1017	864	*	*	弥・中 204
820	*	*	7		779	865	*	*	弥・中・貝層A 195
821	*	*	6	弥・中	1015	866	*	*	344
822	*	*	5	弥・中	1446	867	*	*	弥・中 239
823	*	*			107	868	*	*	弥・中 1329
78-824	*	底面径13	弥・中	1824	869	*	*	弥・中・貝層A 181	
825	*	*	7	弥・中	1953	870	*	*	弥・中・貝層A 168
826	*	*	10	弥・中	233	871	*	*	451
827	*	*	7	弥・中	285	872	*	*	20
828	*	*	7	弥・中	384	873	*	*	777
829	*	*	7	弥・中	286	874	*	*	207
830	*	*	15	弥・中	1859	875	*	*	1345
831	*	*	9	弥・中	416	876	*	*	42
832	*	*	9	弥・中	304	877	*	*	316
833	*	*	14	弥・中	1861	878	*	*	弥・中 1521
834	*	*	6	弥・中	209	81-879	甕	*	215
79-835	甕	*	7	弥・中	1090	880	*	*	弥・中 1828
836	*	*	8	弥・中	778	881	*	*	309
837	*	*	5	弥・後	56	882	*	*	弥・中 193
838	*	*	6	弥・中	849	883	*	*	弥・中 335
839	*	*	7	弥・後	1605	884	*	*	弥・中 130
840	*	*	8	弥・中	747	885	*	*	880
841	*	*	7	弥・中	1277	886	*	*	270
842	*	*	8	弥・中	1328	887	*	*	1313
843	*	*	6	弥・中	247	888	*	*	379
844	*	*	7	弥・中	35	889	*	*	334
845	*	*	6	弥・後	1202	890	*	*	315
846	*	*	10	弥・中	1864	891	*	*	1067
847	*	*	8	弥・後	1382	892	*	*	1311
848	*	*	9	弥・中	1282	893	*	*	弥・中・S Koi 733
849	*	*	13	弥・中	1279	894	*	*	708
850	*	*	9	弥・後	1296	895	*	*	203
851	*	*	9	弥・後	1314	896	*	*	202
852	*	*	7	弥・中	746	897	*	*	1443
853	*	*	7	弥・中	944	898	*	*	1523
854	*	*	10	弥・中	1254	899	*	*	704
855	*	*	5	弥・中・貝層A	199	82-900	*	*	1810

表11 弥生土器一覽表(11)

件次番号	器形	法量・特徴	出土層	器形 (NKY)	持因番号	器形	法量・特徴	出土層	器形 (NKY)
82-901	甕	底部鉗7	赤・中	1813	84-946 黄 or 灰	直筒口13.6 14	赤・中	930	
902	*	* 12	赤・中	1326	947	壺	口径7	1997	
903	*	* 11		790	948	*	* 8	赤・中	1580
904	*	* 8	赤・後	339	949	*	* 10 腹高14	赤・中	272
905	*	* 8	赤・後	1343	950	*	火照35.0		1803
906	*	* 8	赤・中	257	951	*	口径11 口縁穿孔	赤中・A層B	1499
907	*	* 9	赤・中	194	952	*	* 10	赤・中	1717
908	*	* 6	赤・中	364	953	*	* 14 強部穿孔	赤・中	1969
909	*	* 6	赤・後	1365	954	*	* 13	赤・中	1928
910	*	* 6	赤・中	40	955	*	* 9	赤・後	1748
911	*	* 12	赤・中	371	956	*	* 10	赤・中	1879
912	*	* 7		343	957	*	* 11 口縁穿孔	赤・中	1265
913	*	* 6	赤中・貝層A	203	958	*	* 12 *	赤・中	1586
914	*	* 6	赤・中	745	959	*	* 19	赤・中	1839
915	*	* 10		1107	960	*	* 9	赤・中	1896
916	*	* 6	赤・中	360	961	*	* 22		946
917	*	* 6	赤・後	1297	85-962	鉢	* 11 刃突文	赤・中	1833
83-918	甕 or 壺	* 9	赤・中	15	963	甕	* 14	赤・中	1062
919	*	* 12	赤・中	83	964	鉢	* 19		1808
920	*	* 7	赤・中	17	965	*	* 7	赤中・貝層A	256
921	*	* 12	赤・後	1611	966	*	* 10 口縁穿孔	赤・中	804
922	*	* 9		1804	967	*	* 8	赤・中	1152
923	*	* 7	赤・中	16	968	*	* 10 口縁穿孔	赤・中	1250
924	*	* 12		1351	969	*	* 14	赤・中	1160
925	*	* 8	赤・中	1094	970	*	* 26	赤・中	1096
926	*	* 7	赤・中	84	971	*	* 14	赤・後	967
927	*	* 8	赤・後	1344	972	*	* 18	赤中・SK01	737
928	*	* 6	赤・後	1317	973	*	* 10		603
929	*	* 9	赤・中	1347	974	*	* 18	赤・中	1064
930	*	* 10	赤・中	1436	975	*	* 17		684
931	*	* 6	赤・中	822	976	*	* 14	赤・中	959
932	*	* 7	赤・中	62	977	*	* 19	赤・中	226
933	*	* 6	赤・後	11	978	*	* 15		1561
934	*	* 5		1194	979	*	* 17	赤・中	238
935	*	* 6	赤・中	48	980	*	* 17	赤・中	1615
936	*	* 6	赤・後	101	981	*	* 9	赤・中	98
937	*	* 5		1053	982	*	* 18 刃突文	赤・中	278
938	*	* 4	赤・後	1312	983	*	* 20 *	赤・中	7
939	*	* 6		1042	984	*	* 25		
940	*	* 3	赤・中	1714	985	*	* 22	赤・中	224
					986	鉢	* 26	赤・中	853
84-941	*	* 16	赤中・貝層A	186	86-987	鉢	* 38		657
942	*	* 8		830	988	*	* 14 沈縫	赤・後	1932
943	*	* 5	赤・中	2	989	*	* 22	赤中・SK01	734
944	*	* 9	赤・中	373	990	*	* 20 口縁部穿孔	赤・後	1770
945	*	* 10	赤・中	1599					

表12 弥生土器一覽表(12)

銘柄番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)	序番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
86-991	鉢	口徑18	弥・後	8	89-1036	高杯	口徑12	弥・中	1089
992	+	* 28	弥・中	1533	1037	*	* 33 貼付文	弥・中	1020
993	+	* 12 口縁穿孔	弥・中	1458	1038	*	* 15		1806
994	+	* 16	弥・中	1834	1039	*	* 24	弥・中・貝層A	291
995	+	* 15	弥・後	311	1040	*	* 10	弥・中	1578
996	+	* 18	弥・中	223	1041	*	* 16	弥・中	1894
997	+	* 17	弥・中	1904	1042	*	* 15	弥・中	1059
998	+	* 16	弥・中	1591	1043	*	* 23 頂部穿孔	弥・中	192
999	+	* 30	弥・後	1664	1044	*	* 18	弥・中	217
1000	+	* 11 U縁穿孔	弥・後	385	1045	*	* 28	弥・中	1794
1001	+	* 14	弥・中	1188	1046	*		弥・中	1078
1002	+	* 19 刺突文	弥・中・貝層A	154	1047	*	口徑19	弥・中	809
1003	+	* 22	弥・中	828	1048	*	* 17	弥・中	236
					1049	*	* 24	弥・中	1420
87-1004	+	* 18	弥・中	1710	1050	*	* 39 貼付文	弥・中	1670
1005	+	* 19		986	1051	*	* 35 *	弥・中	1455
1006	+	* 18	弥・中	1025					
1007	+	* 19	弥・中	167	90-1052	*	* 31	弥・中・S2014	1944
1008	+	* 21		1010	1053	*	* 28	弥・中	1777
1009	+	* 21	弥・後	1231	1054	*	* 20	弥・後	969
1010	+	* 22	弥・中	1704	1055	*	* 30		779
1011	+		弥・中	1880	1056	*	* 21	弥・後	1359
1012	+	U縁23	弥・中	234	1057	*	* 22 器高20	弥・後	1167
1013	+	* 24	弥・中	724A	1058	*	* 24	弥・中・貝層A	176
1014	+	* 27	弥・中	713	1059	*	* 24	弥・中・貝層A	178
1015	+	* 25	弥・中	1471	1060	*	* 16	弥・後	1642
1016	+	* 18	弥・中	171	1061	*	* 13	弥・中	126
1017	+	* 18	弥・中	1711	1062	*	* 22	弥・後	1781
88-1018	+	* 18	弥・後	911	1063	*	* 38 貼付文	弥・後	1636
1019	+	* 27	弥・中	103	1064	*	* 33	弥・後	1179
1020	+	* 34	弥・中	1974	91-1065	*	* 32 口縁穿孔	弥・中	718
1021	+	* 24		1012	1066	*	* 30	弥・中・S2017	1672
1022	+	* 16	弥・後	387	1067	*	* 32	弥・中	1442
1023	+	* 23	弥・後	913	1068	*	* 34	弥・中	1972
1024	+	* 28	弥・中	859	1069	*	* 22	弥・中	1258
1025	+	* 21	弥・中	267	1070	*	* 29	弥・中	174
1026	+	* 21	弥・中	818	1071	*	* 26 貼付文	弥・中	295
1027	+	* 18	弥・中	1217	1072	*	* 24	弥・中	1482
1028	+	* 24 壁高26	弥・中・貝層A	149	1073	*	* 24	弥・中	182
1029	+	* 21	弥・中	957	1074	*	* 26	弥・後	1405
1030	+	* 27	弥・中	1028	1075	*	* 35	弥・後	1798
1031	+	* 24	弥・後	1684	1076	*	* 25		1548
1032	+	* 18	弥・中	1836	92-1077	*	* 34	弥・中	1886
89-1033	高杯	* 22	弥・後	1655	1078	*	* 32	弥・中	1447
1034	+	* 24	弥・中	358	1079	*	* 24	弥・中	1269
1035	+	* 31	弥・中	1891	1080	*	* 23	弥・後	1394

表13 弥生土器一覧表(13)

件名番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)	件名番号	器形	法量・特徴	出土層	備考(NKY)
1061	高环	口径18	弥・後	1551	94	1126	高环	底部径13.2	弥・中 388
1062	*	* 25	弥・後	1674	1127	*	* 14.4	弥・後 1941	
1063	*	* 28	弥・後	1745	1128	*	* 13.8	弥・中 1031	
1064	*	底部径 9.2		1889	1129	*	* 14.4	弥・中 1736	
1065	*	* 13.0	弥・中	1827	1130	*	* 13.4	弥・中 59	
1066	*	* 10.8		1527	1131	*	* 13.0	弥・中 390	
1067	*		弥・中	1860	1132	*		弥・中 973	
1068	*	底部径10.4	弥・中	1517	1133	*	底部径14.0 透し	弥・後 1558	
1069	*	* 7.2	弥・中	1771	1134	*	* 14.0 透し	弥・中・貝覆A 1491	
1070	*		弥・後	1965	1135	*	* 11.0 透し	弥・中 13	
1071	*		弥・中	1136	*	方形透し		1690	
1072	*		弥・中	1336	1137	*	方形透し	弥・小 1450	
1073	*		弥・中・貝覆A	299	1138	*	方形透し	弥・中・貝覆B 1498	
1074	*		弥・中	1810	1139	*	底部径 9.6 透し	弥・後 1712	
1075	*		弥・中	131	1140	*	* 13.0 透し	弥・中 824	
1076	*		弥・中	1457					
1077	*		弥・中	49	95-1141	*	* 17.6 透し	弥・中・S Z 16 1910	
1078	*	底部径18.0	弥・後	1348	1142	*	* 12.0 透し	弥・中 1973	
99-1099	*		弥・中	66	1143	*	* 12.4 透し	弥・中 1898	
1100	*		弥・中	405	1144	*	* 11.4	弥・中 1682	
1101	*		弥・中	1789	1145	*		弥・中 1525	
1102	*		弥・中	407	1146	*	底部径19.4	弥・中 1177	
1103	*	底部径14.8	弥・中	1579	1147	*	* 15.6	弥・後 1643	
1104	*	* 14.8	弥・中・S Z 16	1919	1148	*	* 19.0	弥・後 1954	
1105	*	* 12.4	弥・中	1023	1149	*	* 17.8	弥・後 1341	
1106	*	* 15.2	弥・中	1935	1150	*	* 9.6	弥・中 1027	
1107	*	* 15.6	弥・中	1433	1151	*	* 16.0	弥・中 1244	
1108	*	* 14.0	弥・中	724B	1152	*	* 12.8	弥・後 1937	
1109	*	* 15.4	弥・後	12	1153	*	* 13.6	弥・後 1441	
1110	*	* 14.6	弥・中・貝覆A	230	1154	小型土器	II 径 9	弥・中 123	
1111	*	* 10.6	弥・後	1535	1155	*	* 11	弥・中 1602	
1112	*	* 12.4	弥・中	1648	1156	*	* 14	弥・中 1687	
1113	*	* 13.2	弥・後	312	1157	*	底部径 3.2	弥・中・S Z 16 1908	
1114	*	* 14.2	弥・中	1876	1158	*	LJ 径 7	弥・後 1657	
1115	*	* 14.8	弥・中	356	1159	*	* 6	弥・中 1353	
1116	*	* 16.4	弥・中	415	1160	*	* 6	852	
1117	*	* 10.0	弥・中	1931	1161	*	* 6	弥・中 1271	
1118	*	* 16.8	弥・中	1843	1162	*		弥・中 1963	
				1163	*	LJ 径 3		弥・中 1105	
94-1119	*	* 13.2	弥・中	325	1164	*	* 7	弥・中 1883	
1120	*	* 14.4	弥・中・貝覆A	210	1165	*	* 11 高 10	弥・後 310	
1121	*	* 14.4	弥・中	324	1166	*	底部径 4.0	弥・中 1841	
1122	*	* 16.0	弥・中	1029	1167	*	* 3.8	876	
1123	*	* 12.8	弥・中	113	1168	*	* 2.6	1256	
1124	*	* 14.2	弥・中	125	1169	*	* 3.2	920	
1125	*	* 15.2	弥・中	109	1170	*	* 2.0 高 1	弥・後 970	

表14 弥生土器一覽表(14)

件目番号	器形	状態・特徴	出土層	器形	状態・特徴	出土層	器形
		(NKY)			(NKY)		(NKY)
1171	小形土器	底削高3.2 内削	弥・後	971	97-1216 高環	口徑9.5 丹波	1137
1172	*	* 2.8 底削高4	弥・後	1396	1217	* 底削高11.4	弥・中
1173	*	* 2.4	弥・中	1709	98-1218 分割型	沈縫文	2136
1174	*	* 3.6	弥・中	844	1219 J製品	-	-
1175	*	* 2.0	弥・中	1896	1220	-	-
1176	*	L1 径16		1208	1221	-	-
1177	不明七製品		弥・中	744	1222	-	-
1178	*		弥・中・貝層B	1920	1223	-	-
1179	*		弥・中	811	99-1224 夷	口 径22	923
1180	*		弥・中	1142	1225	* * 21	弥・後
1181	*		弥・中	1583	1226	* * 12	弥・後・貝層E
1182	*		弥・中	851	1227	* * 12	1609
96-1183	蓋	L1 径10高3.2 内削	弥・中	1889	1228	* * 17	弥・中
1184	蓋	* 7.5 内削	弥・中	1594	1229	* * 17	弥・後・貝層E
1185	*	* 8	弥・中	1966	1230	* * 16	弥・後
1186	*	* 9	弥・中	1907	1231	* * 18	古・前
1187	*	* 11	弥・中・SK01	732	1232	* * 26	弥・後
1188	*	* 10	弥・中・S Z017	1912	1233	* * 25	古・後
1189	*	*	弥・中	1454	1234	* * 21	弥・後
1190	*	L1 径16	弥・中	1852	1235	* * 10	弥・後
1191	*	* 10	弥・中	94	1236	* * 17	弥・後
1192	*	* 11	弥・中	2187	1237	* * 14	弥・後・貝層E
1193	*	* 12	弥・中	2137	1238	* * 16	弥・後
1194	*		弥・中	1844	1239	* * 17	弥・後
1195	*	L1 径10	弥・中	1412	1240	* * 24	弥・後
1196	*	*	弥・中	1967	100-1241	* * 13 新高20	弥・後
1197	*	L1 径13	弥・中	814	1242	* * 16	弥・後
1198	*	*	弥・中	700	1243	* * 14	弥・後
1199	*	底削径5.4	弥・中	701	1244	* * 20	弥・後
1200	*	* 5.0	弥・中	2163	1245	* * 18	弥・後
1201	*	* 5.8	弥・後	1826	1246	* * 22	弥・後
1202	*	* 4.8	弥・中	1247	1247	* * 19	弥・後
1203	*	* 5.4	弥・中	848	1248	* * 15	弥・後
1204	*	* 5.2	弥・中	10	1249	* * 24	弥・後
1205	*	* 5.0	弥・中	47	1250	* * 16	弥・後
97-1206	*	* 10.8	弥・中	1925	1251	* * 13	弥・後
1207	*	* 11.6	弥・中	1649	1252	* * 18	弥・後
1208	*	* 10.0	弥・中・貝層B	1508	1253	* * 16	弥・後
1209	*	* 5.6	弥・中	2139	1254	* * 15	弥・後
1210	*	* 9.8	弥・中	1698	1255	* * 22	1647
1211	*	* 5.8	弥・中	227	1256	* * 23	弥・後
1212	*	*	弥・中	2144	1257	* * 17	弥・中
1213	*	口 径14	弥・中	690	1258	* * 16	弥・後
1214	高 环	* 23	弥・後	1756	1259	* * 21	弥・後
1215	*	* 30	弥・中	1970+1439	1260	* * 16	弥・後

表15 弥生土器一覧表(15)

器物番号	形	法 量・特 徴	出 土 場	備 考 (N.K.Y.)	器物番号	形	法 量・特 徴	出 土 場	備 考 (N.K.Y.)
100-1261	鉢	口 径16	弥・後	1098	102-1300	鉢	口 径14	弥・後	1660
1262	*	* 15	弥・後	927	1301	把 手		弥・後	1744
1263	*	* 15	古・前	1528	1302	*		弥・後	1574
1264	*	* 20	弥・後	61					
1265	*	* 19	弥・後	1547	103-1303	高 环	口 径16	古・前	1728
					1304	*	* 14	弥・後	1767
101-1266	*	* 18	弥・後	1449	1305	*	* 16	弥・後	1166
1267	*	* 16	弥・後	1293	1306	*	* 13	弥・後	1765
1268	*	* 14	弥・後	1790	1307	*	* 23	古・前	1727
1269	*	* 17	弥・後	1170	1308	*	* 19	弥・後	1926
1270	*	* 10	弥・後	1220	1309	*	* 26	弥・後	1755
1271	*	* 19	弥・後	377	1310	*	底部径12.8	弥・後	1199
1272	*	* 22	弥・後	349	1311	*			1127
1273	*	* 18	弥・後	1656	1312	*	底部径 7.2	弥・後	1743
1274	*	* 29	弥・後	1930	1313	*	* 13.0	弥・後	1752
1275	*	* 13 瓦文	弥・後	1751	1314	*	* 6.8	弥・後	1733
1276	*	* 12	弥・後	1300	1315	*	* 11.2		1689
1277	*	* 14	弥・後 貝網E	1557	1316	*	* 10.4	弥・中	819
1278	*	* 11	弥・後	1933	1317	*	* 11.6		546
1279	*	* 13	古・前	1731	1318	*	* 15.6	弥・後	1554
1280	*	* 13	弥・後	1795	1319	*	* 11.2	弥・後	378
1281	壺	* 31	弥・後	1407	1320	*	* 15.2	弥・後	63
1282	*	* 25		808	1321	唇 台	口 径19	弥・後	1563
1283	*	* 12	耕作土層	1489	1322	*	* 20	弥・後	1411
1284	*	* 16	弥・後	963	1323	*	底部径30.4	古・前	1746
1285	*	* 15	弥・後	1581	1324	*	* 11.2	弥・後	806
1286	*	* 8	弥・後	1943	1325	*	* 6.4	弥・後	1205
1287	*	* 8	弥・後	1761	1326	瓦脚环	口径18 底部径 8 唇高 8	弥・後	1556
1288	*	* 6		956	1327	*	底部径 5.2	弥・後	1764
					1328	*	* 9.6	弥・後	1763
102-1289	*	* 26	古・前	1541	104-1329	鉢	口 径36 一部舟	弥・中	1858
1290	*	* 27	弥・後	1409	1330	高 环	底部径13.2 月坐	弥・後	313
1291	*	* 18	古・前	1539	1331	L1	径20 *	弥・後	1934
1292	*	底部径 4.4	弥・後	1807	1332	壺	*	弥・後	2195
1293	*	L1 径13		1146	1333	高 环	底部径12.8 *	弥・中	846
1294	*	多条沈縁文	弥・後	1661	1334	*	* 11.6 *	弥・後	1345
1295	*	L1 径 6 唇高 5	弥・後	1750	1335	*	口径19 *	弥・後	1658
1296	*			1185	1336	唇 台	* 20 *	弥・後	1556
1297	*			1222					
1298	*		弥・後 貝網E	1570					
1299	鉢	L1 径16	弥・後	1652					

(3) 古墳時代前期の土器

第105図、第106図、第107図、第108図に古墳時代の土器を図示した。器形は壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯、器台形土器、低脚杯に分類し、いずれも古墳時代前期のものである。

a. 壺形土器 1～35が壺形土器である。口縁部は二重口縁で底部のわかるものはかすかに底部を意識しているが丸底に近い（2、18）。器壁は薄く外面は細かなハケ目調整がなされ頸部付近に波状文（2、5、14、27、29）や刺突文（17、30）が施されるものもあるが多くは無文である。内面は頸部より下方はヘラ削りが全面になされる。1は口径32.0cmの火形のものである。

b. 壺形土器 36～43。このうち、40、42は小形丸底壺。40は口径8.5cm、器高8.1cmを測る。43は長く上方に延びた二重口縁の丸底壺でクシ描波状文が胴部にみられる。口径は10.0cm、口縁部の長さは6.0cmある。39は頸部に小孔を穿った短頸壺でクシ描きの鋸歯文がみられる。これらはいずれも小形の壺形土器であるが、これらに対し、36～38、41は大形で、壺形土器と比較すると装飾性に富んでいる。41はほとんど丸底に近い。38は口縁部の小破片であるが、外面に「S」字や円形のスタンプ文が施されている。

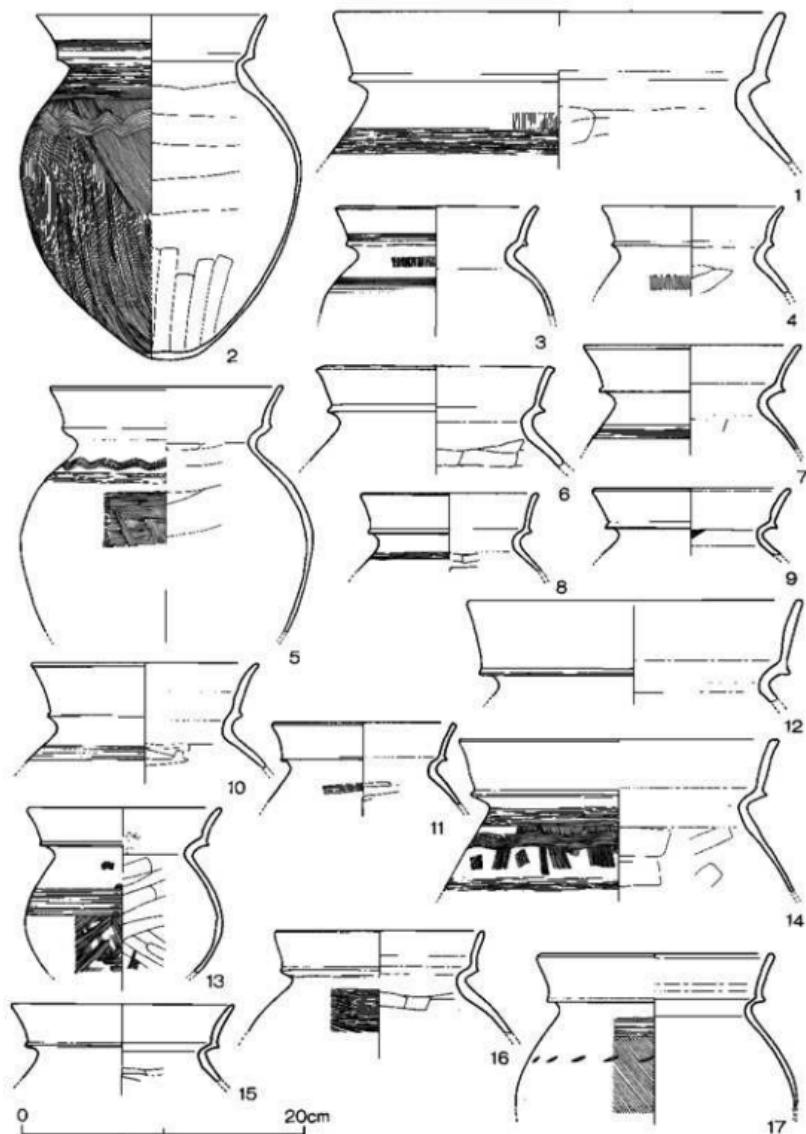
c. 鉢形土器 46は鉢形土器と考えた。逆「ハ」の字状に大きく上方に開いた杯部である。復元口径は28.0cm。口唇部に焼成後、その外面を磨き片刃状の刃部が作り出されているのが注意される。体部の下方に一条の沈線がめぐるが、低い脚が付いていた可能性がある。類似のものは松江市平所遺跡出土例がある。土器片に刃部を作り出したものは、弥生時代中期層で出土した第95図1179があるが関係は不明である。66は小形品である。

d. 高杯 51～57、60は高杯であるが各種みられる。このうち、55は粗雑な手捏成型で実用品とは考えにくい。60の杯部内面には暗文状ヘラ磨きがみられる。

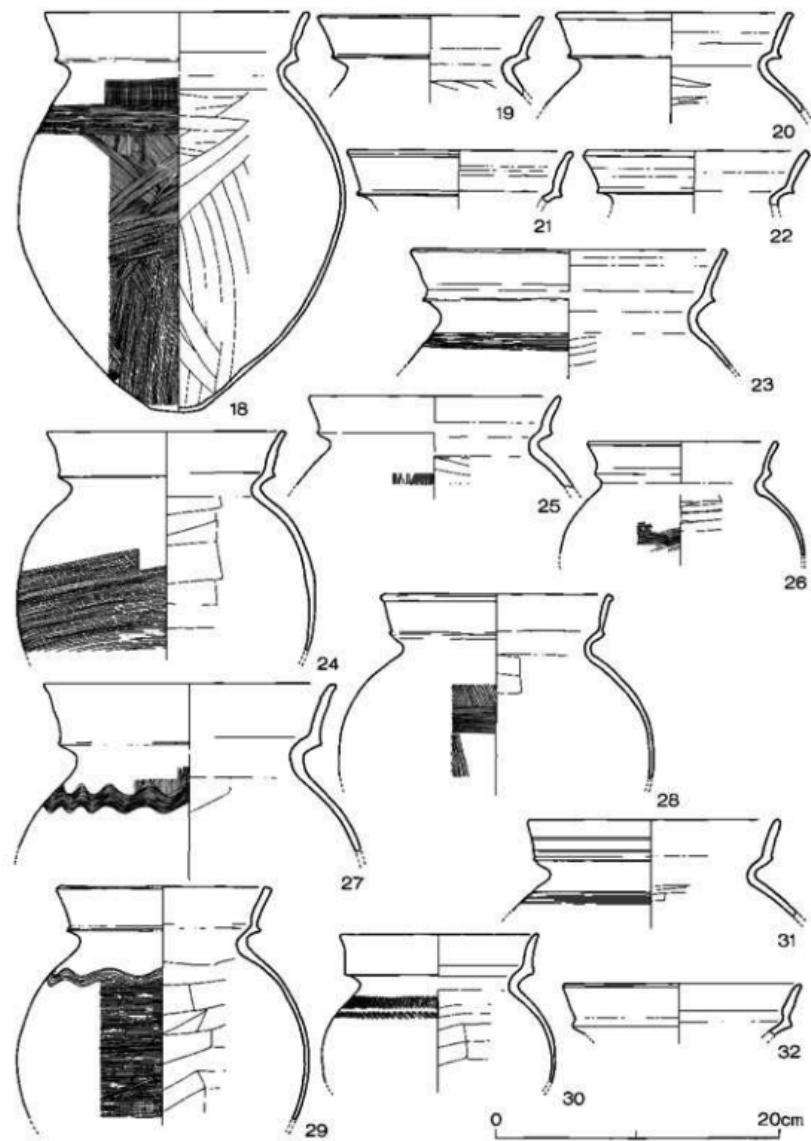
e. 器台形土器 44、45は放形器台である。44は口径17.0cm。45は完形で器高12.0cm、口径22.5cmを測る。

f. 低脚杯 杯部が碗状になる49、50と酒杯状に広く開く58、59、64、65があるが、61、62、63も後者であろう。49、50とも口径は18.0cmで内外面のヘラ磨き調整に若干の違いがあるが互いによく似ている。59、65は丁寧なヘラ磨きが施され、65は杯内面は暗文状となる。59は口径21.0cm、器高6.0cm、65は口径21.0cmであるが杯部は59に比して深い。

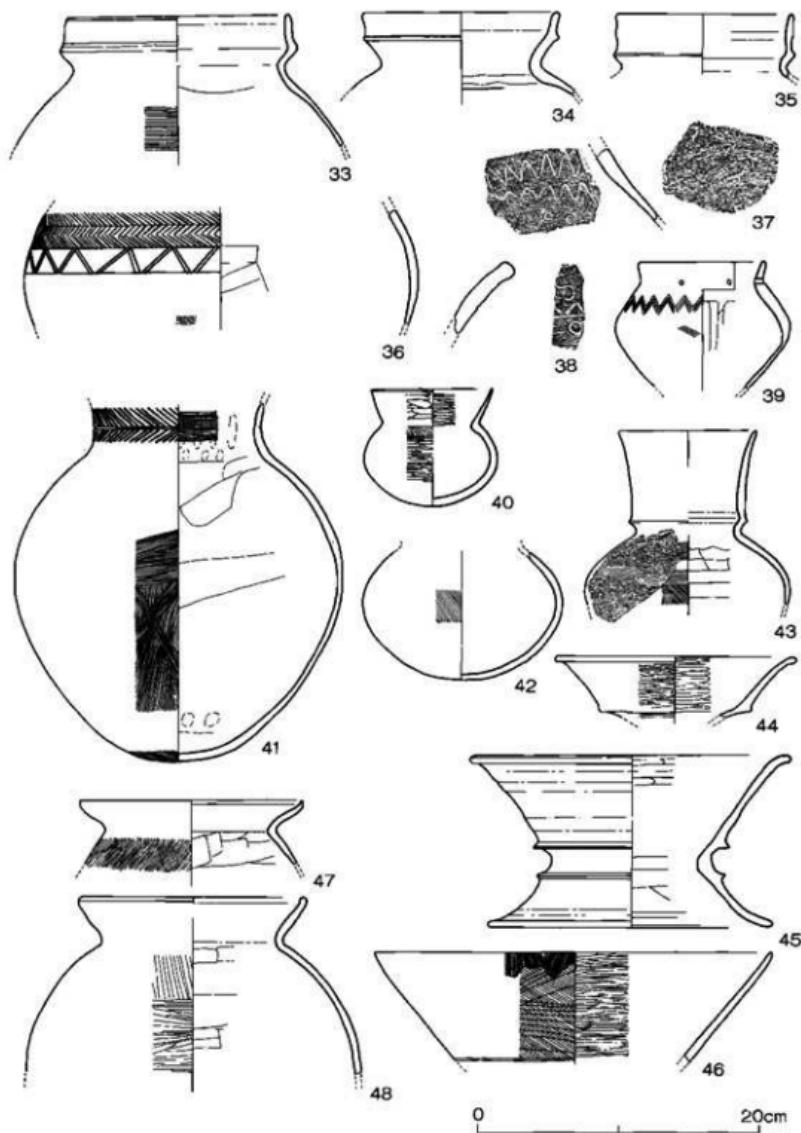
g. 撒入土器 47、48は撒入土器と考えられる壺形土器である。両者とも外面は叩き痕を丁寧にナデ消している。内面は頸部より下方はヘラ削りが施されている。47は口径16.0cmで胎土は茶褐色を呈している。48は口径16.0cmである。47は庄内式、48は布留式土器に比



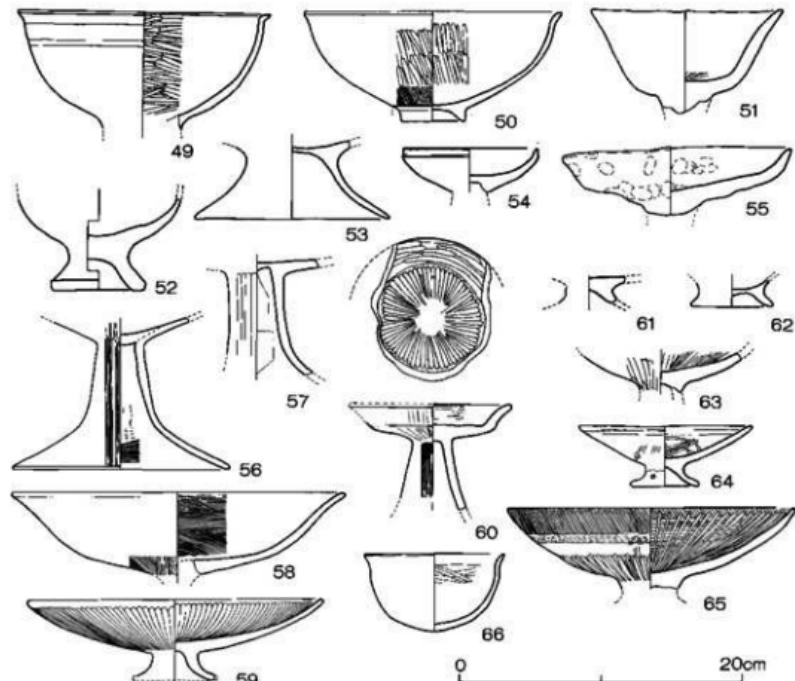
第105図 土器実測図(1)



第106図 土師器実測図(2)



第107図 土器実測図(3)



第108図 土器実測図(4)

定されよう。いずれも畿内からもたされたものと推定される。

(4) 土鎌・石鎌

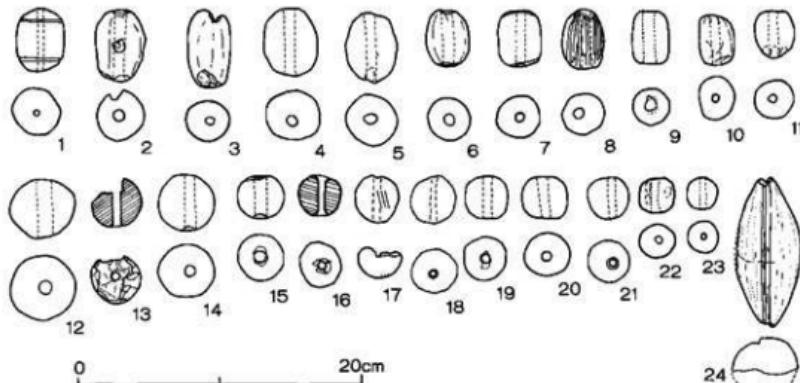
第109図は弥生時代中期～古墳時代前期層出土の上鎌(1～23)と右鎌(24)を示してある(表17)。1～11は長いタイプのもので、このうち、1には両端に一条の沈線がめぐらされており作りは丁寧である。8は縦方向にヘラ磨きがみられる。12～23は球形の十鎌。13は二次焼成を受け破損している。17は孔より半分を失っている。前者の平均重量は43.4g、後者のそれは25.4g、平均は34.8gである。24は右鎌で弥生時代後期層からの出土である。焼成を受け縦方向に半分に割れその一方を失っている。中央には縦方向に断面「V」字状の溝が一条めぐる。両端にむかひ先細りとなった九州型の石鎌である。表面はきれいに磨きがかけられている。

(5) 紡錘車

第110図には紡錘車とその未成品と考えられる土製品を示した(表18)。56と57を除く

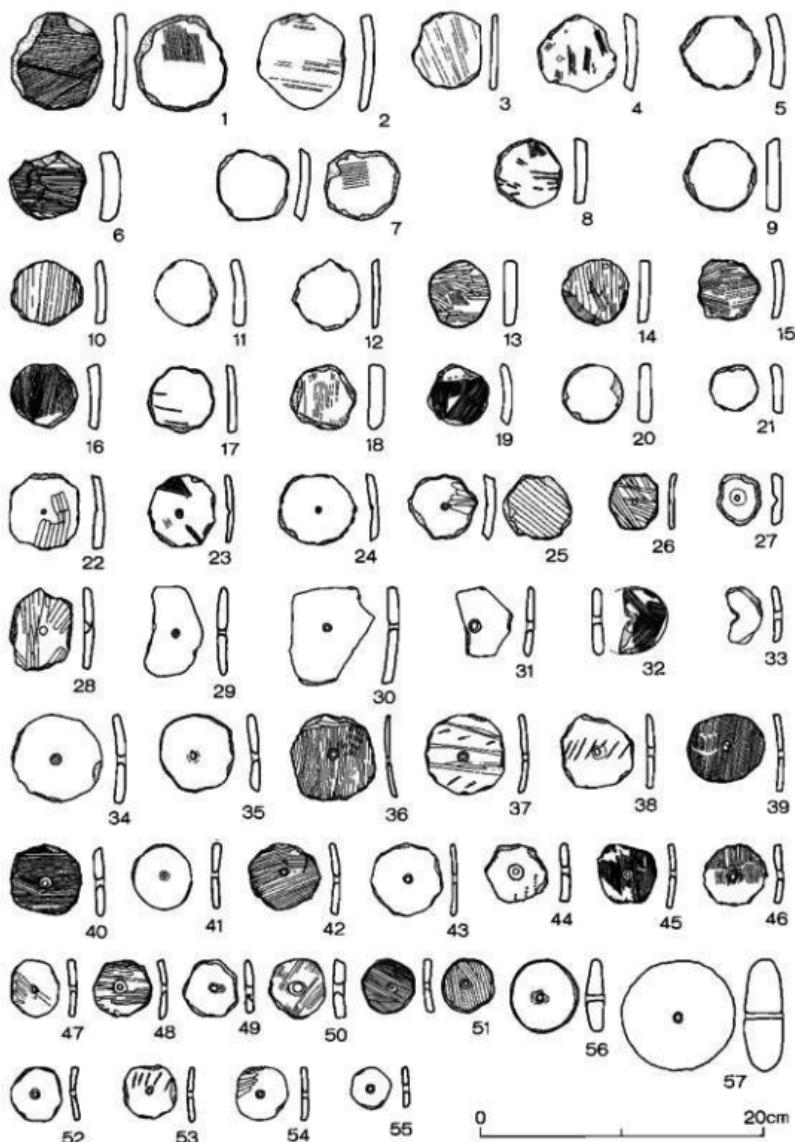
表16 土師器一覽表

標記番号	器形	法 量・特 徴	出 土 所	測 定 (NKY)	標記番号	器形	法 量・特 徴	出 土 所	測 定 (NKY)
106-1	壺	L1 径32	古・前	1686	107-34	壺	L1 径14	古・前	1630
2	*	* 16 深高24	古・前	1641	35	*	* 12	古・前	1286
3	*	* 14	古・前	1125	36	*		古・前	1549
4	*	* 13	古・前	1634	37	*		古・前	1555
5	*	* 16 沈縫文	古・前	1577	38	*		古・前	1936
6	*	* 17	古・前	1616	39	*	L1 径 9	古・後	1696
7	*	* 15 沈縫文	古・前	1417	40	*	* 8 壁高 8	古・前	1140
8	*	* 12	古・前	1415	41	*	底部径 4.0	古・前	1121
9	*	* 14	古・前	1147	42	*	* 2.0		1693
10	*	* 16	古・前	1379	43	*	L1 径10		733
11	*	* 13	古・前	1414	44	器 台	* 17	古・前	1553
12	*	* 24	古・前	1567	45	*	口径23 壁高径20 壁高12	古・前	1151
13	*	* 14 沈縫文	古・前	1124	46		口径28	古・前	1136
14	*	* 22 *	古・前	1532	47	壺	* 16	古・前	2198
15	*	* 16 *	古・前	1165	48	*	* 16	古・前	1431
16	*	* 15	古・前	1627					
17	*	* 17	古・前	1619	108-49	低脚壺	* 18	古・前	1612
					50	*	* 18 壁高 8	古・前	1608
106-18	*	* 19 沈縫文	古・前	1530	51	高 壺	* 13		1572
19	*	* 16	古・前	1138	52	低脚壺	底部径 6.4	古・後	1678
20	*	* 17	古・前	1135	53	高 壺	* 13.6	古・前	1620
21	*	* 16	古・前	1150	54	*	口径 9	古・前	1543
22	*	* 15	古・前	1145	55	*	* 16	古・前	1793
23	*	* 22 沈縫文	古・前	1613	56	*	底部径13.0	古・前	1762
24	*	* 17	古・前	1538	57	*		古・前	1728
25	*	* 18	古・前	1532	58	低脚壺	口径24		1610
26	*	* 13	古・前	1416	59	*	* 21	古・前	1638
27	*	* 21波状沈縫	古・前	1721	60	高 壺		古・前	1540
28	*	* 16	古・前	1692	61	低脚壺			947
29	*	* 15	古・前	1695	62	*	底部径 5.6	古・前	1640
30	*	* 14		1544	63	*	口径12底部径 4.8 壁高 4	古・前	1126
31	*	* 18	古・前	1413	64	*	口径20	古・後	1531
32	*	* 17		1148	65	*	口径10 壁高 6	古・前	1128
107-33	壺	* 16	古・前	1621	66	錐	口径10 壁高 6	古・後	1662



第109図 土錘・石錘実測図

と、いずれも弥生時代中期の土器片を再利用し円形に打ちかき、磨いて作っていることが知られる。1~19は土器片を円形に打ちかいただけのもの、20、21はその周縁に磨きをかけたものである。22~27は中央に一方向から穿孔しようとした小さな凹みがみられるもの、28は両面に凹みがみられるが、貫通していないものである。29~55は小孔が貫通している完成品と考えられる。56、57はあらかじめ紡錘車として製作し焼成したものである。これらは紡錘車としては比較的古いものの可能性がある。57はその径、厚さとも他に比較して群をぬいて大きい。これらの平均重量は21.3gである。木製の紡錘車と考えられるものに、第153図237や第166図307がある。



第110図 紡錘車実測

表 17 土鍼・石鍼計測表

番号	長さcm	幅cm	重量g	備考	番号	長さcm	幅cm	重量g	備考
1	4.4	3.5	45.0	NKY-2117	13	3.5	3.5	32.0	NKY-1874
2	5.0	3.55	50.6	タ 2129	14	3.9	4.0	41.0	タ 2140
3	5.4	3.05	42.0	タ 2120	15	2.95	3.35	28.4	タ 1749
4	4.75	3.8	65.5	タ 2133	16	2.85	2.9	25.0	タ 1922
5	4.7	3.7	56.5	タ 2114	17	3.2	3.1	15.8	タ 1760
6	3.9	3.2	31.0	タ 2123	18	3.3	3.2	31.0	タ 1924
7	4.0	3.05	40.0	タ 2131	19	2.95	3.0	30.0	タ 1857
8	4.2	2.9	32.9	タ 2141	20	3.0	3.2	31.4	タ 2134
9	3.2	2.7	27.3	タ 866	21	2.9	3.0	23.2	タ 1726
10	3.5	2.5	27.5	タ 2138	22	2.4	2.5	12.0	タ 805
11	3.3	2.85	28.6	タ 2132	23	2.0	2.2	10.0	タ 2135
12	4.05	4.65	74.0	タ 2110	24	10.6	4.7	117.6	NKE-7

表 18 紡錘車計測表

番号	縦×横cm	厚さcm	重量g	備考	番号	縦×横cm	厚さcm	重量g	備考
1	6.8 × 6.55	0.8	43.6	NKY-1737	30	6.78 × 5.2	0.7	35.0	NKY-1869
2	6.7 × 6.1	0.7	39.21	タ 1534	31	4.75 × 3.45	0.55	10.67	タ 1753
3	5.2 × 5.1	0.5	18.0	タ 1432	32	4.75 × (2.7)	0.5	12.07	タ 1288
4	5.4 × 5.42	0.8	25.0	タ 1588	33	3.9 × (2.2)	0.55	6.2	タ 1703
5	5.22 × 5.38	0.78	26.59	タ 1782	34	6.1 × 6.35	0.65	35.37	タ 1754
6	4.4 × 5.5	1.2	41.23	タ 1673	35	5.4 × 5.2	0.6	22.18	タ 2128
7	4.6 × 5.25	0.65	19.4	タ 1725	36	5.7 × 5.68	0.3	20.0	タ 1942
8	4.55 × 4.65	0.75	25.0	タ 1913	37	5.5 × 5.55	0.5	20.0	タ 1909
9	5.0 × 5.0	0.95	32.2	タ 1849	38	5.2 × 5.0	0.5	17.48	タ 1236
10	4.4 × 5.0	0.6	19.0	タ 1914	39	5.4 × 4.8	0.4	15.18	タ 2118
11	4.65 × 4.4	0.85	20.0	タ 1958	40	4.8 × 4.82	0.7	20.0	タ 1911
12	4.95 × 4.7	0.45	12.07	タ 1776	41	4.58 × 4.18	0.55	14.73	タ 2111
13	4.6 × 4.25	0.92	24.60	タ 2127	42	5.0 × 4.7	0.5	12.0	タ 1872
14	4.4 × 4.62	0.8	21.58	タ 1815	43	5.1 × 5.05	0.35	11.0	タ 1867
15	4.2 × 4.3	0.6	15.0	タ 1590	44	4.02 × 4.3	0.6	19.0	タ 1916
16	4.61 × 4.4	0.7	20.59	タ 2130	45	4.45 × 4.3	0.42	9.19	タ 2116
17	4.7 × 4.7	0.6	15.17	タ 2124	46	4.12 × 4.2	0.5	10.05	タ 1766
18	4.52 × 4.4	1.1	28.0	タ 1488	47	4.0 × 3.6	0.5	8.55	タ 1402
19	4.35 × 4.4	0.6	15.5	タ 1681	48	4.8 × 4.15	0.5	10.3	タ 2108
20	4.1 × 4.25	0.86	20.0	タ 1957	49	3.7 × 3.95	0.55	9.95	タ 2115
21	3.3 × 3.5	0.45	10.1	タ 1762	50	4.19 × 3.9	0.7	15.58	タ 2109
22	5.2 × 5.2	0.7	23.0	タ 1918	51	3.65 × 3.7	0.6	10.43	タ 1722
23	4.82 × 4.55	0.32	11.0	タ 1917	52	3.75 × 3.6	0.4	7.62	タ 2119
24	4.7 × 5.28	0.58	20.0	タ 1965	53	3.85 × 4.05	0.4	7.83	タ 1595
25	4.5 × 4.65	0.7	16.9	タ 1723	54	3.7 × 3.58	0.4	7.31	タ 1888
26	3.82 × 3.5	0.32	7.13	タ 2125	55	2.9 × 2.65	0.4	3.85	タ 2145
27	3.62 × 3.0	0.7	10.0	タ 1870	56	5.1 × 4.88	1.24	35.35	タ 2126
28	5.7 × 4.82	0.65	21.28	タ 2157	57	7.98 × 7.7	2.62	181.7	タ 1847
29	6.3 × (3.7)	0.6	24.5	タ 1845					

(6) 弥生時代中期の木製品

第111図～第156図には弥生時代中期層から出土した木製品を掲げてある（図版44～64）。西川津遺跡の木製品の中で、この中期層からの出土が最も多く、それらは主として、ウッドサークルの中やその周辺で発見されたものである。鍬・鋤を中心とする農耕具類、漁撈具、建築材、各種の容器、祭祀遺物、装身具類等がある。尚、樹種についてはII章表26に示してある。

a. 農耕具類

ミカン割材 第111図、第112図、第113図、第114図12、第142図166～167、169、170には各種の木製農耕具類の材料となる板状のミカン割材を示した。樹種はカシである。最大のものは長さ1.17m、幅0.29m、厚さ0.11～0.03cmであるが（第141図163）、第141図161の一木鋤の未成品例は1.50m近くある。短い例としては第113図10のような0.50mのものがあり、他はいずれもこれらの間に収まるサイズである。ミカン割材の両面は何ら加工痕のみられない割ったままの状態であり、3・9・10・12には樹皮がみられる。加工痕は両端に顕著で両面から加工しているので、161や163よりさらに長い材があったとも推測される。

第115図18、19、第116図21～24はミカン割材から木製農耕具を製作した切れ端と考えられるものである。その両端に加工痕がみられるが、一方の形状は不整形で、ミカン割材製作時のものであろう。21・24には樹皮が残る。

第114図15、13、14、第115図16、17、20は、ミカン割材から次の段階へ進んだものと思われるが、どのような製品を目的としたのかは不明である。このうち15は鋤の未成品である可能性がある。

広鋤A類 広鋤で柄つぼを穿つ舟形隆起を有し、その裏面にいわゆるゲタをつけたものを広鋤A類とした。第117図、第118図、第119図、第120図、第121図49・50・51・53。

26・27・28は、ミカン割材から切り離され、中ほどから刃部に向かい薄く削り出そうとしている。製作工程としては初期の段階のものである。26の例をとると、長さ27.0cm、幅20.0cmである。28は樹皮がついている。裏面には未だ加工痕はみられない。

29は刃部に向かい長く下垂する舟形隆起の部分が、周辺を削り出すことによって表われはじめ、26～28の次の段階のものである。舟形隆起の頂上部以外に粗い加工痕が残り、裏面にも加工が加えはじめられている。長さ27.0cm、幅21.0cm。

第118図31～34は、裏面のゲタの位置が定められ、削り出そうとする段階のものである。

全体の形が整えられ、この段階で鍔としてのサイズが決定されたと思われる。33の例をとれば長さ26.0cm、幅21.0cmである。

第119図35は、さらに削り込まれ、舟形隆起をはじめ全体の形状がさらに明確となった段階のものであるが、舟形隆起への穿孔はまだみられない。刃部へも刃を意識した加工が加えられている。長さ27.5cm、幅20.5cm、舟形隆起の長さは頭部より17.4cm、高さ2.0cmを測る。

第119図36・38・39は、以上の製作工程とは別のそれによって製作されたものである。36は、舟形隆起は刃部に向かい長く下垂する形状を明確にしているが、全体の形状は整っていない。裏面のゲタも削り出されてなく、別種の広鍔とも考えられる。長さ29.5cm、幅20.5cmとやや大形である。舟形隆起は長さ12.0cm、幅6.3cm、高さ2.0cm。

38は一部を欠くが、長さ31.2cm、最大幅24.0cmと大形で、全体の形状は中央よりやや上方で幅22.8cmと一旦くびれ、再び刃部に向かい広がる大形のものである。舟形隆起は上下両端が尖り、長さ15.0cm、幅1.4cm、高さ2.5cmを測る。その中央には孔を穿ちはじめている。裏面はゲタが付く。特徴的なのは刃部より上方約1/3の周縁が、幅約1.2cm、高さ約0.5cmと高く縁取りされていることである。これは刃部の強度を補強する為と考えられている。中央の舟形隆起に穿孔すれば完成する最終段階の広鍔であるが、弥生時代前期のものの可能性がある。

39は長さ35.5cm、幅24.5cmを測る広鍔としては最も大形品である。全体の加工は加工途中のように粗く、舟形隆起も整っていないが、既に穿孔され、その孔は仕上げられていることからこのまま使用された可能性がある。

また、第117図30は、風化破損が著しいが、後述する丸鍔のように3枚の広鍔を一度に製作したものと思われる。広鍔A類の中では他に同様な資料はない。

40～53は完成品である。加工途中のものに比すると薄く、刃部の破損が目立つ。長さ27.0cm以上の大形のものと(40・50・51)、24.0cm前後の小形のもの(41・43・44・49)がある。40・44・49・50・51は中央あるいはそれより上方で幅が狭くなりくびれる。舟形隆起には両端が突るもの(40・47)と一方が刃部に向かい下垂するもの(41・43・44・45・46・48・49・50)がある。これらのうち、50と51の頭部は中央が半円状に凹む装飾となっている。49には舟形隆起の両側に小孔が一対穿たれている。42・43・46・47・53は舟形隆起の剥離したものである。

広鍔B類 一枚のミカン削材を長さ30cm前後に切断し加工を加えて広鍔とする点では広鍔A類と同じであるが、舟形隆起やゲタのみられない広鍔をB類として、第122図、第123

図、第124図、第125図70～76に示した。

第122図56は長さ1.05cm、幅24.5cm、厚さ約4.0cmのミカン削材の端から、約33.0cmの長さに広鍬の材料を切断しようとしている資料である。断面が「V」字状となった幅約3.0cm、深さ0.5cmの溝が片面のみにみられる。この部分と両端以外には加工痕はみられない。

57・58・59・60・64・67は、ミカン削材から切断した段階のもので、両端以外には、両面ともほとんど加工痕はみられない。60の場合、長さ31.0cm、幅24.0cm、厚さ3.6cmある。59・64・67は樹皮がついたままである。いずれも両端の加工痕をみると、ミカン削材の両面から溝を入れていることが判るので、56はその最も初期の段階のものと考えられる。

61・62・63・65は片面のほぼ中央をわずかに高くした段階のもので、その周辺に若干の加工痕が観察される。この段階では縦に長い61・62・63と縦と横の幅があまり差のない65とがあるが、同様なことは、57～60・64・67についても言えるかもしれない。すなわち、57～60は縦長の前者に、64・67は後者に対応する可能性がある。63は長さ31.2cm、幅21.0cm、中央での厚さ3.6cm、65は長さ23.5cm、幅22.2cm、中央での厚さ3.9cmを測る。

66・68・69はさらに加工の進んだ段階で、柄の孔を穿つ突起は低いけれども明確になり、全体の形状が整えられ、頭部は丸味を帯びる。66・68のように縦長のものと、69のように幅広のものがある。66は長さ27.0cm、幅20.5cm、中央部での厚さ2.4cm、69は長さ21.6cm、幅20.5cm、中央部の厚さ3.0cmを測る。

70～76は完成品である。縦方向に割れた破損品が多い。完形品においても柄を装着する孔の穿たれた周辺の隆起は低く、広鍬A類にみられた舟形隆起のように境がはっきりしない。70・71のように幅広のものと、72～76の縦長のものがあり、加工途中の未成品に対応している。70の場合長さ26.5cm、幅24.5cm、孔付近の厚さ1.8cmを測る。この幅広のものには未完成65や69のように70より小形のものが存在するようである。未完成のうち64や67が70に対応すると考えられる。73は柄が装着されたまで発見された唯一の例であるが、縦方向に約13が欠損している。柄は径約2.5cm、長さ26.7cmの短いものである。欠損したために柄も短くし、手鍬のようにして使用したのであろう。柄は隆起の側から装着されている。

狭鍬A類 長さに対し幅の狭い狭鍬のうち舟形隆起のあるものを狭鍬A類とした。

第126図86はミカン削材から狭鍬A類を製作しようとしたものである。現状での長さは約70.0cm、幅約20.0cmを測り、2枚の狭鍬が加工途中であるが、一方の端に加工痕が認められず、後に折れしており、元は少なくとも3枚を作り出そうとしていた資料であることが判る。隆起部での厚さは5.4cmある。第121図52は狭鍬の完成品で、両端は欠損している。

幅は13.8cmを測る。

狭鋸B類 柄を装着する部分に明確な隆起のない狭鋸を狭鋸B類とした。第125図77・78、第126図79・80・81・82・83・84がそれである。皆完成品で、やはり欠損品が多い。全体を知ることのできる77は長さ28.0cm、幅13.0cm、厚さ1.8cm、82の場合長さ30.0cm、幅11.0cm、厚さ2.4cmある。これらの中には広鋸B類の再利用のものがある可能性もある。第125図73の例からすると柄の短い手鋸であった可能性もある。

叉鋸 第126図85は叉鋸の破片と考えられる。西川津遺跡の下流部の調査やタテチョウ遺跡出土例からすると歯は6本である。

丸鋸A類 刃部が直線的で、ミカン割材から、広鋸A・B類のようにあらかじめ1枚ずつ切り離した材から製作した丸鋸をA類として分類した。ミカン割材とした第112図7はその1枚にあたるかもしれない。第113図11、第128図90・91、第129図93・94はその加工途中のもので、11・90は裏面に把りを入れつつある段階のもので、91・93・94はそれより少し以前の段階のものである。いずれも端部や両面には粗い加工痕がみられる。93の場合、長さ42.0cm、幅23.5cm、隆起部での厚さ6.3cmある。第133図109はこの種の完成品であるが、全体に加工は粗い。隆起部の孔のあけ方から、鋤と同様な柄の装着方法であったことが知られる。長さは34.8cm、幅25.8cmを測る。110は孔が貫通しているが、仕上げはみられないで、穿孔途中のものが破損したと考えられる。

丸鋸B類 ミカン割材において、3枚の丸鋸をかなりの段階まで切り離さないままに加工を施した製作方法で、刃部が丸い形状のものを丸鋸B類とした。

ミカン割材を加工しはじめた例としては、第141図160、第127図88・89がある。このうち、160は長さ1.04m、幅29cmで3枚の丸鋸を製作しようとしている好例である。柄を装着する隆起を削り出し、その周辺には著しく加工痕がみられる。中央のものの両端に、「V」字状に溝を加工し切断しようとしているが、未だその裏面には何ら加工痕はみられない。しかし、長軸方向の両サイドにはそれぞれ2か所ずつ「V」字状の切れ込みを入れてあり、両端は既に丸味を帯びた加工が施してある。88・89は160より加工の進んだ段階であるが、まだ切り離しは行われていない。刃部も丸味をやや帯び、裏面の抉りがはじまっている。89の隆起部はかなり明確になっている。

ミカン割材から切り離しの行われた段階のものとしては92・95・96・97・98がある。両端には切り離しの為の「V」字状の切れ込みが残り、両端も未だ直線的に切り離しの加工痕が残ったままである。97の例をとると長さ33.0cm、幅24.0cm、隆起部の厚さ4.5cmを測る。

98～108はほぼ全体の形状が出来上り、ミカン割材からの切り離し痕はきれいに加工さ

れ、薄くなり、いわゆる圓扇状に整形された段階である。最も出土量がある。105の例をとると長さ33.0cm、幅26.5cmである。

111～114は完成品である。広鉗と同様に欠損品が多い。柄を装着した孔は、いずれも丸鉗A類のそれと同じである。これは、西川津遺跡の下流部やタテショウ遺跡出土例も同様で、広鉗のような装着例はみられないでの、丸鉗の機能はA・B類ともいわゆる鉗ではなく、むしろ鋤であったと考えられる。114には補修孔がみられる。

鋤A類 一本鋤を鉗A類とした。第141図161は未完成品であるが、この種の唯一の出土例である。全長は約1.5m。身の長さ53.4cm、幅20.5cm、握りは「T」字状を呈す。第142図166・167・169・170は一本鋤の材であろう。第137図139・140はこれの完成品が破損したものであろう。140には柄と身を補強するための突帯が中央に作られている。

鋤B類 組み合わせ鋤。第134図、第135図、第136図、第137図、第138図は組み合わせ式の鋤の身と柄を示した。これらは身の形状から4種に大別される。

鋤B₁類 身が二叉になった、いわゆるナスピ形の鋤。118～125がこれにあたる。

鋤B₂類 身の中ほどに二等辺三角形状の孔をもつもの。127～131がこれにあたる。115は鋤B₁類か鋤B₂類の未完成品と考えられる。

鋤B₃類 身がスコップ状となる135・136・137・144・145・146を鋤B₃類とした。このうち、135・144・145・146は完成品で、柄の先端が、身の中央にくくよう、身の中央には溝がつけられているが、貫通していない。145は両側に透しがある。136、137は未完成品であろう。

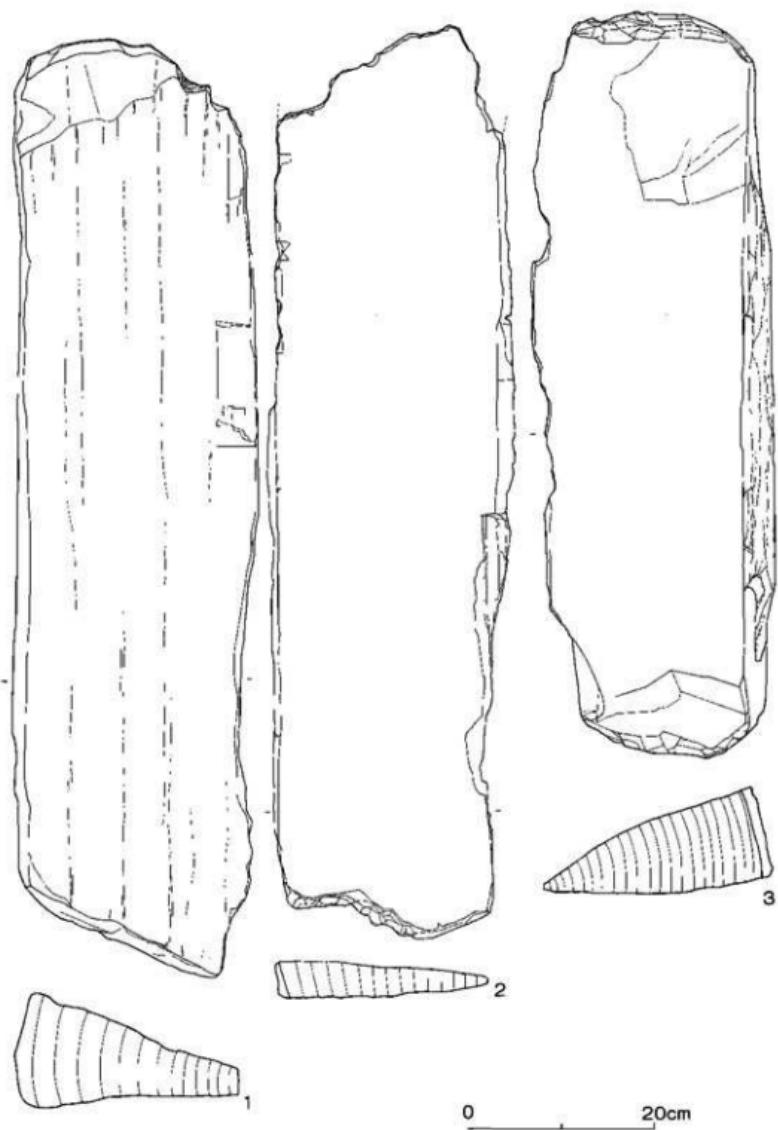
尚、141・142・143は鋤に類似しているが材質はスギやモミであり、また147はカンを使用しているが鋤として機能を果していただかは疑わしい。

116・117・132は以上の鋤の柄と考えられ、116は未完成品である。また87も鉗か鋤の柄と考えられるが前者の可能性が高い。

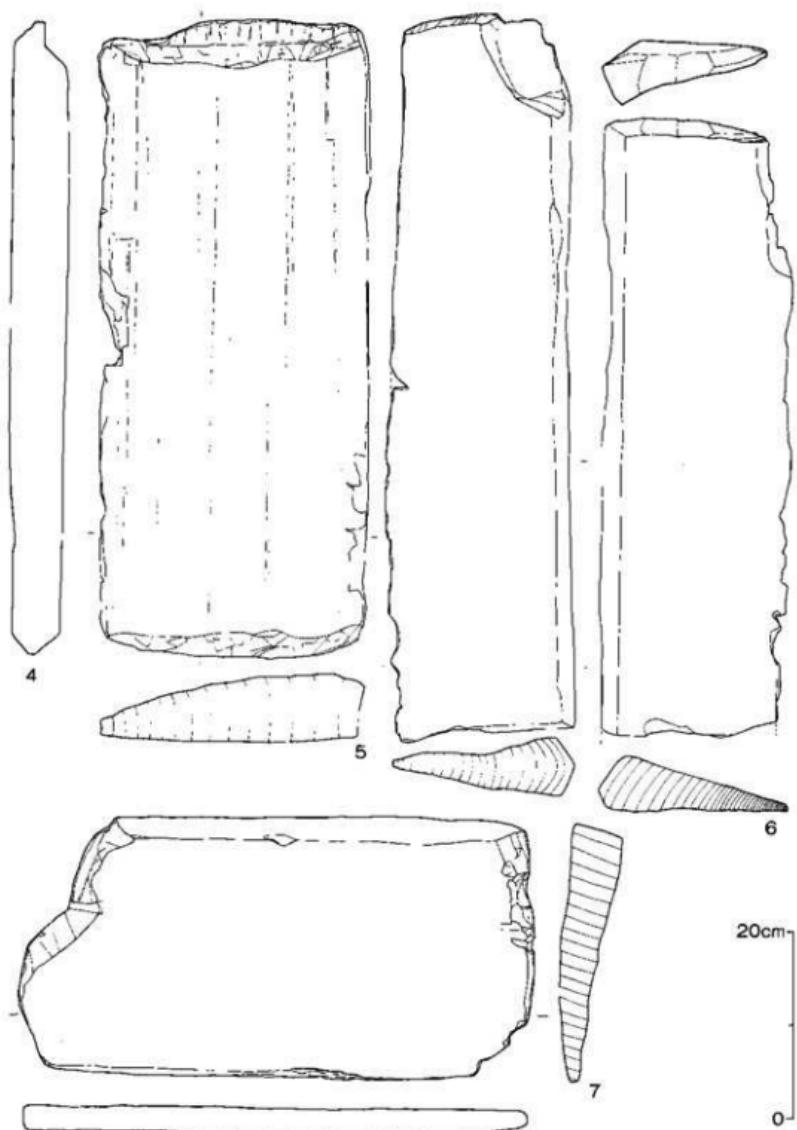
エブリ 第121図54は5本歯のエブリである。長さ27.6cm、幅9.6cm、厚さ2.0cmを測る柄を装着する孔は貫通しているが、その内側や歯の周辺は仕上げが完成されていない。

田下駄 第140図には田下駄と考えられるものを示した。このうち、155・157は大足と考えられる。第144図175や176もこの種に入るかもしれない。また、第145図の板状木製品も田下駄の未完成品の可能性もある。材質もスギが多い。

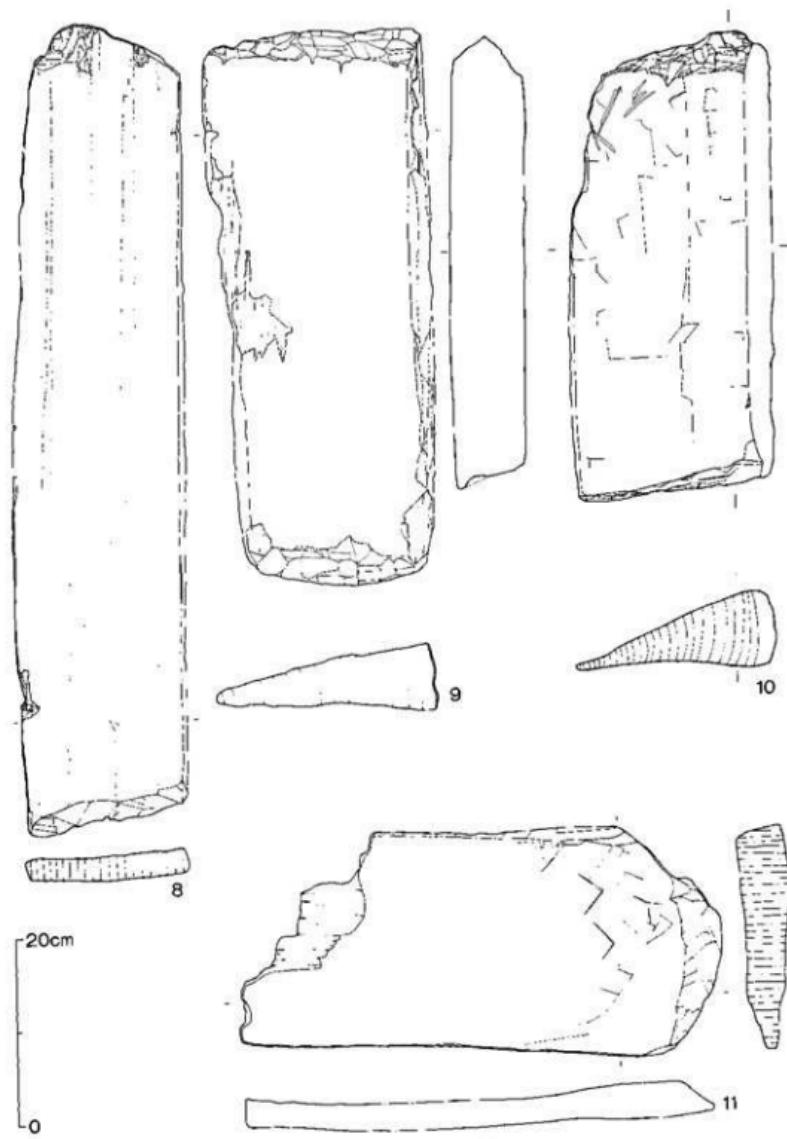
土掘具 第146図184・185は畑での種を播ぐ時に使川する土掘具と考えた。184は長さ29.4cm、185は長さ43.2cmを測る。185を例にとれば両端とも尖らせているので、いずれの端も使用したと思われる。两者とも比較的怪の小さな自然木の枝を柄とし、幹を加工して



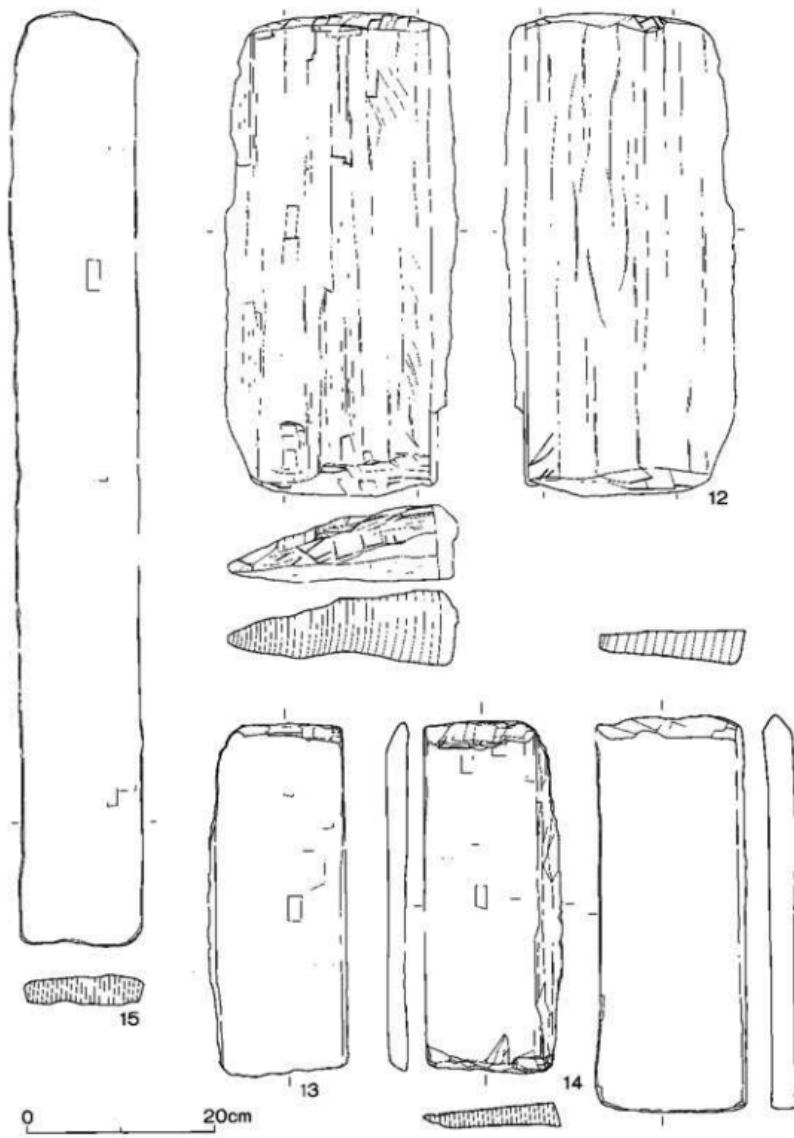
第111図 木製品実測図(1)



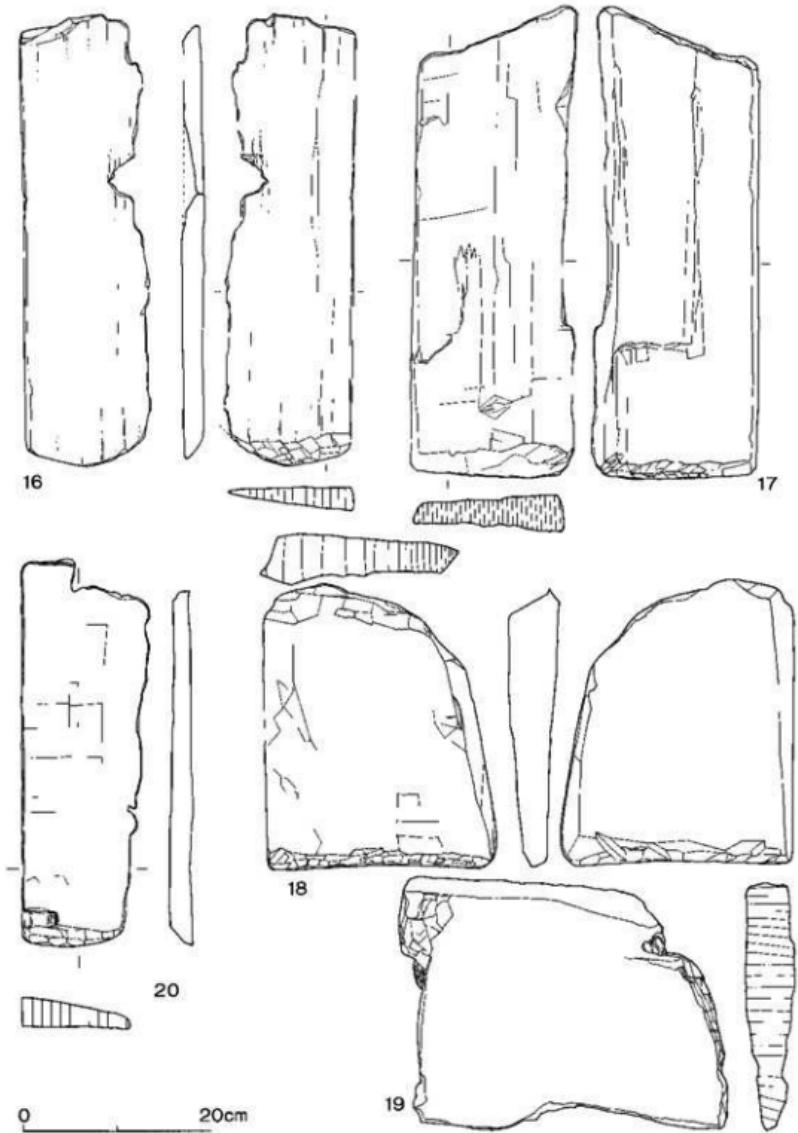
第112図 木製品実測図(2)



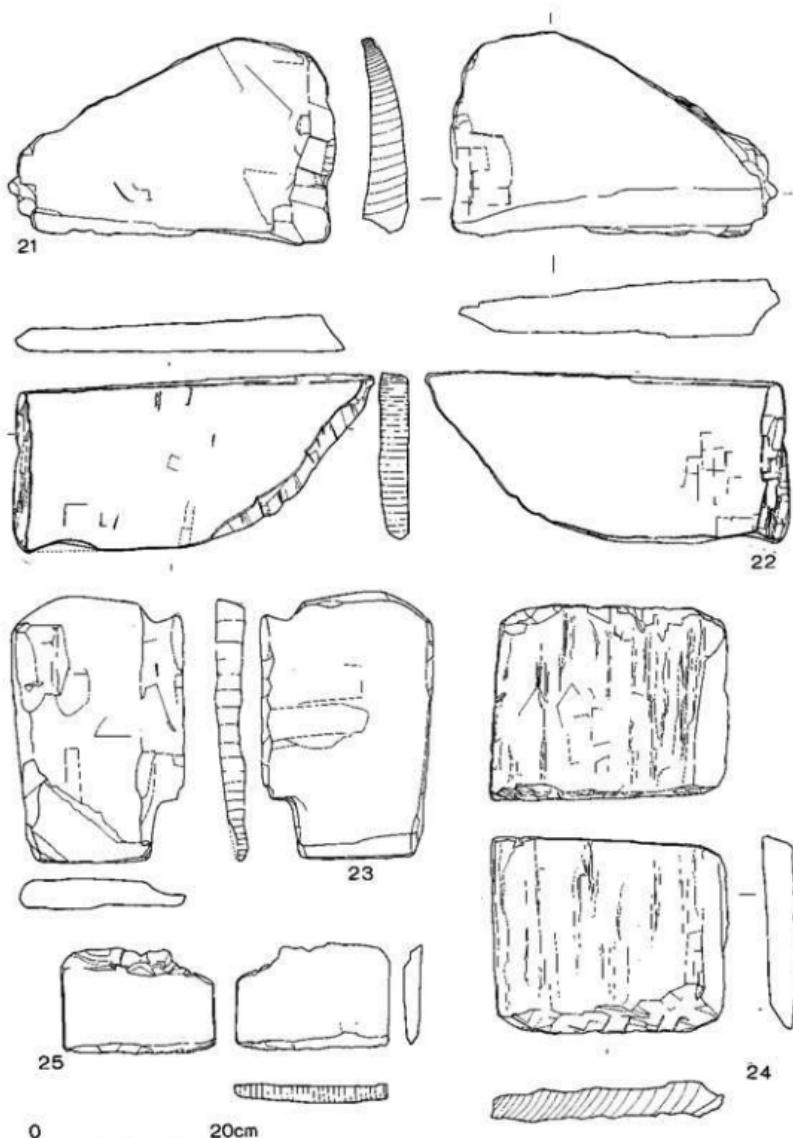
第113図 木製品実測図(3)



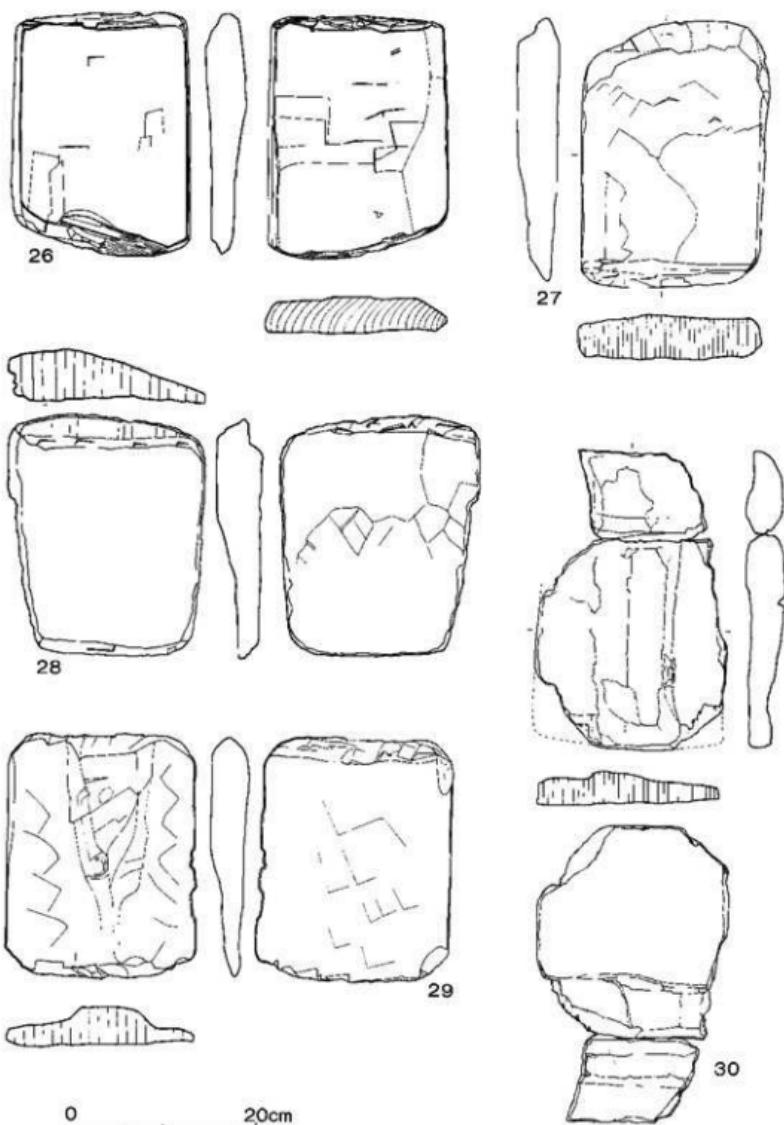
第114図 木製品実測図(4)



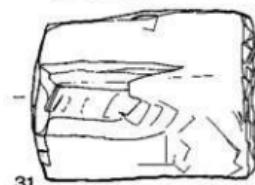
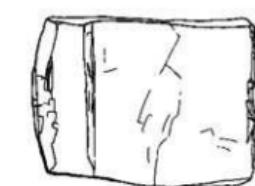
第115図 木製品実測図(5)



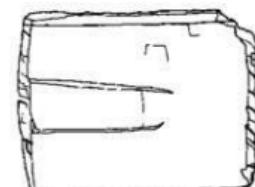
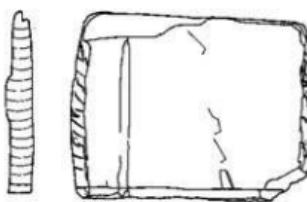
第116図 木製品実測図(6)



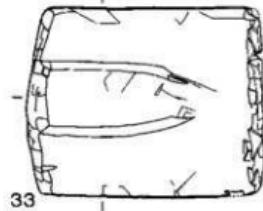
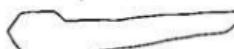
第117図 木製品実測図(7)



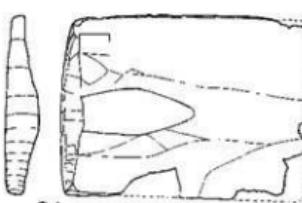
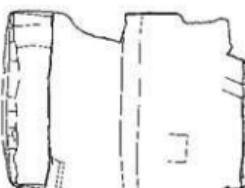
31



32



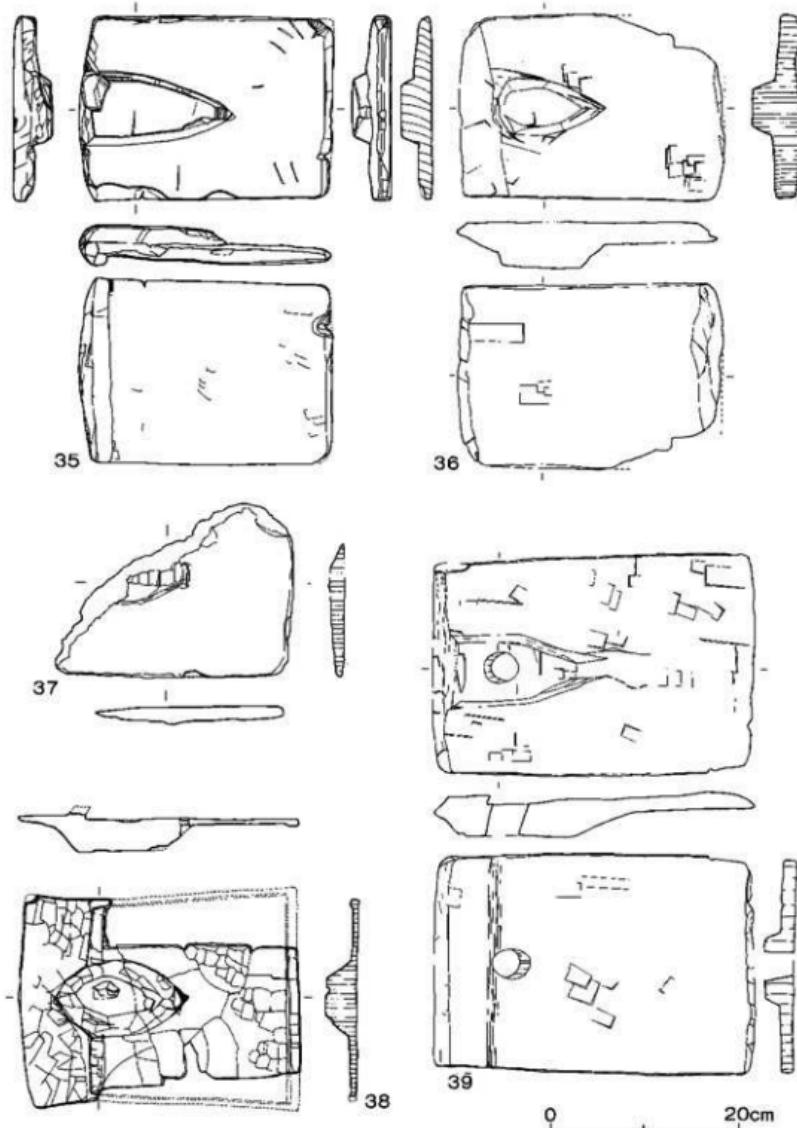
33



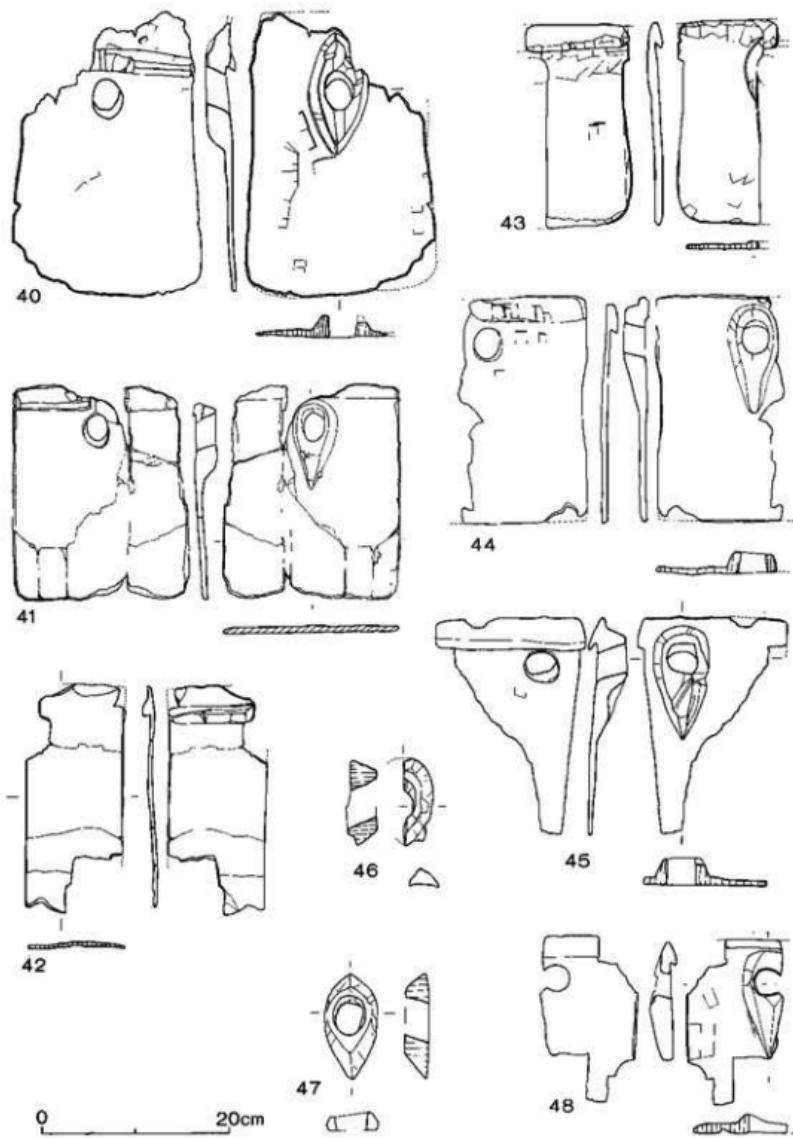
34

0 20cm

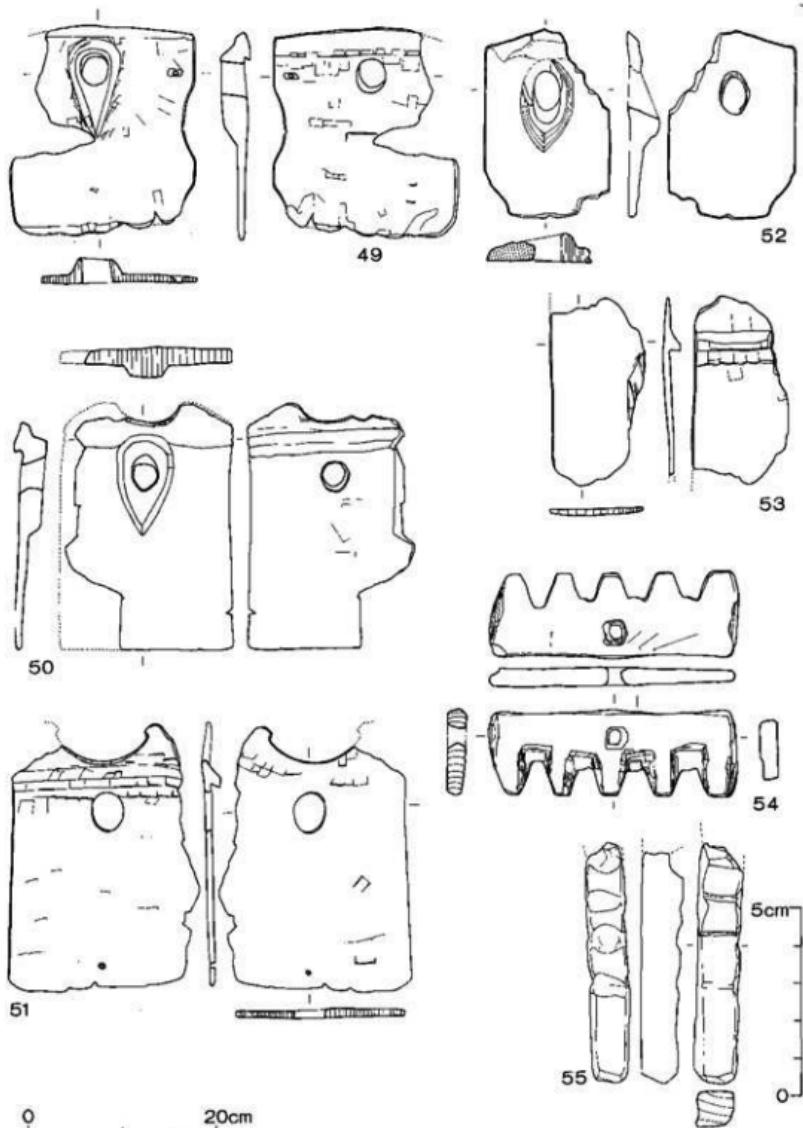
第118図 木製品実測図(8)



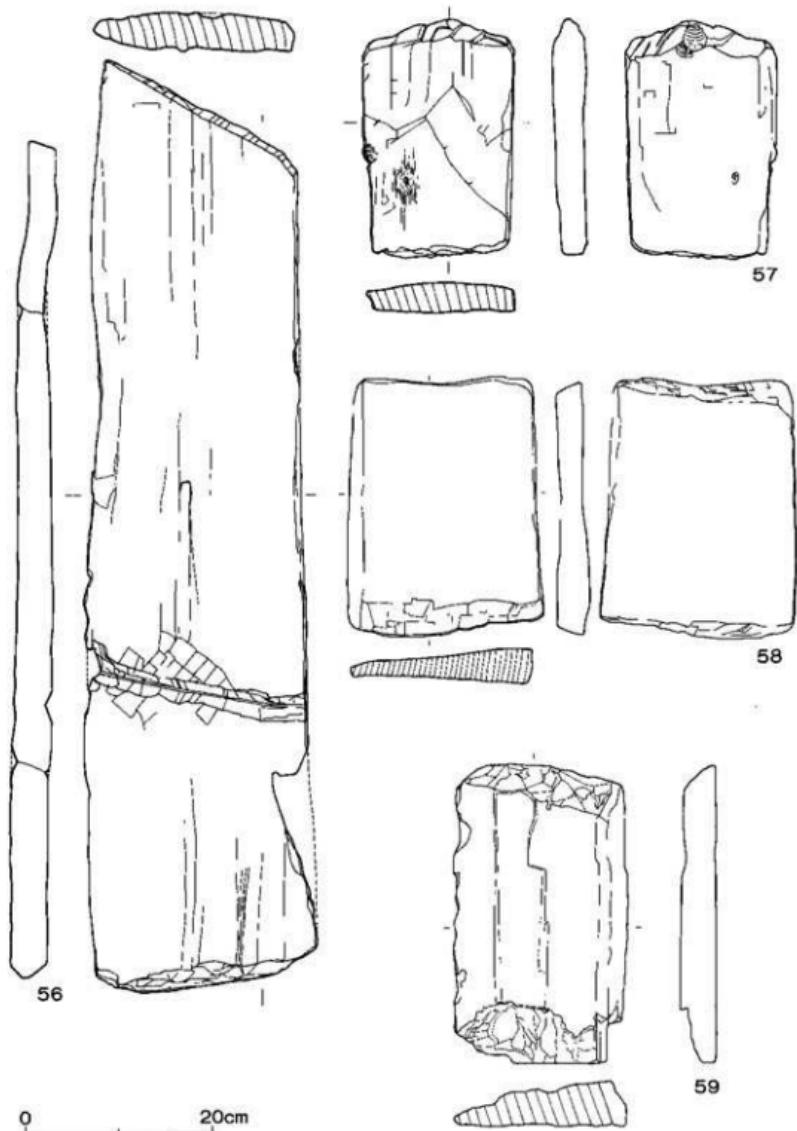
第119図 木製品実測図(9)



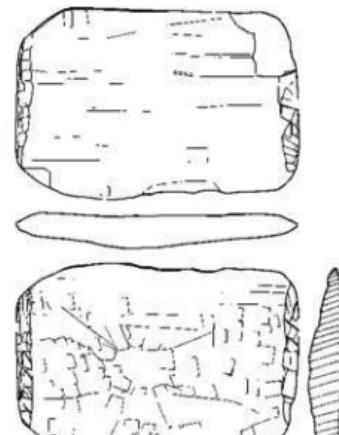
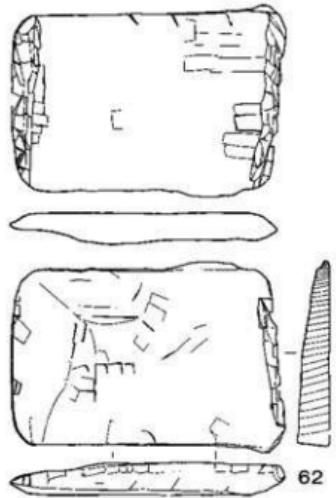
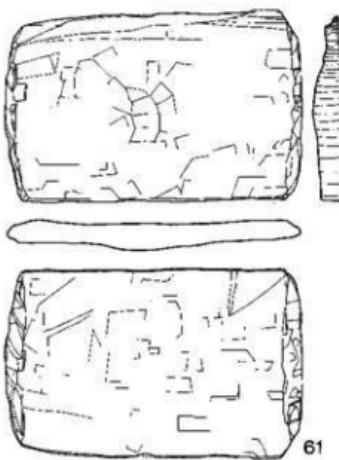
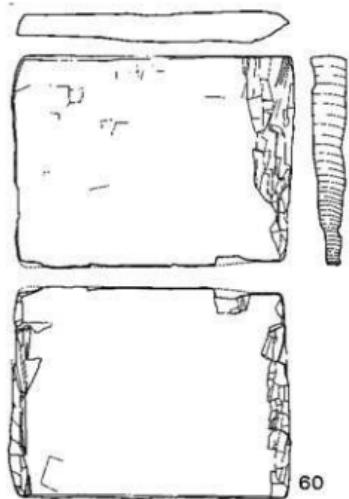
第120図 木製品実測図(10)



第121図 木製品実測図(11)

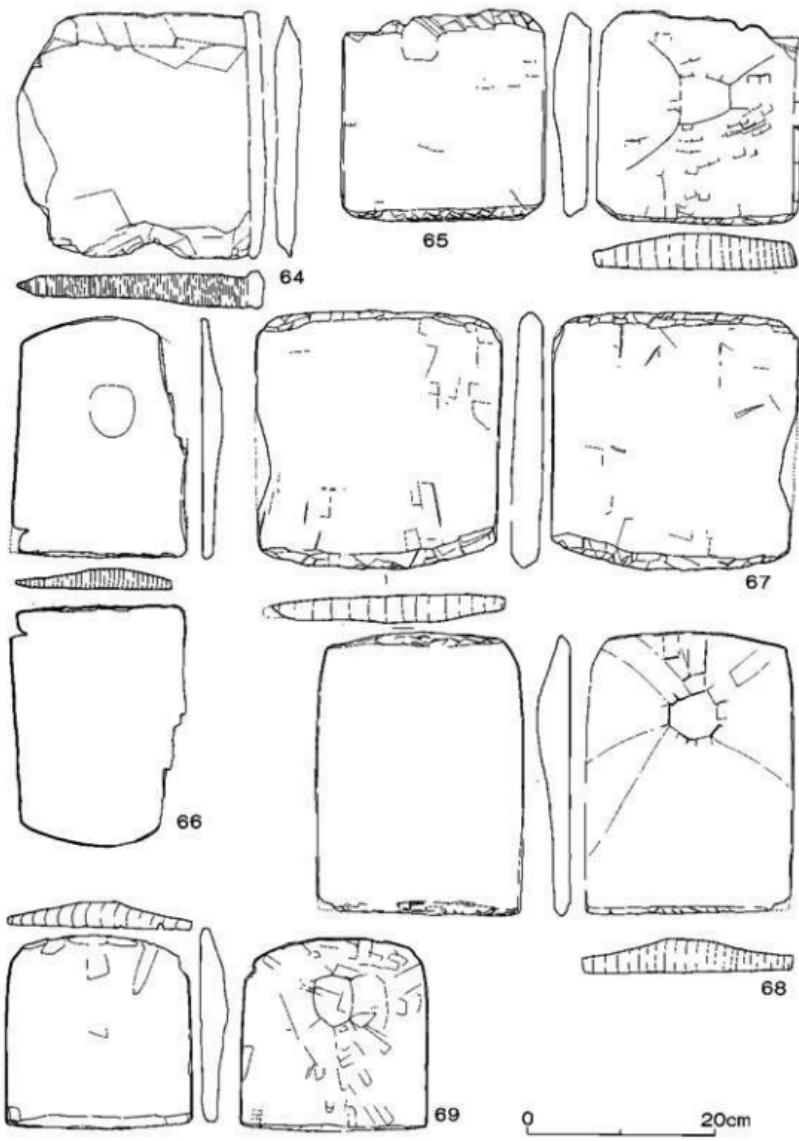


第122図 木製品実測図(12)

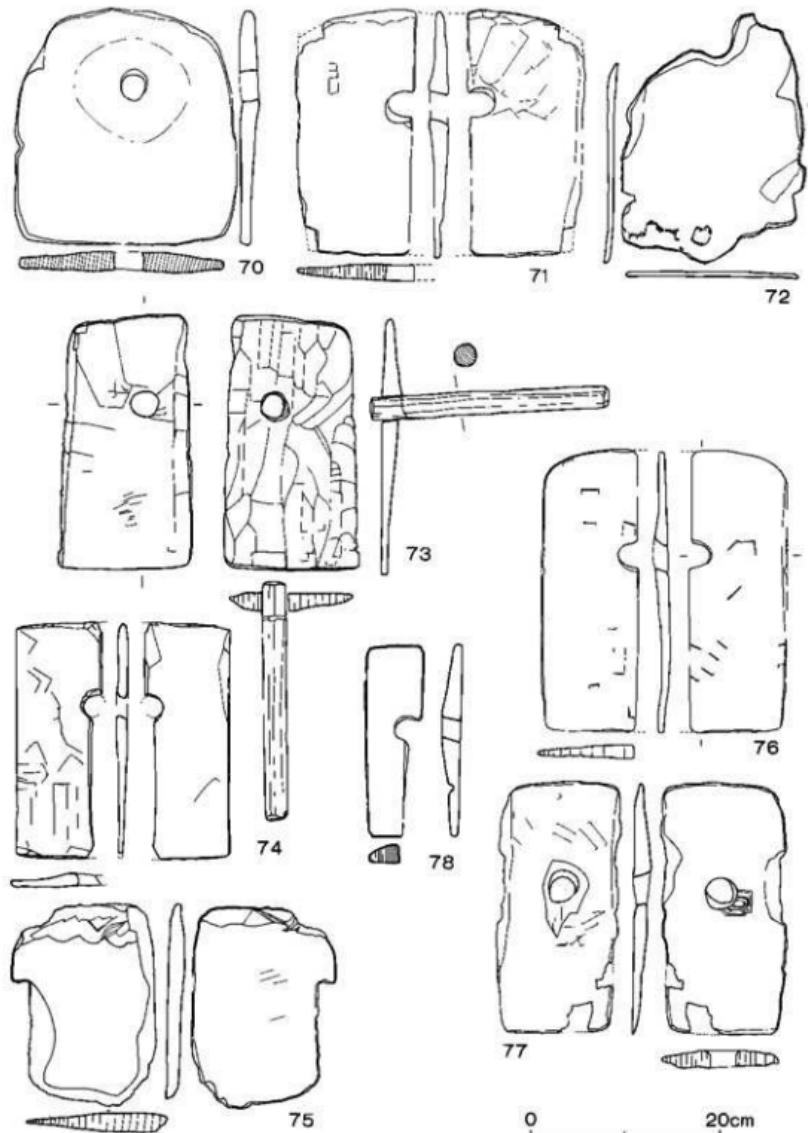


0 20cm

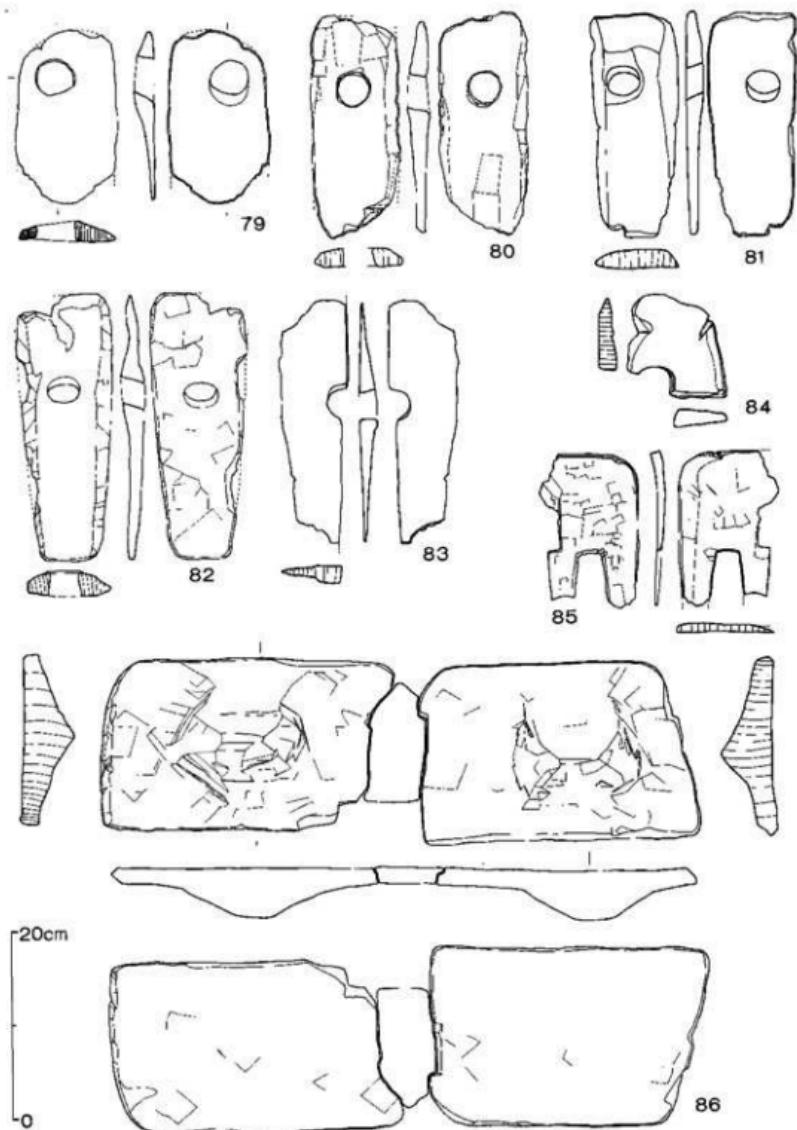
第123図 木製品実測図(13)



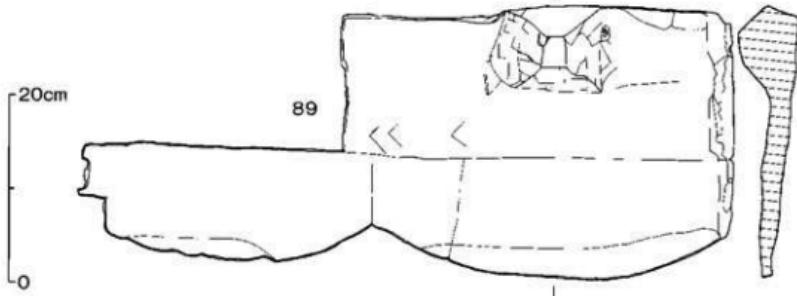
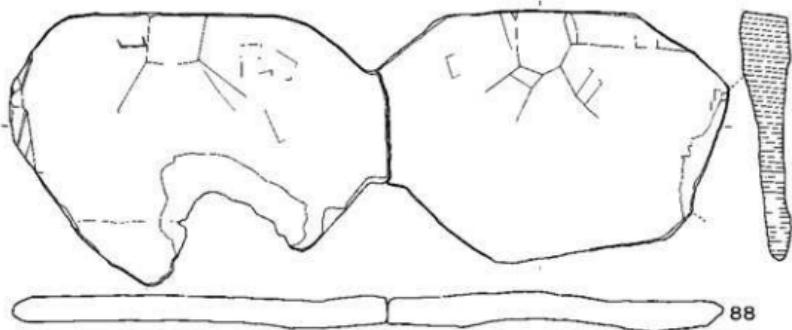
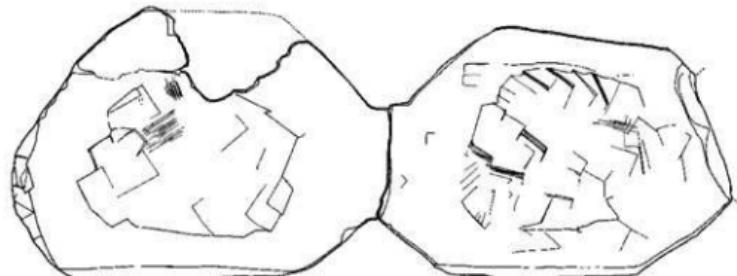
第124図 木製品実測図(14)



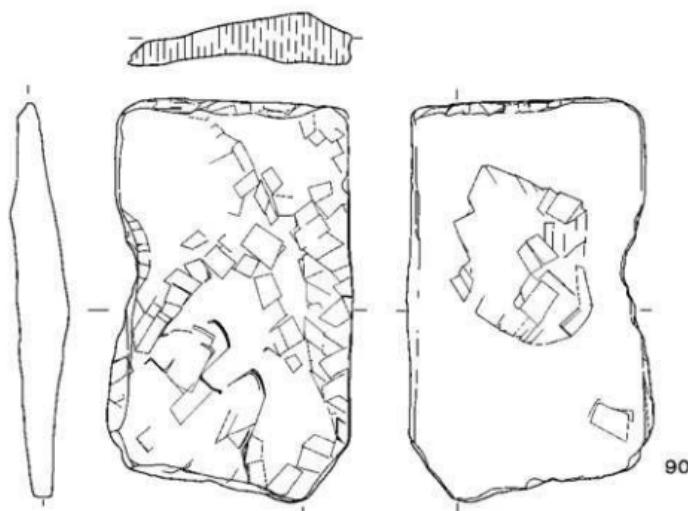
第125図 木製品実測図(15)



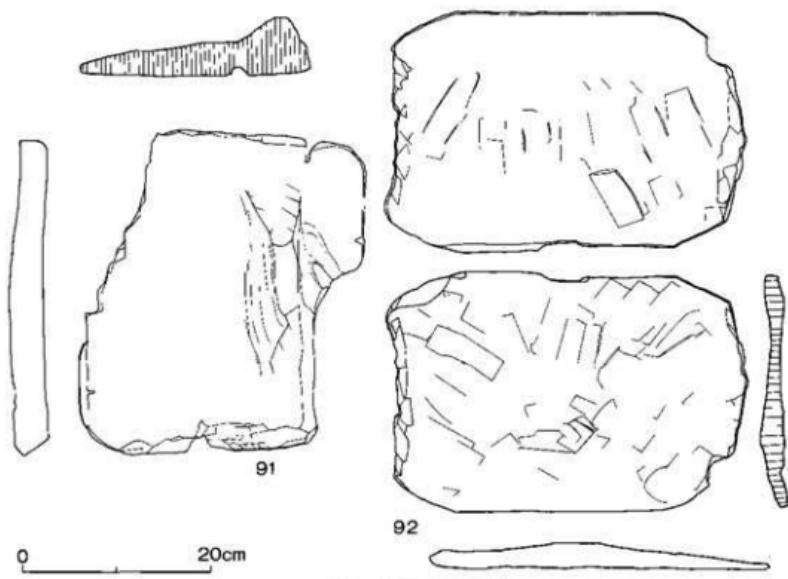
第126図 木製品実測図(16)



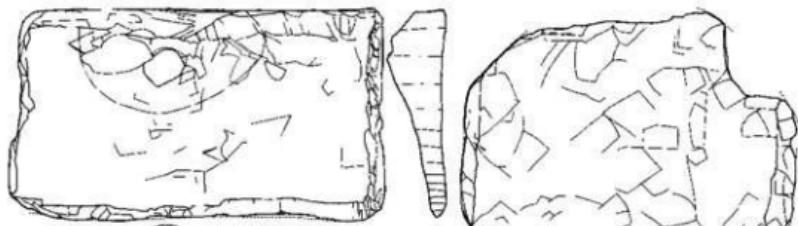
第127図 木製品実測図(17)



90



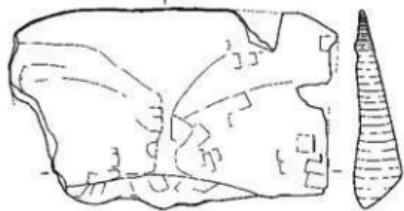
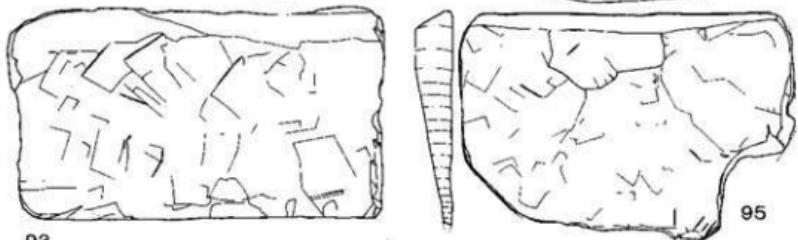
第128図 木製品実測図(18)



93

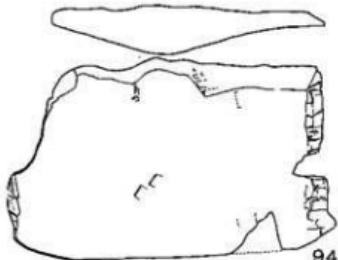


95

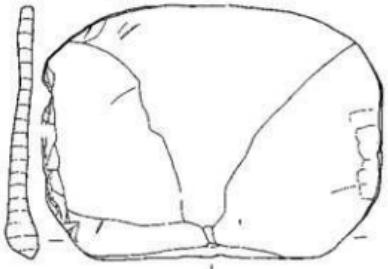


0

20cm

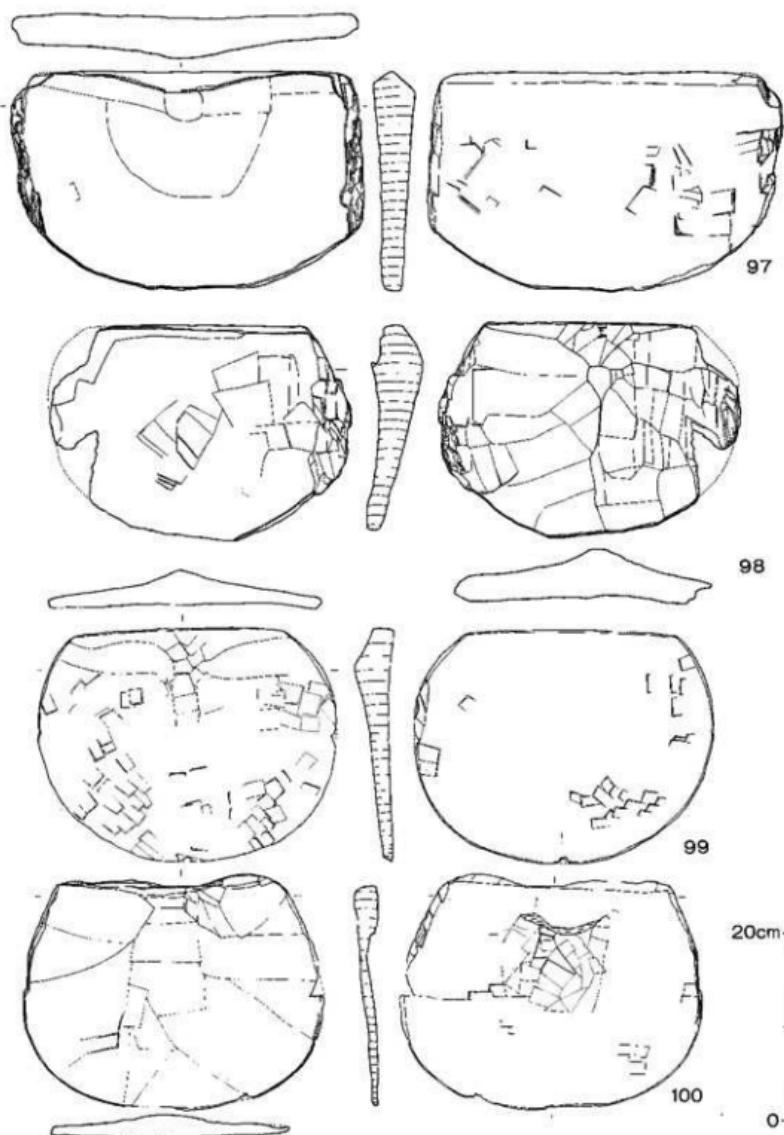


94

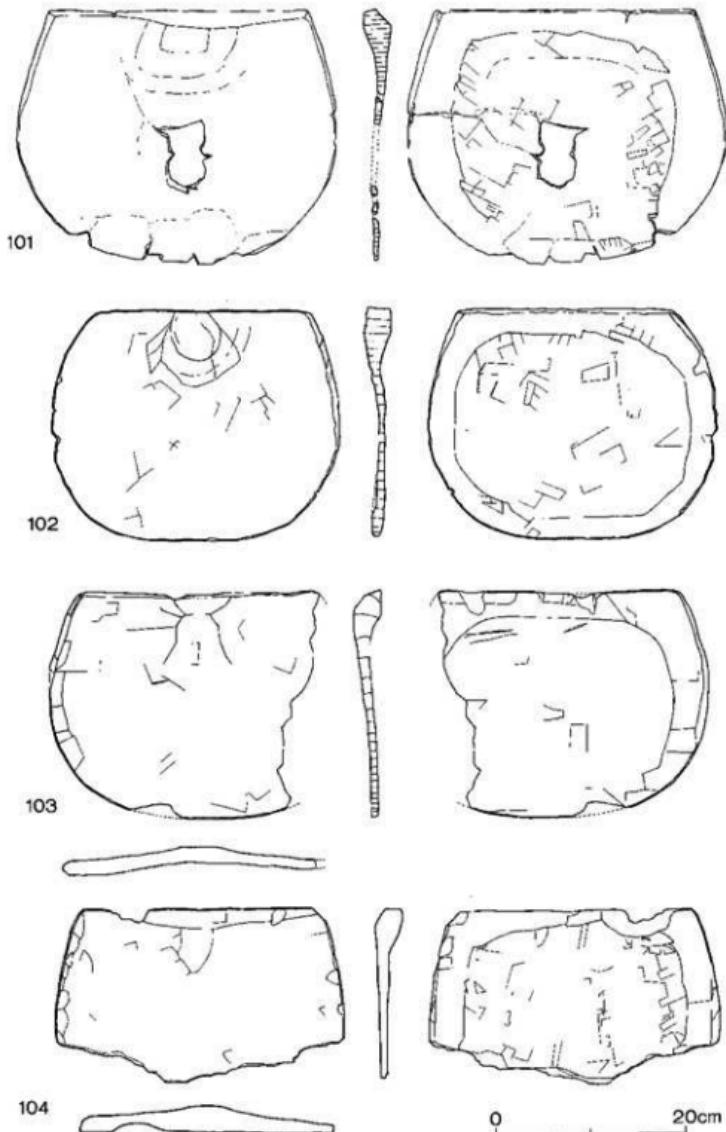


96

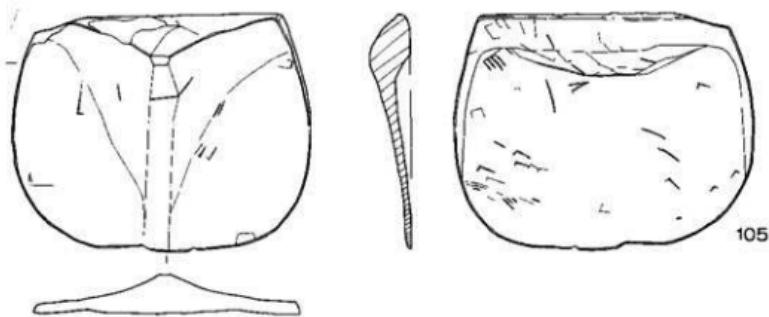
第129図 木製品実測図(19)



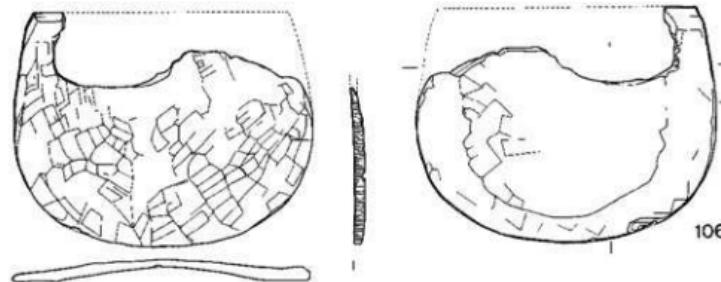
第130図 木製品実測図(20)



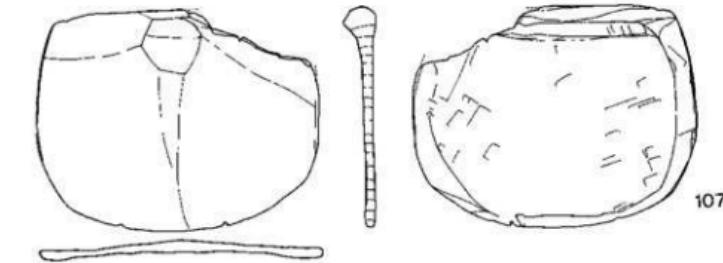
第131図 木製品実測図(21)



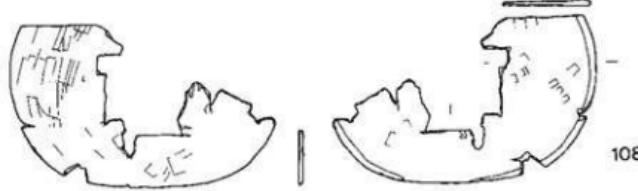
105



106



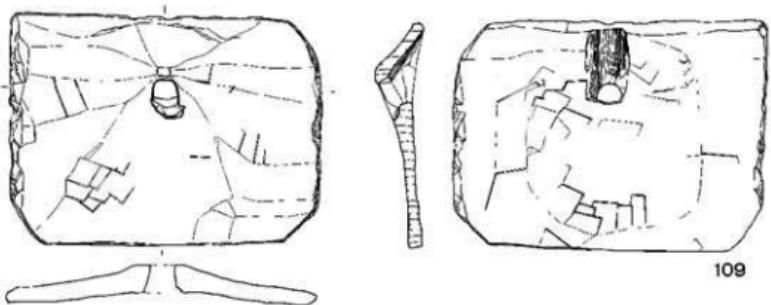
107



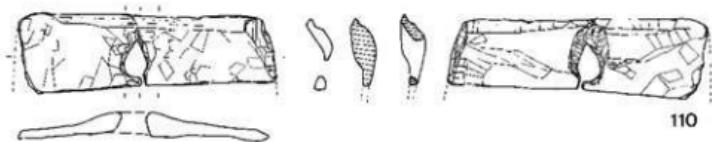
108

0 20cm

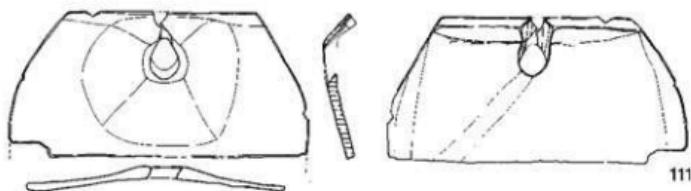
第132図 木製品実測図(22)



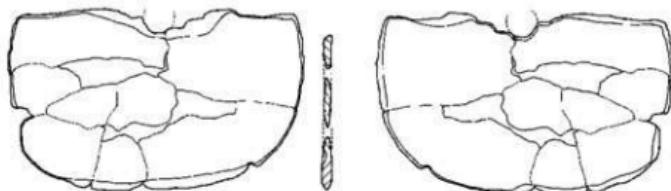
109



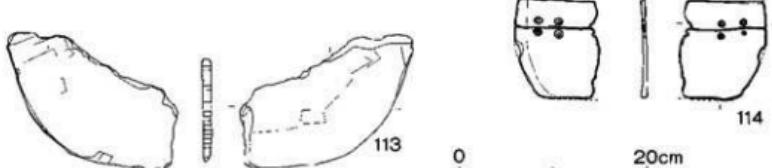
110



111



112



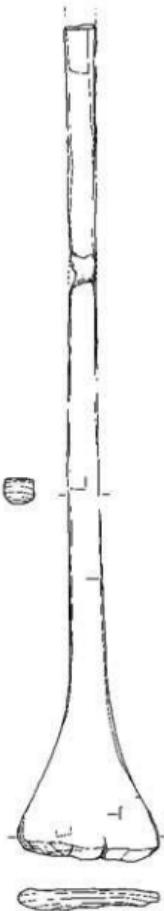
113

0 20cm

第133図 木製品実測図(23)



115



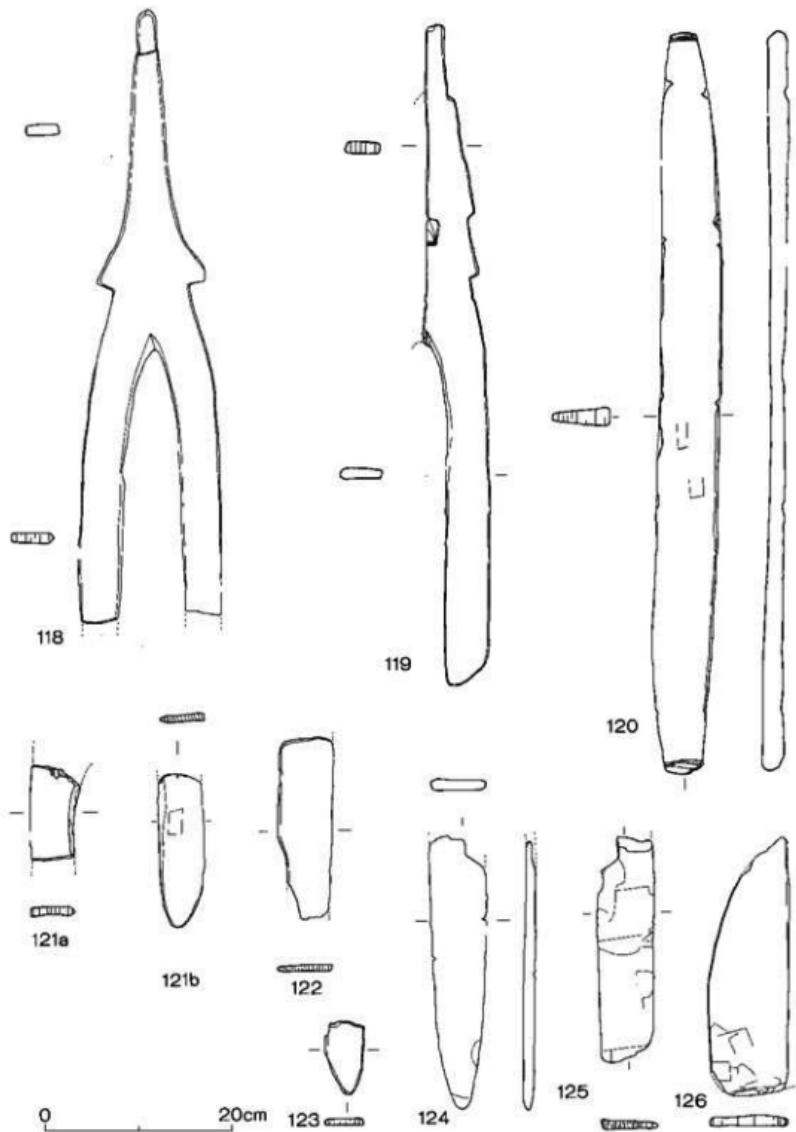
116



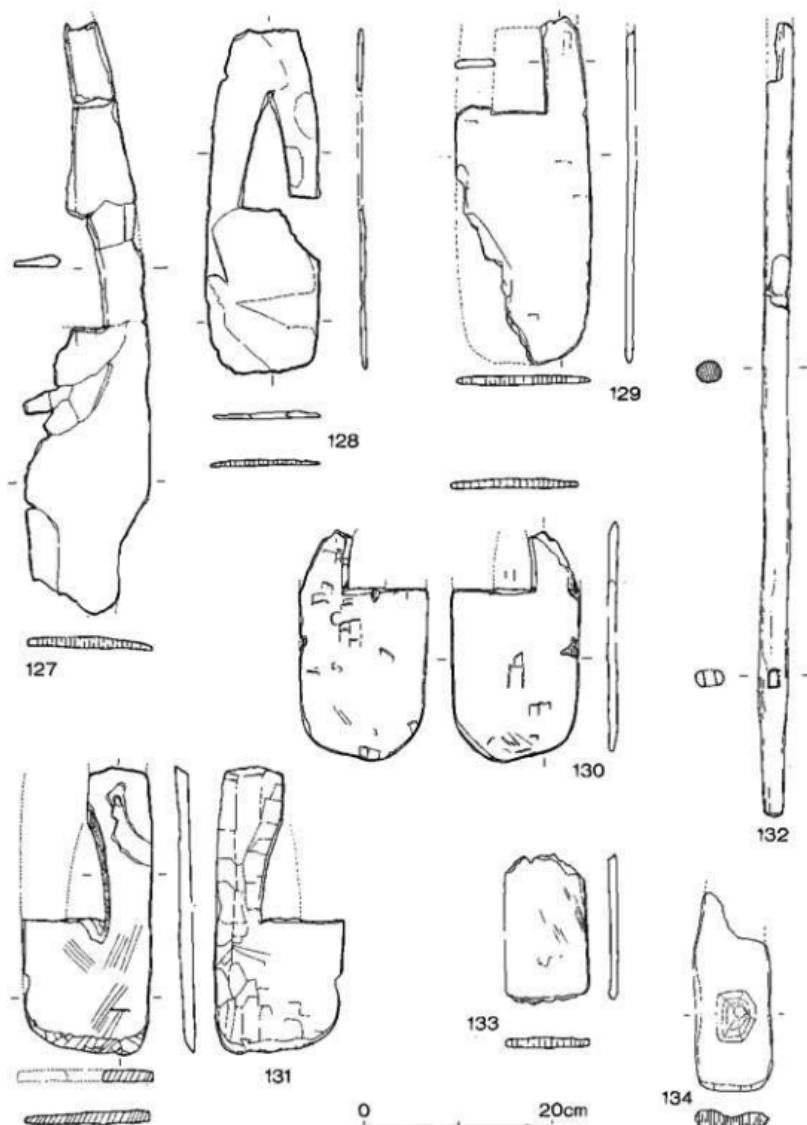
117

0 20cm

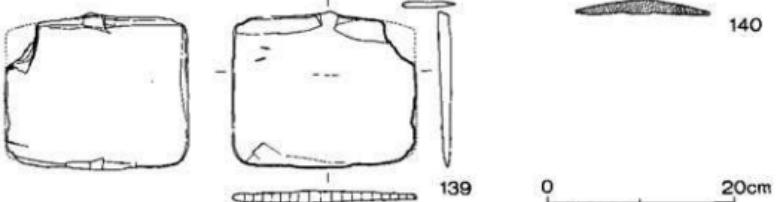
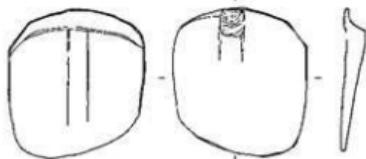
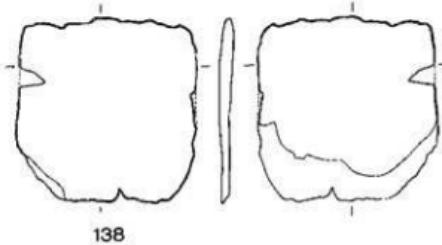
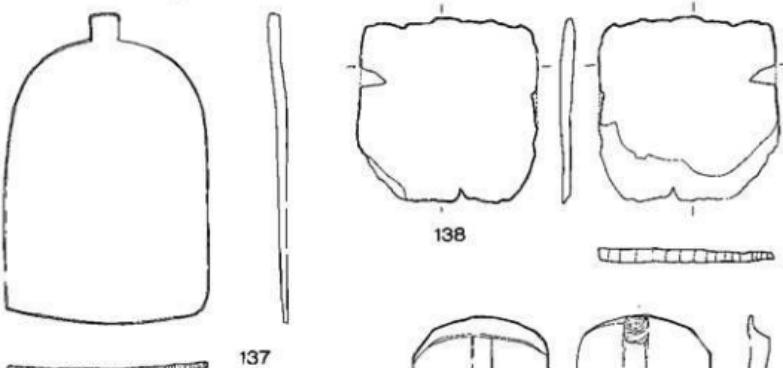
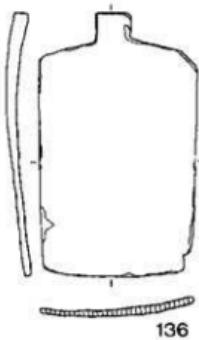
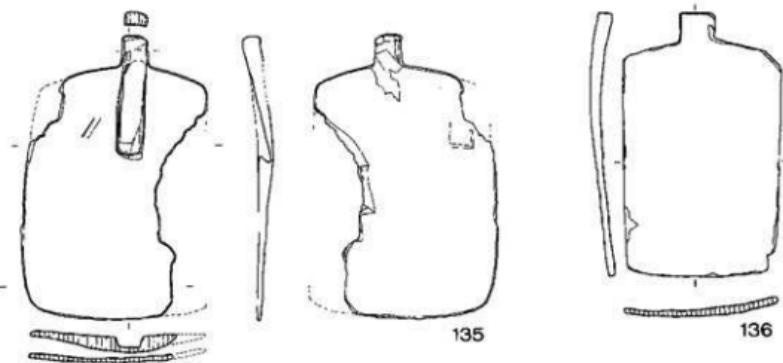
第134図 木製品実測図(24)



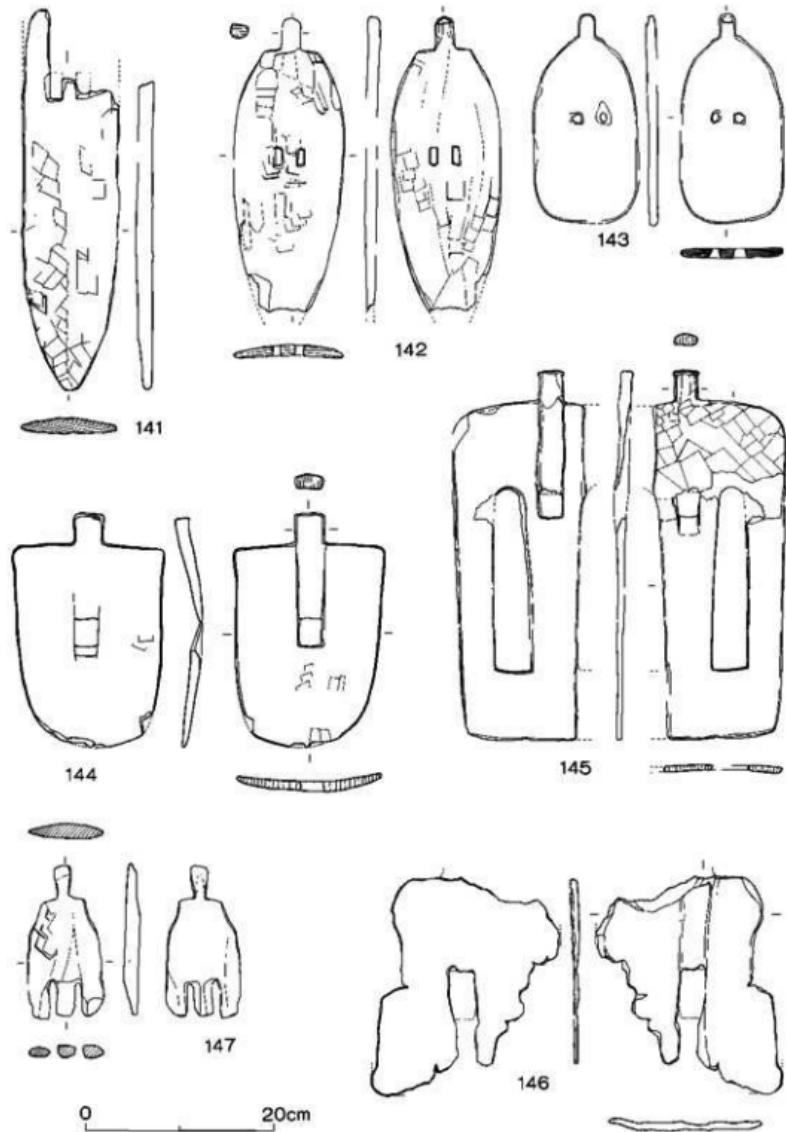
第135図 木製品実測図(25)



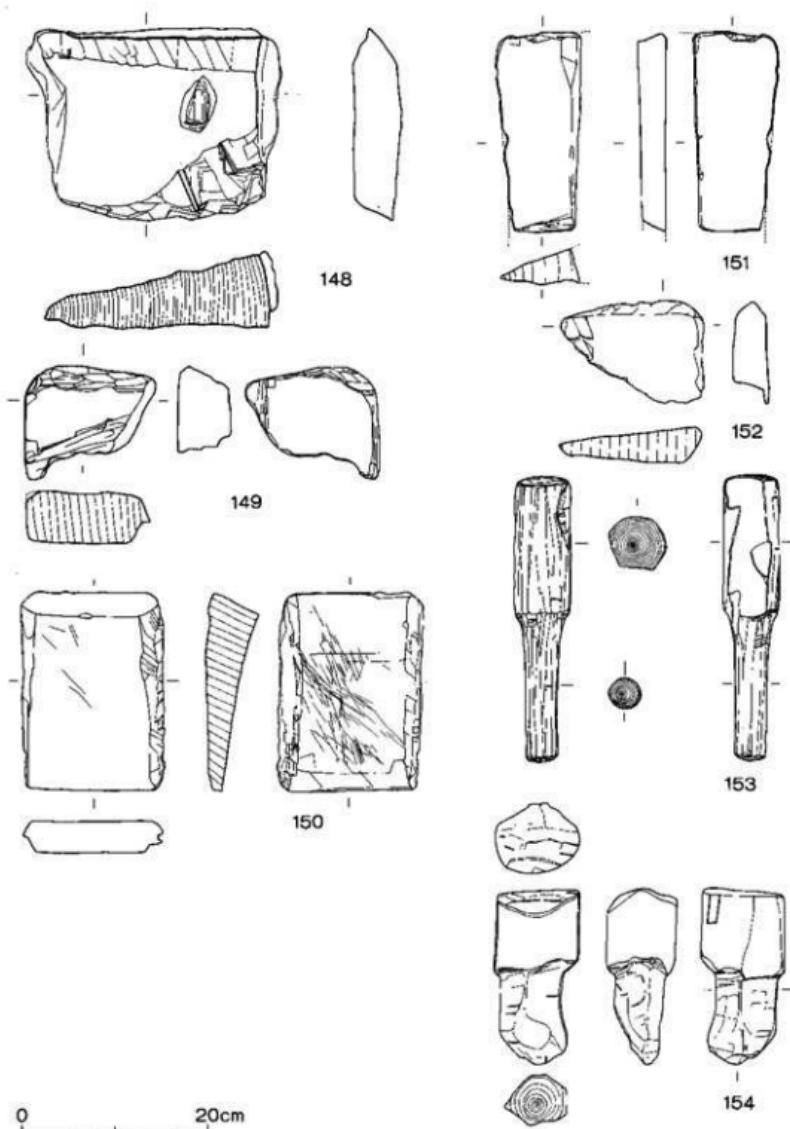
第136図 木製品実測図(26)



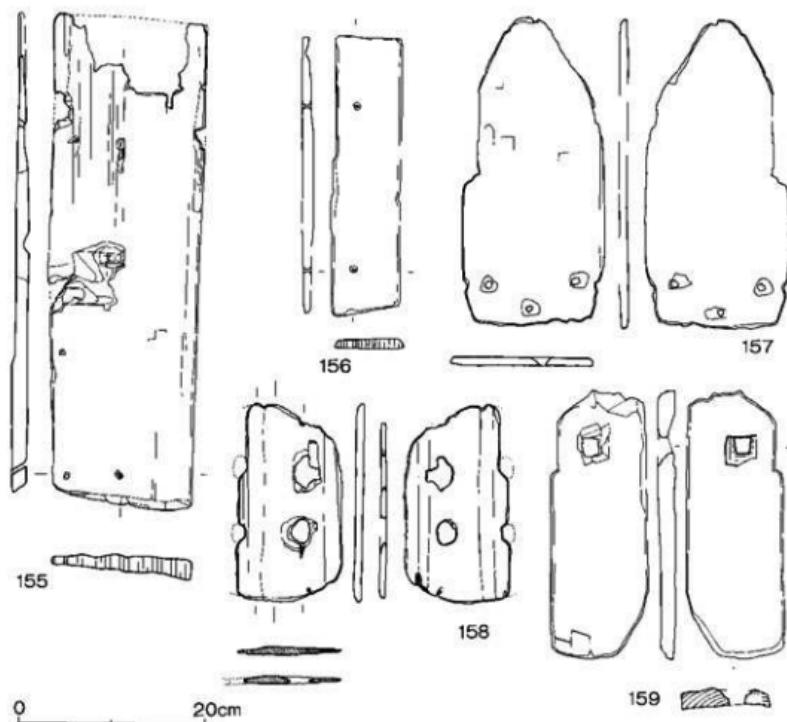
第137図 木製品実測図(27)



第138図 木製品実測図(28)



第139図 木製品実測図(29)



第140図 木製品実測図(30)

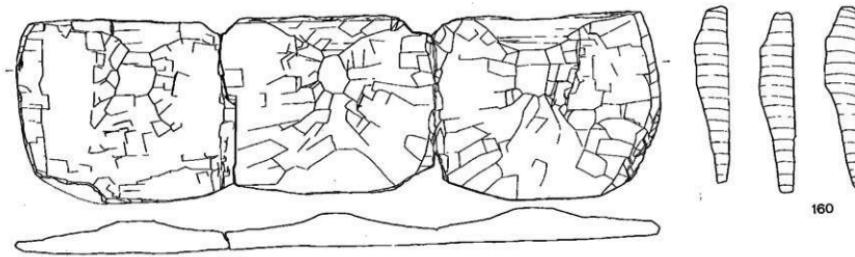
尖らせている。

砧(横樋) 153は砧の完成品で、長さは32.4cm。使用の為に一部凹みができる。154は小形の砧の未完成品であろうか。砧としてはやや疑わしい。

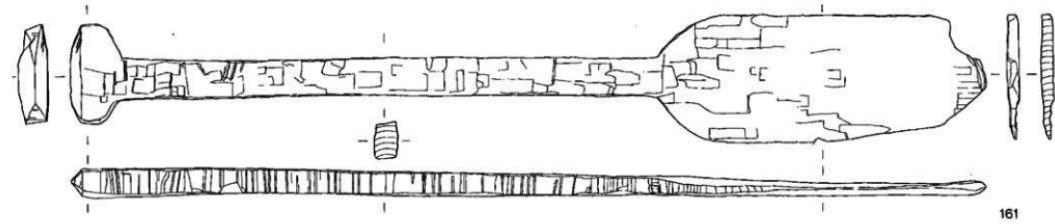
b. 漁撈具

第143図171と172はタモ杵である。完成品である172は長さ56.0cm、柄は約30cmを測る。二叉の木を利用し、枝の両端を細く削り約7.0cmほど重ねて釣の杵としている。重なりあり枝の先端には紐で縛った痕が残っている。柄の一面が半円に削られているのは、場合によっては、さらに長い柄をつないで使用した為と考えられる。171もほぼ同様なタモ杵の未完成品である。

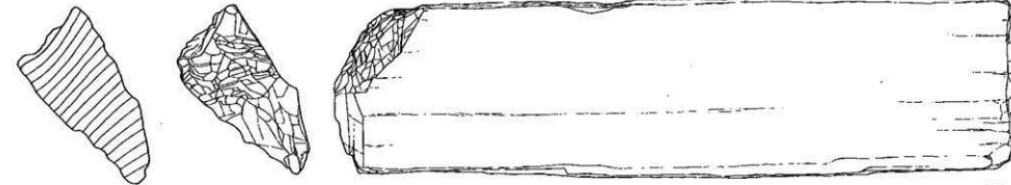
c. 建築関係材



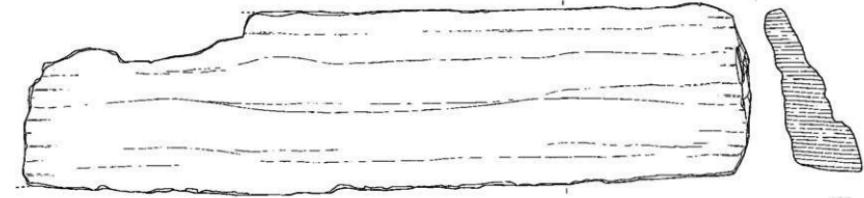
160



161



162

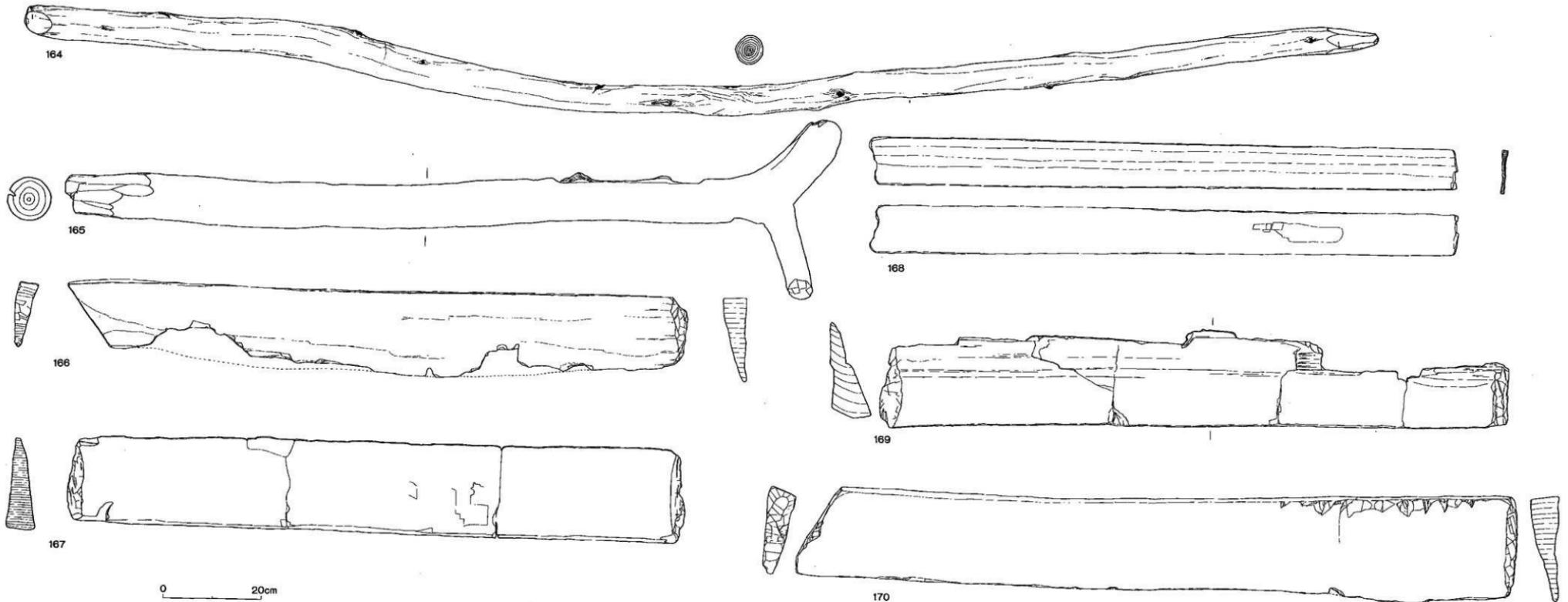


163

0 20cm

第141図 木製品実測図(31)

-177- ~ -178-

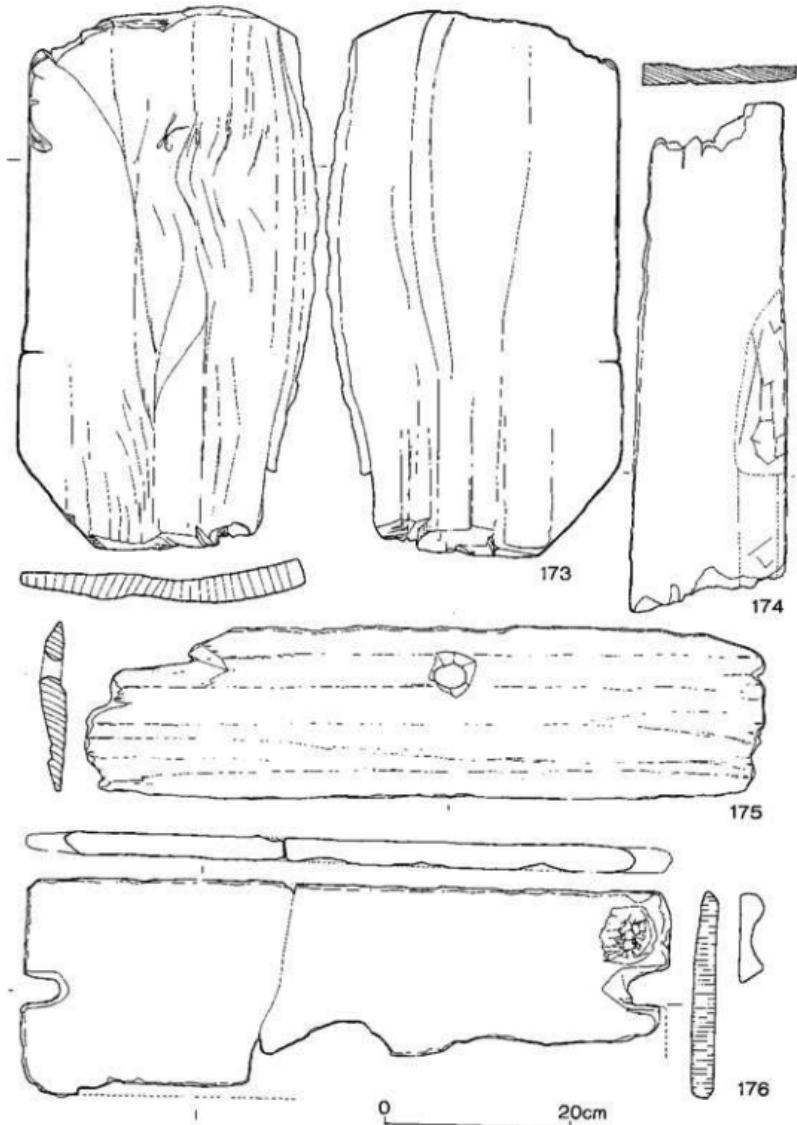


第142圖 木製品実測図(32)

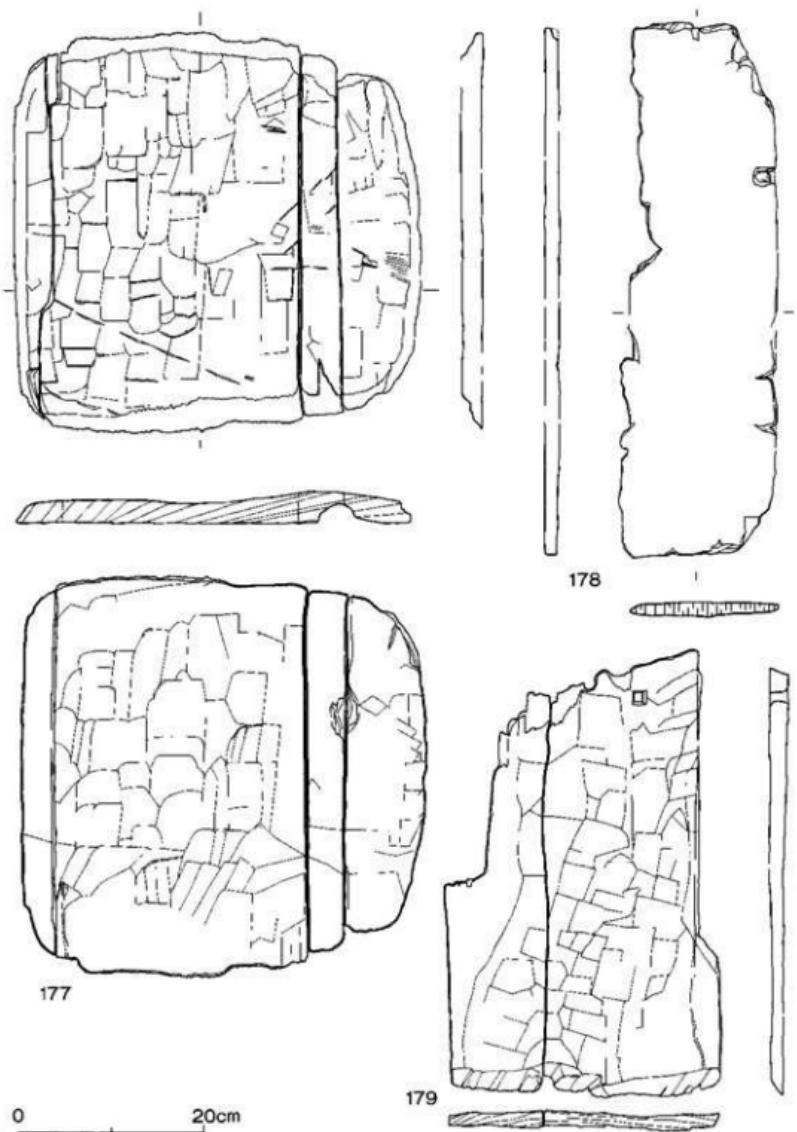


0 _____ 20cm

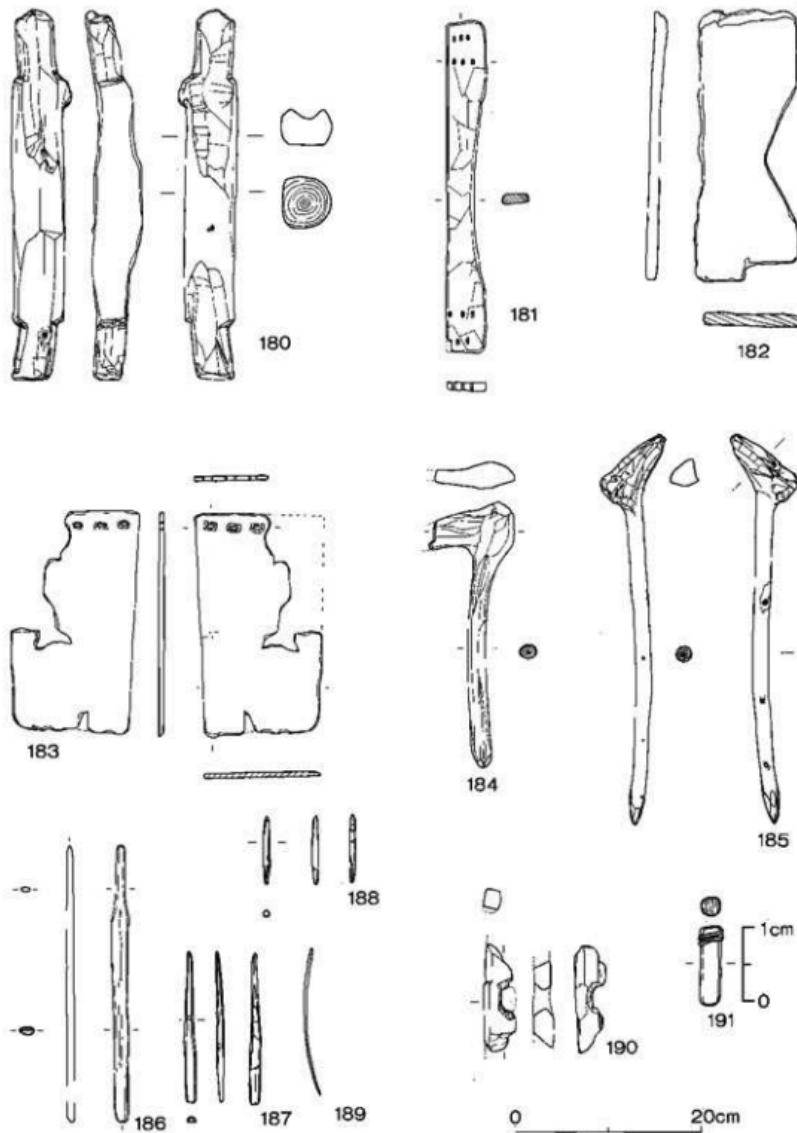
第143図 木製品実測図(33)



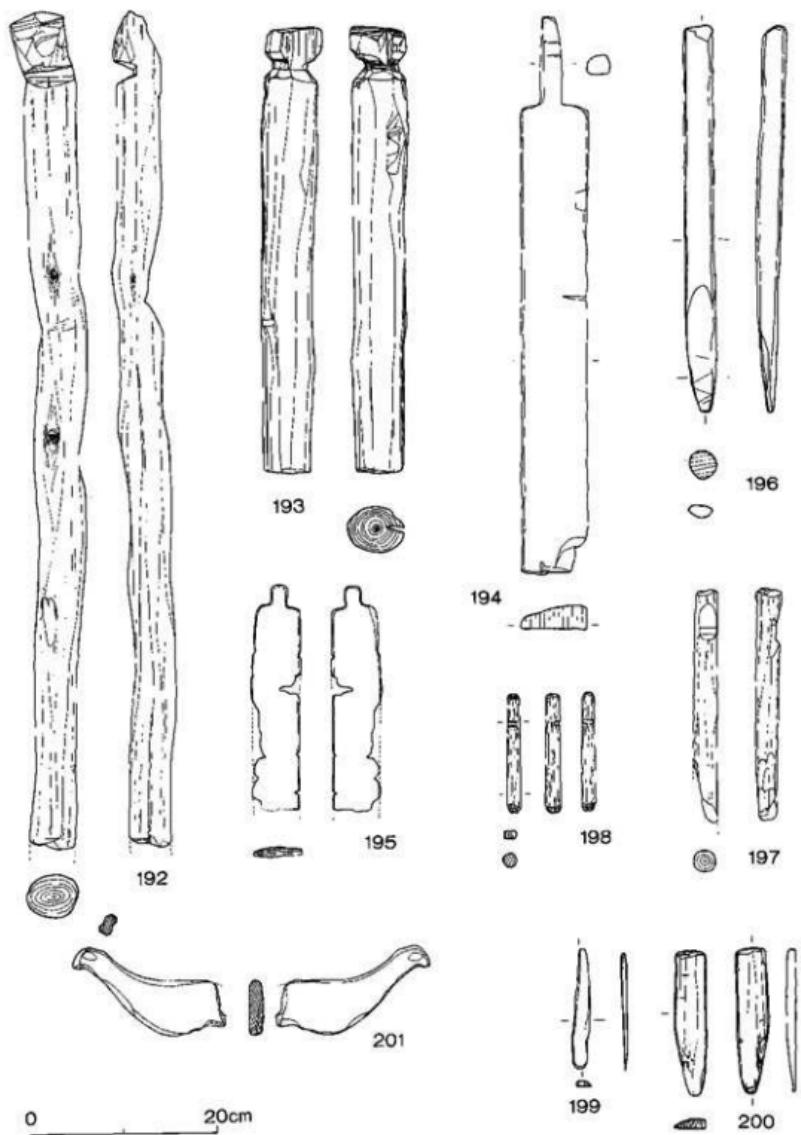
第144図 木製品実測図(34)



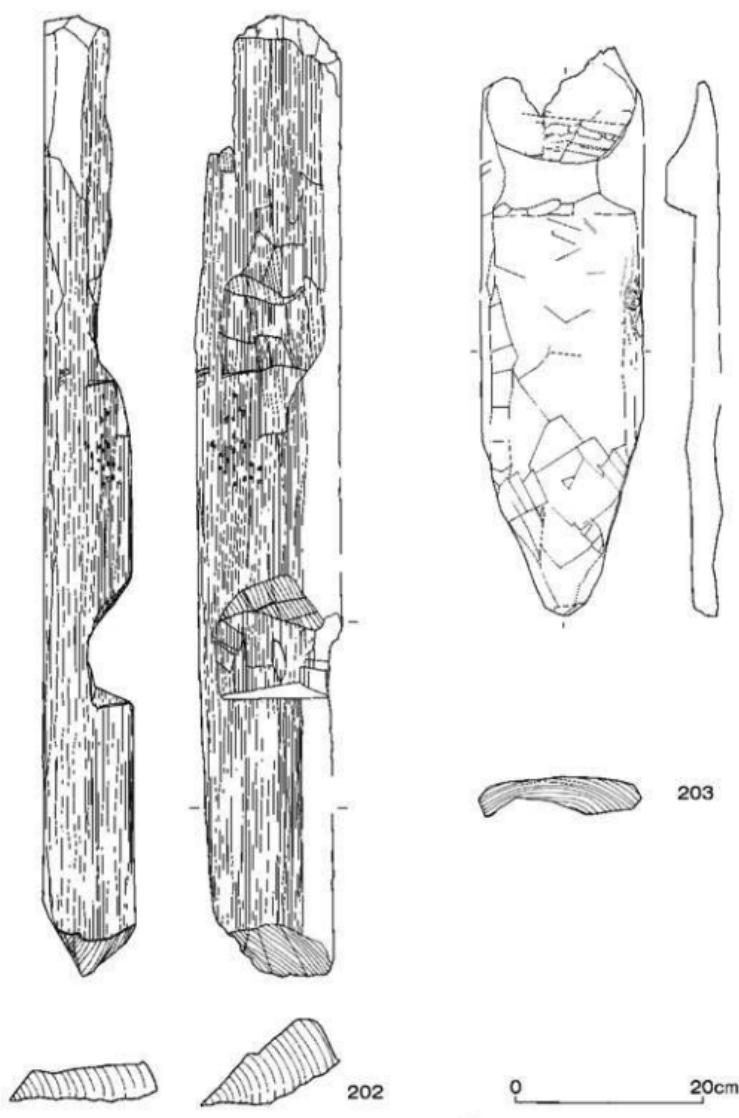
第145図 木製品実測図(35)



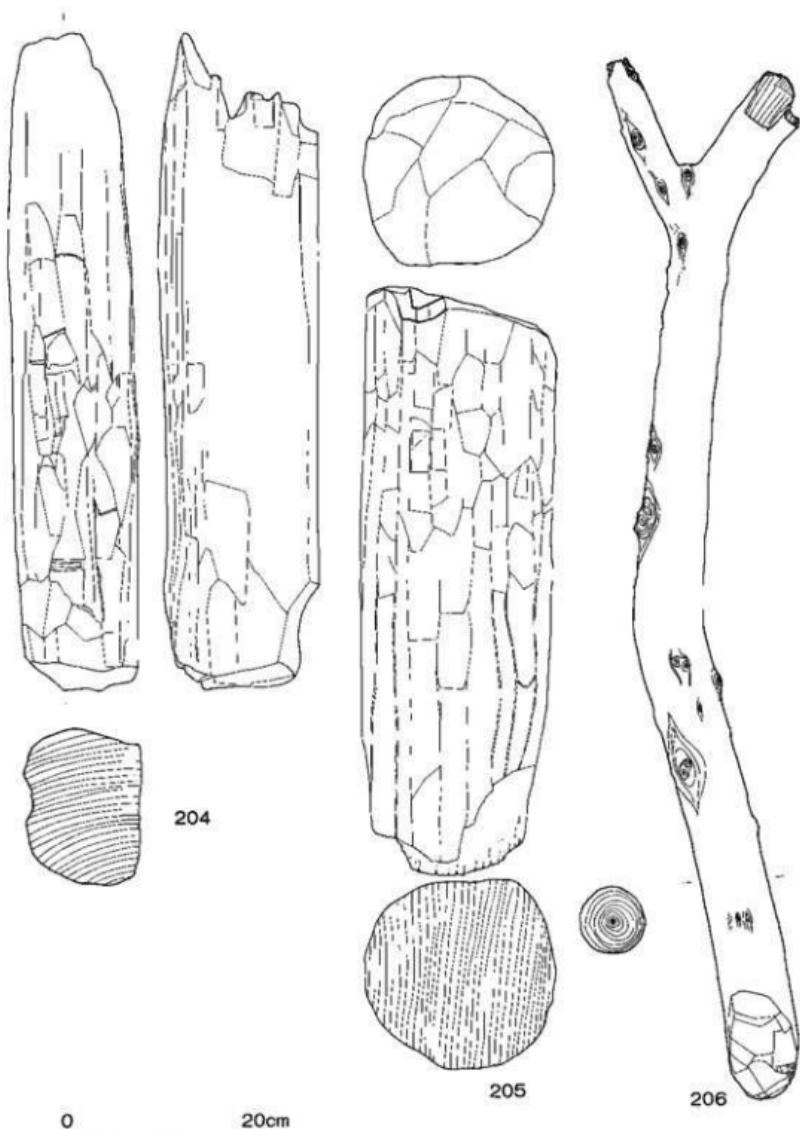
第146図 木製品実測図(36)



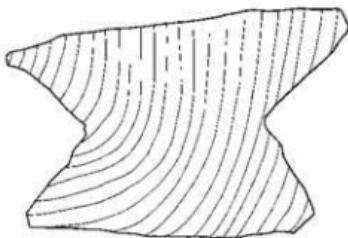
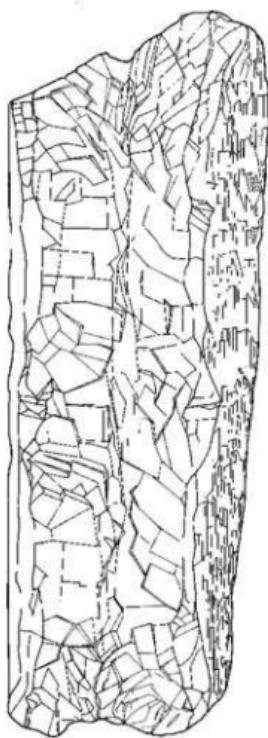
第147図 木製品実測図(37)



第148図 木製品実測図(38)



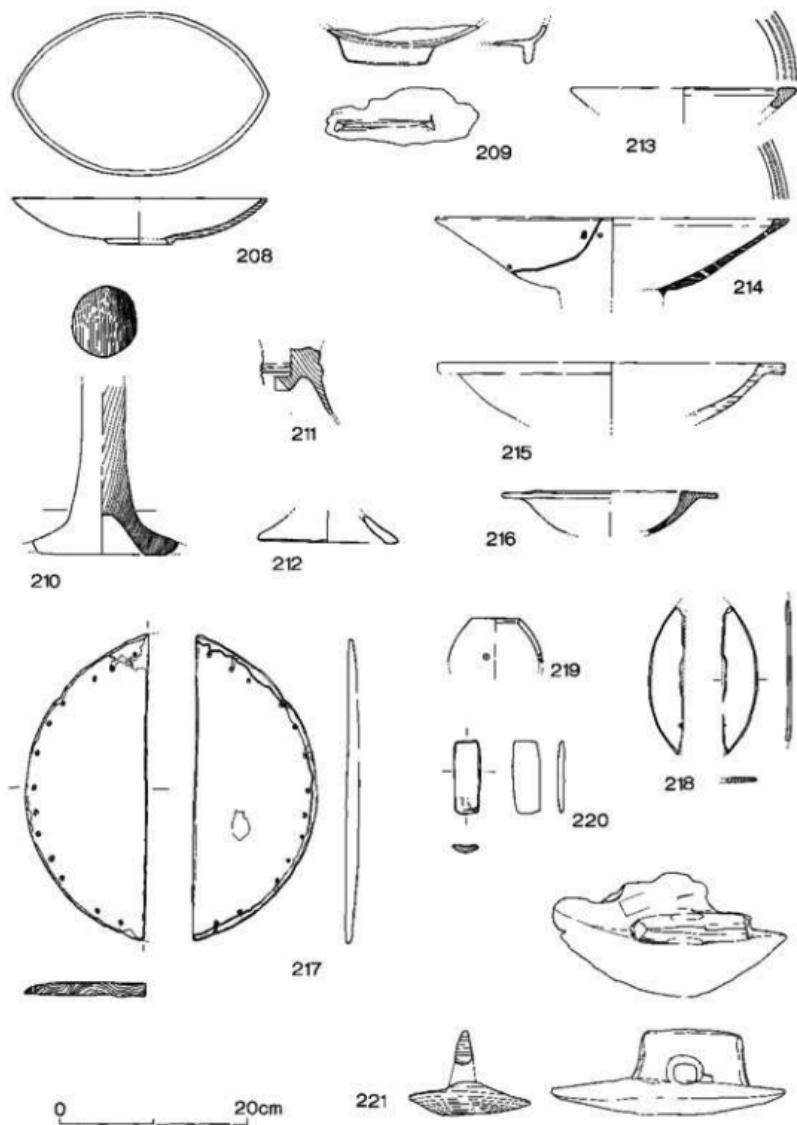
第149図 木製品実測図(39)



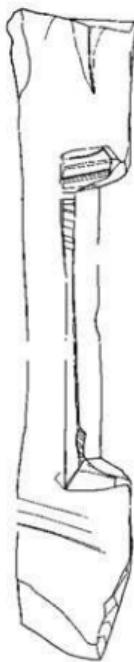
207

0 20cm

第150図 木製品実測図(40)



第151図 木製品実測図(41)



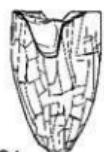
222



223



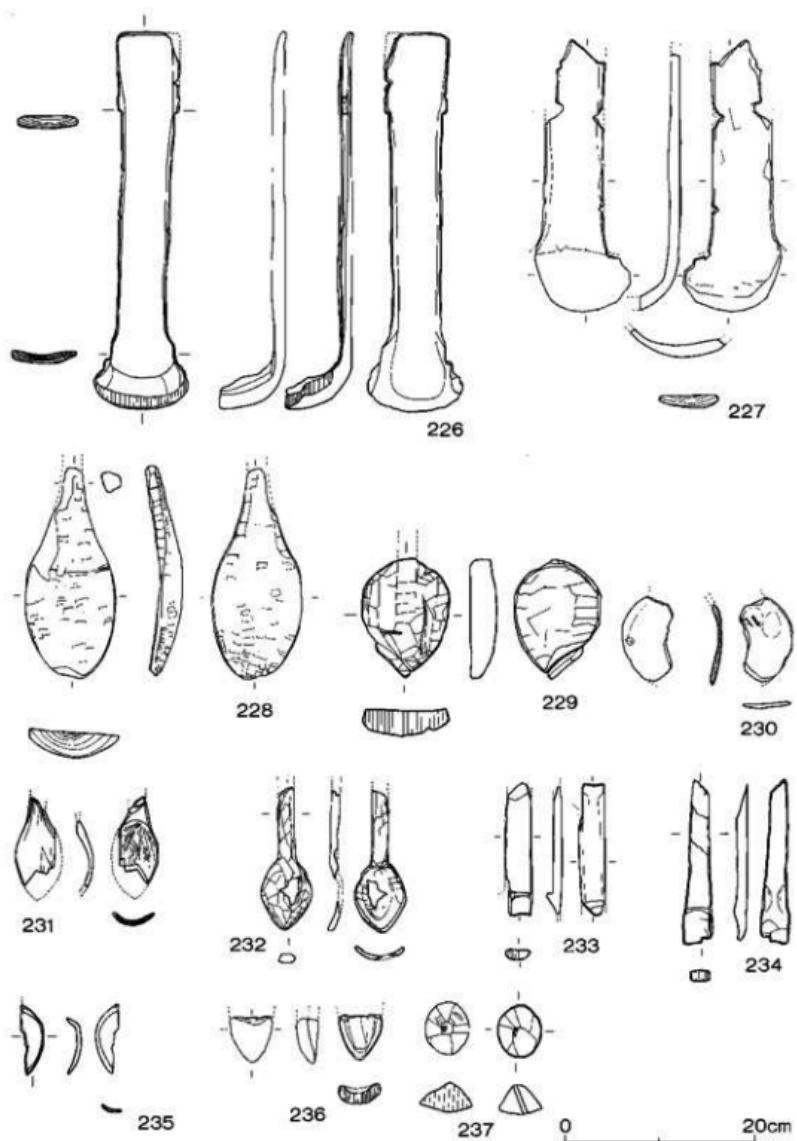
224



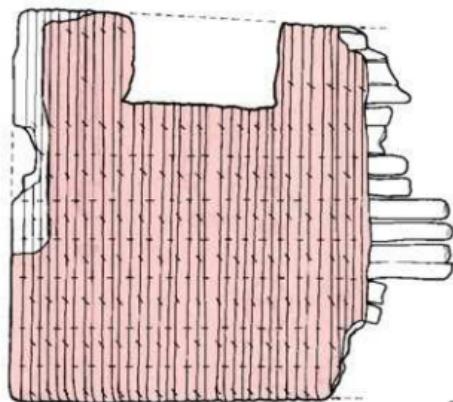
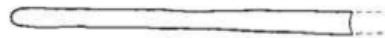
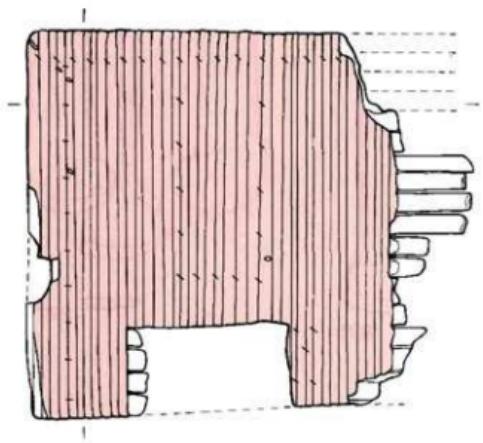
0

20cm

第152図 木製品実測図(42)



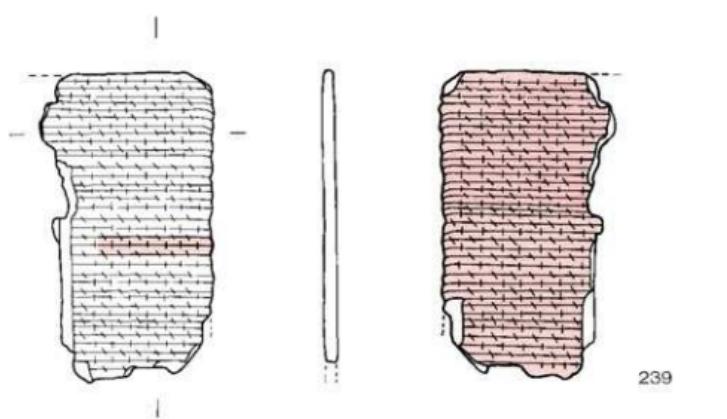
第153図 木製品実測図(43)



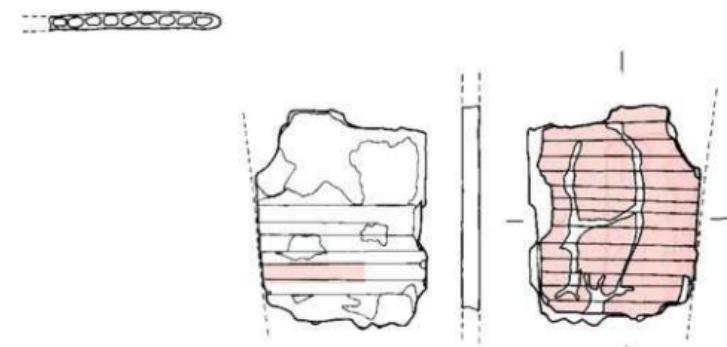
10cm
0

238

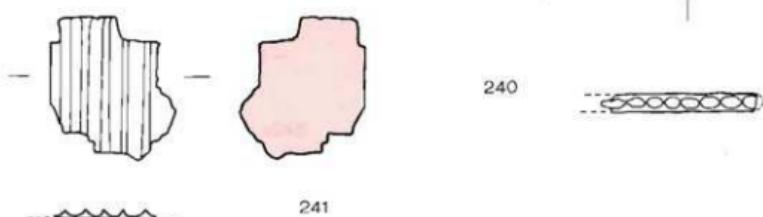
第154図 木製品実測図(44)



239



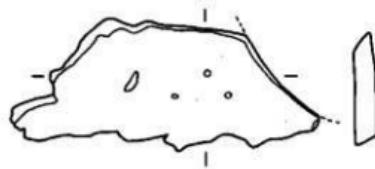
240



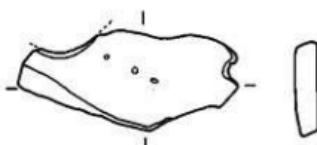
241



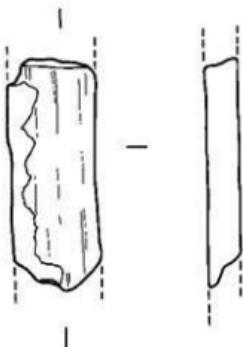
第155図 木製品実測図(45)



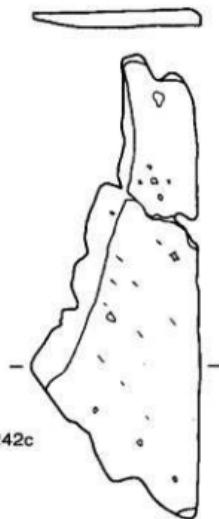
242a



242b



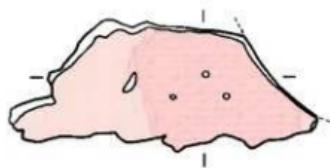
243



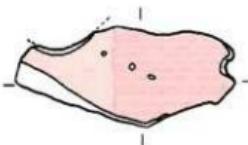
242c



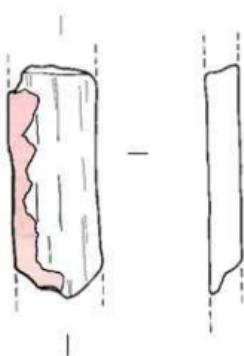
第156図 木製品実測図(46)



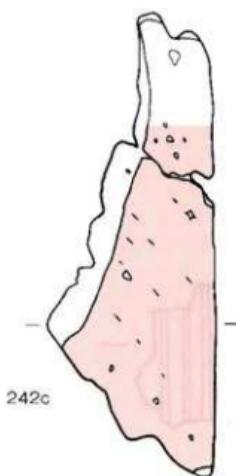
242a



242b



243



242c



第156図 木製品実測図(46)

第149図204・205は柱穴内に残っていた柱である。全面に粗い加工が施され、基底部にあたるところにもみられ半扣である。204は径 17.5×13.0 cm、長さ73.0cm、205は径21.0cm、長さ66.0cmでそれより上は朽ちて失われている。

第148図202・203は梯子である。202は現存部長さ1.1mの未成品の一部。203は成品を杭に再利用したもので現存部の長さ65.0cmある。

d. 杭

第142図165、第149図206はそれぞれ長さ1.7mと1.2mの頭部が二叉となった杭である。165は先述したようにSK01の上部構造に用いられたと考えられるものである。第142図164は径7.2cm、長さ約2.94mの長い杭である。恐らくウッドサークル(SZ)に用いるためのものであろう。因に168はSZ014の横木に用いられていたと思われる板材である。

e. 部材

第146図・第147図、第180～183図、第190図、第192～198図、第200図は各種の部材である。このうち180・181は櫛の把手、194・195は紡織機の可能性があり、これに関連するものとして第153図237の木製紡錘車がある。192・193は有頭棒。

f. 容器類

高坏 第150図207、第151図210～216は高坏である。このうち、207は長さ82.0cm、幅38.0cm、厚さ24.0cmでその断面は「エ」の字状をしている。全面に加工痕が著しい。樹種が環孔材であることと、その特異な形状から、高坏を2個体分作ろうとした未成品と考えられる。213・214は弥生時代中期の高坏形土器のうちB類に、215はC類に、216はD類に対応する。またまた298は脚部の内部に円錐形の突起がみられるので、金属器と鍛爐を用いて製作されたものであろう。

盤 第151図208・209は台付の盤であろう。

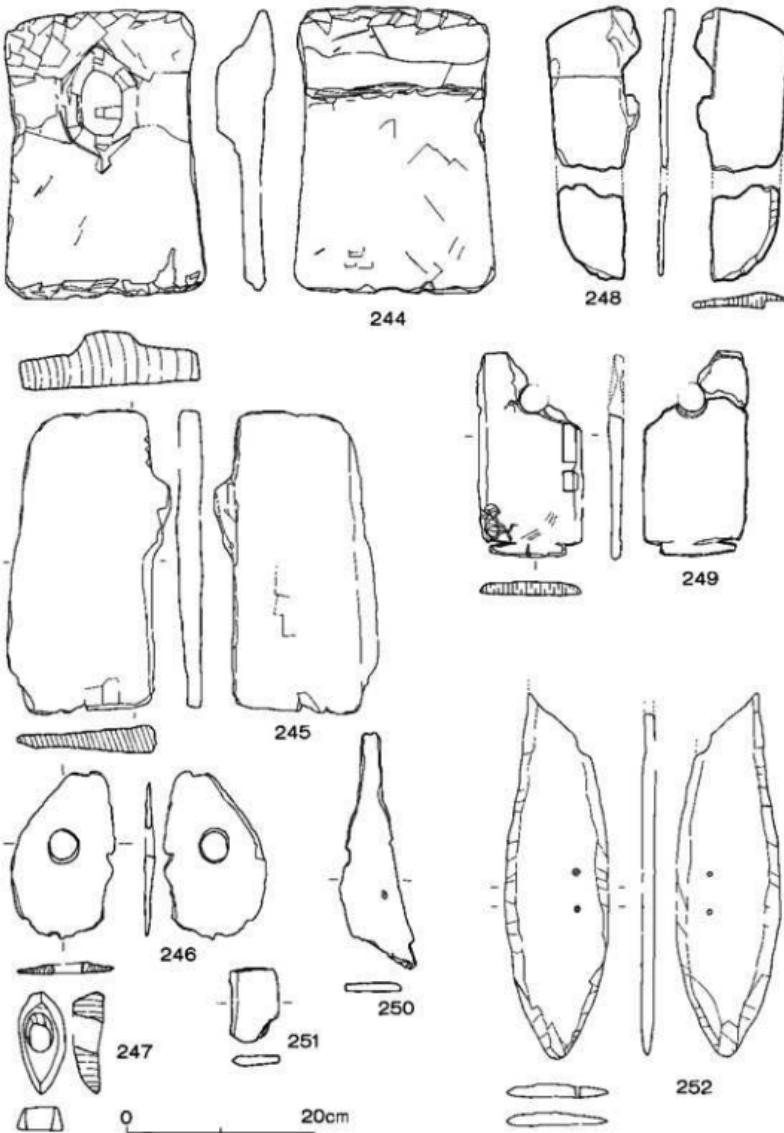
円形容器 第151図217・218は円形容器の底や蓋と考えられる。217は径34.5cmで周縁に小孔列がある。

ヒュウタン製容器 第151図219はヒュウタン製の容器片で、復元した口径5.4cm、胴部径は10.0cmで、補修孔がみられる。

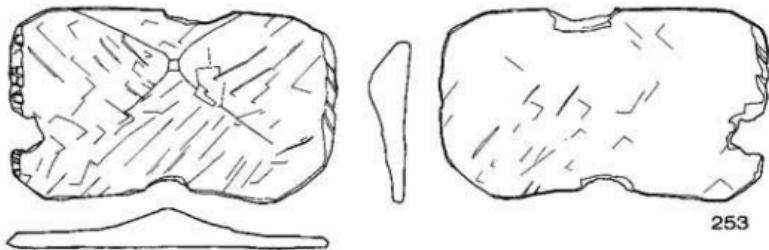
コップ型容器 第152図225は長さ15.3cm、径7.8cmの砲弾形の容器である。内部の深さは9.0cm。224はその未成品、223はこれらの材料と考えられる。

柄杓 第153図226・227は柄杓である。226は長さ42.6cmで柄の頭部に簡単な装飾が施される。第152図222はこれらの未成品と考えられる。

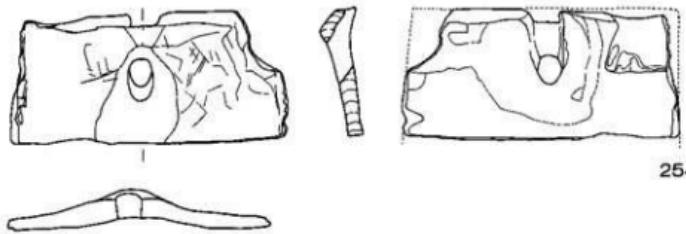
匙 第152図228～236には匙の各種を図示した。228と229は人形の未成品である。他は



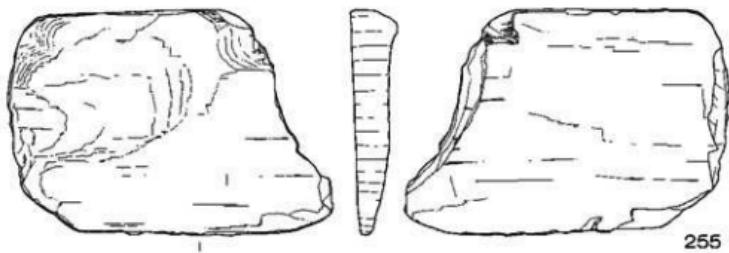
第157図 木製品実測図(47)



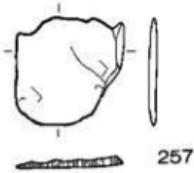
253



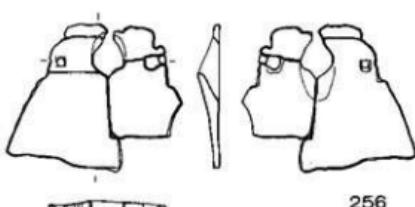
254



255



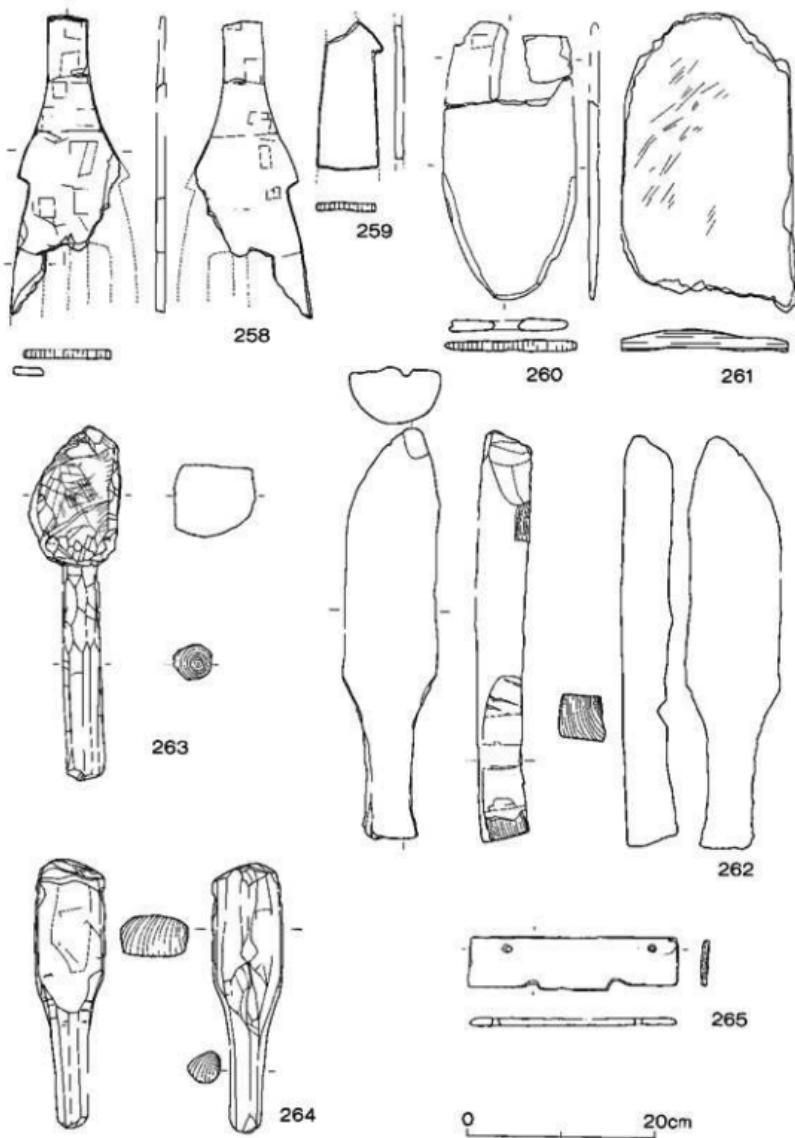
257



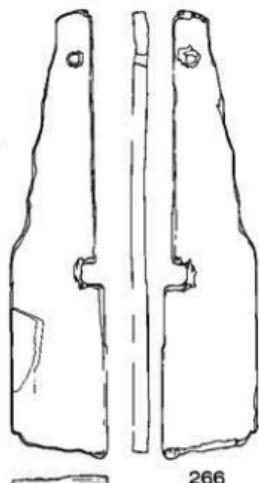
256

0 20cm

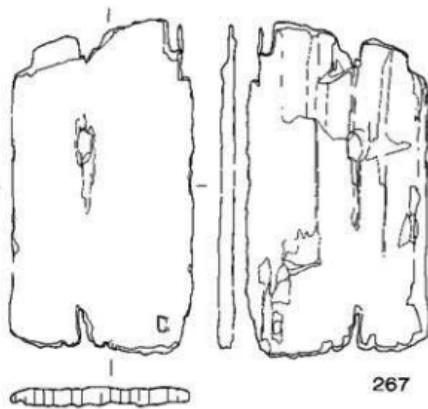
第158図 木製品実測図(48)



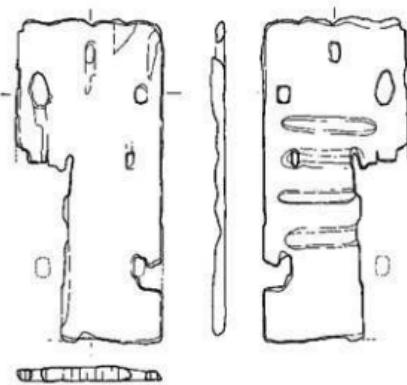
第159図 木製品実測図(49)



266

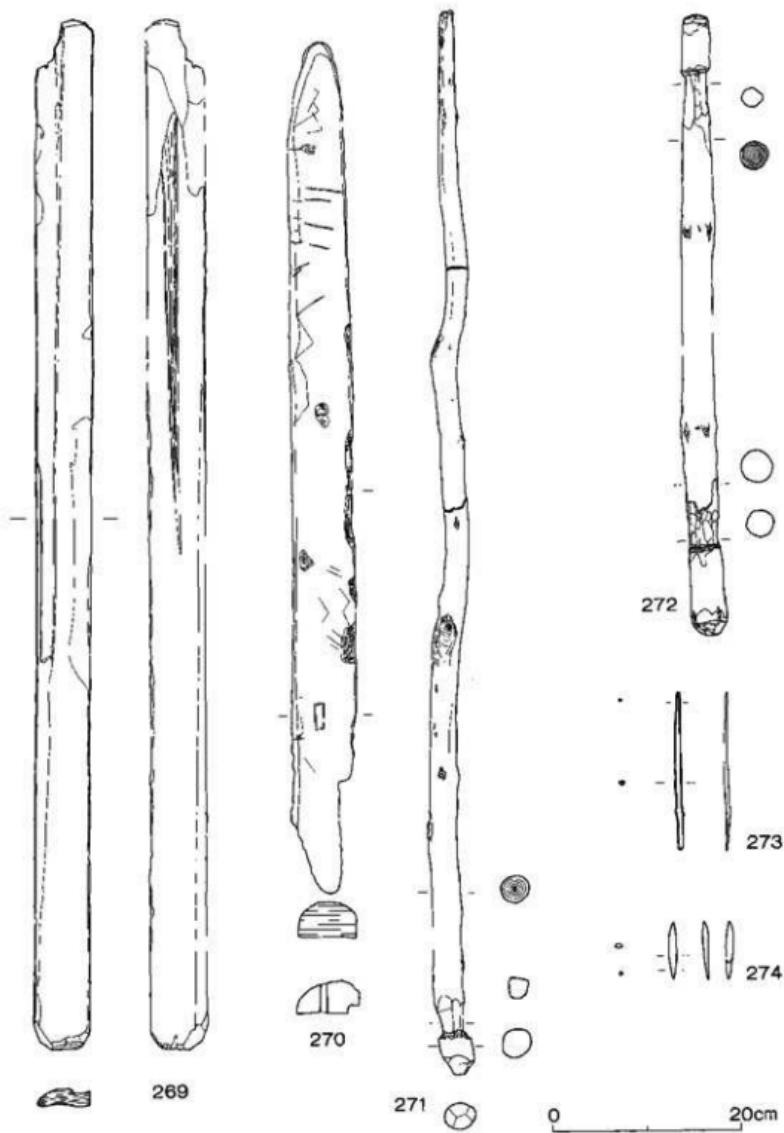


267

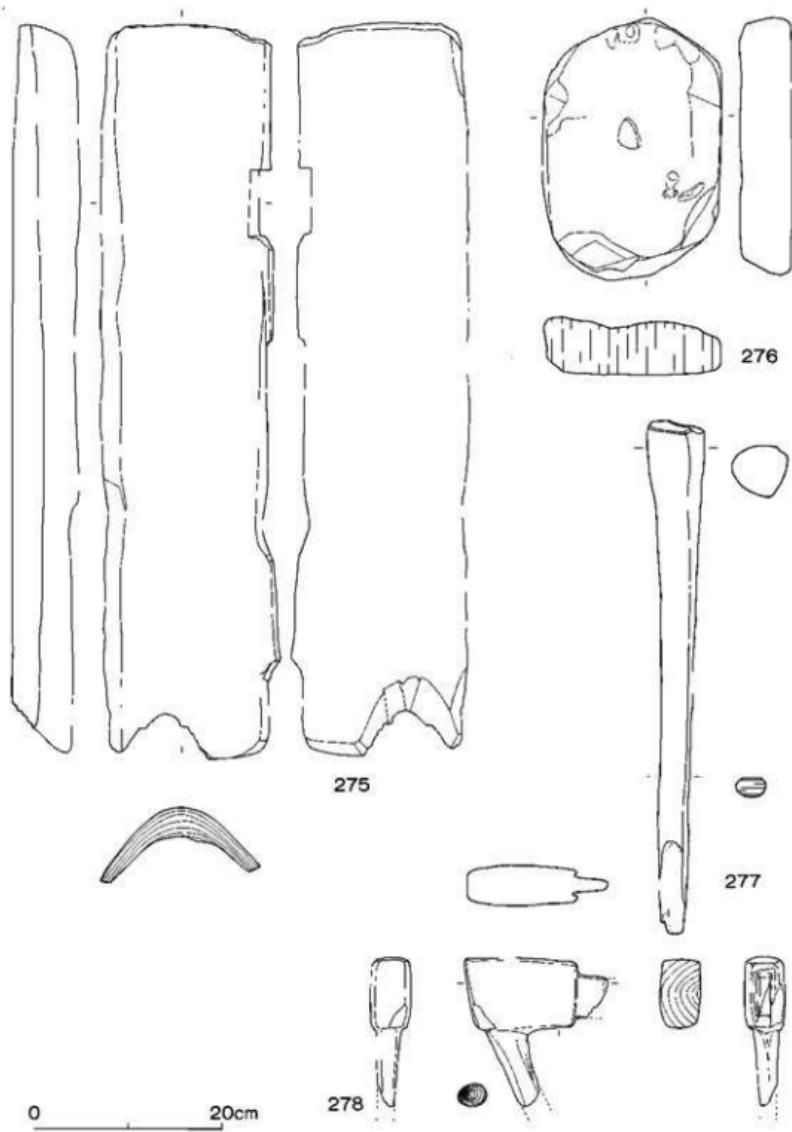


268

第160図 木製品実測図(50)



第161図 木製品実測図(51)



第162図 木製品実測図(52)

いずれもスプーン状の完成品であるが、欠損品が多い。このうち236は舟形木製品の可能性もある。

g. 祭祀遺物

鳥形木製品 第147図は鳥形木製品の頭部から胴部にかけてのものである。板材で作られており、両眼は凹めて表わしている。現存部の長さ18.0cm、長さ1.5cmを測る。ウッドサークルの付近で出土した。

舟形木製品 第153図236は舟形木製品の一部か、あるいは匙の一部と考えられる。

h. 鎏状木製品

平面は $26.4 \times 14.0\text{cm}$ の楕円形に近い形状をし、把手がその上につけられている。東大阪市鬼虎川遺跡の報文に従って鎔と考えた。鬼虎川遺跡の分類では鎔A類となる。

i. 装身具類

第154～156図は装身具類を図示した。

櫛 238～241は木製の櫛である（カラー図版）。238の例をとると径約3mmの歯を18本、糸で繋縫したものである。いずれも頭部をその上から先に黒漆、次に赤漆を塗装して同めている。242a・b・cは同一個体と考えられるもので厚さ4mmの板に直接赤漆が塗られている。一応簪の一部と考えたが、全く別のものの可能性も捨てきれない。243は幅1.5cmの木製の釦で赤漆が塗られている。

j. 刺突具

第146図、第186～189図は刺突具類であろう。

k. 作業台

第139図150は $22.0 \times 16.0\text{cm}$ 、厚さ5.4cmを測るミカン割材から作られたものであるが、表面に細かな直線的な傷痕が多数みられる。俎等の作業台と考えられる。

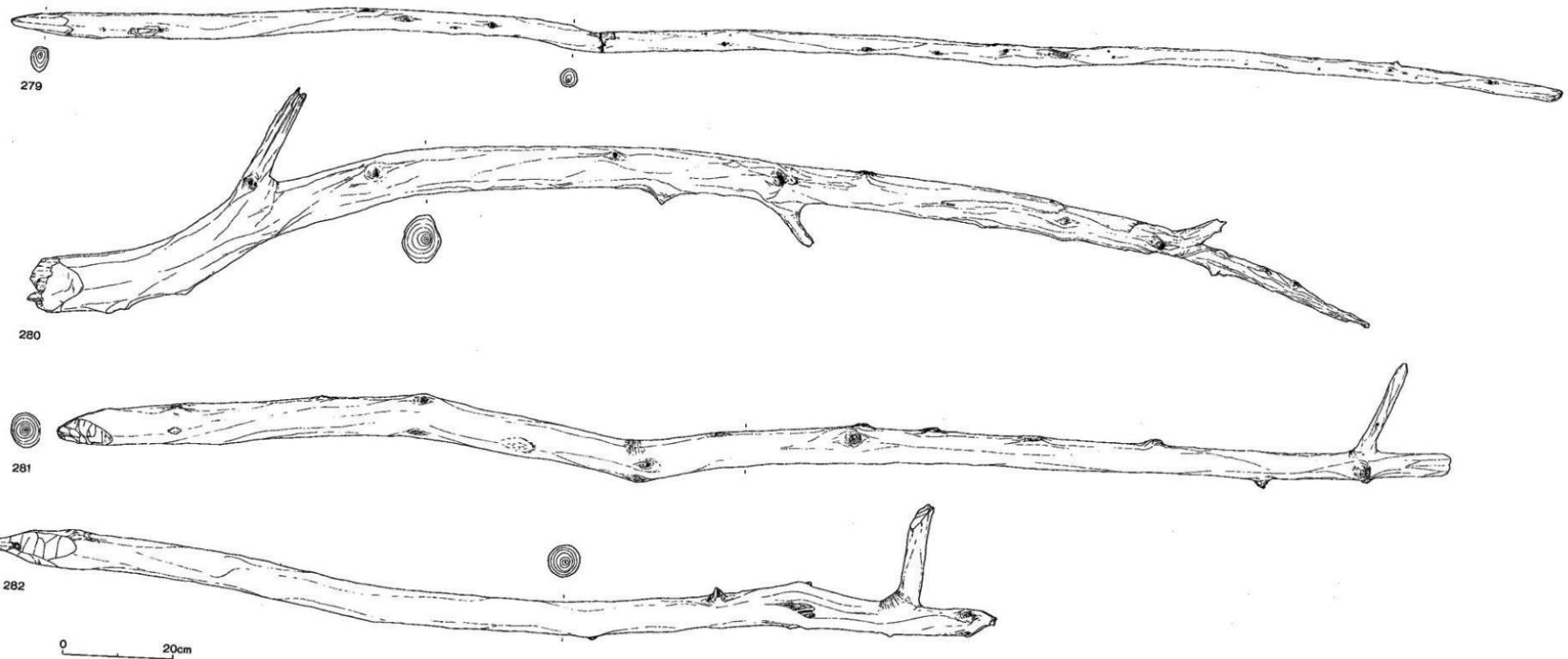
l. 火鏡臼

第121図55は火鏡臼片で現存部は6.3cmあり、焼成を受け黒色をしている。

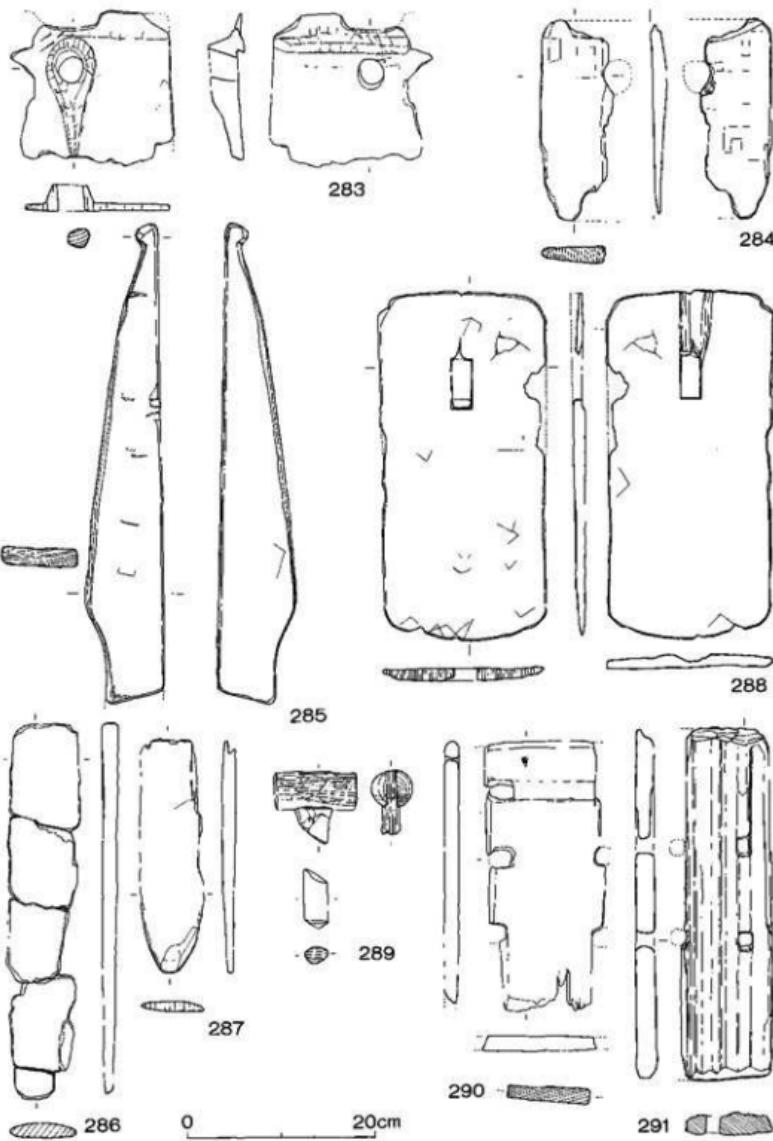
以上その他に、図版71の上に示したような籠状の編み物がある。また、図版71の下は桜の樹皮であるが、これの幅の広いものや狭いものが遺跡のいたる所で出土した。実際に使用されていた例としては、第146図191に示した長さ1.0cmの不明木製品や、弥生時代前期の変形土器の補修に使用された例がある。恐らく漆等を入れた蓋付の変形土器にも使用されたのであろう。東大阪市鬼虎川遺跡では石鎧の柄の装着や石剣の柄にも使用されている。

（7）弥生時代後期の木製品

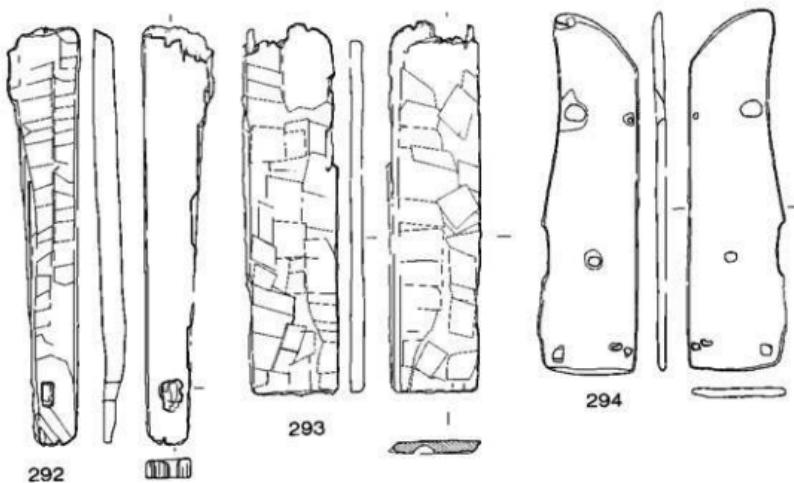
第157図～第163図は弥生時代後期層から出土した木製品である。この層はそれ以前の各



第163圖 木製品實測圖(53)



第164図 木製品実測図(54)



292

293

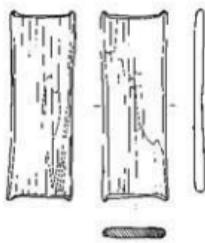
294

295

297

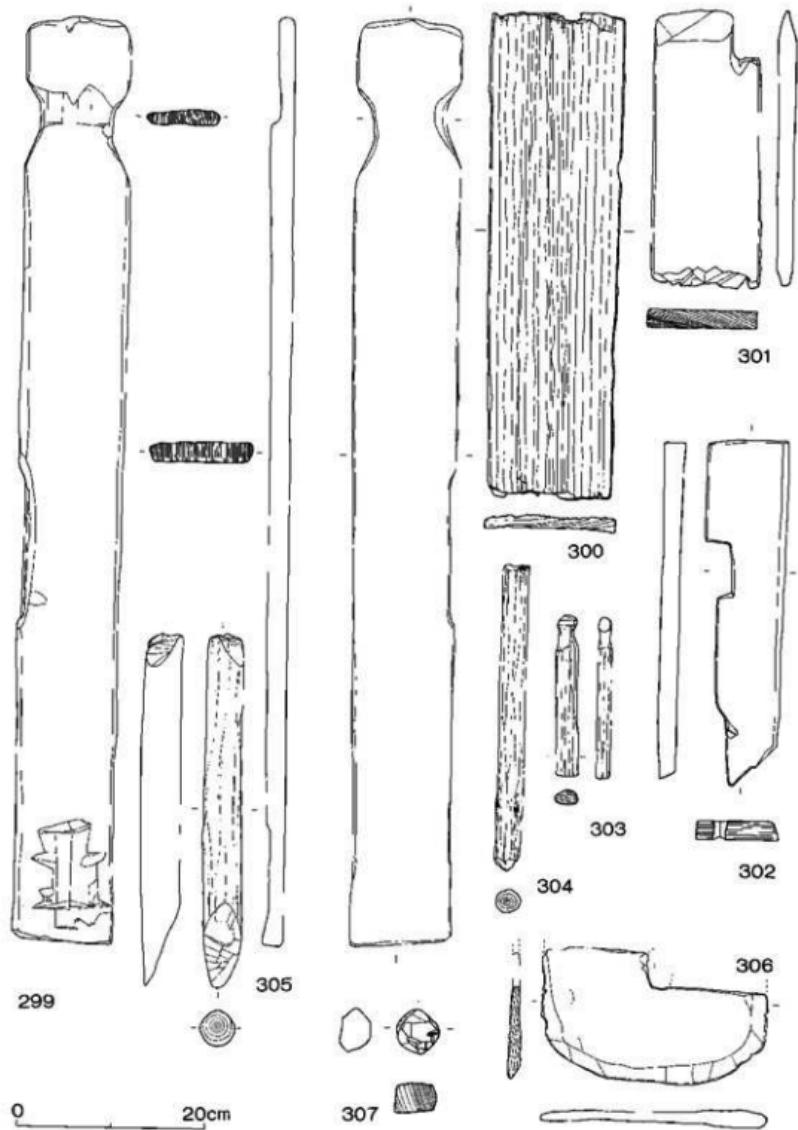
20cm

0

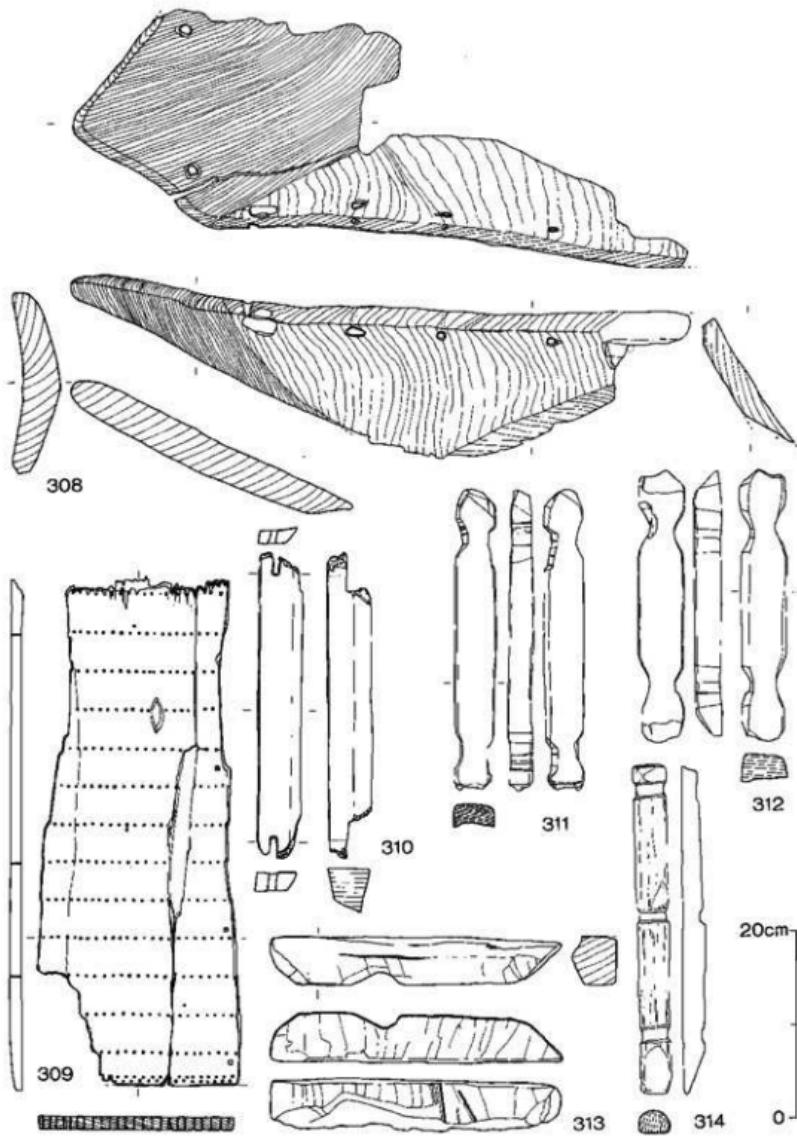


296

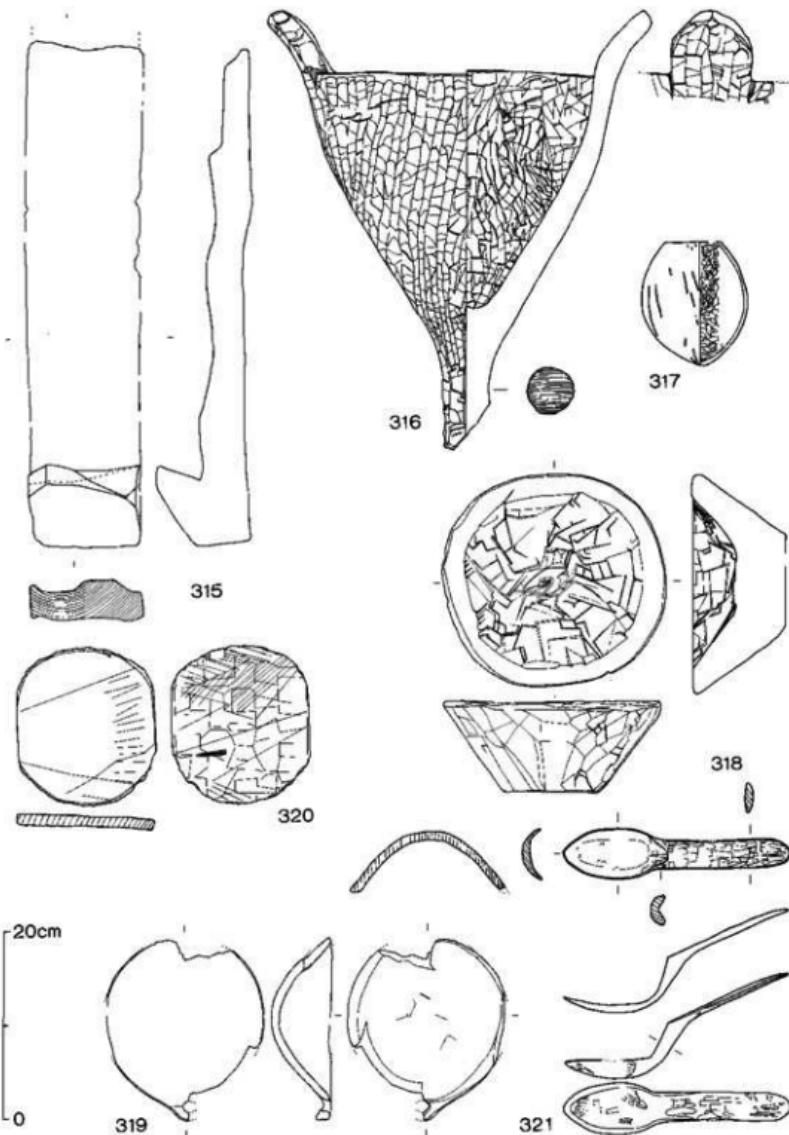
298



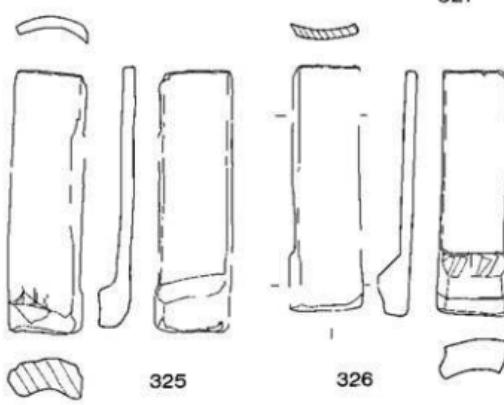
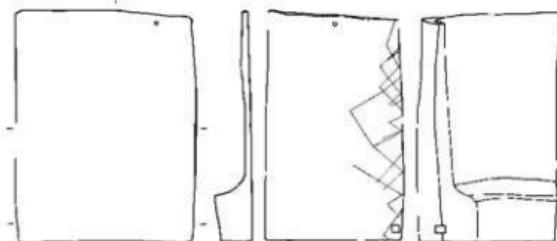
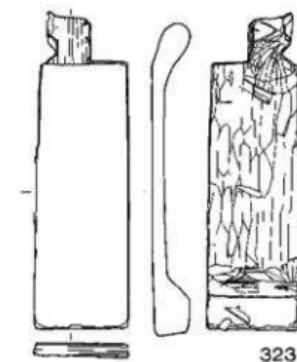
第166図 木製品実測図(56)



第167図 木製品実測図(57)

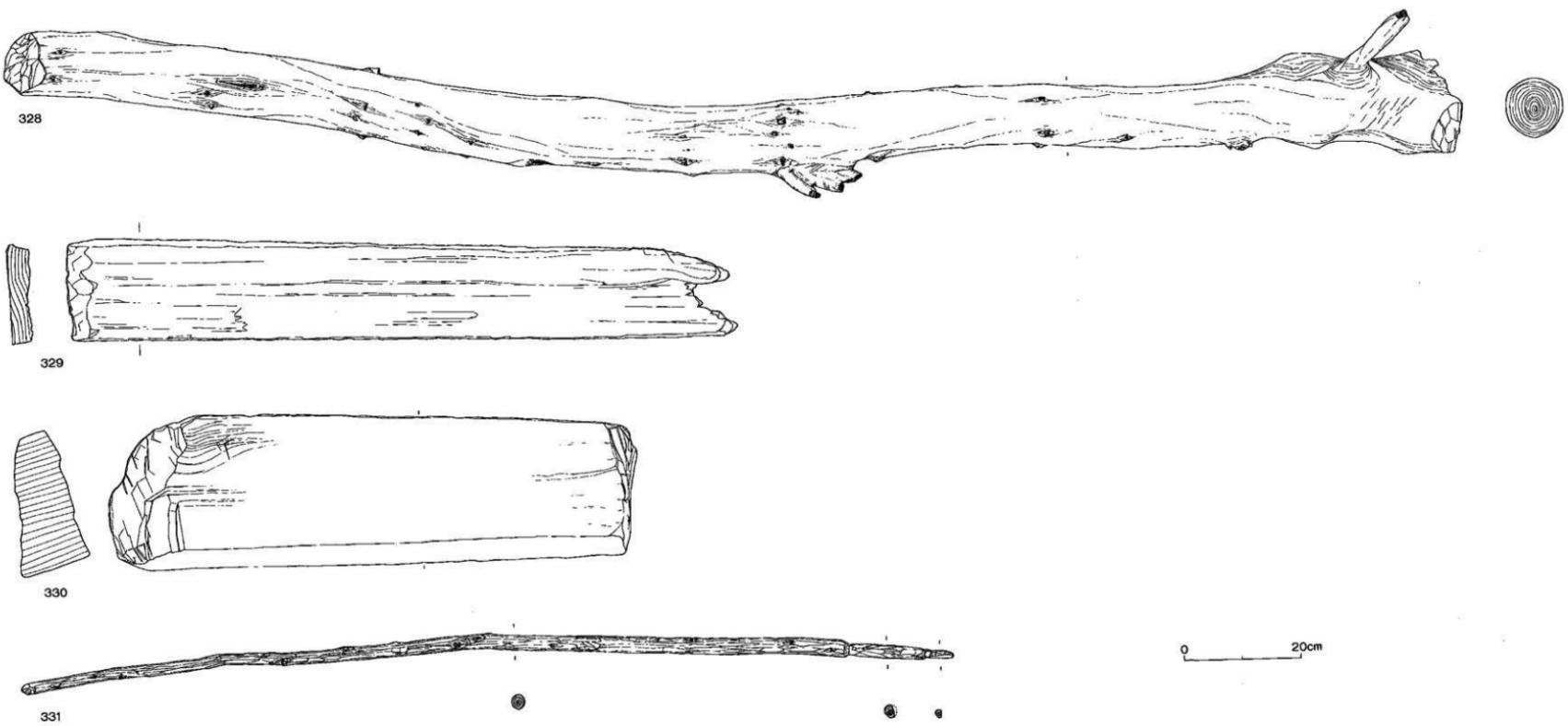


第168図 木製品実測図(58)



0 20cm

第169図 木製品実測図(59)



第170圖 木製品實測圖(60)

時代の遺物を最も多く包含していた層で、遺構も大きな氾濫の為かその残存部は良好ではなかった。従って、木製品の出土量は他の層に比較して少なく、これらの中には弥生時代前期～中期のものも含まれていると思われるが、後期層出土として一括して扱うこととした。分類は中期層出土の木製品に従う。

a. 農耕具類

広鋸A類 第157図244・247。244は長さ32.4cm、幅21.6cmの未成品で、舟形隆起や全体の形状は第119図38に近く、前期のものの可能性がある。247は一方が尖った舟形隆起が削離したものである。

狭鋸B類 第157図247・249は狭鋸B類である。249は長さ22.8cm、幅11.4cm。

丸鋸A類 第158図254は丸鋸A類の完成品で刃部を欠損している。幅は30.6cmある。柄を装着する方法も中期のそれに同じである。

丸鋸B類 第158図253・255はいずれも丸鋸B類の未完成品である。253の場合長さ36.0cm、21.0cm、隆起部での厚さ4.0cmを測る。

丸鋸C類 弥生時代中期層にはみられなかった形状で丸鋸C類とした。完成品で刃部とその近くを欠損する。柄はその装着される孔より、広鋸と同様であったと考えられ、丸鋸A類・B類とは異なる。その両側に方形の孔が一对穿たれているのも特徴である。

鋤B₁類 ナスピ形鋤。第157図250・251、第159図258・259がこれにあたる。

鋤B₂類 第159図260がこれにあたるが、B₁類とした251もB₂類の一部かもしれない。

鋤B₃類 第157図248は鋤B₃類の完成品が欠損したものである。

尚、第157図252は一応鋤状木製品としたが、スギ材を使用しており、中期の141～143のそれと同様なものと思われ、農耕具類ではないと思われる。

田下駄 第159図265、第160図266・267・268は田下駄である。このうち266は大足。

砧（横鉗） 第159図262・263・264は砧である。264は長さ30.0cmの完成品で二面が凹み使用痕と考えられる。262はその未完成品であろう。263は長さ39.6cmで木の節を頭部に枝を柄に利用したものである。これで完成品であろう。

c. 建築関係材

第163図は建築材と考えられるものである。279は2.9mの長い有頭棒、281と282は長さがそれぞれ2.66mと1.9mの二叉の柱であろう。280はその未完成品と思われ、長さ2.6mある。

e. 部材

第161図269～272、第162図275は部材の各種である。271・272は有頭棒。270は長方形の

孔がみられる。275は樋状を呈している。

j. 刺突具

第161図273・274はそれぞれ長さ18.0cmと6.6cmの刺突具である。274は2~3本を組み合わせて使用されたと思われる。

m. 斧の柄

第162図277は現存部58.0cmを測る始刃磨製石斧の柄の欠損品と考えられる。後期のものではないと思われる。278は鉄斧の柄で、中期層より出土したようなソケット式の鉄斧が装着されたものと考えられる。

(8) 古墳時代前期の木製品

第164図~第170図は古墳時代前期層から出土した木製品である。比較的安定した層であった為、これらのはほとんどは土器の示す古墳時代前期のものと考えられる。分類は弥生時代中期のそれに従う。

a. 農耕具類

ミカン割材 第170図330は長さ93.0cm、幅24.5cm、厚さ12.5cmのミカン割材である。

広鍬A類 第164図283は広鍬A類の完成品である。舟形隆起の一方が刃部に向かい、弥生時代中・後期のそれよりさらに細く長く下垂しているのが特徴的である。

広鍬B類 第164図284は広鍬B類の欠損品と考えられる。

鋤B類 第164図285~287は鋤B₁類の一部と思われる。288は鋤B₃類の完成品である。長さ39.0cm、幅18.0cmを測る。289は握りが「T」字形をした組合せ式の鋤の柄と考えられる。握りは両面より二対の木釘によってとめられている。

田下駄 第164図290・291、第165図292~295は田下駄である。このうち第165図292~295は大足と考えられる。293以外は皆完成品である。

土掘具 第165図297は木の幹を頭部に加工し、枝を柄とした長さ30.0cmの土掘具である。弥生時代中期層出土の184・185と同様なものである。

c. 建築関係材

第170図328は長さ2.6mの柱である。建築材であろう。

e. 部材

第165図166、第166図(307を除く)及び第167図310~314は部材の各種である。306は丸鍬のようにみえるけれども、スギ材を使用している。303・311~314は有頭櫛。

f. 容器類

柄杓 第168図315は柄杓の未成品と考えられる。長さ57.0cm、幅13.0cmを測る。

ココヤシ製容器 第168図317はココヤシの種皮製の容器である。長さ13.8cm、口径6.0cm、胸部径12.0cmを測る。日本海での漂流物であろう。

椀 第168図319は径18.0cmで一方の端に小孔を穿った外耳がつけられている。318は外耳のない椀の未成品であろう。第169図は内外面に鉢の痕がみられる薄く仕上げられた優品の椀である。

桶 第168図316、第169図322～326は桶である。このうち、316は他に例をみない桶の未成品で、一对の外耳がつけられる。これには、孔が穿たれるものと思われる。下方に向かい漏斗状に凹むが、その先端はいずれ切り落とされるものであろう。現状での長さは49.0cm、口径は34.2cmを測る。他はいずれも把手の形状に若干の違いがみられるほかは同様な形態の桶である。みな完成品が欠損したものである。

匙 第168図321は完形の匙である。全体に鉢の痕がみられる。

n. 紡織具

第165図296は長さ21.0cm、幅7.2cmの糸巻き。第166図307は、弥生時代中期層で出土しているような木製紡錘車の未成品であろう。

o. 舟

第167図308は舟の舳先である。スギ材で作られている。先端部を除く舷には小孔が一列穿たれている。

p. 盾

第167図307は木製盾である。現状は長さ56.4cmあり、両端は二列の小孔、その間は約4.0cmの等間隔に一列ずつ穿たれている。朱は塗られていない。同時期の出土例には平城京内遺跡がある。

q. 弓

第170図331は木製弓である。長さは1.67m、径は2.4cmでヒノキ材を使用している。

(9) 石器

第171図～第192図には、石鎌・石剣・石斧・石鏃を掲げてある(表19～24)。西川津遺跡ではこれらの石器の他に、砥石、蛤刃磨製石斧、環状石斧、石包丁等があるが次年度に報告する予定である。以下の石器類はいずれも弥生時代前期～中期の層や遺構から出土したものである。

a. 石鎌 1・2は磨製石鎌で、両面に丁寧な研磨が施され、稜線がはっきりと残る。1は両端が折半している。2はやや丸味を帯びた二等辺三角形を呈す。3～86は安山岩製

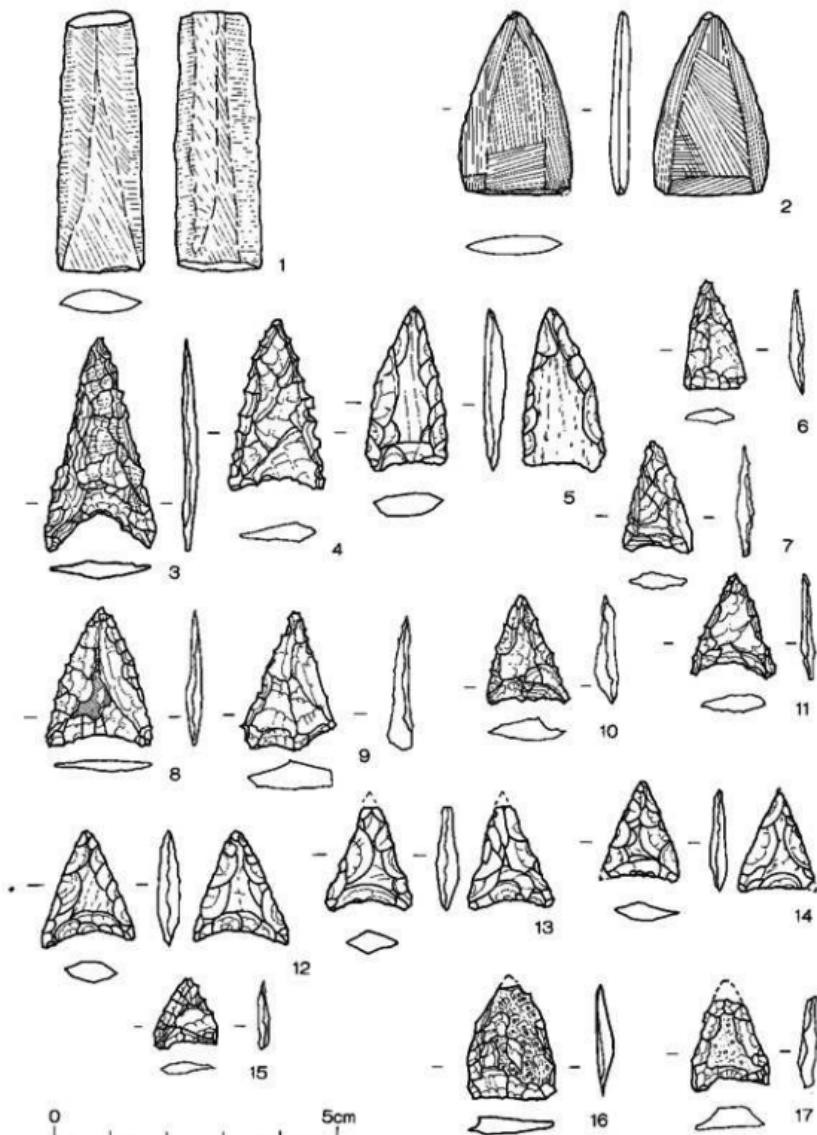
の打製石鎌である。黒曜石製のものに比べると、剝離調整が粗く難で、主要剝離面や自然面を残す。このうち、3の両側刃部には深い交互剝離が加えられ、一側面は凹凸状をなし、鋭い刃部をもつ。これは黒曜石製石鎌37と類似する。18~80は黒曜石製である。特に18~39は長身で身幅が狭く、きれいな二等辺三角形を描き出す大形品である。刃部は鋭く、鋸歯状をなすものがほとんどだが、36のように凹凸状をなすものもある。39は他のものに比べると調整が粗く、未成品の可能性がある。40~52の形態は前者同様、二等辺三角形を呈すが小形である。53~60は形が不定形で、調整が難である。61~66は縄文時代の製品かと思われる。67~86は未成品で主要剝離面がみられる。8は安山岩製の局部磨製石鎌である。

b. 石劍（第176図、第177図） 明らかに石劍と判るものは6点出土している（1~6）。1~3は半磨製の短劍である。3は握りを欠くが、1・2・3ともそのサイズはほぼ同じである。7はこの種のものの未成品の欠損したものと思われる。3は中央に稜を研ぎ出している。東大阪市鬼虎川遺跡では、この種の短劍に図版71の下に示したような樹皮を巻きつけた出土例がある。4は刃部の大部分を欠くが、茎を有して中央に稜がある両刃の鉄劍形の磨製石劍である。5・6も鉄劍形の磨製石劍である。5は欠損品であるが一部に孔が残る。6は全長8.6cmの小形のもので基部に一对の孔があけられている。茎のない有孔の石劍はタテチヨウ遺跡出土例がある。

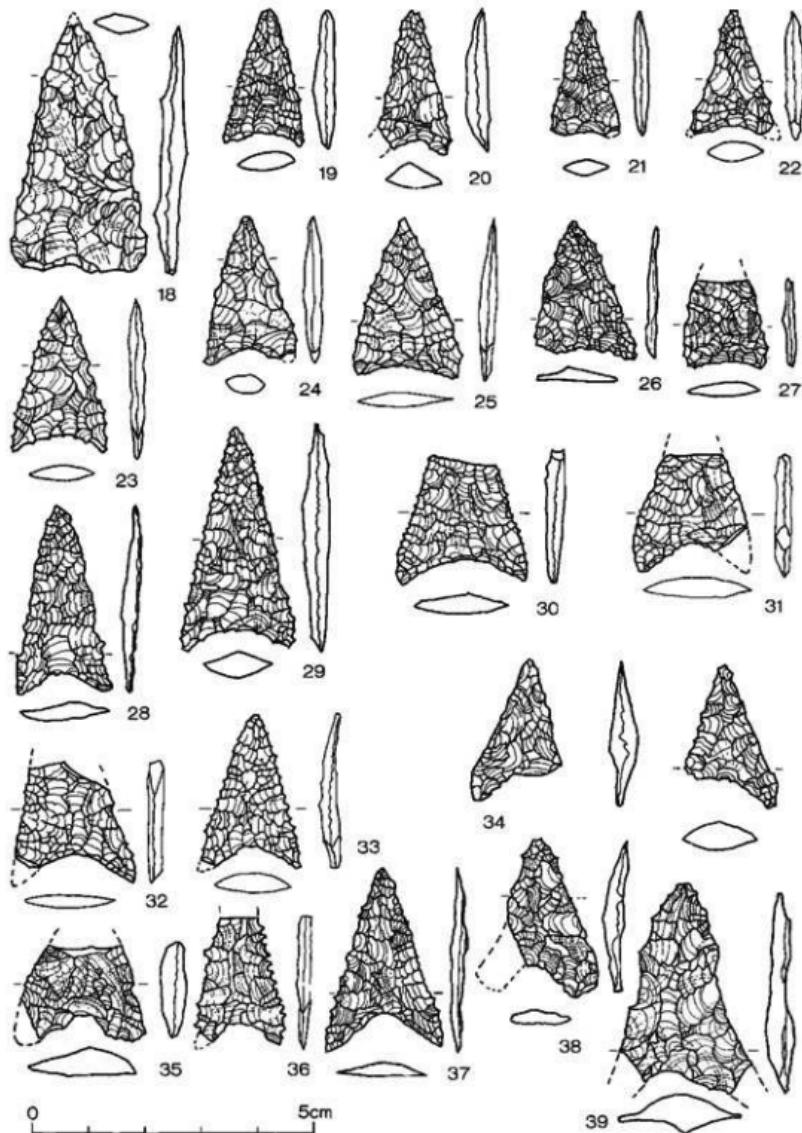
c. 扁平石斧（第178図） 刃部の幅からみると次の4種がある。1~5は刃部の幅が1.0cm前後で細長で短いものである。このうち2は両刃に近く、他は片刃である。6~13は刃部の幅が3.0cm前後の一群で片刃のもの（6・7・10~13）と両刃のものと両刃に近いもの（11）がある。14~18は刃部の幅が5.0cm前後の一群である。いずれも片刃で17は完形に近い。14・16も完成品であるが、もとは17のような長さがあったと考えられる。19・20は刃部の幅がさらに広い一群で、19は両刃である。

d. 挟入柱状片刃石斧（第182図~第188図） 総数は43個体あるが、このうち18個体を選び石器の製作工程から次のA・B・Cの三段階に分類した。A段階は原石を荒割りしほぼサイズを決定した段階である。1~2がこれにあたる。B段階は敲打と研磨による整形で、3~10が相当する。A段階・B段階で欠損する場合も多かったようであるが、10はほぼB段階の原形を知ることができる。C段階はさらに研磨をかけ、抉りを入れ完成させたもので、11~18がこれにあたる。11・14はほぼその全様が知られるが、他は使用時に壊れたものが多い。12・13は抉りが2か所みられる。

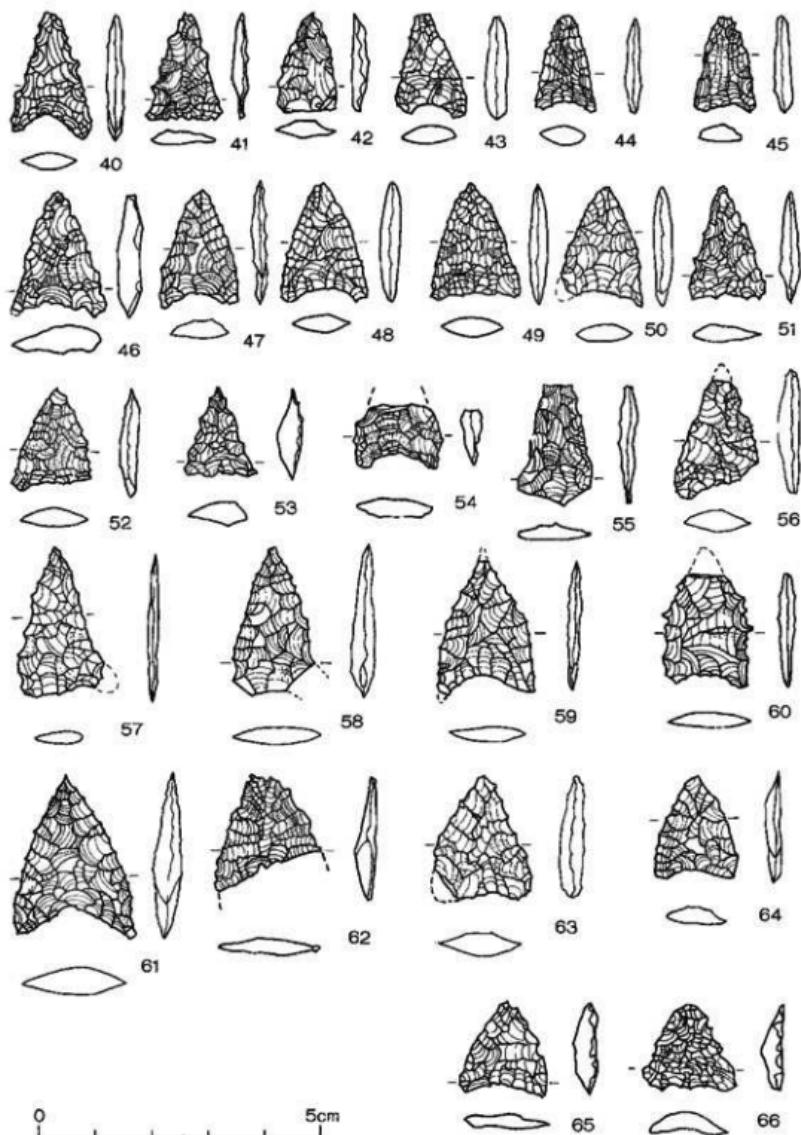
e. 石鎌（第189図~第192図） 13点の石鎌が出土している。その内訳は局部磨製石鎌



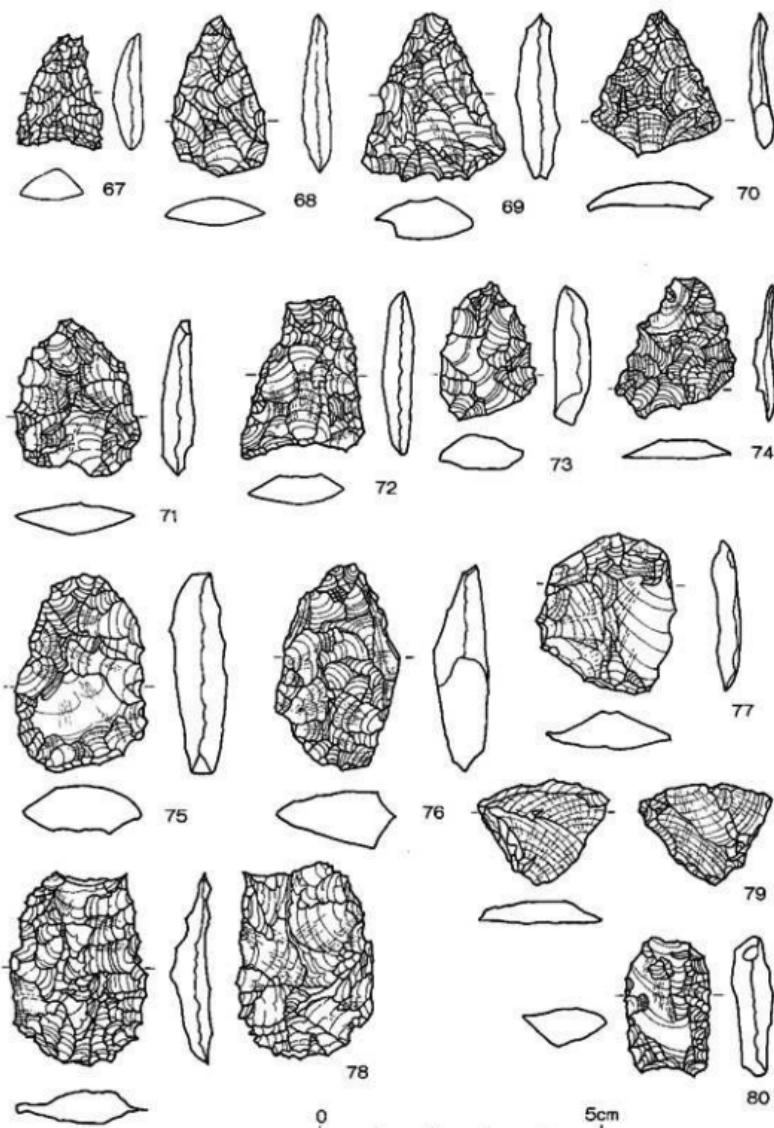
第171図 石器実測図(1)



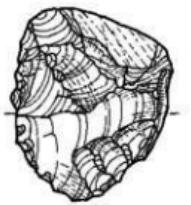
第172図 石器実測図(2)



第173図 石器実測図(3)



第174図 石器実測図(4)



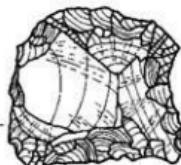
81



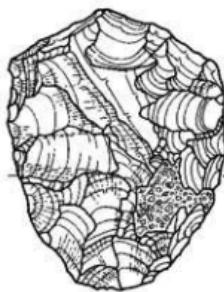
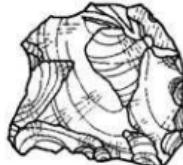
82



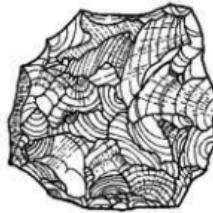
83



84



85



86

0

5cm

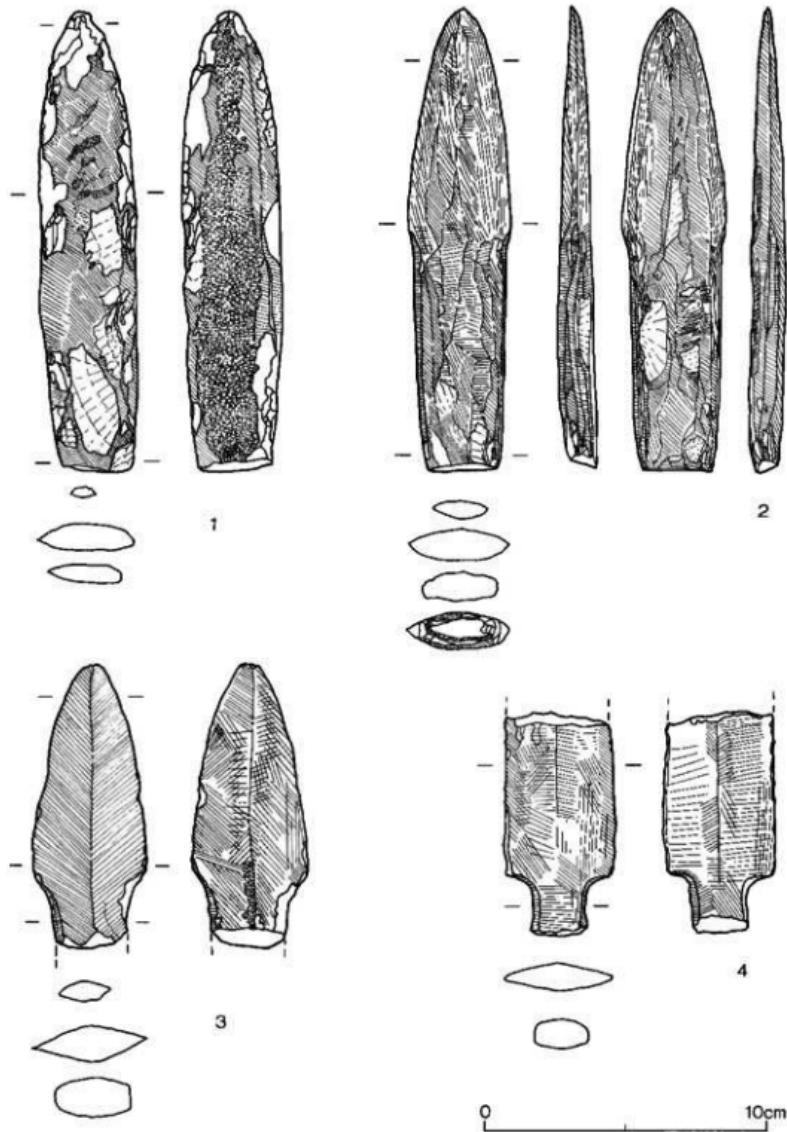
第175図 石器実測図(5)

表19 石 蔭 計 測 表 (1)

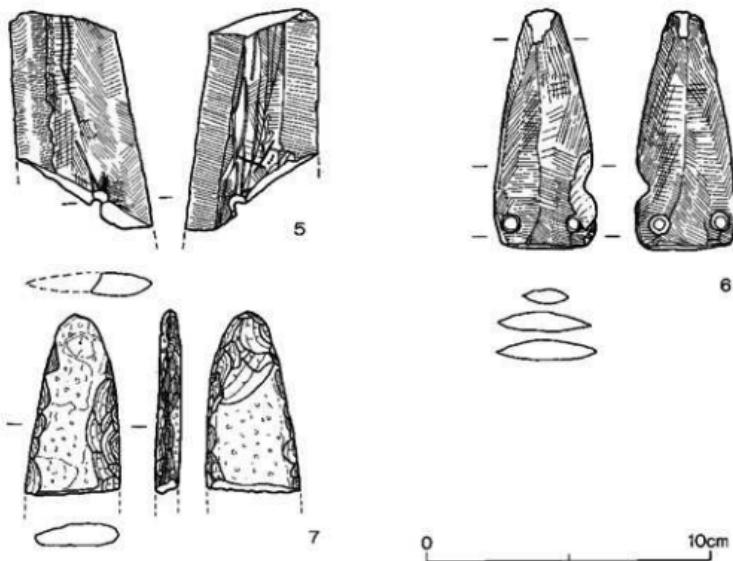
標	石	材	最	大	厚	重	量	基	部	的	对	称	調	整	折	損	部	中	央	断	面	出	土	層	
			人	長	大	幅	厚	重	量	基	部	的	对	称	調	整	折	損	部	中	央	断	面	出	土
1	黒	片岩	4.6	1.6	0.4	4.0																			弥生中期層
2	タ		3.2	2.0	0.3	2.26																			タ
3	S N		3.0	2.0	0.3	2.1																			—
4	S N		2.8	1.6	0.3	1.4																			弥生中期層
5	S N		2.9	1.45	0.4	1.65																			タ
6	S N		1.8	1.1	0.25	0.5																			タ
7	S N		1.8	1.1	0.35	0.5																			タ
8	S N		2.1	1.6	0.3	0.9																			タ
9	S N		2.4	1.6	0.5	1.6																			タ
10	S N		1.8	1.5	0.35	0.8																			タ
11	S N		1.5	1.3	0.3	0.58																			タ
12	S N		2.00	1.65	0.35	1.0																			タ
13	S N		1.8	1.5	0.4	0.9																			タ
14	S N		1.8	1.5	0.3	0.55																			タ
15	S N		1.05	1.1	0.2	0.2																			弥生中期層
16	S N		2.0	1.5	0.3	0.9																			タ
17	S N		1.6	1.3	0.3	0.75																			タ
18	o b		4.3	2.4	0.5	4.4																			タ
19	o b		2.35	1.4	0.3	0.7																			タ
20	o b		2.5	1.2	0.45	0.7																			弥生中期貝層B
21	o b		2.2	1.2	0.25	0.5																			タ
22	o b		2.2	1.3	0.3	0.6																			弥生前期貝層中
23	o b		2.7	1.7	0.3	1.0																			タ
24	o b		2.55	1.6	0.35	1.0																			タ
25	o b		2.8	1.9	0.3	1.15																			タ
26	o b		2.2	1.7	0.2	1.0																			弥生中期層
27	o b		1.5	1.45	0.25	0.45																			タ
28	o b		2.0	1.5	0.4	1.1																			タ
29	o b		3.9	2.0	0.45	2.1																			タ
30	o b		2.3	2.3	0.35	1.2																			タ
31	o b		2.1	1.95	0.3	1.0																			タ
32	o b		2.1	2.0	0.2	0.85																			タ
33	o b		2.7	1.7	0.4	0.7																			タ
34	o b		2.5	1.5	0.5	1.1																			タ
35	o b		1.65	2.2	0.45	1.1																			タ
36	o b		2.2	1.6	0.25	0.85																			弥生前期貝層中
37	o b		1.7	2.0	0.3	0.95																			タ
38	o b		2.9	1.3	0.3	1.17																			タ
39	o b		2.7	2.2	0.5	3.4																			タ
40	o b		2.2	1.35	0.3	0.8																			弥生前期貝層中
41	o b		1.8	1.4	0.3	0.6																			タ
42	o b		1.7	1.0	0.4	0.45																			タ
43	o b		1.8	1.2	0.3	0.5																			タ

表20 石 織 計 測 表 (2)

標番号	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	基部の対称性	調 整		折損部	中央断面	出 土 層
							両 面	片 面			
44	o b	1.7	1.0	0.4	0.35	ほぼ対称	両 面	—	両 凸	—	
45	o b	1.7	1.1	0.25	0.4	非 対称	片 面	—	タ	弥生中期層	
46	o b	1.8	1.1	0.35	0.9	タ	両 面	—	タ	タ	
47	o b	2.0	1.3	0.3	0.7	ほぼ対称	タ	—	タ	タ	タ
48	o b	2.1	1.5	0.3	0.85	タ	タ	—	タ	タ	タ
49	o b	2.0	1.5	0.3	0.7	—	タ	内 溝	タ	タ	タ
50	o b	2.1	1.5	0.3	0.9	非 対称	タ	尖端・一端	タ	タ	タ
51	o b	2.0	1.3	0.3	0.6	—	—	—	タ	タ	タ
52	o b	1.8	1.4	0.3	0.5	—	片 面	—	タ	タ	タ
53	o b	1.5	1.2	0.4	0.35	—	両 面	—	タ	タ	タ
54	o b	1.1	1.5	0.4	0.55	ほぼ対称	タ	片	タ	タ	タ
55	o b	2.1	1.5	0.3	0.65	非 対称	タ	尖 端	タ	弥生前期層	
56	o b	2.1	1.4	0.4	0.7	—	片 面	尖端・一端	タ	タ	タ
57	o b	2.6	1.55	0.2	0.8	—	両 面	一 端	タ	タ	タ
58	o b	2.6	1.4	0.3	0.95	—	タ	尖端・一端	タ	タ	タ
59	o b	2.3	1.7	0.3	0.85	非 対称	タ	尖端・一端	タ	タ	タ
60	o b	1.95	1.45	0.25	0.87	タ	タ	尖 端	タ	タ	タ
61	o b	2.8	2.0	0.5	1.65	対称	タ	一 端	タ	タ	タ
62	o b	1.8	2.0	0.4	0.65	—	タ	片	タ	弥生中期層	
63	o b	2.15	1.7	0.4	1.1	—	タ	一 端	タ	タ	タ
64	o b	1.8	1.3	0.3	0.5	—	タ	—	タ	弥生前期貝層中	
65	o b	1.2	1.3	0.5	0.5	—	タ	—	タ	タ	タ
66	o b	1.5	1.6	0.3	0.7	—	タ	—	片面凸	タ	
67	o b	1.9	1.5	0.5	1.3	非 対称	タ	—	—	三角形	タ
68	o b	2.7	1.6	0.45	1.85	タ	タ	—	両 凸	弥生前期貝層中	
69	o b	2.9	2.5	0.7	3.7	—	タ	—	タ	弥生中期層	
70	o b	2.4	2.4	0.3	1.7	対称	タ	—	片面凹	タ	
71	o b	2.7	2.2	0.6	2.2	—	タ	—	両 凸	タ	
72	o b	2.8	2.2	0.5	2.75	非 対称	タ	尖 端	四角形	タ	
73	o b	2.1	1.6	0.6	2.79	—	タ	—	両 凸	タ	
74	o b	2.5	2.1	0.3	1.45	—	タ	—	片面凸	タ	
75	o b	3.4	2.3	0.8	6.0	—	タ	—	両 凸	弥生中期貝層B	
76	o b	3.6	2.2	1.0	6.1	—	タ	—	タ	タ	タ
77	o b	3.0	2.4	0.5	4.68	—	タ	—	タ	タ	
78	o b	3.8	2.6	0.6	5.1	—	タ	尖 端	タ	タ	
79	o b	1.9	2.3	0.4	1.5	—	—	—	タ	—	
80	o b	2.45	1.5	0.7	2.1	—	—	—	三角形	弥生中期層	
81	o b	3.35	2.7	0.8	8.1	—	—	—	両 凸	タ	
82	o b	3.0	2.2	1.0	6.12	—	—	—	タ	タ	
83	o b	2.7	2.2	0.7	3.6	—	—	—	四角形	タ	
84	o b	2.6	2.8	0.7	7.22	—	—	—	両 凸	タ	
85	o b	4.9	3.7	1.4	18.9	—	—	—	タ	タ	
86	o b	3.5	3.6	0.9	15.55	—	—	—	タ	タ	



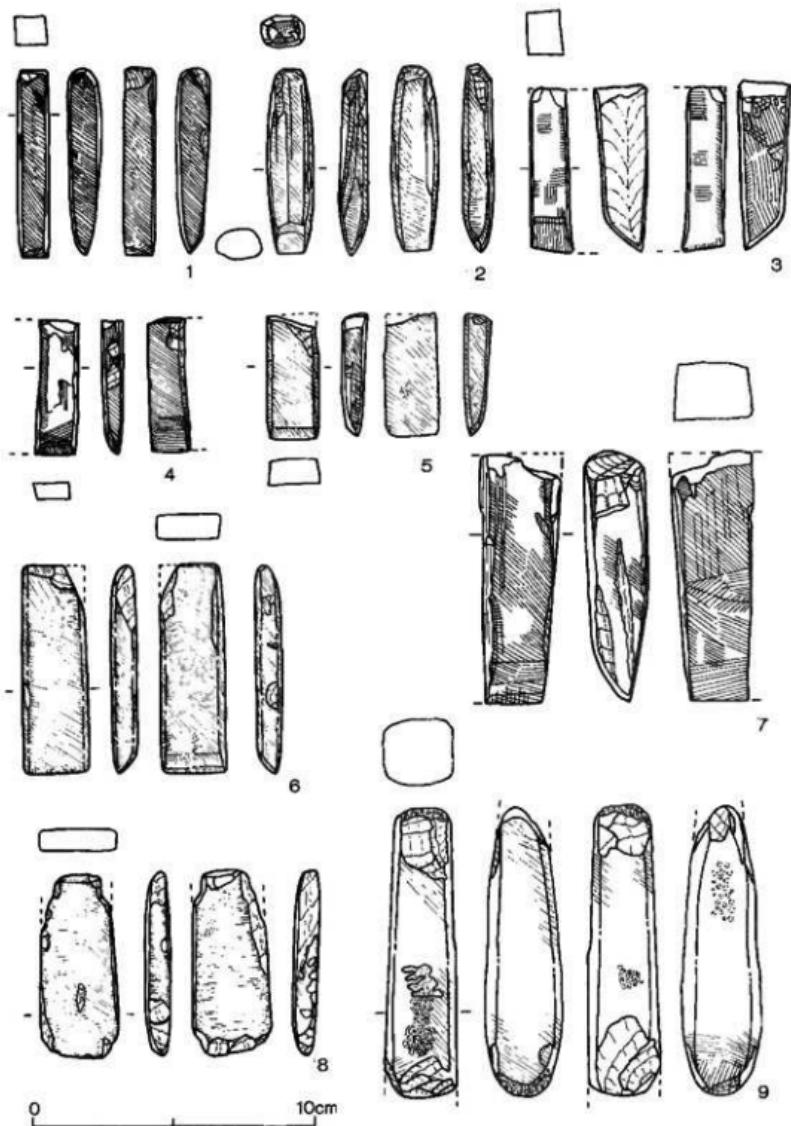
第176図 石器実測図(6)



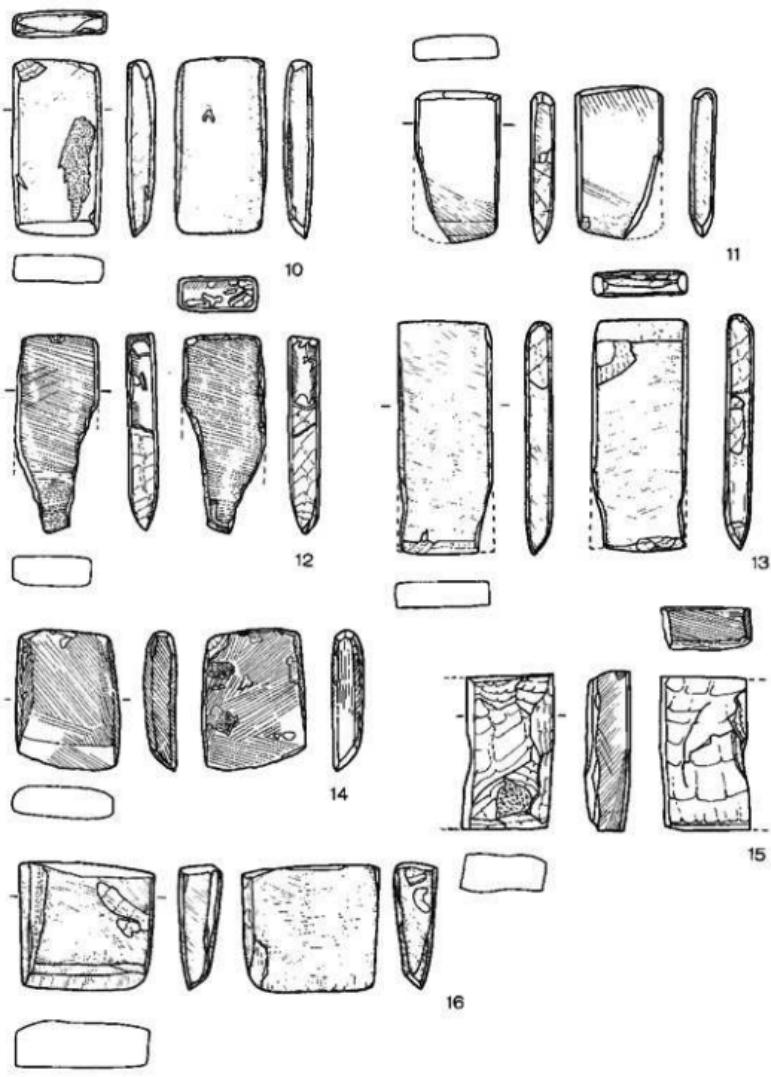
第177図 石器実測図(7)

表21 石 剣 計 測 表

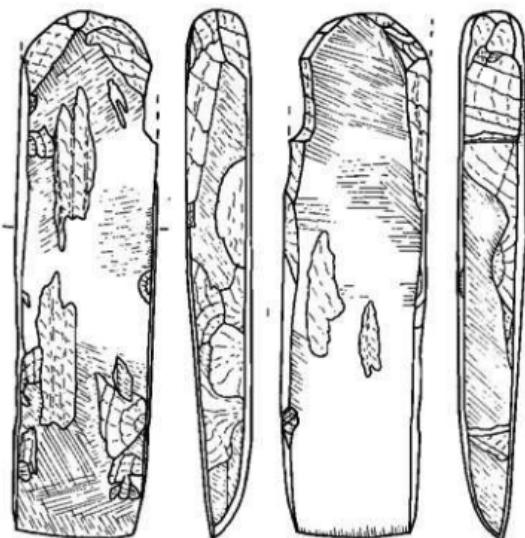
採集番号	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	特 徹	重 量 (g)	石 材	時 期
1	16.3	3.4	1.0	短剣型、完形	80	黒色片岩	弥生中期
2	16.5	3.5	1.3	ク 刀部のみ	104	ク	ク
3	10.1	4.1	1.4	ク	54	ク	ク
4	8.0	3.8	1.0	鉄剣型	40	ク	ク
5	7.9	4.5	0.8	ク 2孔アリ	38	ク	ク
6	8.6	3.0	0.7	ク	26.0	ク	ク
7	6.4	3.3	0.7	未成品?	24.0	ク	ク



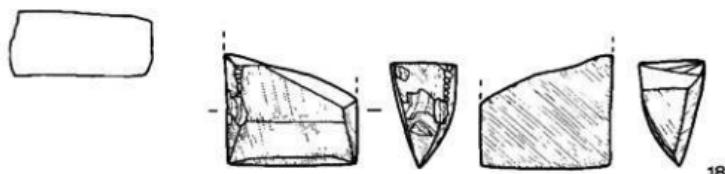
第178圖 石器實測圖(8)



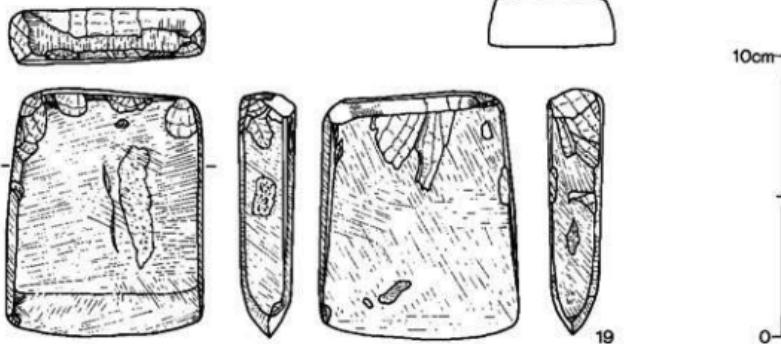
第179図 石器実測図(9)



17

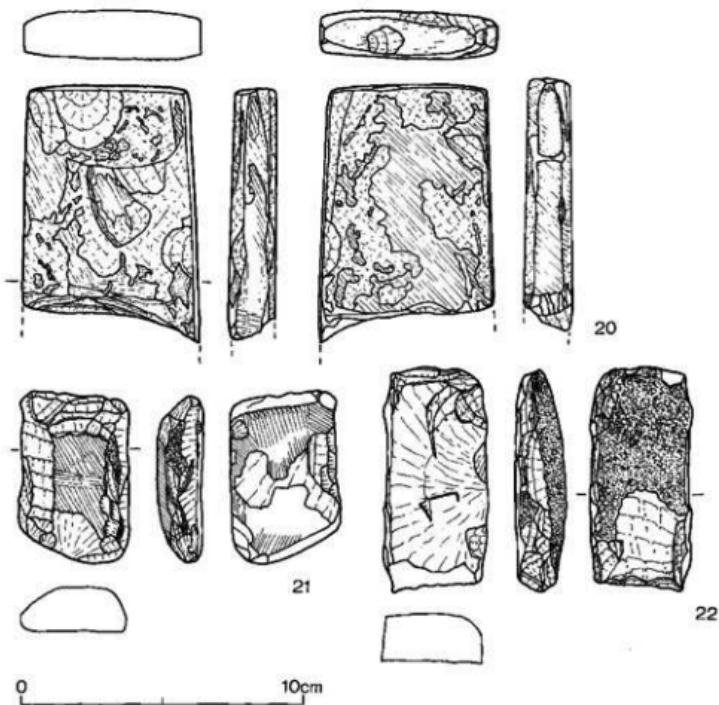


18

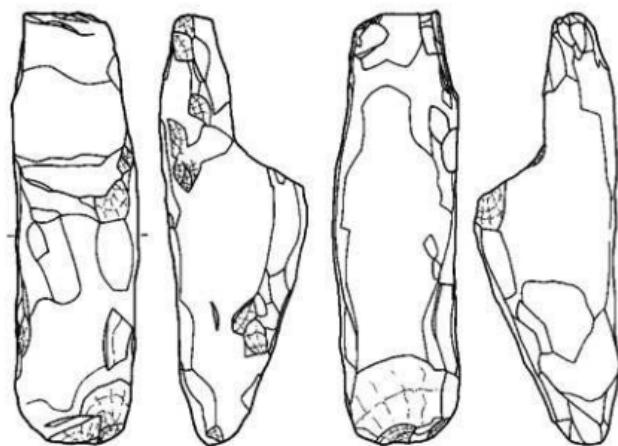


19

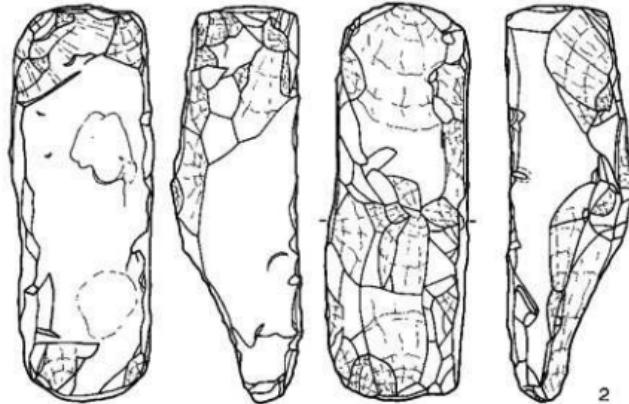
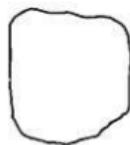
第180図 石器実測図(10)



第181図 石器実測図(11)



1

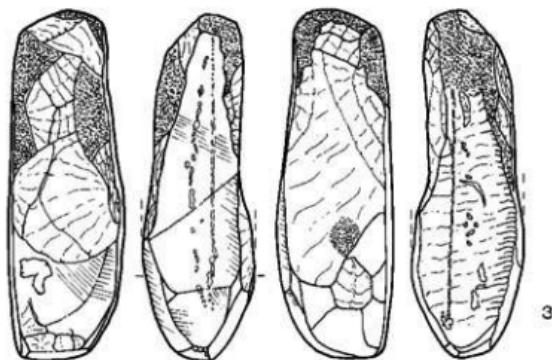


2

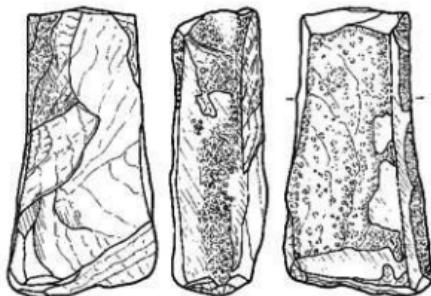
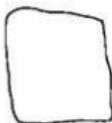
10cm
0

A vertical scale bar indicating a length of 10 centimeters, with '0' at the bottom and '10cm' at the top.

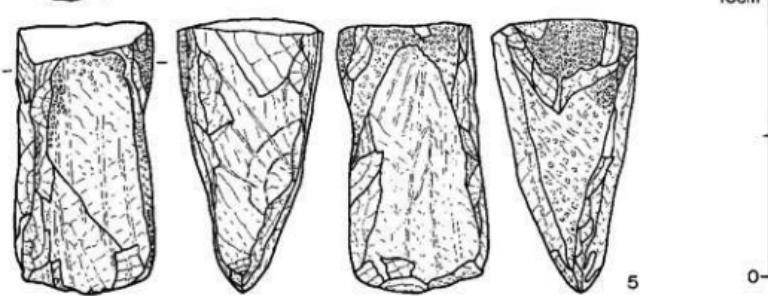
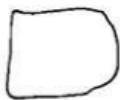
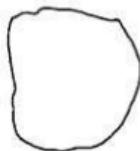
第182図 石器実測図(12)



3



4

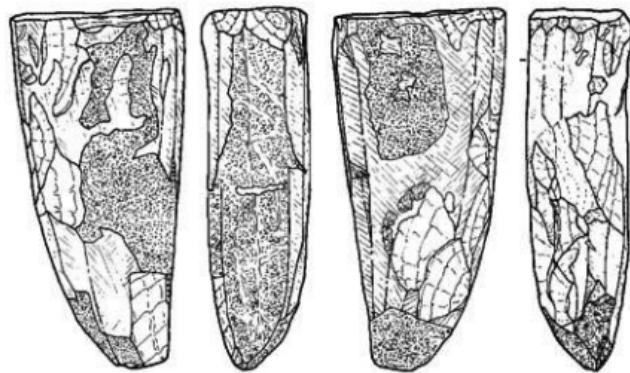


5

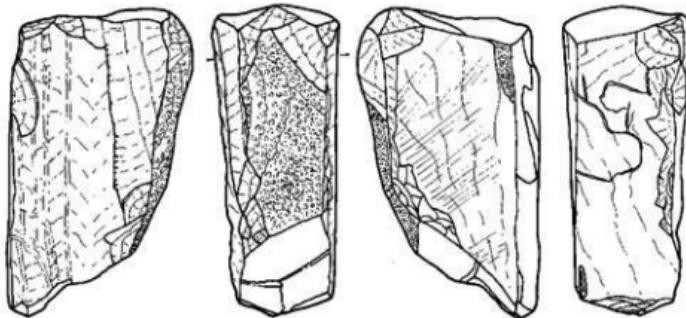
10cm
0

A vertical scale bar indicating a length of 10 cm, with a mark at 0 cm at the bottom.

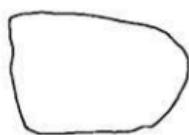
第183図 石器実測図(13)



6

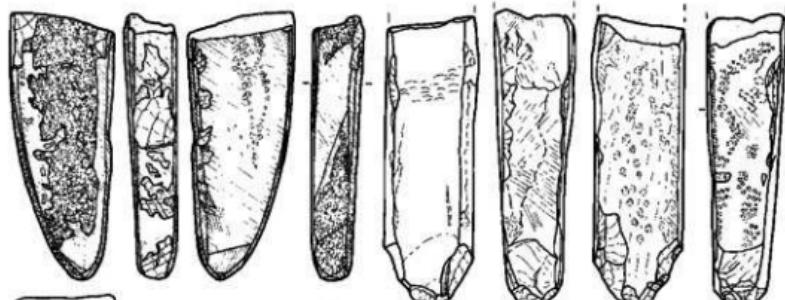


7



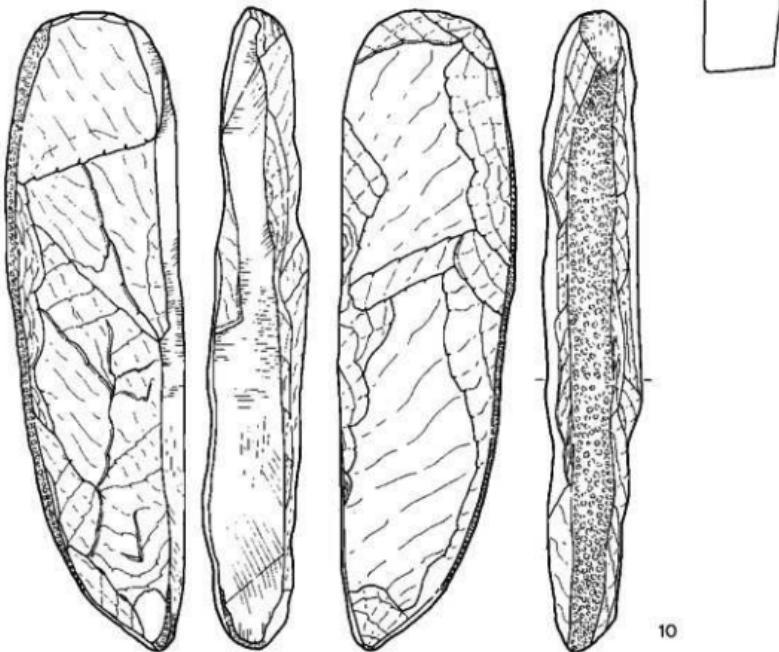
0 10cm

第184図 石器実測図(14)



8

9

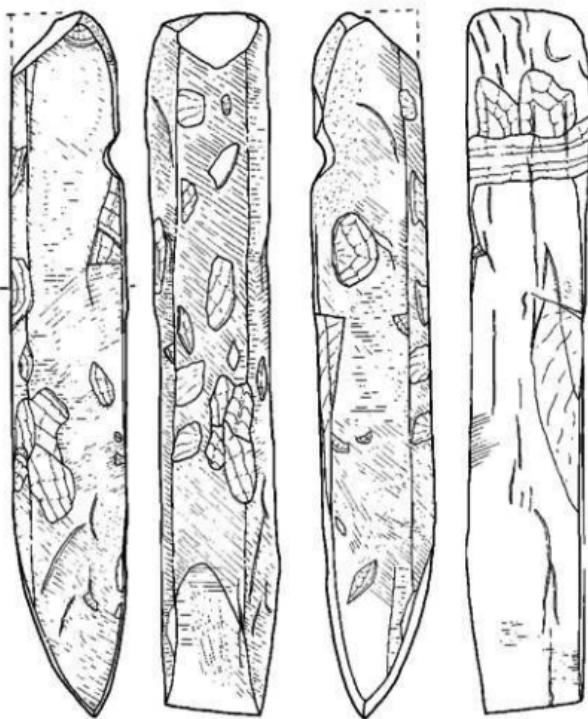


10



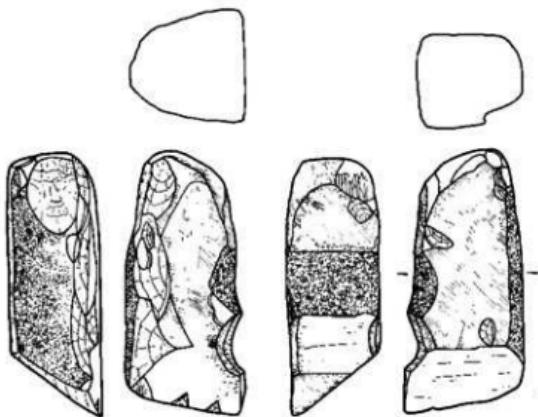
0 10cm

第185図 石器実測図(15)



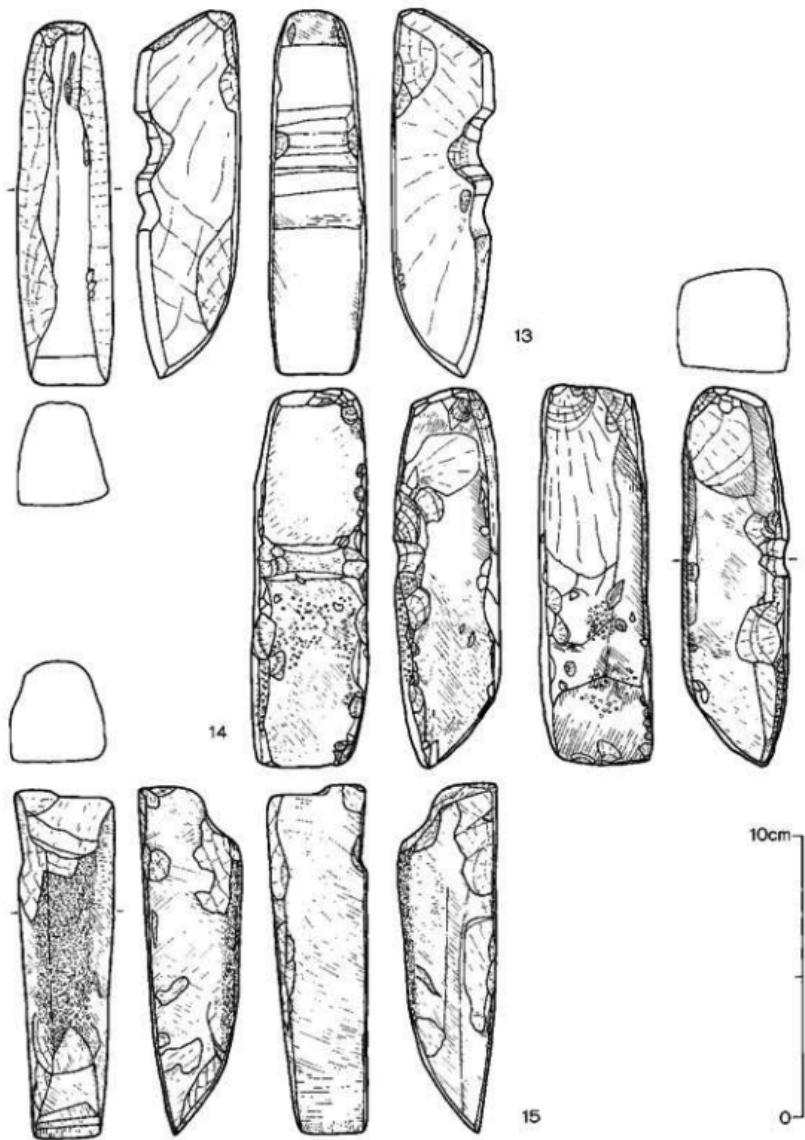
11

10cm
0

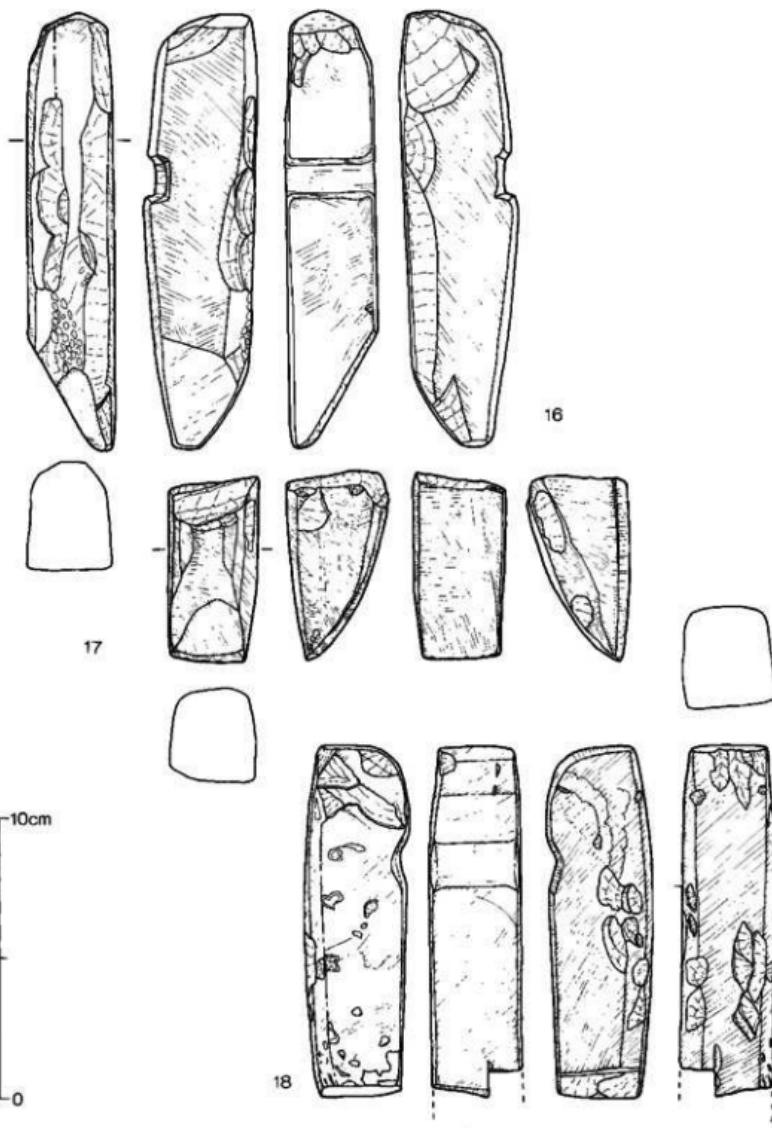


12

第186圖 石器實測圖(16)



第187図 石器実測図(17)



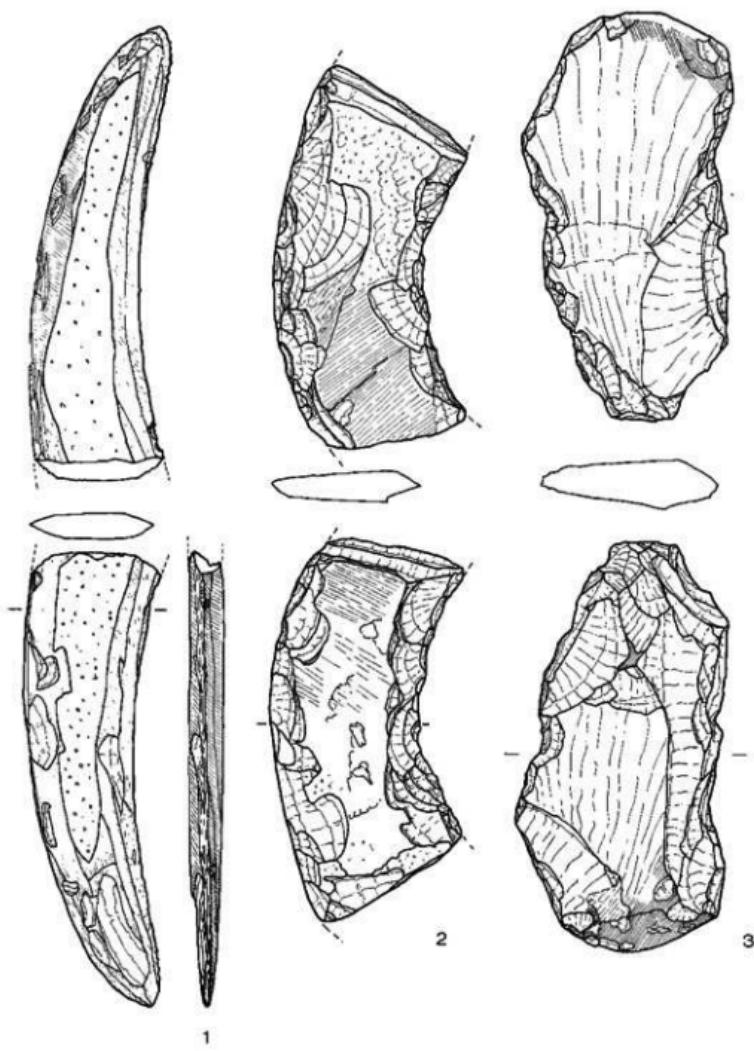
第188図 石器実測図(18)

表22 扇平石斧計測表

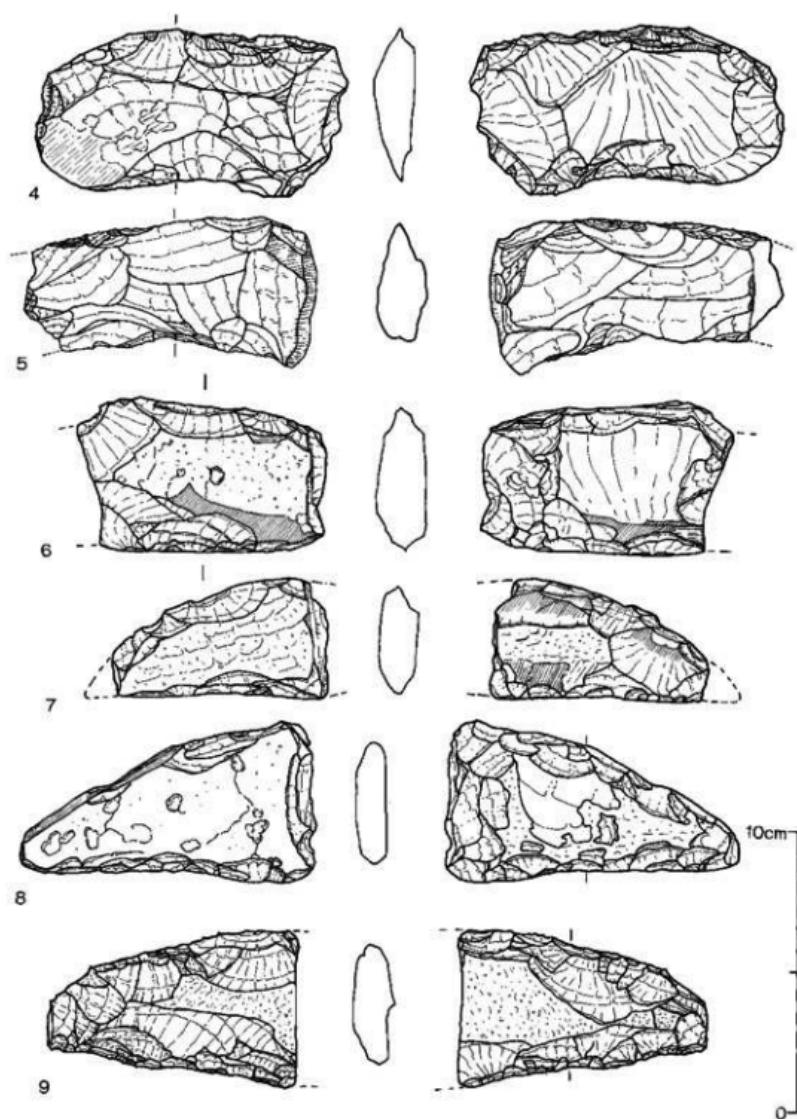
鉢底番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	刃部の特徴	重量 (g)	石材	時期備考
1	6.6	1.1	1.0	片刃	17	頁岩	前～中期 NKW-30
2	6.5	1.6	1.0	両刃	18	タ	NKW-34
3	5.8	1.3	1.6	片刃	26	タ	NKW-35
4	4.7	1.2	0.6	タ	8	タ	NKW-22
5	4.4	1.8	0.9	タ	14	タ	NKW-18
6	7.4	2.3	0.9	タ	34	タ	NKW-13
7	8.8	2.9	2.0	タ	95	泥質片岩	NKW-31
8	6.6	2.7	0.8	?	27	頁岩	NKW-20
9	10.2	2.5	2.7	?	120	タ	NKW-33
10	6.3	3.3	1.0	片刃	42	タ	NKW-15
11	5.4	3.0	0.8	両刃	25	タ	NKW-23
12	6.9	2.8	1.0	タ	36	タ	NKW-24
13	8.3	3.3	0.9	タ	54	タ	NKW-16
14	4.9	3.7	1.1	片刃	36	タ	NKW-14
15	5.4	2.9	1.3	?	46	タ	NKW-21
16	4.5	4.8	1.6	片刃	59	タ	NKW-17
17	18.6	5.0	2.3	タ	380	タ	NKW-29
18	4.0	4.5	1.9	タ	49	タ	NKW-19
19	8.8	7.0	2.2	両刃	250	タ	NKW-27
20	8.9	6.2	1.7	?	168	タ	NKW-28
21	6.0	3.8	1.6	?	49	砂質頁岩	NKW-26
22	7.9	3.5	1.7	?	81	頁岩	NKW-25

表23 拵入柱状片刃石斧計測表

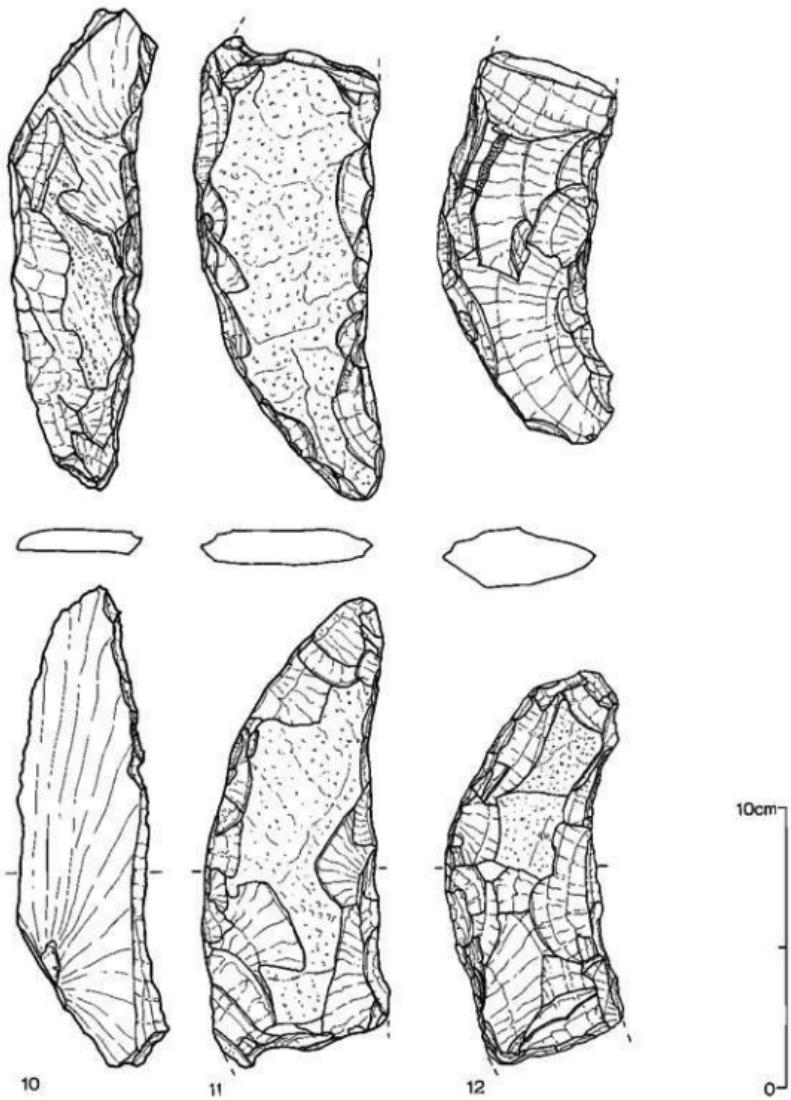
鉢底番号	完成度	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重 量 (g)	石材	時期	備考
1	A段階	15.3	4.4	450	緑色頁岩	前～中期	NKT-3
2	タ	14.1	5.0	492	タ	タ	NKT-2
3	B段階	12.2	3.8	305	タ	タ	NKW-37
4	タ	10.2	5.1	285	タ	タ	NKW-48
5	タ	9.5	4.9	329	タ	タ	NKW-38
6	タ	12.8	3.6	475	タ	タ	NKW-44
7	タ	10.9	4.3	468	タ	タ	NKW-39
8	タ	9.4	2.7	108	タ	タ	NKW-42
9	タ	10.5	3.2	148	タ	タ	NKW-40
10	タ	22.6	3.3	765	タ	タ	NKW-46
11	C段階	24.9	4.0	590	タ	タ	NKW-36
12	タ	9.0	4.2	タ	タ	タ	NKT-4
13	タ	13.9	3.2	248	砂質片岩	タ	NKW-48
14	タ	13.9	3.7	364	緑色頁岩	タ	NKT-5
15	タ	12.3	3.5	242	タ	タ	NKW-49
16	タ	15.5	3.1	334	タ	タ	NKW-47
17	タ	6.5	3.2	118	タ	タ	NKW-41
18	タ	12.4	3.2	330	タ	タ	NKW-45



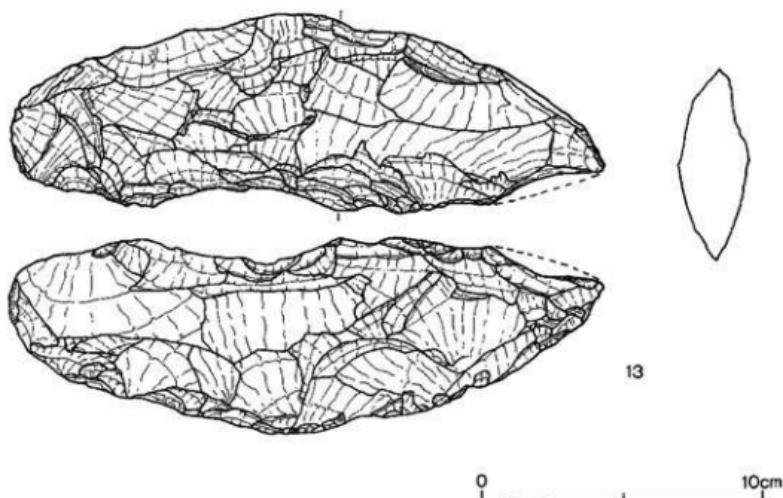
第189図 石器実測図(19)



第190図 石器実測図(20)



第191図 石器実測図(21)



第192図 石器実測図(22)

表24 石 器 計 測 表

標因番号	調 整	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	石 材	時 期	備 考
1	磨 製	16.1	4.6	1.0	緑色頁岩	前 期	NKY-36
2	打製+局部磨製	13.5	6.8	1.1	タ	タ	NKU-56
3	タ	14.5	7.4	1.8	タ	タ	NKU-57
4	タ	11.0	5.9	1.5	タ	タ	NKU-55
5	タ	10.3	4.9	1.3	タ	タ	NKY-39
6	タ	8.8	5.4	1.8	タ	タ	NKU-51
7	タ	7.6	4.3	1.2	タ	タ	NKU-52
8	打 製	10.4	5.7	1.0	タ	タ	NKU-53
9	タ	8.8	5.5	1.4	タ	タ	NKU-48
10	タ	16.9	4.6	0.7	タ	タ	NKU-54
11	タ	16.5	6.2	1.2	タ	タ	NKU-50
12	タ	13.9	5.3	2.0	タ	タ	NKU-49
13	タ	21.0	7.0	2.4	タ	タ	NKH-74

7点、打製石鎌6点である。石材は比較的剝離しやすいものが使用されており、粘板岩、頁岩、緑色凝灰岩といったものがみられる。使用された素材は、横長の剥片素材、もしくは扁平な自然石を利用したもので、一長側辺部を刃部とし、もう片方を背部とする。製作技法は刃部は直線刃（3・6）、内湾刃（1・2・4・5・11～13）とやや内湾気味（7～9）のものにわけができる。

打製石鎌（10～13） 中央面に主要剝離面もしくは自然面を残しながら周縁部に粗い調整剝離を加えている。縁辺部の剝離痕はやや深く、ほとんどが階段状の剝離調整がなされている。縄文時代の打製石器の製作方法とほとんど変化はないようだ。10は剥片素材の腹面部を大きく残したままで、背面部に粗い調整痕を残す。11・12も自然面、または主要剝離面を残しながら縁辺部を簡単に打ち欠いている。13は大形品で、刃部中央部がやや半円状にえぐれている。

局部磨製石鎌（1～8） いずれも粗い剝離調整の後、部分的に研磨を施している。1と7は先端部が残存している。とくに1は形状がシャープで、厚さも薄く、断面は両端とも銳く尖る。研磨は刃部中心に念入りに磨かれている。わずかだが刃こぼれと思われる使用痕もみられる。その他の石鎌は縁辺部近くを部分的に研磨している。

西川津遺跡からは多数の石鎌が出土しているにもかかわらず、磨製のものは1点も検出されなかった。また、出土した石鎌も未成品と言ってもいいような剝離調整が難なものばかりであった。このことは後述する石包丁についても言えることで、調整不十分の石器を成品として使用しているのが西川津遺跡の特徴であろう。

中国地方において一遺跡で最も多くの出土量を誇るのは山口県の綾羅木遺跡で、西川津遺跡はそれに次ぐものである。

Ⅰ 自 然 科 学 的 分 析

1. 松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について 渡辺 正巳 (244)
2. 西川津遺跡弥生中期相当層から検出された
動物遺存体について 井上 貴央 (261)

1. 松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について

鈴 川崎地質 渡 辺 正 巳

I はじめに

国内各地で低湿地に埋没する遺跡の調査が行われている。島根県では近年、松江市のタテチヨウ遺跡・中竹矢遺跡・才ノ峰遺跡・布田遺跡などの低湿地での遺跡の調査が行われている。これらの遺跡においては他の立地条件の遺跡とことなり、種子・果実・葉・材などの大型植物遺体はもとより様々な種類の遺物が出土する。それらを総合的に検討することにより、当時の生活様式や環境の解明が行われる可能性を持っている。

今回、島根県教育委員会が1983年度から1985年度にかけて松江市西川津遺跡海崎地区に(第193図)おいて行った調査により出土した木製品の樹種同定を行う機会をえた。この内本編では、弥生中期を中心とした349点の試料について報告する。同時に採取された流木については、大西ほか(印刷中)において記載済みである。本編においては、筆針葉樹と、一部の広葉樹についてのみ記載を行い、不明点のあるものについては散孔材、環孔材と言う記述にとどめた。これらについては統報で明らかにして行きたい。また、農具とその用材についての若干の考察を行った。

II 遺跡の概要

松江市の北東部を流れる朝雨川流域一帯には、低湿地遺跡が広く分布しており、上流部を西川津遺跡、下流部をタテチヨウ遺跡と呼んでいる。西川津遺跡では、島根県教育委員会により1979年の試掘調査以来、2年間の試掘調査と5年間の本調査が行われてきた(島根県教育委員会、1980、1981; 島根県土木部河川課・島根県教育委員会、1987a)。

これまで、両遺跡は縄文時代早期から中世に至る遺跡であり、土器、石器などに混ざって多くの植物遺物、動物遺物が出土したことが報告されている(島根県教育委員会、1974、1980、1981; 島根県土木部河川課・島根県教育委員会、1987a、1987b)。

西川津遺跡では弥生時代前期から中期にかけての期間の遺物が多く、この時代の貝塚群や堀立柱の柱穴も見つかっている。タテチヨウ遺跡においても同時期と考えられる出土遺

物は存在するが、人間の生活した跡は未だ報告されていない。

これらの遺跡においては、従来から継続的に花粉分析が行われており、およそ縄文時代後半から現在に至るまでの花粉分带が行われている（大西、1974；大西・渡辺、1987a、b、c）。

大型植物遺物については、西川津遺跡において内田（1987）が、縄文時代のものと考えられる種子、実などを、渡辺（1987）が縄文時代の新型木製品の記載を行っている。また、タテチヨウ遺跡においては粉川（1974）の報告があるが、出土層準不明の試料のため時代的な考察は行われていない。

III 試料の処理方法

樹種鑑定を行うにあたり、試料にできるかぎり損傷を与えないように注意し、横断面・接線断面・放射断面の切片を作り、サフランで染色した後、カナダバルサムで封入し永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡下で観察し内部形態的特徴から樹種の同定を行った。

IV 木材の記載及び結果

樹種同定に至った根拠を以下に示す【用語は島地ほか（1985）に準じた】。樹種同定は、小林（1957）、鈴木・能代（1986）、須藤（1959）、能代・鈴木（1987a）の記載を参考にし、現生標本のあるものについてはそれを参考にした。試料の同定結果を表26に示す。

1) モミ属 *Abies* sp. (10試料)

仮道管、放射柔細胞、傷害樹脂道からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞早材部の分野壁孔はスギ型であり、末端壁はじゅう状であるなどから、モミ属であると同定できる。モミ属にはモミ、ウラジロモミなどいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでモミ属としておく。

2) ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp. (12試料)

仮道管、樹脂細胞、放射樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行はややゆ

るやかで、樹脂細胞は晩材に偏在する。放射柔細胞早材部の分野壁孔はヒノキ型で2個存在するなどからヒノキ属であると同定できる。ヒノキ属には、ヒノキ、サワラなどいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでヒノキ属としておく。

3) スギ *Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don (56試料)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞早材部の分野壁孔はスギ型で2個存在するなどからスギであると同定できる。

4) イスガヤ属 *Cephalotaxus* spp. (14試料)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材で、晩材の山が非常にせまく年輪界はやや不明瞭である。仮道管には螺旋肥厚が明瞭であるなどからイスガヤ属であると同定できる。イスガヤ属にはイスガヤ、ハイイスガヤがあるが区別が困難なのでイスガヤ属としておく。

5) イチイ属 *Taxus* sp. (1試料)

仮道管、放射柔細胞からなる針葉樹材で、晩材の山が非常にせまく年輪界がやや不明瞭である。仮道管には螺旋肥厚が明瞭であるなどからイチイであると考えられるが、本地域に近い大山には同属のキャラボクが生育しており、対比標本がたいことから今回はイチイ属としておく。

6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. (1試料)

年輪に沿って大型の道管が単独で数列に並んでいる環孔材で、成長方向に向かって徐々に道管の軽を減じていく。孔圈外道管は火炎状配列を示し、道管穿孔は単穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型であることなどからクリと同定した。

7) スダジイ *Castanopsis cuspidata* var. *Sieboldii* (MAKINO) NAKAI (3試料)

年輪に沿って中庸の道管が単独で並んでいる環孔材で、孔圈外道管は火炎状配列を示し、道管穿孔は単穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型であることなどからスダジイと同定した。

8) コナラ節 *Quercus* (Sect. *Prinus*) Spp. (1試料)

年輪に沿ってやや大きい中庸の道管が単独で並んでいる環孔材で、角ばった孔圈外道管は火炎状配列を示す。道管穿孔は単穿孔。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型のものと複合放射組織があることなどから、コナラ節と同定した。コナラ節にはコナラ、ミズナラなどのいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでコナラ節としておく。

9) アカガシ亜属 *Quercus* (*Cyclo.*) spp. (202試料)

中庸の道管が単独で配列する放射孔材で、道管穿孔は単穿孔。軸方向柔細胞は、1ないし数細胞巾の独立帶状柔組織を示すことが多い。放射組織は単列できわめて低い同性放射組織型のものと複合放射組織があることなどから、アカガシ亜属と同定した。アカガシ亜属にはいくつかの種が存在するが、区別が困難なのでアカガシ亜属としておく。

V 考 察

今回得られた結果より、西川津遺跡では弥生時代中期においてすでに農具その他の木製品の用材が決っていたと考えられる。このことは、伊藤ほか(1987)によりまとめられた全国のとよく一致する。しかし西川津遺跡において、どの時代にどの木製品の用材が決っていったかは、弥生中期以前の資料が不足しているために明かではない。また、現在(1987年末)までに島根県下で報告されている低湿地遺跡の内、木製品の出土が多量に報告されている遺跡には、松江市竹矢町の布田遺跡・中竹矢遺跡・才ノ岬遺跡(島根県教育委員会、1983)・西川津町のタテチョウ遺跡(島根県教育委員会、1974)と、今回の報告にある西川津遺跡(渡部、1987)があるが、何れも試料数が少ないため、比較の対照となり難い。

また、表26に示されているように、鍛とされているもののうち明らかに実用に向かない樹種で作られているものがある。これは西川津遺跡においても当てはまる。また、西川津遺跡においてこの様な農具のはほとんどが小型であり実用的でないことなどから、祭祀等に使われた可能性も考えられる。

Ⅵ ま と め

- ① 松江市西川津遺跡より出土した弥生時代前期より、古墳時代前期にかけての木製品349試料についての樹種鑑定をした。

- ② 樹種鑑定の結果、針葉樹 5 分類群、広葉樹 6 分類群に分けられた。
- ③ 弥生時代中期に、西川津遺跡では鍬・鋤の用材がほぼ決定していたと考えられる。
- ④ 鍬・鋤の内、明らかに実用に適さない樹種で作られたものが存在した。これらは祭祀等で使用されていた可能性もある。

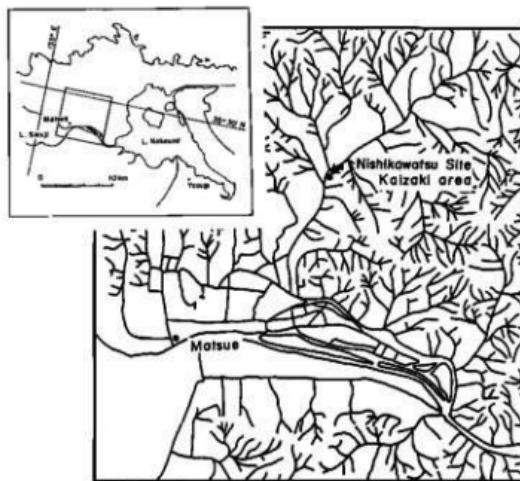
VII 辞 謝

天理大学付属参考館学芸員金原正明氏には、樹種同定にあたり御指導頂いた。また、島根県教育委員会文化課主事内田律雄氏には、物心両面にわたり多くの御援助を頂いた。同文化課片山礼子氏には永久プレパラート作りに御協力頂いた。今回の報告をまとめるにあたりここに厚く感謝の意を表したい。

文 献

- 伊藤隆夫・山口和穂・林 昭三・布谷知夫・島地 謙、1987：日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途。木材研究・資料、No.23、42-210。
- 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会、1983：国道九号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書(IV)本文編、21-198、199-345、346-458。
- 粉川昭平、1974：出土種子類の観察。朝鈴川河川改修工事に伴うタテチ_{ヨウ}遺跡発掘調査報告書—I—、180-187、p1. 72。
- 小林彌一、1975：本邦における針葉樹材のカード式識別法。林業試験場研究報告。No.98、1-84、p1. 1-16。
- 能代修一・鈴木三男、1987 a：中里遺跡出土木材遺体から推定される古植生。東北新幹線建設に伴う発掘調査中里遺跡2、253-320。
- 大西部夫、1974：花粉の分析。朝鈴川河川改修工事に伴うタテチ_{ヨウ}遺跡発掘調査報告書—I—、188-193。
- ・渡辺正巳、1987 a：西川津遺跡(83)の花粉分析。朝鈴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—I—(海崎地区I)、252-261。
- ・——、1987 b：タテチ_{ヨウ}遺跡(85)の花粉分析。朝鈴川河川改修工事に伴うタテチ_{ヨウ}遺跡発掘調査報告書—II—、219-223。
- ・——、1987 c：松江市西川津町、タテチ_{ヨウ}遺跡の花粉分析。山陰地域研究(自然環境)、No.3、109-120。
- ・——・内田律雄、1988：松江市西川津遺跡出土の材化石。山陰地域研究(自然環境)、No.4。
- 島地 謙・佐伯 広・原田 広・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司、1985：木材の構造、文永堂、276p。東京。
- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会、1987 a：朝鈴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—I—(海崎地区I)。島根県土木部河川課・島根県教育委員会、28-3p。

- ・—、1987b：朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書—II—、島根県土木部河川課・島根県教育委員会、237p。
- ・—、印刷中：朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—IV—（海崎地区II）。島根県土木部河川課・島根県教育委員会。
- 島根県教育委員会、1974：朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書—I—。島根県教育委員会、204p。
- 、1980：朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—I—。島根県教育委員会、31p。
- 、1981：西川津遺跡詳細分布調査報告書。島根県教育委員会、12p。
- 須藤彰司、1959：本邦産広葉樹材の識別（識別カードを適用して）。林業試験場研究報告、No.118、1—138、pl. 1—36。
- 鈴木三男・能代修一、1986：新保遺跡出土加工木の樹種。新保遺跡I 劍生・古墳時代大溝編—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集—本文編、71—94、pl. 3—19。
- 内田律雄、1987：植物遺体。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—III—（海崎地区I）、264、pl. 136。
- 渡辺正巳、1987：松江市西川津遺跡出土の木製品について。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書—III—（海崎地区I）、264、pl. 136。



第193図 西川津遺跡位置図

表25 鍬類の用材と時代の変遷 (伊藤ほか1987をもとに編集)

用材	古文鏡	鏡面鏡	中期一 後期	中期一 後期	後期	漆生内鏡			古墳	奈良	平安	平安		
						古生古墳	中期一 後期	後期						
アカガレ亞麻	2	29	19	27	36		92	91		9	32	2	14	1
クスノキ	2	2			1	2	4							
センダン				1										
ニレ				1										
コナラ						1(5)	1	(1)	5(40)		2(1)			
ムクロジ					1	1								
アオダモ							1							
ニズリハ							1							
クロマツ						1								
ケヤキ							1	2						
シイノキ							1							
キハダ							1							
ホムノキ								1						
サカキ									1					
クリ										1				
イスノキ	1										18		3	
スギ										1	2			
ヒノキ										3		1		

表26 木製品一覧表

番号	時代	製品名	樹種	備考
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亞属	N KM— 21
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亞属	タ— 31
0	弥生前期	丸鍬（未）	アカガシ亞属	タ— 45
0	弥生前期	有頭柄	アカガシ亞属	タ— 50
0	弥生前期	鍔？	スギ	タ— 51
0	弥生前期	蓋 or 容器（木）	クリ	タ— 59
0	弥生前期	有頭棒	散孔材	タ— 61
0	弥生前期	広鍬（木）	アカガシ亞属	タ— 66
0	弥生前期	鍔 or 棍の柄	アカガシ亞属	タ— 81
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亞属	タ— 83
0	弥生前期	石斧の柄	散孔材	タ— 86
0	弥生前期	石斧の柄	アカガシ亞属	タ— 109
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属	タ— 111
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属？	タ— 112
0	弥生前期	ヤス状木製品	イヌガヤ属	タ— 115
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属？	タ— 116
0	弥生前期	ヤス状木製品	モミ属？	タ— 117
0	弥生前期	下駄付広鍬？	アカガシ亞属	タ— 118
0	弥生前期	広鍬（未）	アカガシ亞属	タ— 144
0	弥生前期	鍔（未）	アカガシ亞属	タ— 159
0	弥生前期	広鍬（未）	アカガシ亞属	タ— 203
0	弥生前期	下駄付広鍬	アカガシ亞属	タ— 216
0	弥生前期	切れ端	アカガシ亞属	タ— 219
0	弥生前期	突歫（木）	アカガシ亞属	タ— 223
0	弥生前期	下駄付広鍬（未）	アカガシ亞属	タ— 237
0	弥生前期	みかん剤	アカガシ亞属	タ— 247
0	弥生前期	みかん剤	スギ	タ— 262
0	弥生前期	丸鍬（木）	アカガシ亞属	タ— 270
0	弥生前期	板状木製品	アカガシ亞属	タ— 280
0	弥生前期	みかん剤	アカガシ亞属	タ— 282
0	弥生前期	みかん剤	アカガシ亞属	タ— 286
0	弥生前期	丸鍬（木）	アカガシ亞属	タ— 291
0	弥生前期	板状木製品	スギ	タ— 296
0	弥生前期	有頭棒（部材）	スギ	タ— 297
0	弥生前期	有頭棒	ヒノキ属	タ— 304
0	弥生前期	丸鍬	未鑑定	タ— 313
0	弥生前期	やす	骨角器	タ— 321
0	弥生前期	用途不明	スダジイ	タ— 322
0	弥生前期	容器	環孔材	タ— 325
0	弥生前期	板状木製品（木）	アカガシ亞属	タ— 332
0	弥生前期	杖	ヒノキ属	タ— 339
0	弥生前期	広鍬（木）	アカガシ亞属	タ— 348
0	弥生前期	広鍬 or 鍔	アカガシ亞属	タ— 350

番 号	時 代	製 品 名	樹 種	備 考
0	弥生前期	鋤？(木)	スギ	N KM- 351
0	弥生前期	柄	アカガシ亞属	タ - 371
0	弥生前期	下駄付広鉢	アカガシ亞属	タ - 372
0	弥生前期	下駄付広鉢	アカガシ亞属	タ - 373
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	タ - 374
0	弥生前期	広歎	アカガシ亞属	タ - 375
0	弥生前期	下駄付広鉢	アカガシ亞属	タ - 376
0	弥生前期	下駄付広鉢	アカガシ亞属	タ - 377
0	弥生前期	下駄付広鉢	アカガシ亞属	タ - 378
0	弥生前期	板状木製品(木)	未鑑定	タ - 379
0	弥生前期	鋤？	未鑑定	タ - 380
0	弥生前期	板状木製品(木)	未鑑定	タ - 381
0	弥生前期	丸歎(木)	未鑑定	タ - 382
0	弥生前期	広歎	未鑑定	タ - 383
0	弥生前期	柱	未鑑定	タ - 384
0	弥生前期	鋤、歎の柄	未鑑定	タ - 385
0	弥生前期	下駄付広鉢(木)	未鑑定	タ - 386
0	弥生前期	容器	未鑑定	タ - 387
0	弥生前期	石斧の柄	未鑑定	タ - 388
0	弥生前期	板状木製品(木)	未鑑定	タ - 389
0	弥生前期	広歎(木)	未鑑定	タ - 390
0	弥生前期	広歎	未鑑定	タ - 391
0	弥生前期	下駄付広鉢(木)	未鑑定	タ - 392
0	弥生前期	広歎(木)？	未鑑定	タ - 393
0	弥生前期	板状木製品(木)	未鑑定	タ - 394
0	弥生前期	丸歎	未鑑定	タ - 395
0	弥生前期	下駄付広鉢(木)	未鑑定	タ - 396
0	弥生前期	丸歎(木)	未鑑定	タ - 397
0	弥生前期	狹歎	未鑑定	タ - 398
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	タ - 399
0	弥生前期	みかん割	未鑑定	タ - 400
0	弥生前期	不明木製品	未鑑定	タ - 401
0	弥生前期	杭	未鑑定	タ - 402
0	弥生前期	容器	未鑑定	タ - 403
0	弥生前期	田下駄？	未鑑定	タ - 405
0	弥生前期	匙	未鑑定	タ - 406
0	弥生前期	広歎	未鑑定	タ - 407
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	タ - 409
0	弥生前期	有頭棒	未鑑定	タ - 410
0	弥生前期	石斧の柄	未鑑定	タ - 413
0	弥生前期	石斧の柄	未鑑定	タ - 414
0	弥生前期	柱	未鑑定	タ - 415
0	弥生前期	柱	未鑑定	タ - 416
0	弥生前期	丸歎(木)	未鑑定	タ - 417

番号	時代	製品名	樹種	備考
0	弥生前期	下駄付広鏡(木)	木鑑定	N K M - 418
0	弥生前期	柱	木鑑定	タ - 420
0	弥生前期	広鏡	木鑑定	タ - 424
0	弥生前期	有頭樽	木鑑定	タ - 425
0	弥生前期	下駄付広鏡	木鑑定	タ - 426
0	弥生前期	柱	木鑑定	タ - 427
0	弥生前期	柱	木鑑定	タ - 428
0	弥生前期	柱	木鑑定	タ - 429
0	弥生前期	栓	木鑑定	タ - 430
0	弥生前期	弓	木鑑定	タ - 432
1	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 272
2	弥生中期	みかん剝	木鑑定	タ - 275
3	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 261
4	弥生中期	みかん剝	木鑑定	タ - 276
5	弥生中期	鉗	アカガシ亞属	タ - 252
6	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 151
7	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 248
8	弥生中期	鉗(木)	アカガシ亞属	タ - 277
9	弥生中期	みかん剝	木鑑定	タ - 279
10	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 140
11	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 259
12	弥生中期	みかん剝	アカガシ亞属	タ - 70
13	弥生中期	板状木製品	アカガシ亞属	タ - 236
14	弥生中期	板状木製品(未)	アカガシ亞属	タ - 238
15	弥生中期	板状木製品	アカガシ亞属	タ - 260
16	弥生中期	板状木製品	アカガシ亞属	タ - 251
17	弥生中期	板状木製品(木)	アカガシ亞属	タ - 241
18	弥生中期	みかん剝切れ端	アカガシ亞属	タ - 129
19	弥生中期	みかん剝切れ端	アカガシ亞属	タ - 209
20	弥生中期	板状木製品	アカガシ亞属	タ - 226
21	弥生中期	切れ端	アカガシ亞属	タ - 132
22	弥生中期	切れ端	アカガシ亞属	タ - 125
23	弥生中期	農具の切れ端	アカガシ亞属	タ - 9
24	弥生中期	切れ端	アカガシ亞属	タ - 139
25	弥生中期	鉗(木)	アカガシ亞属	タ - 36
26	弥生中期	広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 141
27	弥生中期	広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 194
28	弥生中期	広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 363
29	弥生中期	広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 352
30	弥生中期	下駄付広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 192
31	弥生中期	F駄付広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 13
32	弥生中期	F駄付広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 44
33	弥生中期	F駄付広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 12
34	弥生中期	下駄付広鏡(未)	アカガシ亞属	タ - 64

番号	時代	製品名	樹種	備考
35	弥生中期	下駄付広鉢(木)	アカガシ亜属	N KM— 6
36	弥生中期	下駄付広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 74
37	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 233
38	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 368
39	弥生中期	下駄付広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 67
40	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 48
41	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 182
42	弥生中期	F駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 214
43	弥生中期	F駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 3
44	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 57
45	弥生中期	F駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 43
46	弥生中期	広鉢	木鍛定	タ— 327
47	弥生中期	広鉢	木鑑定	タ— 317
48	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 204
49	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 105
50	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 26
51	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 114
52	弥生中期	広鉢	アカガシ亜属	タ— 196
53	弥生中期	下駄付広鉢	アカガシ亜属	タ— 107
54	弥生中期	えぶり(木)	アカガシ亜属	タ— 17
55	弥生中期	火繩り白	頭丸材	タ— 92
56	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 341
57	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 340
58	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 184
59	弥生中期	みかん削	アカガシ亜属	タ— 263
60	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 136
61	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 135
62	弥生中期	丸鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 131
63	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 127
64	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 170
65	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 119
66	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 120
67	弥生中期	広鉢(木) ?	アカガシ亜属	タ— 24
68	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 96
69	弥生中期	広鉢(木)	アカガシ亜属	タ— 15
70	弥生中期	広鉢	アカガシ亜属	タ— 173
71	弥生中期	広鉢	アカガシ亜属	タ— 193
72	弥生中期	広鉢?	アカガシ亜属	タ— 245
73	弥生中期	鏡の柄	散孔材	タ— 35
73	弥生中期	広鉢(手鏡)	アカガシ亜属	タ— 35
74	弥生中期	広鉢	アカガシ亜属	タ— 2
75	弥生中期	鏡の切れ端?	アカガシ亜属	タ— 32
76	弥生中期	広鉢	アカガシ亜属	タ— 65
77	弥生中期	狭鉢	アカガシ亜属	タ— 212

番号	時代	製品名	樹種	備考
78	弥生中期	狭歯	アカガシ亞属	N KM— 358
79	弥生中期	狹歯	アカガシ亞属	タ — 77
80	弥生中期	狭歯	アカガシ亞属	タ — 72
81	弥生中期	広歯	アカガシ亞属	タ — 28
82	弥生中期	狹歯	アカガシ亞属	タ — 95
83	弥生中期	広歯	アカガシ亞属	タ — 30
84	弥生中期	広歯	アカガシ亞属	タ — 333
85	弥生中期	又歯	アカガシ亞属	タ — 40
86	弥生中期	広歯(末)	アカガシ亞属	タ — 18
87	弥生中期	歯の柄	ヒノキ属	タ — 5
88	弥生中期	丸歯(木)	アカガシ亞属	タ — 190
89	弥生中期	丸歯(末)	アカガシ亞属	タ — 367
90	弥生中期	丸歯(木)	アカガシ亞属	タ — 211
91	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 185
92	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 27
93	弥生中期	丸歯(末)	アカガシ亞属	タ — 8
94	弥生中期	丸歯(木)	アカガシ亞属	タ — 121
95	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 1
96	弥生中期	丸歯(末)	アカガシ亞属	タ — 7
97	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 128
98	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 138
99	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 90
100	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 69
101	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 187
102	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 202
103	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 14
104	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 23
105	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 124
106	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 208
107	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 22
108	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 370
109	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 68
110	弥生中期	丸歯(未)	アカガシ亞属	タ — 258
111	弥生中期	丸歯	アカガシ亞属	タ — 76
112	弥生中期	丸歯	未確定	タ — 411
113	弥生中期	丸歯	アカガシ亞属	タ — 188
114	弥生中期	丸歯	アカガシ亞属	タ — 97
115	弥生中期	筒	アカガシ亞属	タ — 254
116	弥生中期	錫(未)	アカガシ亞属	タ — 55
117	弥生中期	錫の柄(木)	アカガシ亞属	タ — 62
118	弥生中期	なすび形錫	アカガシ亞属	タ — 154
119	弥生中期	なすび形錫	アカガシ亞属	タ — 345
120	弥生中期	用途不明木製品	放射孔材	タ — 201
121	弥生中期	錫	木鑑定	タ — 307

番号	時代	製品名	樹種	備考
121	弥生中期	なすび形鋤	アカガシ亞属	N.K.M.— 232
122	弥生中期	なすび形鋤	アカガシ亞属	タ — 34
123	弥生中期	鋤	未鑑定	タ — 421
124	弥生中期	鋤	未鑑定	タ — 326
125	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 324
126	弥生中期	不明木製品	アカガシ亞属	タ — 4
127	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 360
128	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 343
129	弥生中期	鋤	未鑑定	タ — 380
130	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 143
131	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 243
132	弥生中期	鋤の柄?	環孔材	タ — 349
133	弥生中期	切れ端?	アカガシ亞属	タ — 29
134	弥生中期	鋤? (末)	アカガシ亞属	タ — 198
135	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 73
136	弥生中期	鋤 (末)	アカガシ亞属	タ — 160
137	弥生中期	鋤 (末)	アカガシ亞属	タ — 63
138	弥生中期	鍔 (末) ?	アカガシ亞属	タ — 25
139	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 19
140	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 167
141	弥生中期	鋤	スギ	タ — 225
142	弥生中期	杯	モミ属	タ — 85
143	弥生中期	鋤状木製品	スギ	タ — 71
144	弥生中期	鋤	アカガシ亞属	タ — 108
145	弥生中期	杯	アカガシ亞属	タ — 84
146	弥生中期	鋤	未鑑定	タ — 408
147	弥生中期	鋤状木製品	アカガシ亞属	タ — 75
148	弥生中期	みかん割切れ端	アカガシ亞属	タ — 250
149	弥生中期	切れ端	アカガシ亞属	タ — 249
150	弥生中期	作業台	アカガシ亞属	タ — 213
151	弥生中期	みかん割切れ端	クリ	タ — 137
152	弥生中期	切れ端	アカガシ亞属	タ — 331
153	弥生中期	砧	散孔材	タ — 142
154	弥生中期	砧 (末)	散孔材	タ — 122
155	弥生中期	田下駄?	アカガシ亞属	タ — 244
156	弥生中期	田下駄?	アカガシ亞属	タ — 257
457	弥生中期	田下駄	スギ	タ — 33
458	弥生中期	田下駄	スギ	タ — 146
159	弥生中期	田下駄?	モミ属	タ — 199
160	弥生中期	丸鉢 (末)	アカガシ亞属	タ — 133
161	弥生中期	鋤 (末)	アカガシ亞属	タ — 149
162	弥生中期	みかん割	アカガシ亞属	タ — 274
163	弥生中期	みかん割	アカガシ亞属	タ — 265
164	弥生中期	杭 or 柱	ヒノキ属	タ — 305

番号	時代	製品名	樹種	備考
165	弥生中期	柱	未鑑定	N KM— 412
166	弥生中期	鋤(木)	アカガシ亞属	タ — 269
167	弥生中期	みかん割	アカガシ亞属	タ — 292
168	弥生中期	板状木製品	スギ	タ — 287
169	弥生中期	みかん削	アカガシ亞属	タ — 293
170	弥生中期	みかん削(鉢(木))	アカガシ亞属	タ — 266
171	弥生中期	たも or てんびん	モミ属	タ — 60
172	弥生中期	たも	モミ属	タ — 455
173	弥生中期	板状木製品(木)	アカガシ亞属	タ — 342
174	弥生中期	板状木製品	スギ	タ — 207
175	弥生中期	板状木製品	スギ	タ — 268
176	弥生中期	田下駄?(木)	環孔材	タ — 217
177	弥生中期	板状木製品	スギ	タ — 218
178	弥生中期	板状木製品	アカガシ亞属	タ — 246
179	弥生中期	板状木製品	スギ	タ — 369
180	弥生中期	紡織具?	散孔材	タ — 335
181	弥生中期	部材	スギ	タ — 255
182	弥生中期	用途不明	スギ	タ — 353
183	弥生中期	鋤(木)	アカガシ亞属	タ — 253
184	弥生中期	上用穴あけ道具	未鑑定	タ — 404
185	弥生中期	土用穴あけ道具	イヌガヤ属	タ — 301
186	弥生中期	用途不明木製品	スギ	タ — 178
187	弥生中期	やす	未鑑定	タ — 423
188	弥生中期	やす	未鑑定	タ — 318
189	弥生中期	やす	未鑑定	タ — 359
190	弥生中期	用途不明	散孔材	タ — 338
191	弥生中期	不明木製品	未鑑定	タ — 431
192	弥生中期	有頭棒	スダジイ	タ — 153
193	弥生中期	有頭棒	散孔材	タ — 38
194	弥生中期	紡織機	散孔材	タ — 156
195	弥生中期	紡織具	アカガシ亞属	タ — 52
196	弥生中期	鋤の柄	アカガシ亞属	タ — 336
197	弥生中期	有頭棒	アカガシ亞属	タ — 176
198	弥生中期	有頭棒	イヌガヤ属	タ — 99
199	弥生中期	もえさし	未鑑定	タ — 422
200	弥生中期	ヘラ状木製品	アカガシ亞属	タ — 145
201	弥生中期	鳥形木製品	スギ	タ — 152
202	弥生中期	梯子	スギ	タ — 150
203	弥生中期	梯子	スギ	タ — 171
204	弥生中期	柱	スギ	タ — 162
205	弥生中期	柱	スギ	タ — 273
206	弥生中期	杭 or 柱	環孔材	タ — 344
207	弥生中期	高杯(木)	環孔材	タ — 355
208	弥生中期	容器	環孔材	タ — 110

番号	時代	製品名	樹種	備考
209	弥生中期	台付き容器	環孔材	N K M — 89
210	弥生中期	高杯	環孔材	タ — 49
211	弥生中期	高杯	木鑑定	タ — 298
212	弥生中期	高杯？	環孔材	タ — 328
213	弥生中期	高杯	環孔材	タ — 303
214	弥生中期	高杯(四角)	環孔材	タ — 78
215	弥生中期	高杯	環孔材	タ — 93
216	弥生中期	高杯	環孔材	タ — 46
217	弥生中期	容器	スギ	タ — 210
218	弥生中期	蓋	環孔材	タ — 101
219	弥生中期	ひょうたん	木鑑定	タ — 311
220	弥生中期	用途不明(浮き)	木鑑定	タ — 310
221	弥生中期	こて状木製品	環孔材	タ — 80
222	弥生中期	柄杓？(未)	環孔材	タ — 278
223	弥生中期	コップ(未)	環孔材	タ — 123
224	弥生中期	コップ(木)	環孔材	タ — 134
225	弥生中期	コップ？	環孔材	タ — 47
226	弥生中期	柄杓	環孔材	タ — 104
227	弥生中期	柄杓	環孔材	タ — 88
228	弥生中期	匙	散孔材	タ — 98
229	弥生中期	匙	木鑑定	タ — 419
230	弥生中期	匙	散孔材	タ — 356
231	弥生中期	匙	イヌガヤ属	タ — 205
232	弥生中期	匙	散孔材	タ — 330
233	弥生中期	匙	環孔材	タ — 130
234	弥生中期	匙	木鑑定	タ — 315
235	弥生中期	匙	環孔材	タ — 102
236	弥生中期	匙 or 舟形木製品	環孔材	タ — 79
237	弥生中期	用途不明	木鑑定	タ — 320
238	弥生中期	櫛	タ	タ — 453
239	弥生中期	タ	タ	タ — 239
240	弥生中期	タ	タ	タ — 436
241	弥生中期	タ	タ	タ — 436
242	弥生中期	かんざし？	タ	タ — 447
243	弥生中期	鍋	タ	タ — 448
244	弥生後期	下駄付広鏡(木)	アカガシ亞属	タ — 10
245	弥生後期	狭鏡(未)	アカガシ亞属	タ — 186
246	弥生後期	広鏡	アカガシ亞属	タ — 221
247	弥生後期	広鏡	木鑑定	タ — 312
248	弥生後期	丸鏡？	アカガシ亞属	タ — 346
249	弥生後期	狭鏡	アカガシ亞属	タ — 230
250	弥生後期	なすび形鏡	アカガシ亞属	タ — 361
251	弥生後期	鏡	木鑑定	タ — 221
252	弥生後期	鏡状木製品	スギ	タ — 165

番号	時代	製品名	樹種	備考
253	弥生後期	丸歯(木)	アカガシ亞属	N KM— 41
254	弥生後期	丸歯(木) ?	アカガシ亞属	タ — 20
255	弥生後期	丸歯(木) ?	アカガシ亞属	タ — 334
256	弥生後期	広歯 or 丸歯	アカガシ亞属	タ — 362
257	弥生後期	板状木製品	スギ	タ — 329
258	弥生後期	なすび形鋤	アカガシ亞属	タ — 234
259	弥生後期	なすび形鋤	未鑑定	タ — 323
260	弥生後期	なすび形鋤	アカガシ亞属	タ — 181
261	弥生後期	板状木製品	スギ?	タ — 222
262	弥生後期	砧(木)	散孔材	タ — 366
263	弥生後期	砧	イヌガヤ属	タ — 169
264	弥生後期	砧	アカガシ亞属	タ — 42
265	弥生後期	田下駄	スギ	タ — 357
266	弥生後期	田下駄	スギ	タ — 228
267	弥生後期	田下駄	スギ	タ — 365
268	弥生後期	田下駄	スギ	タ — 664
269	弥生後期	部材	スギ	タ — 309
270	弥生後期	部材	スギ	タ — 284
271	弥生後期	有頭棒	ヒノキ属	タ — 288
272	弥生後期	有頭棒	イヌガヤ属	タ — 295
273	弥生後期	やす	未鑑定	タ — 319
274	弥生後期	やす	未鑑定	タ — 316
275	弥生後期	種状木製品	スギ	タ — 271
276	弥生後期	広歯(木)	アカガシ亞属	タ — 354
277	弥生後期	石斧の柄	アカガシ亞属	タ — 239
278	弥生後期	鉄斧の柄(木)	散孔材	タ — 82
278	弥生後期	鉄斧の柄	散孔材	タ — 82
279	弥生後期	杭	ヒノキ属	タ — 283
280	弥生後期	柱	イヌガヤ属	タ — 302
281	弥生後期	柱	イヌガヤ属	タ — 299
282	弥生後期	柱	イヌガヤ属	タ — 300
283	古墳前期	下駄付広歯	アカガシ亞属	タ — 100
284	古墳前期	広歯	アカガシ亞属	タ — 220
285	古墳前期	なすび形鋤	環孔材	タ — 39
286	古墳前期	なすび形鋤	スダジイ	タ — 175
287	古墳前期	なすび形鋤	コナラ節	タ — 174
288	古墳前期	鋤	アカガシ亞属	タ — 206
289	古墳前期	鋤の柄	散孔材	タ — 172
289	古墳前期	鋤	イヌガヤ属	タ — 172
290	古墳前期	田下駄	ヒノキ属	タ — 180
291	古墳前期	田下駄	スギ	タ — 224
292	古墳前期	田下駄?	スギ	タ — 240
293	古墳前期	板状木製品	スギ	タ — 229
294	古墳前期	田下駄	スギ	タ — 37

番号	時代	製品名	樹種	備考
295	古墳前期	田下駄	スギ	NKM- 242
296	古墳前期	糸巻	ヒノキ属	タ- 161
297	古墳前期	土用穴明け道具	イチイ属	タ- 103
298	古墳前期	用途不明木製品	環孔材	タ- 166
299	古墳前期	琴伏木製品	スギ	タ- 264
300	古墳前期	板状木製品	スギ	タ- 285
301	古墳前期	板状木製品	スギ	タ- 168
302	古墳前期	建築部材	スギ?	タ- 195
303	古墳前期	有頭棒	スギ	タ- 179
304	古墳前期	鋤 or 細の柄	ヒノキ属	タ- 189
305	古墳前期	杭	イスガヤ属	タ- 200
306	古墳前期	用途不明木製品	スギ	タ- 183
307	古墳前期	用途不明	木鑑定	タ- 314
308	古墳前期	舟	スギ	タ- 155
309	古墳前期	盾	セミ属	タ- 231
310	古墳前期	部材	スギ	タ- 289
311	古墳前期	四ツ手綱の腕木or部材	ヒノキ属	タ- 258
312	古墳前期	四ツ手綱の腕木or部材	スギ	タ- 257
313	古墳前期	部材	スギ	タ- 290
314	古墳前期	部材	スギ	タ- 197
315	古墳前期	柄杓(木)	散孔材	タ- 177
316	古墳前期	桶(木)	環孔材	タ- 148
317	古墳前期	コップ	木鑑定	タ- 147
318	古墳前期	容器	環孔材	タ- 87
319	古墳前期	容器	スギ	タ- 94
320	古墳前期	向物	スギ	タ- 91
321	古墳前期	匙	イスガヤ属	タ- 106
322	古墳前期	桶	スギ	タ- 163
323	古墳前期	桶	スギ	タ- 227
324	古墳前期	桶	ヒノキ属	タ- 164
325	古墳前期	桶	スギ	タ- 215
326	古墳前期	桶	スギ	タ- 235
327	古墳前期	容器	イスガヤ属	タ- 126
328	古墳前期	杭 or 柄	イスガヤ属	タ- 306
329	古墳前期	板状木製品	スギ	タ- 281
330	古墳前期	みかん鉢	アカガシ亞属	タ- 267
331	古墳前期	弓	ヒノキ属	タ- 294

2. 西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について

鳥取大学医学部解剖学第二講座 井 上 貴 央

1. はじめに

島根県松江市西川津遺跡からは、縄文前期、弥生前期、弥生中期の動物遺存体が多数検出されている。前回の報告書では、縄文前期相当層から検出された動物遺存体を報告したが、今回は弥生中期の動物遺存体を報告する。弥生前期相当層については、現在、水洗などの処理がおこなわれており、次回に報告する予定である。

ところで、西川津遺跡は、宍道湖と中海を結ぶ低湿地に開けた遺跡で、これらの湖沼の古地理学的な変遷を考えると、この遺跡から検出される動物遺存体にも当然なんらかの変遷が認められるはずである。実際、今回報告する弥生中期から検出された動物遺存体は、その種の構成要素が縄文前期のものと著しく異なっており、このあいだをうめる弥生前期からどの様な動物遺体が検出されるか、興味深いものがある。次回の調査によって、西川津遺跡をめぐる動物相の変遷が明らかにできるものと考えているが、とりあえず、今回は弥生中期相当層から検出された動物遺存体について報告し、本遺跡の総括は次回におこないたい。

2. 遺物含有層と骨の検出状況

今回報告する骨は、弥生時代中期相当層のシジミを中心とする貝塚から検出されたものである。骨は発掘担当者によって取り上げられ水洗の後、筆者に分析を依頼されたものである。骨の検出状況等については、別章で詳述されているので別章を参照されたい。検出された骨にはほとんど水磨による摩耗痕が認められない。

検出された動物遺存体は、保存状態が良好で、細部まで観察が可能である。骨の表面には、低湿地遺跡から検出された骨によく認められる藍鉄鉱の付着を認めるものもあるが数は少ない。大部分の骨は茶褐色～淡黄褐色を呈する。火を受けて白色～黒色を呈する骨はほとんど認められない。

3. 検出された動物遺存体

本遺跡で検出された動物遺存体は次の如くである。軟体動物については別に論じられるので、これは除いてある。

哺乳動物綱 MAMMALIA

靈長目 Primates

ニホンザル *Macaca fuscata*

食肉目 Carnivora

アナグマ *Meles meles*

タヌキ *Nyctereutes viverrinus*

イタチ *Mustela sibirica*

齧歯目 Rodentia

ムササビ *Petaurista leucogenys*

偶蹄目 Artiodactyla

ニホンシカ *Cervus nippon*

イノシシ *Sus scrofa*

鳥類綱 AVES

オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas*

ハクチョウ *Cygnus* sp.

ツル科 *Grus* sp.

スズガモ属 *Axis* sp.

スズメ目 *Passeres*

両生類綱 AMPHIBIA

ヒキガエル *Bufo bufo japonicus*

トノサマガエル *Rana (Rana) nigromaculata*

ツチガエル *Rana (Rana) rugosa*

ヤマアカガエル *Rana (Rana) ornativentris*

爬虫類綱 Reptilia

蛇類 Ophidia

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

スズキ *Lateolabrax japonicus*

カンダイ *Semicossyphus reticulatus*

マイワシ *Sardinops melanostictus*

ハゼ科 Gobiidae

アイナメ *Hexagrammos otakii*

フナ *Carassius auratus langsdorffii*

ナマズ *Silurus asotus*

コチ *Platycephalus indicus*

軟骨魚類綱 CHONDRICHTHYES

サメ類またはエイ類 Squali/Radji

1) 哺乳動物

イノシシ

イノシシの主要検出骨リストを表27に示した。これでみる限り、最小個体数は4頭になるが、後述するように下顎骨から判断すると、最小個体数は6頭になる。今回検出された弥生中期のイノシシは幼獣が多いのが特徴である。

表27 イノシシの部位別検出個体数

	右	左
上顎骨	0	2
下顎骨	3	3
上歯骨	近位 遠位	0 1 2
側骨	近位 遠位	2 0
尺骨	近位	1
中手骨	Mc I Mc II Mc III Mc IV Mc V	0 0 2 0 0
肩甲骨		
radius		
環椎		
軸椎		
寰骨		
大枕骨	近位 遠位	0 0
腰骨	近位 脊柱部 遠位	0 1 1 2
腰蓋骨		
蹠骨		
脚骨		
中足骨	Mc I Mc II Mc III Mc IV Mc V	0 0 1 0 0

脳頭蓋、顔面頭蓋では原型をとどめているものは存在しない。後頭部を中心とした骨片が数10点検出されているが、接続できない。従って、先に報告したような本遺跡の縄文時代のイノシシに認められたような脳橋摘出が本遺跡の弥生中期にあったかどうかについては今回の試料からは判断できない。

上顎骨では一部の歯牙が釘植した左側上顎骨が2点検出されている。1点は第3、第4乳臼歯を伴った幼獣であり、もう1点は第4前臼歯から第2臼歯にかけての歯牙を伴った、咬耗著しい老獣である。

下顎骨では、右側が3点、左側が3点検出されている。歯の萌出程度や咬耗の具合からみて、これらはすべて別個体のものであると考えられ、下顎骨からみると少なくとも6頭のイノシシの骨が存在している。下顎は前臼歯部で削られており、検出され

表28. 検出イノシシ下頸の年齢推定 (Age Groupの基準は林ら(1977)による)

	試料番号	歯 齒 齶 側 牙					Age Group	推定年齢 (週・月)
右 側	1		M ₁	P ₄			I	7~8月
	2	M ₂	M ₂	M ₃			V	55ヶ月以上
	4			P ₄	P ₃		I 以前	13週以下
左 側	5		P ₄	M ₁			I	7~8月
	6		P ₃	P ₄			I 以前	13週以下
	7	な し (M ₁ 未検出)					II	19~20月

た骨は前臼歯部から下顎枝にかけての部分が多い。各々の歯牙の釘植の様子と林ら(1977)によるAge Groupを示すと表28のようになる。左下顎骨として、下顎枝の部分のみが検出されているものが1点あるが、この骨の前方には未萌出の第3大臼歯が入っていたと思われる歯槽腔があり、これからAge Group IIのものと推定されたものである。歯牙の萌出状態でイノシシの年齢を推定すると、いわゆる「うり坊」に相当するAge GroupがI以前(13週未満)の個体が2頭、Age Group I(7~8ヶ月)が2頭、Age Group II(19~20ヶ月)が1頭、Age Group V(55ヶ月以上)が1頭含まれている。総じて若い個体が多いが、この様な現象は松江市西川沖縄文遺跡(前期初頭)、米子市陰山縄文遺跡(前期初頭)米子市目久美縄文遺跡(前期)には認められなかった点であり、注目に値する。2点の下顎骨には下顎枝に横方向の解体痕が認められており、咬筋などを切って下顎をはずす際にいたるものであると考えられる。

環椎(第1頸椎)は4点検出されている。そのほかに、検出時にはお互いに離れたところから検出されたが、骨の同定の段階で、同一個体の連続した部分と思われる頸椎が見つかっている。それは、軸椎(第2頸椎)から第5頸椎にかけての部分である。この頸椎の並びを観察すると、第2頸椎の棘突起には破損が認められるが、発達の悪い第3~第5頸椎の棘突起には破損が認められない。また、第3~第5頸椎の横突起には両側ともに破損が認められる。これらの破損は固有背筋を切り取るために打削を受けたためによるものと考えてよいであろう。遺跡から検出されるシカやイノシシの椎骨には、犬などによってこれらの突起が咬みちぎられる場合があるといわれているが、この椎骨列の突起の破損状況をみると、犬の咬痕によるものとは思われない。寛骨では右側が1点検出されているのみである。

肩甲骨は右側が1点、左側が3点検出されている。上腕骨は近位端は検出されておらず、右側遠位端が1点、左側遠位端が2点検出されている。解体痕が認められるものは1点あり、遠位端の側面と後面に横方向の切痕が認められる。桡骨では、右側が2点、左側が1点検出されている。桡骨の近位端前面には横方向の解体痕が認められるものが含まれ

ている。尺骨は左が1点検出されているのみで、これは腕尺関節を中心とした部分である。

後肢骨では、大腿骨や膝蓋骨は検出されていない。脛骨では右側が2点、左側が3点検出されている。これらのうち、左右各1点が骨体部で、残りは遠位端である。解体痕が認められる骨は2点検出されており、1点は左骨体部の外側部に、横方向の解体痕をみるとめる。もう1点は右脛骨遠位端に認められたもので、遠位端より約4cm上方の前面と後面に横方向の解体痕が、遠位端より約2cm上方の前面内側から外側下方にかけて斜方向の解体痕が認められる。

足根骨では距骨は検出されておらず、踵骨が左右各1点検出されているのみである。これらの骨は、遺跡から検出される場合、比較的よく保存されており、検出され易い骨であるが、本遺跡では極めて少ない。手足の骨としては、右第3中手骨が2点、左第3中足骨が1点検出されている。指骨では、基節骨が2点、末節骨が4点検出されているが、中節骨は検出されていない。

シカ

シカの主要検出骨リストを表29に示した。これでみる限り、最小個体数は5頭になるが、後述するように下頸骨から判断すると、最小個体数は9頭になる。イノシシが幼獣が数多く検出されているのに対し、シカは成獣が多く検出されている。

イノシシと同様、顔面頭蓋や脳頭蓋の原型をとどめるシカの骨は検出されていない。

表29. シカの部位別検出個体数

	右	左
蝶角	1	0
上顎骨	4	3
下顎骨	0	5
上腕骨	近位	4
	遠位	3
橈骨	近位	1
	遠位	2
尺骨	0	1
中手骨	0	1
第3中手骨	2	2
椎骨		
蝶形		1
軸椎		0
対合		
大顎骨	近位	1
	遠位	0
脛骨	近位	0
	骨体部	0
	遠位	0
膝蓋骨	0	0
距骨	4	1
踵骨	1	0
中足骨	1	1

検出された上顎と下顎の歯牙の釘植状況、咬耗示数、及び推定年齢を表30に示した。この表に示した下顎のうち、No.5の左下顎、No.10の右上顎、No.14の左上顎は同一個体のものと考えられる。イノシシは乳歯を伴った幼獣が多いのに対し、シカは乳歯を伴った幼獣は1頭のみと少ない。ほとんどが生後2年～10年の成獣である。

シカの下顎には解体痕が認められたものが多い。ほとんどすべての下顎に何等かの解体痕が認められたといつても過言ではない。これらの解体痕は頬側、舌側ともに認められるが、頬側の方が頻度が多い。解体痕は斜め前下方に向かうものと斜め後方に向かうものとの2種類が認められた。これらの解体痕の

表30. 検出シカ上・下顎と推定年齢性別（咬耗示数、計測値の基準は大暮町（1980）による）

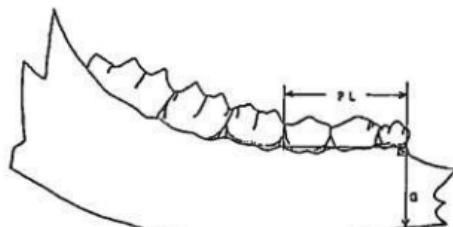
		試料番号						歯 種 別 牙			咬耗示数			計測値		推定年齢 (歳)	推定性別
				M _s	M _d	M _t	P _s	P _d	P _t	M _s	M _d	M _t	a	p _i /a			
下 側	右	1	M _s	M _d	M _t	P _s	P _d	P _t		2	3	4	23.0	63.7	6.5—8	♀	
		2	M _s	M _d	M _t	P _s	P _d	P _t		3	5	6			4		
		3	M _s	M _d	M _t	P _s	P _d	P _t		5	6				1.8以上		
		4	M _s	M _d	M _t	P _s	P _d	P _t		4	5	7	17.8	47.2	3—4	♀	
側	左	5		P _s	P _d	M _t	M _s	M _d		1	2	1	20.6	63.6	10以上	♀	
		6		P _t	P _s	P _d	M _t	M _s	M _d	5	6	7	28.0	74.7	2	♂	
		7			P _s	P _d	M _t	M _s		5	5		21.8	58.4	2—3	♀	
		8		P _t	P _s	P _d							(23)	(58)		♀	
上 側	右	9				M _s	M _d			1	2				8以上		
		10	M _s	M _d	M _t	P _s	P _d										
		11	M _s	M _d	M _t	P _s	P _d	P _t									
		12	M _s	M _d	M _t	P _s											
側	左	13	M _s	M _d	M _t												
		14		P _t	P _s	P _d	M _s	M _d	M _t								
		15						M _s	M _d								
		16					M _s	M _d									

線条はお互いに平行して認められることから、ある一定の角度でもって筋肉を外したものと考えられる。No.2とNo.8の下顎骨頬側面には細かいほぼ規則正しい間隔を有する線条が幅数cmにわたって観察された。この様な細かい規則的な解体痕は、これまで筆者がかかわってきた山陰各地の縄文遺跡から検出された動物遺存体には認められなかったものである。この解体痕はヘラ状の鉄器によって骨から筋をそぐようにしてはずす時にいたるものと考えられ、規則正しい細かい線条は刃先の微細な刃こぼれを反映したものであろう。

鹿角では、ほぼ完形の右鹿角が1点と、鹿角の破片が8点検出されている。破片には長軸と直交する方向に認められた鉄斧のものと思われる加工痕や長軸方向に走る小刀状のものと考えられる加工痕が認められるものが3点含まれている。

ほぼ完形の鹿角は角座をつけており、捕獲された後、鹿角をはずしたものである。

環椎（第1頸椎）は1点検出されているのみで、軸椎（第2頸椎）は検出されていない。肩



第194図 性別査定のためのシカ下顎計測点（大暮町、1980による）

甲骨は右側が2点、左側が2点検出されている。左側の肩甲骨は関節部を欠いている。肩甲骨のうち2点に解体痕が認められた。これらはいずれも肩甲骨の肋骨面に認められ、また、肩甲骨上縁、下縁にも認められた。

上腕骨は右側遠位端が3点、左側遠位端が1点検出されており、近位端は検出されていない。解体痕では、右側遠位端の前面外側に鉄斧のようなもので横方向に叩いたような解体痕が認められるものが1点、左側遠位端の前面外側に同様の解体痕が認められたものが1点ある。これらの著明な解体痕がいずれも外側に認められたことは、当時のシカの解体様式を知るうえで興味深い。

桡骨では、左側桡骨の近位端が2点、右側桡骨の近位端が1点右側桡骨の遠位端が2点検出されている。左側桡骨のうちの一つは近位端から骨体部にかけてのものであり、遠位端を欠く。検出されたすべての近位端前面に横方向の解体痕が認められた。遠位端には解体痕は認められなかった。尺骨では、左尺骨の腕尺関節の部分が1点検出されているのみである。

大腿骨では近位端の部分が左右各1点検出されている。左側のものは大腿骨頭が存在するが、右側のものは打割を受けて欠損している。左側大腿骨頭直下の内側に横方向に走る解体痕が認められた。脛骨では、左側脛骨の骨体の部分が2点検出されているのみである。踵骨は左側が2点検出されている。距骨は右側が4点、左側が1点検出されている。

手足の骨では左中手骨が1点、中手骨の骨片が2点、右中足骨が1点、左中足骨が1点、中足骨片が2点検出されている。左中手骨には骨折治癒が認められた。この骨の骨折は骨折の種類からいえば斜骨折で骨折面がずれて癒合した後、骨折面断端の骨組織が吸収、再生され新しい骨構築をなしている。骨折面は近位関節面の内側下方4cmのところから外側下方6cmのところにかけて走っている。このため中手骨前面に走る溝が異常に弯曲している。この骨の外側面には、外側方向から叩いたものと思われる横方向の解体痕が4ヶ所にわたって認められた。この様な解体痕は遺跡から検出される骨には余り認められないものである。このシカは狩猟された時点において左中足骨の部位の下肢は外反していたと考えられるが、解体に携わった弥生人が下肢が曲がっているシカを見て骨折治癒後の骨が弯曲している部位を意識的に叩いているのは興味深い。指骨では基節骨が9点、中節骨が2点検出されているが、末節骨は検出されていない。

ニホンザル

左下顎が1点、遊離歯として検出された左下顎第2大臼歯と右上顎第2大臼歯が1点づつ、左大腿骨近位端が検出されている。このうち、左下顎は下顎枝の部分を欠き、第1小

臼歯から第3大臼歯にかけての歯牙が釘植しているが、第1大臼歯を欠く。この第1大臼歯は先天的に欠けているもので、歯牙の欠損例である。左大腿骨は近位骨端から骨体部にかけてのものであるが、骨体部はSpiral fractureの断面を示し、人為的に割られたものであることを示している。

ムササビ

上顎切歯と下顎切歯がそれぞれ2本づつ、左側顎骨が1点検出されている。

アナグマ

頭蓋骨が2点と下顎骨が1点検出されている。頭蓋骨のうちの1点は左右の上顎骨をともなった鼻部の部分であり、眼窩の前方で前額断されている。もう1点は左上顎骨で矢状方向に割られているように見受けられる。下顎骨は右下顎骨の関節突起の部分である。

タヌキ

右下顎骨が2点検出されている。一点は第1前臼歯から第1大臼歯にかけての歯牙が、もう一点は第2前臼歯から第1大臼歯にかけての歯牙が釘植している。何れも下顎枝の後部を欠いている。

イタチ

左上顎が1点検出されている。そのほかに大きさから判断してイタチのものらしい歯牙が数点遊離歯として検出されているが、確言できない。

2) 鳥類、両生類、爬虫類

ハクチョウは左尺骨の骨体部が1点検出されている。解体痕は認めないが、割れ口の形状からして人為的に割られたものであろう。オオミズナギドリは右翼状骨が1点検出されている。また、ツル科の右大腿骨遠位端が1点、スズカモ属の左上腕骨遠位端が1点と右跗蹠骨が1点、スズメ目と思われる脛骨が1点検出されている。そのほか、種属を特定できない左跗蹠骨が1点と胸骨側肋骨が1点検出されている。

ヒキガエルでは左右の肩甲骨が各1点、雄の左上腕骨が1点、雌の左上腕骨が1点、右桡尺骨が2点、左桡尺骨が1点、右腸骨が3点、左側仙骨が1点、左脛腓骨が1点検出されている。ヤマアカガエルでは雌の右上腕骨が1点、右腸骨が4点、左腸骨が2点検出されている。ツチガエルでは雌の左上腕骨が3点、雌の右上腕骨が1点、雌の左上腕骨が2点検出されている。トノサマガエルでは雌の左上腕骨が1点、右腸骨が1点、左腸骨が3点検出されている。カエル類では、この他にも種を特定できない椎骨2点をふくめ、歯骨などの部分骨が数多く検出されている。

爬虫類ではヘビのものと考えられる椎骨が6点検出されている。

3) 魚類

本遺跡から検出された魚種については先のリストに挙げた通りであるが、まだ未同定の骨も含まれている。今後さらに魚種の増える可能性がある。本遺跡の主要な魚骨はフナ、クロダイ、スズキであるが、なかでもフナの検出数が最も多い。

本遺跡の魚骨で最も顕著なのがこのフナの主鰓蓋骨である。この主鰓蓋骨は右側では21点、左側では23点、破片が103点検出されている。これについて数多く検出されているのがフナの下鰓蓋骨で右側が32点、左側が38点検出されている。フナでは他に第3脊椎が1点、他の部位の脊椎が2点、下頸歯骨が2点検出されている。これらの骨は現生種と比較検討したところギンブナに一番近いと思われるが、ここでは一応フナとしておきたい。

ナマズは胸鰓条が1点検出されている。各種のナマズと比較検討したが、種を同定するに至らなかった。

クロダイは左右の前上頸骨がそれぞれ5点、左下頸歯骨が1点、左右の上頸骨がそれぞれ1点、右涙骨が3点、左涙骨が1点、左角骨が2点、右前鰓蓋骨が2点、左前鰓蓋骨が1点、左右の舌頸骨がそれぞれ1点検出されている。

カンダイは左前上頸骨の一部が1点、右上咽頭骨が1点、下咽頭骨の尾方部分の破片が2点、同じく右方部分の破片が1点検出されている。

スズキは左上頸骨が3点、右下頸歯骨が1点、左右の方形骨がそれぞれ2点、左角骨が2点、右主鰓蓋骨が1点検出されている。

その他の魚骨としては、コチは左右の上頸骨がそれぞれ1点と脊椎が2点検出されている。ダツは左右の歯骨がそれぞれ1点検出されている。ハゼは脊椎が1点検出されているのみである。マイワシは腹椎が1点、尾椎が1点検出されている。アイナメの仲間と考えられる左前上頸骨が1点、ニシン科のものと考えられる椎骨が1点検出されている。

4. 考察

これまでに知られている山陰地方の弥生時代貝塚としては、山陰地方の矢野遺跡、知井宮多聞院貝塚が知られているにすぎない。これらの遺跡から、狩猟の対象となった動物遺存体が検出されてはいるが、詳細な報告はなされていない。また、その他の弥生遺跡で動物遺存体をともなった例としては、平田市猪ノ目洞窟遺跡や美保関町小浜洞窟遺跡などが知られているが、これとても詳細な報告はなされておらず、最近になってタテヂョウ遺跡などで動物遺存体の分析がおこなわれるようになってきたのが現状である。今回発掘され

た西川津弥生中期遺跡は、質量ともにこれらの遺跡を上回り、これまで資料の少なかった山陰地方の動物相や当時の動物の解体様式や食生活を解明する上で貴重な遺跡である。

今回明らかにされた動物遺存体から特徴的なことをいくつか挙げてみよう。まず、今回報告した弥生中期の西川津遺跡は、宍道湖近傍に立地した遺跡であるが、そこで営まれた漁撈活動は、当時の朝酌川～宍道湖にかけて棲息していたと思われる汽水～淡水性の魚種を中心としている。前回報告した縄文前期の本遺跡の場合は、フグ、クロダイ、マダイ、スズキなどが検出されているが、フグやマダイに関しては、島根半島北岸での漁撈活動、もしくはこの地方との交易を考えざるを得なかつた。今回検出された魚種の多くは、当時の宍道湖の本遺跡周辺の環境下で捕れるものが大部分であり、本遺跡の縄文初頭相当層から検出されたフグやマダイは一点も検出されていない。当時の人々が稲作農耕をおこないながら、本遺跡に定着した生活を送っていた一つの傍証ともみることができよう。しかし、一方では、縄文時代に引き続き島根半島を越えての交流がおこなわれてきたに違いない。それは、石器の原料として、隠岐島から運んできたと考えられる黒曜石の製品が数多く検出されていることに加え、カンダイ等の外洋性の魚や、ムラサキウニ等の遺跡の近傍では採取不可能であった動物遺存体が本遺跡から検出されていることにもよる。

今回明らかになった本遺跡の動物種数は、これまで知られていた山陰地方の縄文遺跡から検出された動物遺存体に比べて、極めて多彩である。検出された弥生の貝層をすべて取り上げ、水洗選別によって遺物を検出したという山陰では初めての発掘作業による事もあるが、同様の方式でなされた本遺跡の縄文時代の動物遺存体に比べても動物種は多岐にわたっている。なかでも、ハクチョウ、カエル、ムササビの骨は山陰地方の動物遺存体としては初めて検出されたものである。

次に、動物遺存体に占めるシカやイノシシの割合が低いことも一つの特徴である。今回報告した動物遺存体は、多数のヤマトシジミを中心とした貝塚から検出されたものであるが、シジミやフナを中心とする漁撈活動によって、シカやイノシシの狩猟活動の必要性が少なくなってきたことによるものかも知れない。

イノシシとシカを比べてみると、シカが成獣～老獣を狩猟対象としているのに対し、イノシシは幼獣が多いことも本遺跡の動物遺存体の特徴といえよう。検出個体数が少ないので確言できないが、このことはイノシシの飼育がおこなわれていたことを示唆するものかも知れない。金子と牛沢（1980）は大阪の池上遺跡から出土したイノシシの年齢構成が低いことや中国の遺跡から出土したイノシシの年齢構成の類似性から、イノシシが家畜化されていた可能性があるとして記している。池上遺跡から検出されたイノシシは第3後臼歯

が萌出するかしないかの時期のものが多いが、本遺跡から検出されたイノシシは乳歯を作り多くのが多く、これよりはもっと若年の個体が多い。松井（1986）によると、大阪の亀井遺跡は池上遺跡と同様なイノシシの年齢構成を示したが、シカについても若い個体が多く認められるので、亀井遺跡の場合はイノシシの飼育を考えることは困難で、農耕開始に伴う人口増加による狩猟圧が高まった結果、捕獲される動物が相対的に若令化したとみるほうが合理的であるとしている。しかし、本遺跡の場合は、シカは幼獣が多いのに対し、イノシシは乳歯を伴う幼獣が多い。検出された個体数が少ないので確言はできないが、イノシシの家畜化は念頭においておかなければならぬであろう。

今回検出された動物骨で火を受けているものは極めて少ない。数100点にのぼる検出骨のうち、火を受けているものはわずかに2点である。正確な値は算出していないが、これまでの山陰地方の縄文遺跡から検出された動物遺存体に認められた火を受けた骨の割合に比べると、極度に少ないと言わざるを得ない。

最後にイノシシ、シカを中心とした動物の解体様式について触れておきたい。本遺跡から検出された獣骨には、先にも述べたように数々の解体痕が確認された。その数は総じて縄文遺跡の動物の解体痕よりも多く、かつ明瞭なものが多い。これらの獣骨の検出層である弥生中期といえば、鉄器がかなり普及してきた時期であり、解体痕の中には鉄器によるものとしか考えられないものが存在している。解体様式もほぼ定型化していて、下頸骨に付着する筋肉のはずしかた、四肢の打削の方向などに規則性が認められた。この点については、再度詳細な検討を加えて、別稿で明らかにしたいと考えている。

5. おわりに

以上、本遺跡から検出された動物遺存体を報告したが、これまでに報告された山陰地方の縄文時代の動物遺存体には認められなかつたいくつかの所見が明らかになった。これまでもに発掘調査されたいくつかの貝塚の動物遺存体についても詳細な検討をおこなう必要性を感じている。

稿を終るにあたり、本遺跡の動物遺存体の検討の機会を与えて頂いた島根県文化課の内田律雄氏を始め島根県教育委員会の関係各位に御礼申し上げる。また、国立科学博物館の小野慶一、野刈谷保、国立奈良文化財研究所の松井章、千葉県立文化財センターの小宮孟の諸氏には動物遺存体の同定に関してお世話になった。記して御礼申し上げる。

6. 参考文献

- 井上貴久 (1984) 陰田繩文遺跡の動物遺存体について。陰田、120-123
- 井上貴久 (1986) 日久美遺跡より検出された動物遺存体について。加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。129-138 米子市教育委員会
- 井上貴久 (1987) 西川津繩文遺跡から検出された動物遺存体について。西川津遺跡発掘調査報告書 III、266-275
- 大森司紀之 (1980) 遺跡出土ニキシカの下顎骨による性別年齢死亡季節判定法。考古学と自然科学、133、51-72
- 金子浩昌 (1979) 奇椎動物遺体。タテヂュウ発掘調査報告書、I、194-199
- 金子浩昌 (1987) タテヂュウ第2次調査出土動物遺存体。タテヂュウ発掘調査報告書、II、200-211
- 金子浩昌・牛沢百合子 (1980) 池上遺跡出土の動物遺存体。池上遺跡、四ツ池遺跡発掘調査報告書、第6分冊自然遺物編、9-25
- 林良博・西田隆雄・頃月公子・瀬田季茂 (1977) 日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定。日本歯科誌、165-174
- 松井 章 (1986) 亀井遺跡(切り広げ部)出土の動物遺存体の分析。亀井(その2)近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書、423-465

図版説明

図版82 (1~17; イノシシ。縮尺;すべて1/2)

1. 左上顎 (p_3 を伴った幼獣)
2. 左上顎 ($P_4 \sim M_2$)
3. 右下顎 (p_4 、 M_1 を有する幼獣)
4. 右下顎 ($M_1 \sim M_3$ 、咬耗はかなり進んでいる)
5. 右下顎 (p_3 、 p_4 を伴った幼獣)
- 左下顎 (下顎枝から下顎角にかけての部分)
7. 左下顎 (p_3 、 p_4 を有する幼獣)
8. 左下顎 (P_4 、 M_1 を有する。 M_1 は萌出したばかり)
9. 第2頸椎 (軸椎) ~ 第5頸椎 (a; 側面観、b; 腹面観。これら4個の椎骨はそれぞれ別の場所で検出されているが、同一個体のものであり、このように交連可能である)
- 10-13. 第1頸椎 (環椎)
14. 右肩甲骨
- 15-17. 左肩甲骨

図版83 (1~24; イノシシ。縮尺;すべて1/2)

1. 右上腕骨近位端
- 2-3. 左上腕骨近位端
- 4-5. 右桡骨 (近位~骨体部)
6. 左桡骨近位端
7. 左尺骨
8. 右尺骨
9. 右脛骨骨体部
10. 左脛骨骨体部
11. 右脛骨遠位端
- 12-13. 左脛骨 (骨体部~遠位端)
14. 右蹠骨
15. 左蹠骨
- 16-17. 基節骨
- 18-20. 中節骨
- 21-24. 小節骨

図版84 (1~11; シカ。縮尺;すべて1/2)

1. 左上顎 (M_2 、 M_3)
2. 左上顎 (M_1 、 M_2)
3. 右上顎 ($P_1 \sim M_3$)
4. 右上顎 ($P_3 \sim M_2$)

5.右上顎 ($M_1 \sim M_3$) 6.左上顎 ($P_1 \sim M_3$) 7.右上顎 ($P_2 \sim M_3$) 8.左右上顎 (6と7の上顎は同一個体のものであり、これを組み合せたもの。尚、この上顎に対応する下顎は図版85の6であって、これらを組み合せた側面観を図版85の10に示した) 9.右鹿角(角座を有しており、解体時にははずされたもの。割口は新しい) 10-11.加工痕の残る鹿角片

図版85 (1~10; シカ。縮尺;すべて1/2)

1.右下顎(試料番号3、 $p_1 \sim p_3$ 、 $M_1 \sim M_2$ を伴う。 M_3 は未萌出) 2.右下顎(試料番号1、 $P_1 \sim M_3$) 3.右下顎(試料番号2、 $P_2 \sim M_3$) 4.右下顎(試料番号4、 $P_1 \sim M_3$) 5.左下顎(試料番号8、 $P_1 \sim P_3$) 6.左下顎(試料番号5、 $P_2 \sim M_3$ 、咬耗はかなり進んでいる。図版84の6、7の上顎と同一個体) 7.左下顎(試料番号6、 $P_1 \sim M_3$) 8.左下顎(試料番号7、 $P_2 \sim M_2$) 9.左下顎(試料番号9、 $M_1 \sim M_2$) 10.左上下顎(上顎(図版84の6、7)と下顎(図版85の6)を組み合せた側面観)

図版86 (1~21; シカ。縮尺;すべて1/2)

1.軸椎(第1頸椎) 2.左肩甲骨 3-4.右肩甲骨 5-7.右上腕骨遠位端 8.左上腕骨遠位端 9.右橈骨近位端 10-11.右橈骨遠位端 12-13.左橈骨近位端 14.左尺骨 15.右大腿骨近位端(骨頭を欠く) 16.左大腿骨近位端 17.右寛骨 18-19.左寛骨 20-21.左脛骨(骨体部)

図版87 (1~24; シカ, 25~27; アナグマ, 28~29; タヌキ, 30; イタチ。縮尺; 1~24は1/2, 25~30は原寸)

1-2.左踵骨 3-6.右距骨 7.左距骨 8-9.中手骨片 10.左中手骨 11.中足骨片 12.右中足骨 13a, b.左中足骨(a;前面観、b;外側面観。斜骨折を起こし癒合治癒したもの。外側面には横方向に走る解体痕が認められる) 14-17.基節骨 18-24.中節骨 25a, b.アナグマ左上顎(a;上面観、b;下面観。眼窩前方で前額断されている) 26a, b.アナグマ左上顎(a;側面観、b;下面観) 27.アナグマ右下顎骨関節突起の部分) 28-29.タヌキ右下顎骨 30a, b.イタチ左上顎(a;側面観、b;下面観)

図版88 (1~4; ニホンザル、5~9; ムササビ、10~11; ネズミ類、12; ハクチョウ、13; オオミズナギドリ、14; スズメ目、15; ツル科、18~19; スズガモ属、14と17; 鳥類種属不明、20~25; ヘビ類、26~37; ヒキガエル、38~44; ヤマアカガエル、45~50; ツ

チガエル、51~55；トノサマガエル。縮尺；1と4は1/2、他は原寸）
1a, b. ニホンザル右下顎骨（a；側面観、b；上面観。M₁は先天的に欠損している）2.
右上顎第2大臼歯 3.左下顎第2大臼歯 4.左大腿骨（骨体部は意識的に割られたもので
ある）5-6.ムササビ上顎切歯 7-8.下顎切歯 9.左蹠骨 10.ネズミ類右寛骨 11.ネズミ
類左寛骨 12.ハクチヨウ左尺骨骨体部 13.オオミズナギドリ右翼状骨 14.鳥類胸側肋
骨 15.スズメ口脛骨 16.ツル科右大腿骨遠位端 17.種属不明 18.スズガモ属右跗蹠骨
19.スズガモ属左上腕骨遠位端 20-25.ヘビ類椎骨 26.ヒキガエル右肩甲骨 27.左肩甲
骨 28.左上腕骨（♂）29.左上腕骨（♀）30.左脛腓骨 31-33.右腸骨 34.右仙骨 35-
36.右桡尺骨 37.左桡尺骨 38.ヤマアカガエル右上腕骨（♀）39-42.右腸骨 43-44.左腸
骨 45-47.ツチガエル左上腕骨（♂）48.右上腕骨（♀）49-50.左上腕骨（♀）51.トノサ
マガエル左上腕骨（♀）52-54.右腸骨 55.左腸骨

図版89（1~32；フナ。縮尺；すべて原寸）

1-6.右主鰓蓋骨 7-12.左主鰓蓋骨 13-20.右下鰓蓋骨 21-28.左下鰓蓋骨 29.右下顎齒
骨 30-32.椎骨

図版90（1~24；クロダイ、25~35；スズキ、36~40；カンダイ、41~44；コチ、45~
46；ダツ、47；アイナメ、48；カサゴ、49；ナマズ、50；ハゼ、51-52；マイワシ、53；
ニシン。縮尺；すべて原寸）

1-5.クロダイ右前上顎骨 6-10.左前上顎骨 11.左下顎齒骨 12-13.左角骨 14.右上顎
骨 15.左上顎骨 16-18.右涙骨 19.左涙骨 20.右舌顎骨 21.左舌顎骨 22-23.右前鰓
蓋骨 24.左前鰓蓋骨 25.スズキ左下顎齒骨 26-28.左上顎骨 29.右主鰓蓋骨 30-31.
左角骨 32-33.右方形骨 34-35.左方形骨 36.カンダイ左前上顎骨 37-39.下咽駆骨
40.上咽頭骨 41.コチ右上顎骨 42.左上顎骨 43-44.椎骨 45-46.ダツ歯骨 47.アイナ
メ左前上顎骨 48.カサゴ右前鰓蓋骨 49.ナマズ胸鱗棘 50.ハゼ椎骨 51-52.マイワシ
椎骨 53.ニシン椎骨

写 真 図 版

----- 凡 例 -----

- 158-14は本文第158図14

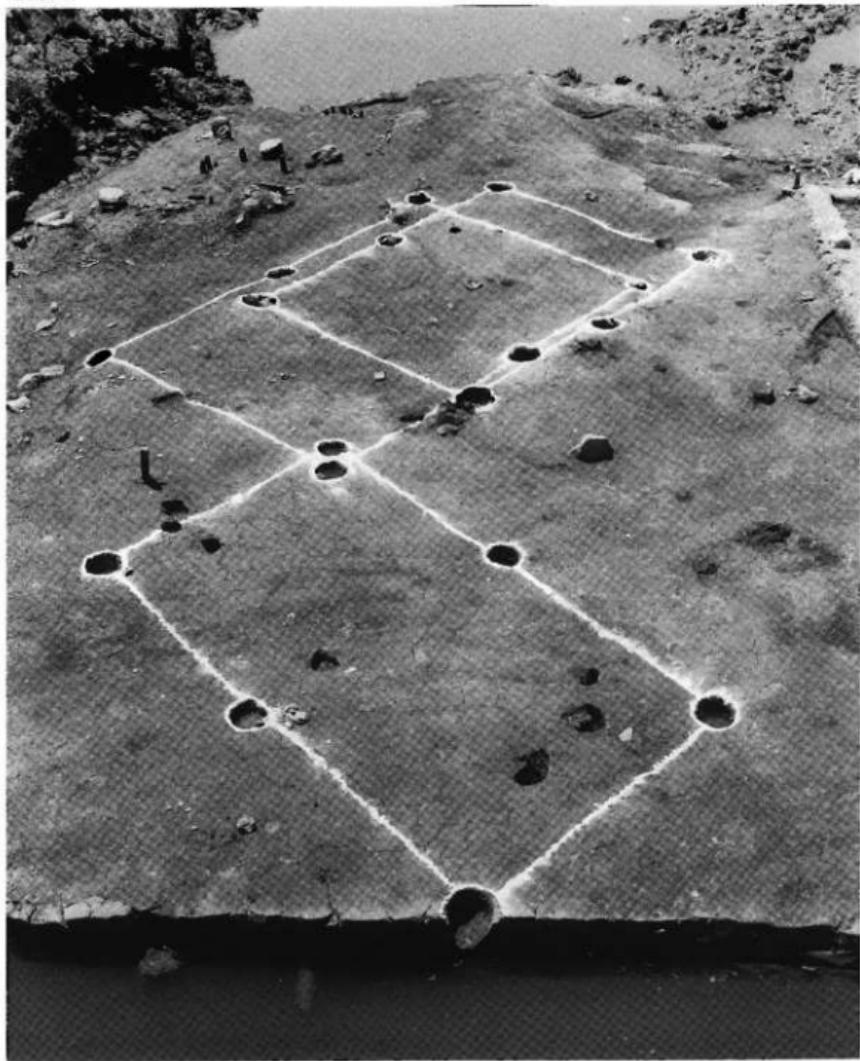


弥生時代中期の遺構面（西より）

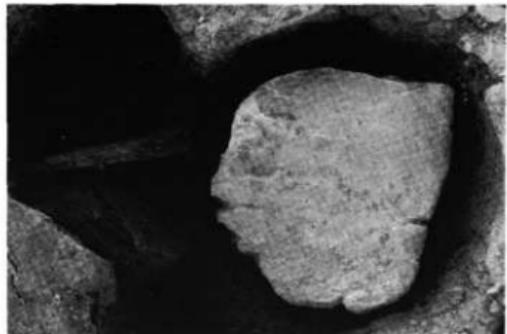


弥生時代中期の遺構面（東より）

図版 2



SB・01・02・03



P21



柱穴
各種

P23

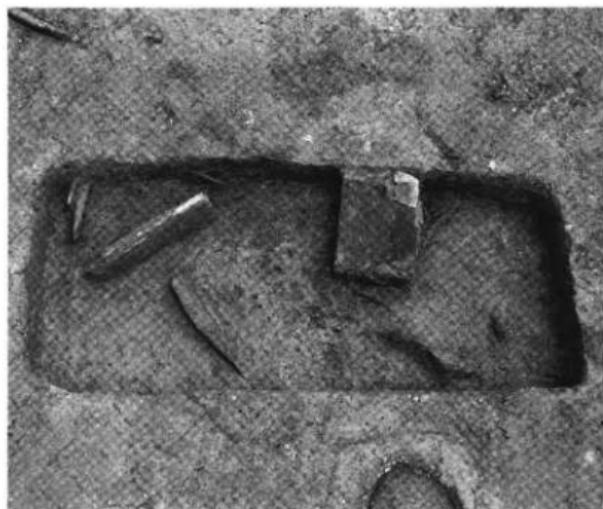
図版 4



SK・02（南より）



SK・02（北より）



SK・02（西より）



SK・02内木製櫓

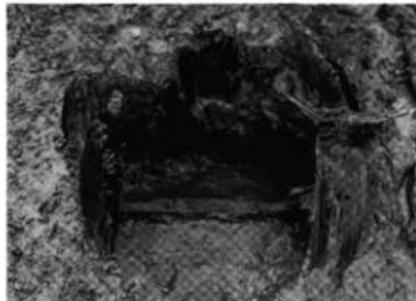


SK・03（東より）

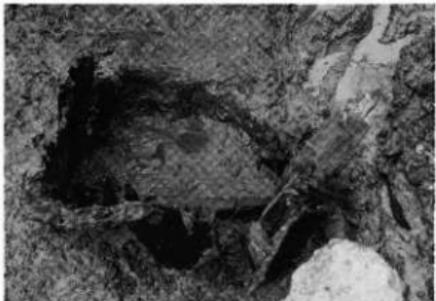


SK・03（南より）

図版 6



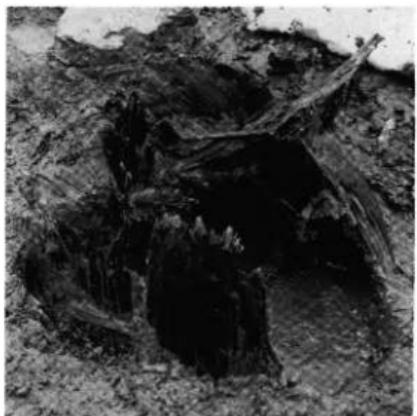
SK・04



SK・04



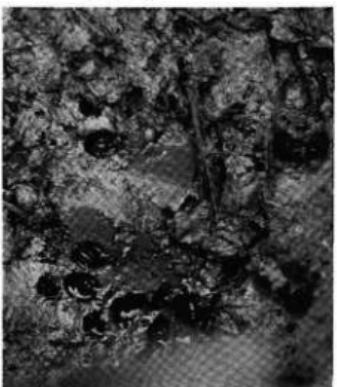
SK・04



SK・04



SK・04内 ドングリ



同 左



溝状遺構（北より）



溝状遺構（南より）

図版 8



SZ・05~09



SZ・05~09

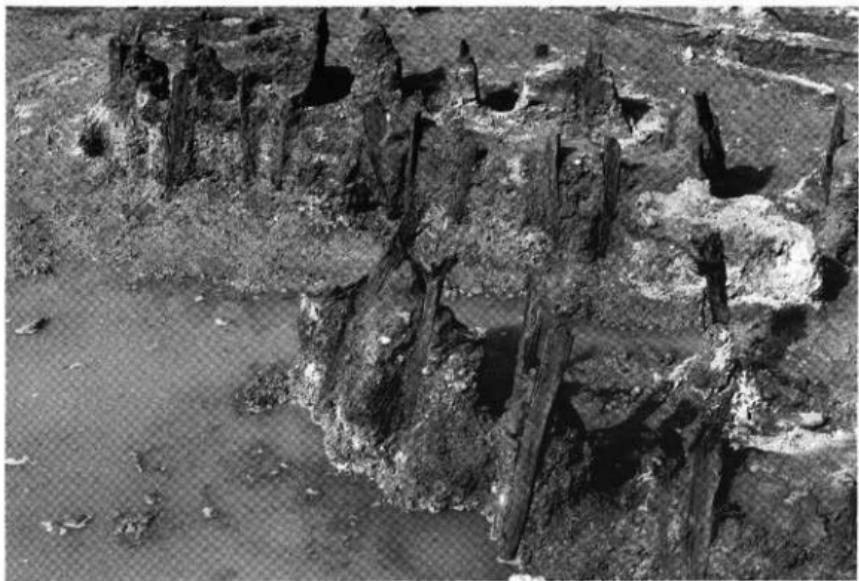


SZ・010~013



SZ・010~013

図版10



SZ・010~013



SZ・010~013



SZ・013



SZ・014

図版12



SZ・014



SZ・015



SZ・017

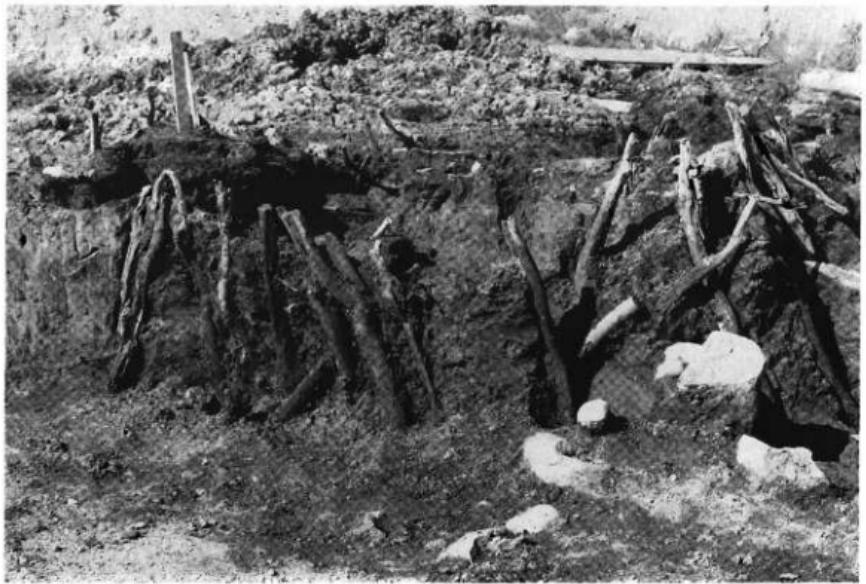


SZ・017



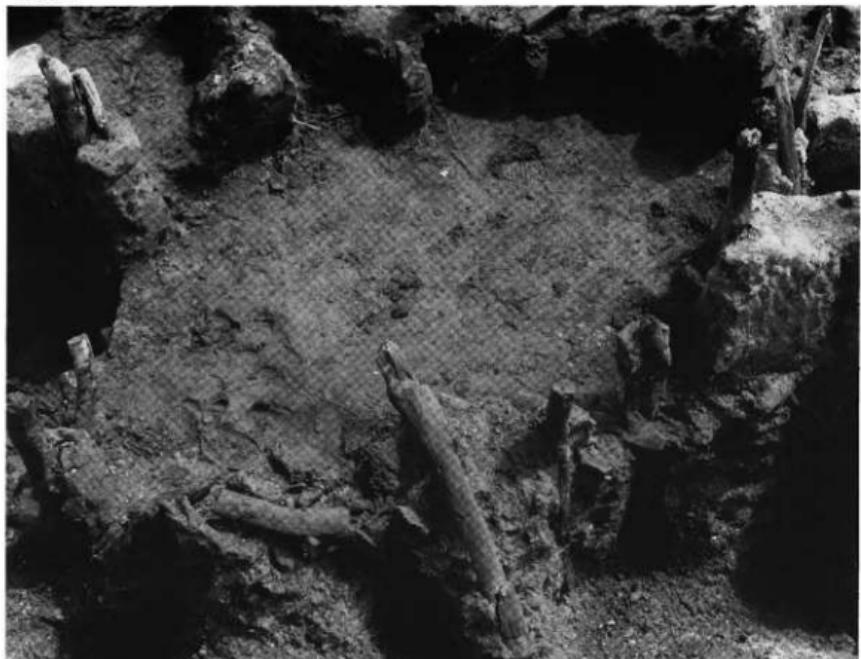


SZ・018



SZ・018

図版16



SZ・016



SZ・020~023